THE KAIZO

改造

六月特別号

22

有島武郎著（著作集第十四輯）

星座 第一卷

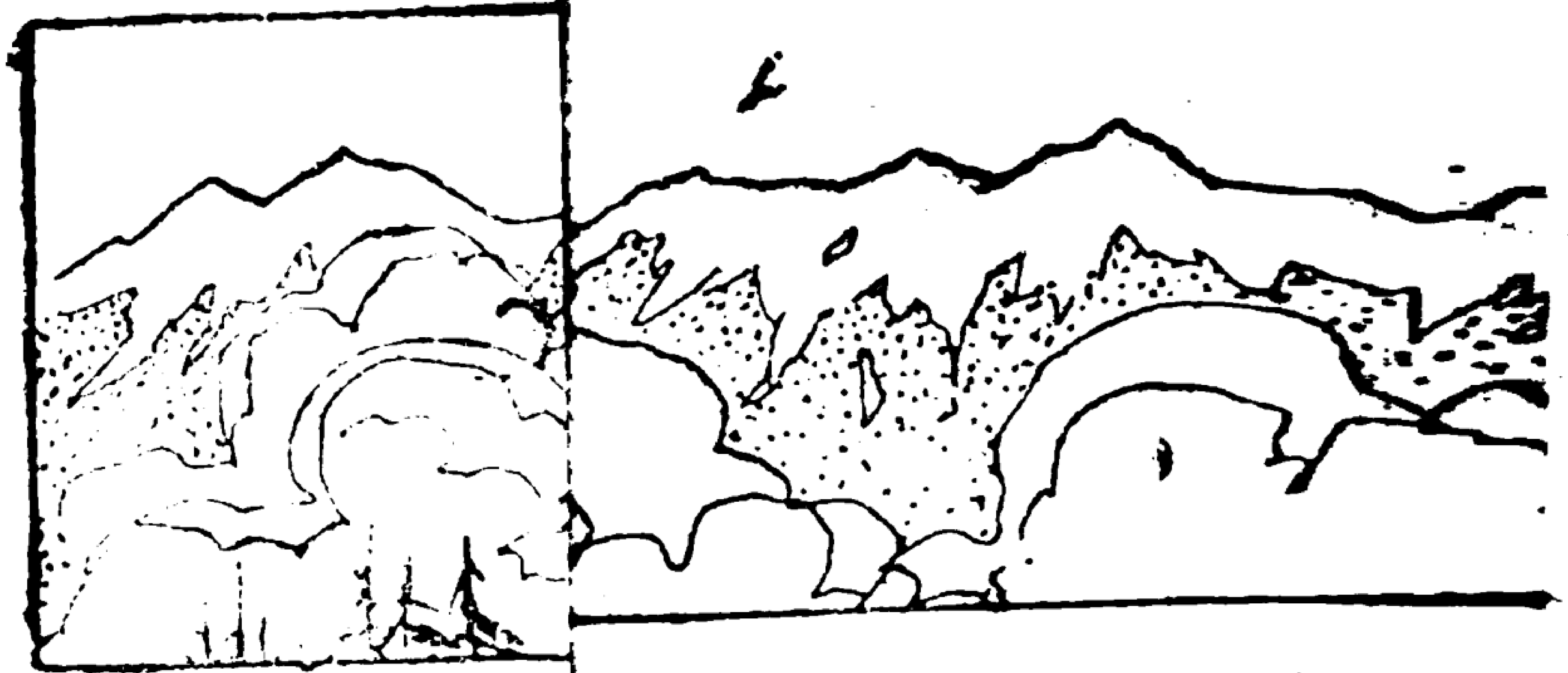
定價壹圓參拾錢
送料書留拾參錢

新刊

これは一つの長篇創作の序曲たるべき第一卷である。若い生命が如何に生れるか、如何に萎むか、如何に育つか、如何に實るかを作者は探らうとする。それは明らかに作者の力には餘るらしい冒險である。けれども船は既に乘り出された。覆る所まで進む外はない。……著者



改造六月特別號目次



社會政策と階級鬪爭

本書に

法學博士 福田德三著

◇四六版◇ 定價貳圓八拾錢

◇並製◇ ◇送料金拾九錢◇

東京日日新聞評 本書は我が經濟學界の權威者として許されてゐる著者が社會政策の發程と本質的な可能性並にその史的發展をば理論的に究明した社會政策序論として草されたものに社會の共同生活における必然的運命に在る階級鬪爭の意義及びその鬪爭當事者が社會的生活上の苦惱反轉等を論究敍述した論文を加へたもので今著者に從へば人々の無限な慾望を全

對する各新聞の批評

◇◇ 廉價版

く放棄してしまはない限り資本所得階級と勞働所得階級との鬪爭が繰返されるべきものであると共にそれが益烈强深刻に進んで行くものである社會政策の意義はこの鬪爭に對する人爲的緩和策を指すもので吾々はマルクス流の唯物史觀を信じない限りに於て社會政策の緊要意見を發見し而してこれを高調して行かなければならないものだ。

時事新報評　人類の共同生活が始まつて發達すれば階級が起る其間に又鬪爭の生ずるのは必至である資本所得と勞銀所得の兩階級の爭ひである兩者は雇傭懸引と勞銀爭議の形を以つて今や爭ひ最中にある――著者は如上の出發點から獨持の社會政策を立て資本主義なるものはマルキシズムの說くが如く決して必然的に崩壞するものでない、此儘にして置けば「資本增殖の勢は益强烈となりて人生の眞生の厚生幸福は全く其の爲めに蹂躪せらるゝの外はない」だから資本主義に對するには人爲の政策を以つてしなければならぬ社會政策の存する理由である本書は社會政策序論と階級鬪爭と其當事者の二篇より成る新らしき學說である。明快なる論と偉力ある文とは內容をして一層重からしめて居る。

讀賣新聞評　理路と明快と蘊蓄の深邃と識量の卓拔とに於て博士は常に讀者を推服せしめる。該著も亦其適切な一例たるや言ふ迄もない、經濟政策や行政論から獨立した理論の一體系として社會政策の要綱を概論する手際は全く唯ひとり博士にのみ許された得意の壇場で階級鬪爭にマルクス主義者の唯物史的樂觀を排して飽く迄も勞資對立を認むる所にこそ社會政策が可能であると主張する立論の冴えは誠に此新著に無量の愛着を痛感せずは措かない。

拾四版發賣

東京芝愛宕下町一ノ一
振替東京八四〇二番
改造社

刊發賣

久平和論である。現代の哲學がカントを中心とし、そして其政治哲學は實に現代思想の根原をなす。本書はカントの法理哲學並に政治哲學卽國家論の根本原理を闡明した最高級の政治哲學書だ、殊に其著者はカント研究の權威者たるは今更呶々するまでもない。現代の政治を論ずる青年諸君に敢えて本社の尤も自信ある一書の公刊されしことを告ぐ。

◇四六版布裝上製函入◇
定價壹圓五拾錢
◇書留送料金拾五錢◇

東京芝愛宕下町一ノ一
振替東京八四〇二一番
改造社

對する各新聞の批評

く放棄してしまはない限り資本所得階級と勞働所得階級との鬪爭が繰返さるべきものであると共にそれが益烈强深刻に進んで行くものである社會政策の意義はこの鬪爭に對する人爲的緩和策を指すもので吾々はマルクス流の唯物史觀を信じない限りに於て社會政策の緊要意見を發見し而してこれを高調して行かなければならないものだ。

時事新報評　人類の共同生活が始まつて發達すれば階級が起る其間に又鬪爭の生ずるのは必至である資本所得と勞銀所得の兩階級の爭ひである兩者は雇傭懸引と勞銀爭議の形を以つて今や爭ひ最中にある――著者は如上の出發點から獨持の社會政策を立て資本主義なるものはマルキシズムの說くが如く決して必然的に崩壞するものでない、此儘にして置けば「資本增殖の勢は益强烈となりて人生の眞生の厚生幸福は全く其の爲めに蹂躙せらるゝの外はない」だから資本主義に對するには人爲の政策を以つてしなければならぬ社會政策の存する理由である本書は社會政策序論と階級鬪爭と其當事者の二篇より成る新らしき學說である。明快なる論と偉力ある文とは內容をして一層重からしめて居る。

讀賣新聞評　理路と明快と蘊蓄の深邃と識量の卓拔とに於て博士は常に讀者を推服せしめる。該著も亦其適切な一例たるや言ふ迄もない、經濟政策や行政論から獨立した理論の一體系として社會政策の要綱を概論する手際は全く唯ひとり博士にのみ許された得意の壇場で階級鬪爭にマルクス主義者の唯物史的樂觀を排して飽く迄も勞資對立を認むる所にこそ社會政策が可能であると主張する立論の冴えは誠に此新著に無量の愛着を痛感せずは措かない。

廉價版

拾四版發賣

東京芝愛宕下町一ノ一
振替東京八四〇二番
改造社

北郊雜記

阿部次郎著

哲人にして藝術家たる著者の如きは又珍しい、晴れ
ては三畝の後圃に鍬をとり、降つては讀書に耽溺する

新

賀川豊彦著

死線を越えて

本書の世界譯

英、獨、佛、蘭、スカンヂナヴイヤ

の各國語に飜譯さる

賀

東京芝區愛宕下町

Now---Try "Radiorayer" in your own home.

The Radiorayer High Frequency treatment is the great force for health and beauty which science has ever produced. A comparatively recent discovery. it has already won the universal indrosement in the medical profession.
Why not send for a Radiorayer. As long as they are in our store --- as long as these machines are not in your home, you are missing the greatest health and beauty treat of your life. Why not send for your Radiorayer?

電波療器 ラヂオレーヤー

電波療器

皇室御用



米國の偉人トーマス、エヂソン氏の發明せるラヂオレーヤーの偉大なる作用は人體の細胞に一大改造を起し病菌を根本的に殺滅し健康なる新生細胞を増殖して健康及精力を増進す、本器を使用する時は凡ゆる神經性及肉體の病根を絶滅せしめ健康を増進す現今疾病にて苦しむもの又健康を欲するものは一日も早く本器を使用せられよ。

神經諸病、各種疼痛、[illegible]、動悸、胃、腸、頭痛、不眠、便秘、脊髓、喘息、生殖器病、ルイレキ、腎臓、眼病、皮膚病及慢性疾患に奇効

(説明書進呈)

ラヂオレーヤー東洋一手發賣元東京本郷一ノ九

電小石川六二四 五八三二 振替口座東京五二四七 ラヂオレーヤー商會



金參拾五圓

電波療器 ラヂオレーヤー

ガンヂイと眞理の把持

文學博士 鹿子木員信
饒平名智太郎

新刊

改造社編

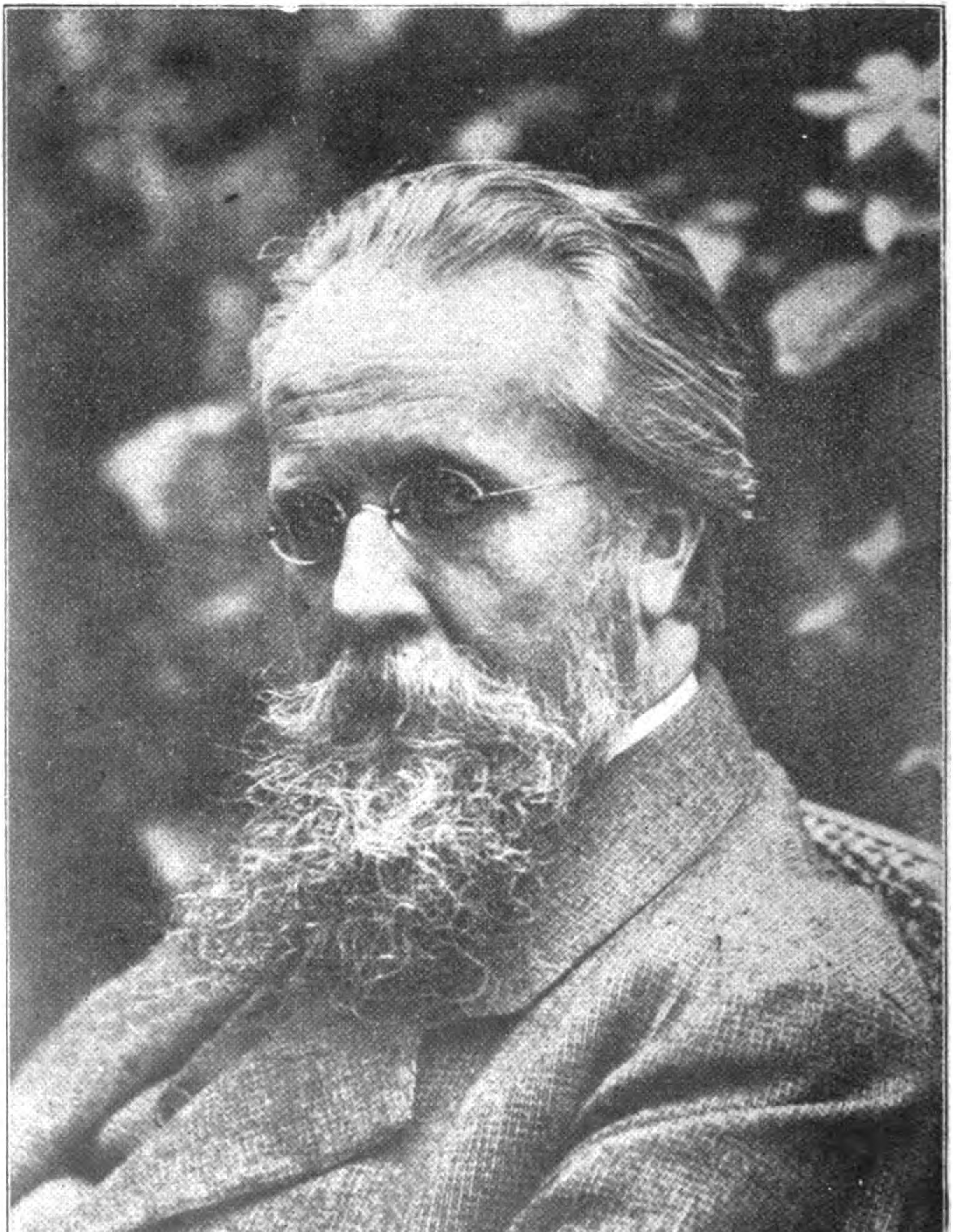
印度革命の靈ガンヂ
ガンヂ評傳及其思想と運動

物質的に褌一つの野蠻生活をしながら、精神的に愛と眞理の把持に徹した至高至純の生活者が、ガンヂ其人だ、如何なる懷疑者も、彼に接して神靈の實在を疑ふ譯にいかない。米のホルムスは、彼を世界最大の人傑と激賞した。正義の觀念に於て、プラトー、ソクラテスに比すべく、革命の風雲兒としてはレニンと並稱さるべきだ。しかもレニンの物的暴力的なるに反し、彼は理想的非暴力的で、其間南極と北極との相違點がある。英國の紳士道も帝國主義も彼の前には顏色がない。彼は決して鬪々たる妥協主義者でも人道主義者でもない。―本書は印度研究のオーソリチイ鹿子木博士の印度革命に對する見解及ガンヂに對する熱烈なる崇拜と饒平名氏のガンヂ評傳思想及その運動を詳述批評した好著で、眞に社會と人とを變ふるの士、最高文化の意義を知悉せんとする者の必讀を要する。

◇四六版上製函入◇
◇定價貳圓卅錢◇

改造社

◇東京芝區愛宕下町◇
◇振替東京八四〇二◇



リッケルト教授



==《改造六月號》==

懺悔、逃避の文化的價値

一番快いのは初夏の朝だ、カラッとした蟠りのないその朝だ、綠燃えゆくその姿だ。ただこの時、懺悔、逃避の思想が世に漲りつくし、賴もしからざる退轉的傾向が此世を蓋ふておることが少からず我が心を痛める、この哀れな退嬰的傾向、その淺ましい煩悶の姿は、卑しむべき現代そのまゝの直寫であらうか。

その病みつきの傾向と、思想に一片の威嚴の伴ふていないのは、それが輕はづみの衝動的厭世觀の所産であり、悲しむべき女性的煩悶の所産である左券だ。

かゝる風潮の瀰蔓は組織的機能を否認するものであり、文化的向上を阻止するものだ、深山に栗を拾ひ、谿水を慕ふ伯叔の徒にどうして文化的進展が期せられやう、その主唱者、及び支持者は實に社會生活の落伍者であり、集團生活、國家生活の呪咀者である。

人類の再生、文明の再建、それは實に死生の巷を幾たびも踏へ、幾多の犧牲とそして幾多の試錬を經た光榮ある果實でなくてはならぬ、それを逃避、懺悔を奉ずる落伍者たちが、男らしくもなき病み上がり思想で改革の、社會奉仕のと喋ぎ廻る狂態は哀れにも悲慘である、それは實に政治道德の攪亂者たる現內閣の十醜によりて、政界の革新が企及さるるのと好一對だ。

時代に逆行する病思潮、向上、進化を標幟する人類に反逆する仙人思慕者、その人たちによりてどうしてなま〳〵しい社會の生命が繫れやう、火の出るやうな改革が期せられやう。我々はそんな深山の潺々たる一支流に應接して居る遑はない、我々は實に濁浪天に漲る社會の本流と鬪はねばならぬ。

我々は初夏の天地に勢よく檐を壓して行く新鋭の若芽を氣持よく見る、それにもまして一段の生氣を以つてグン〳〵延びて行く青年を一際氣強く打眺める、我々は悒鬱を抱いて煩悶せる人々はそのまゝに、その位置にソツトしておかう。



ボルシエヴヰキズムの『資本主義への降伏』（其二）

――勞農露國の經濟難と其經濟政策の變革――

福田德三

引用書

Russische Korrespondenz Jahrgang II Band2, No. 7-9.

1) **Bucharin, Neuorietterung in der oekonomischen Politik.**

2) Bogdnow, Die **neue** o·konomische Politik Sowjet-**Russlands.**

3) **Krhishanowski, Bemerkungen zur Elektrifizierung.**

4) Preobrashensky, Die neue Wirtschaftspolitik und die Aufgaben der Partei.
5) Sorin, Von der neuen Wirtschaftspolitik.
6) Krajew, Der neue Kurs in der Agrarpolitik.
7) Krumlin, Bemerkungen ueber die neue Wirtscaftspolitik Sowjet-Russlands.

Dieselbe..No. 10–11.

8) Lenin, Zum vierten Jahrestag der Russischen Revolution.
9) Radek, Die Deklaration der Sowjet-Regeierung ueber die Anerkennung der Schulden aus der Vorkriegszeit.
10) Trotzki, Die Hungersnot in Russland und die Weltlage.
11) Klepikow, Die Missernte des Jahres 1921 (Zahlen und Tatsachen).
12) Preobrashensky, Die Perspektiven der neuen Wirtschaftspolitik.

Dieselbe..No. 12.

13) Lenin, Ueber die Bedeutung des Goldes jetzt und nach dem vollen Sieg des Sozialisumus.
14) Winokurow, Die Ausdehnung der Hungersnot und die erforderliche Hilfe.
15) Krshishanowski, Auf der Schewelle (Eindruecke vom VIII. Allrussischen Elektro-technischen Kongress).

Die kommunistische Internationale. No. 18.

16) Miliutin, Die Hungersnot in Sowjet-Russlands.
17) Varga, Die Wendung in der Wirtschaftspolitik Sowjet-Russlands.

Die Staats-Kommission zur Elektrisierung Russlands.

18) Schematische Karte der Elektrisierung Russlands.

（一）

ジェノヴァ會議の結果は、本文起草の時（五月六・七日）に於ては、寸毫も逆睹す可き材料が與へられて居ないから、其れが如何になるかは、全く之を度外に置いて考察する外はないが、然し此會議は、其業績の如何なるものとなるを問はず、

從來の聯合國諸會議に比して、一の特に重要な意義を有するものであることは、疑を容れないことゝ思ふ。其の特に重要な意義とは、勞農露國の經濟的開國（近刊『商學研究』掲載拙文『勞農露國の『開國と資本主義降伏』』を參考せられたい。）の序幕が、ジエノヴア會議に於て演出せられたと云ふ事、而して其序幕がラパルロ條約と云ふ興味ある場面を以て開かれた事是れである。

ラパルロ條約はジエノヴア會議の二つの最大問題に對する開幕であつた。一は露國開國の問題であり、他は卽ち獨逸償金輕減問題之れである。此の後の問題に就ては、キーンス氏は其の近業『條約の改修』Keynes, A Revision of the Treaty. London 1922 に於て最も能く論じて居る。私は悉くキーンス氏の說に服從するものである。乍去、此問題は迚も此度の會議に於て、我々が期待する樣な解決が就くものでないことは、今から之を豫測し得るものである。米國の對聯合國貸金の全部帳消し、英國の對聯合國貸金の大部分の放棄と云ふ樣な大英斷は、今日の處では未だ行はれる見込はない。然し私は之を主として、時間の問題であると見て居る。イクラ英米殊に佛國が國民的慾心を逞くしても結局無い袖は振れない。愈々袖が振れないとなれば、英米佛は口先で何と言つたとて、事實上取らないで我慢するより外はない。唯時間の經過が餘り長きに亘るときは、獨逸の社會民主黨政府が自らを支ふること能はざるに至ると云ふ大なる副作用は起るかも知れない。多數社會民主黨、第二インテルナチヨナル政權の倒壞は、決して社會主義國家一切の潰滅を意味するものではない。露國の勞農國家は、其爲めに種々な影響を蒙むるではあらうが、彼倒れゝば此も同時に倒れると云ふわけでないは無論の事である。而してジエノヴア會議は唯卽時に問題を解決し得なかつたと云ふ丈けで、多少時期を延ばすには相違ないが、其れが直ちに獨逸の社會黨國家の運命を定めるものと見る可きではない。所謂「レパラシヨン」の問題は、必ず再び三度び、繰返して國際會議を召起すであらう。然る間に段々キーンス氏の主張し、我々の贊同する所の樣な經過、若くは若干なりとも、其れに近い經過が實現せられることかと思ふ。之を要するに、私は、ジエ

ノウア會議は其結果如何に拘くとも、其れは未だ獨逸の運命從つて社會民主國政府の死命を決定的に左右するものとは云へないと考ふるものである。トコロが、其殆んど反對に、勞農露國の開國（少くとも經濟的開國）に就ては、此會議は、或意味に於て決定的なものであつたと云ひ得るかと思ふ。

（二）

世界全體の社會主義化云々は別問題として、我々は今明かに二つの甚だ異つた社會主義國家系統を目前に見て居るものである。其れは云ふ迄もなく、獨逸の社會民主國家系統と、露國の勞農國家系統とである。近頃例のカウツキー氏は、『グオルギア視察記』(georgien: eine sozia'demokratische Bauernrepublick. Eidrücke und Beobachtungen. Wien 1922. を公けにした。彼は此書に於て、此の小なる一獨立國としての社會民主國を自ら視察して口を極めて賞賛して居る。然るに彼の此書が印刷進行中ゲオルギアは、勞農軍の爲めに滅ぼされて仕舞つて、此書の世に出たときは、ゲオルギアなる社會民主國は、世界の表に存せなくなつて居たのである。此一例は我々に甚だ興味ある一縮寫圖を提供したものと思ふ。恐らく今後も、此くの如き社會民主國家系統と勞農國家系統との入れ換り出換りは繰返されることであらう。レニン、トロツキー等とカウツキー・クノー等正統マルキシストとの國家理論上の爭は、決して單なる『ロゴメキー』ではない。机の上の些細なる言葉爭ひではない。近頃獨逸のヴヰルブラント教授（戰爭中、社會主義に改宗したをて今有名な一經濟學者、其のマルクス評論の著は現に盛んに愛讀せられて居る）は、自由共同經濟 freie Gemeinwirtschaft. 主義を樹立して、勞農露國の强制共同經濟 Zwangsgemeinwirtschaft 主義に對抗す可しとて、盛んに其の爲めにプロパカンダを爲しつゝあり、出來ることなら、日本にも其プロパガンダを廣めて、勞農主義に對抗したいもの

だとて、態々書を日本の同學に寄せた。他の點の相違は姑く措く、現下の事情に就て云へば、ヴヰルブラントの對別は確かに事實に當つてゐる。世界の社會主義の現在は、自由共同經濟主義と强制共同經濟主義とに分れ、而して兩者は到底相容るゝ能はざるものゝ如くに見へて居るのである。此の對抗、此の區別は、他の點から考察すれば、經濟的に進步した國と進步して居ない國との對抗であるかに見へる。『改造』五月號に載つて居たラッセル氏の『未開國に於ける社會主義』は、此の見地から兩者を比較したものと云つても差支なからう。

（三）

ラッセル氏の此論文は、多少推敲不足の點があるようである。例へば the iron law of wages, invented by orthodox economists to discourage trade unions and accepted by Marx to encourage revolution was an economic fallacy.（勞働組合をして意氣沮喪せしむる爲めに正統派の經濟學者が發明し、革命を鼓吹する爲めにマルクスの承認した賃銀の鐵則は、經濟學上の誤謬であつた）五月號七七頁とあるは、一の速斷若しくは誤斷である。此の事は嘗て『改造』に掲げた拙文『階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得』に於て少し詳しく述べて置いた、また小泉信三敎授の諸論文にも屢々言及してある。『賃銀の鐵則』を形づくつたのは正統經濟學者ではない、ラサルレである、而してマルクスは徹頭徹尾之を斥けた。エルフルト會議に於ける社會民主黨綱領の修正とは、即ちラサルレの鐵則を認めたゴタ綱領を捨てゝ、マルクスの賃銀論を採用したので、此は誰も知つて居る有名な事である。正統經濟學者が發明したと云ふ事は、『勞銀基金說』に就て云はねばならぬのである。而して私の右の論文に示して置いた通り、『基金說』を主張した經濟學者は、必ずしも皆勞働組合を「チスカレチ」したのでない。私は言つた『茲に稍々廣く行はれて居る（專門學者の

間にすら)誤解を防いで置かなければならぬ。其は別事ではない、勞銀基金說を唱ふる學者は、平均率以上に勞銀を引上げんとする一切の努力、殊に其目的を以てする勞働團結(トレード・ユニオン)を以つて無用、無効なるものとはしたけれども、決して一切の勞働運動勞働團結を無用なりとしたものでないこと是れである。其は何故であるかと云ふと、勞働に對する供給、需要の自然法則から平均率が定まるといふことを認めることは、必ずしも當然に此平均率なるものは、自然的必然的に何等の人爲なくして、實現するものであると認めることを含んで居らぬからである。尤も當時の英國の資本家、雇主中には此く主張した人は尠からずあつた。彼等は、勞働者に對して云ふ、汝等何事を爲さずとも、需要、供給てふ經濟界の大法則によつて定まつて居る平均勞銀率は、必ず常に實現されるものである、故に汝等の喧騷するは、悉く是れ無益ではないかと。乍併、學者中には斯く主張した人は殆んど一人もなかつた。否、或學者の如きは、明かに勞働者が拱手傍觀するときは、此の當然なる平均勞銀率は實現されぬ、故に勞働者は絕へず市場の形勢に注意を怠らず、需要供給の關係の變動によりて、平均率が高まる可きにも拘らず、雇主が其私慾の爲め、其率を支拂ふを肯ぜざるときは、公々然之を要求す可し、聞かれざるときは、抗爭に訴へざる可からずとさへ主張したのである。リカルド門下の高足の弟子なるマカロツクさへ……勞働に對する需要の增進する時、勞働者自ら進んで勞銀の引上げを請求することなければ雇主は決して其勞銀を引上ぐることなかる可し、否勞銀引上げの要求又は其引下げの拒否が成効するか否かゞ、勞働市場の需給關係に變動が起つたか否かを確知す可き唯一の檢石であるとさへ主張した。又た……フォーセツトも……勞銀の引上げに對する勞働者の力強き要求のみが、市場の好況を呈するに際し、需要の增進により、雇主の懐に歸する增收に對する勞働者の均霑を確保す可き唯一の手段なりと云つて居る。されば勞銀基金說を以つて一切の賃銀爭議を否認するものなりとする見解は甚しい誤謬たることは明かである』と。『社會政策と階級鬪爭』四〇一――四頁　ラツセル氏はリカ

ルドと云ふ可き處を正統學派經濟學者等と云つたものであらうが、其れにしてもリカルドは『勞銀の鐵則』を發見したとは云へないのである。其れは何れでも宜いとしても、マルクスが之を承認したと云ふのは、事實の正反對であることは須知の事實である。從つて氏が此を以て『マルクスは多少誤つて居たことが證明せられた』事の一例とせられるのは、飛んでもない事と云はねばならぬのである。

（四）

右の誤謬は、ラツセル氏に於て一の不用意の誤謬 lapsus calami であらうと思ふが、玆に稍重大な誤傳として指摘せねばならぬことは、次の一節である。

In Russia, where democracy is as yet impossible, some form of oligarchy had to be found until education could become more wide-spread, and this form of oligarchy was found in the dictatorship of the communist party. For the same reason, namely that democracy is not yet possible in Russia, it was in the name of democracy that Capitalism criticized and attacked the Bolsheviks. Thus both sides lost sight of an important part of the truth: the Bolsheviks, practically if not theoretically, of the fact *that democracy is part of the aim of socialism*; their opponents of the fact that democracy cannot the achieved all at once in an uneducated nation. (p. 91)

（今猶デモクラシーの不可能な露西亞に於ては、教育が一層廣く普及し得るに至るまで、何等かの形に於ける寡頭政治が必要であり、此種の寡頭政治は共產黨の獨裁の中に見出されたのである。同じ理由、即ち今猶露西亞ではデモクラシーが不可能だといふことの爲に、資本主義はデモクラシーの名を藉りてボルシエヴキキを批評し攻擊したのである。かようにして双方とも眞理の重要な部分を見逃してしまつた。即ちボルシエヴキキは、理論的には左樣でなくと、實際的には、デモクラシーが社會主義の目的の一部分だといふ事實を忘れ、その敵手は、デモクラシーは、無教育な國民に突然施すことは出來ぬと云ふ事實を忘れたのである。）「改造」五月號八八頁

デモクラシーが社會主義の目的の一部分であるとは、實際的には兎に角、理論的には、マルクスもエンゲルスも決して

主張して居らぬものであることは、拙文『レニンの國家理論』並に『マルキシズムとしてのボルシエヴキズム』に於て稍詳しく論述して置いた通りである。デモクラシーは實際上に於ける一の經過階段、終局目的實現の爲めの一手段であることは兩人とも屢々云つて居ることであるが、理論上、而して目的の一部分としてデモクラシーを認めると云ふことは、マルクス、エンゲルス共に決して考へて居らぬことである。從つて此點に關するボルシエヴキズムの理論は決してマルクス及エンゲルスの眞意に背いて居るものではない。否、レニン正面の敵としてデモクラシーを以て獨裁政治に對抗せしめつゝあるカウツキーすら、デモクラシーを以て目的の部分を成すものなりとは、決して云つては居らぬのである。ラツセル氏の此一節は、無造作にも程のあつたもので、明かに大なる誤謬と斷ぜねばならぬ。詳くは右記した拙文を見られんことを希望する。

然し、ラ氏が斯く不用意に言つてのけた其眞意は、自由共同經濟對強制共同經濟の區別を、主として産業發達の程度から見て、明かにしようとしたので、氏が輕々にデモクラシーと云つたのは、要するに、自由共同經濟のことを指したものと見れば、十分に首肯し得られるのであつて、氏の論文の全體の趣意は、此區別からボルシエヴキズムの現在と將來とを觀察す可しと云ふに在る事と思ふ。斯く考へると、氏が未開國に於ける社會主義國家と、進歩した國に於ける其れとを、對立して明示せられたことは、問題の所在を明かにする爲めに甚だ有益であると云はねばならぬ。而して其れは氏の云ふ様に、『歐洲及亞細亞のボルシヴヰキに對する社會主義批評家が徒らに論議して居る多くの事項が、經驗を基礎として承認せられて居るからである、未發達若くは部分的にしか發達して居らぬ國々に於ける社會主義の實現促進に對して、爲し得可きことゝ得可からざることゝの問題が、レニンが其困難を説明したことによつて大に明白になつた』事を、分り易く示したものである。

(五)

私がジエノヴア會議を以て勞農露國の經濟的開國に對して或意味に於て、決定的であらうと考へる所以は、聯合國の側に於ては勿論、勞農露國の側に就ても亦然るからである。レニン始め勞農露國の當路者は、社會主義の實現の上に於ける未發達國特殊の立場を今に至つて十分に認識し、其認識を言葉の上に於てのみならず事實の上に於て世界に向つて告白した、ジエノヴア會議は、其告白の爲めに或點から云へば、恰當の又た決定的なる舞臺を供したものであることを指して云ふのである。言葉を換へて云へば、自由共同經濟に對する勞農主義の強制共同經濟主義の峻嚴なる對抗の緩和それである、未發達國に於ける特殊の事情は單に特殊のものゝみとして之を取扱ふことを得ず、先進國に於ける經濟的動力を取り入れることの切要を公けに承認したこと之れである。ラツセル氏の言を藉れば『未發達の國々に於ける社會主義の問題を左右するものとして國際問題を考察せねばならぬ』ことゝなつた事是れである。獨逸に就ても同樣であるが、其れよりも更らに大なる程度に於て、勞農露國の前途は、今日に於ては、其大部分をあげて國際の問題である、勞農露國が其期待する所の理想に進み得るか否かの問題は、勞農國其ものよりも、寧ろ國際間の事情によつて決定せらるゝ外ないことが、ジエノヴア會議を機會として世界に示されたのである。而して其國際關係中最重要なるは、經濟上の問題である。私は、此を勞農露國の經濟的開國と名ける。經濟的開國は、勞農國の方針では、第一に外資の輸入による產業の開發であり、第二に電化による農業の工業化及工業生產力の增進之れである。第一は所謂コンセツシヨンの問題として具體化される。卽ち露國への外國企業の誘引である。第二は外資の直接援助として具體化される。共に外國資本の力(以下示す如くレニンは之を資金と呼ぶ)を切要するものである。而して其の爲めに露國舊國債の承認が必要と

なる。ジエノヴア會議は、此の承認を世界に宣示した大舞臺である。而して此れがボルシエヴヰズムの『資本主義への降伏』と呼ばれるのである。故に多くの論者は、ジエノヴア會議は亦た露國の資本主義への降伏を宣言した擅場であると看做すのである。然るにボルシエヴヰキに言はせると、其は亦た同時に、資本主義の勞農主義への降伏であるとするのである。例へばラデックは曰ふ、『聯合國が吾人に要求して、ツアール時代の舊債を承認す可しと云へるは、取りも直さず、彼等が『勞農露國は存した、今も存する、而して將來も亦存續す可し』てふ事を理解す可く知めたことを確證する絕好の左券である。此問題が提出せられたと云ふ一事は、世界革命が今日迄は、資本主義的政府を覆すことに成効しなかつた事實を語るのみならず、更らに、世界反動が、勞農政府を顚覆することに、成効しなかつたことを示すのである。國債承認の必要は、勞農政府の降伏を意味するものとするなら、其れと同時に聯合國が、此承認を勞農政府に求めると云ふ事は、今迄勞農露國に對して一の讓步をも考へたことなく、只管之を排斥し、之を崩壞せしむることのみ企圖つて居た聯合國の降伏をも意味すと云はねばならぬのである』(書目九)と。トロツキーも亦云ふ、『勞農露國を世界經濟生活の中に取入れることなしには、勞農露國の生產力、購買力を增進することなしには、資本主義の世界は、現下の難關を脫出する可能を最早有して居らぬのである』(書目十)と。舊國債の承認と、其れを抵當としての露國開國の承認及資本を以ての援助の受諾とは、露國の前途に對する決定的案件であると共に、實に世界經濟の前途に對する決定的案件である。而してジエノヴア會議は他の問題に就、全く無効無益であつたとしても、兎に角此の二重案件の序幕が演ぜられた舞臺であつたことは疑ひもない所で、而して此一事を以て、此會議は從來幾度となく繰返された聯合國會議に對して一異彩を放つものである。

勞農露國の開國は、其の經濟難の卒直なる告白と其經濟政策の顯著なる變革とを意味するものとして、ボルシエヴヰ

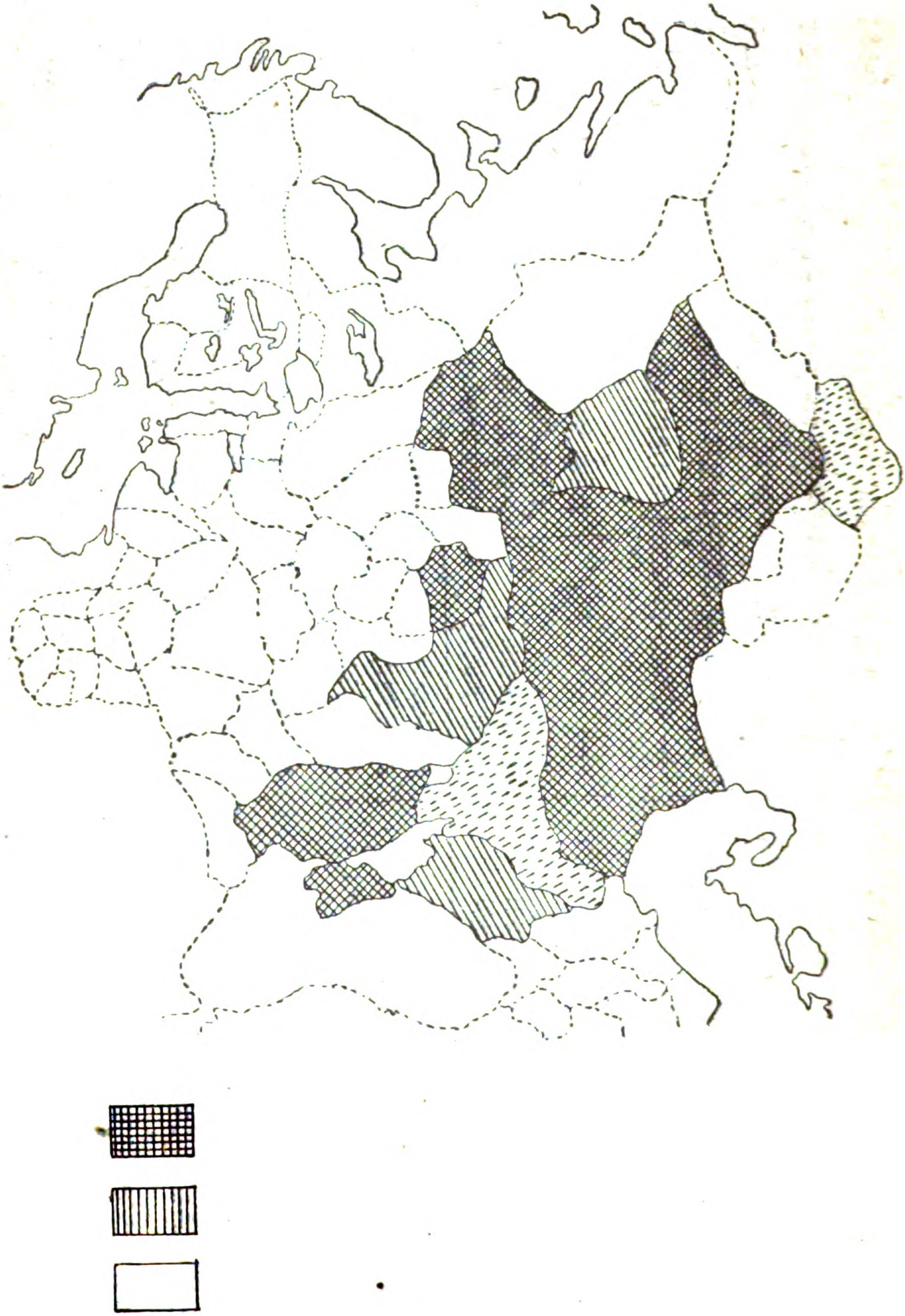
ズムに取つての大案件たるは勿論であるが、同時に勞農露國の此等の問題は獨り勞農國丈けの問題たるに非ず、端的に世界其もの、世界經濟其ものの問題であることを意味するのである。否、今の世界に取つての最大の問題たることを告白したものと見る可きである。我々は、ラッセル氏の樣に世界に於ける『社會主義の最後の勝利――若し其れが來るとするなれば――』が、經濟上進歩した國に來るか、未發達の國に來るかの宿題の解決として、高處下瞰的に一の見物人として、此問題を取扱ふを以て滿足することは迚も出來ないのである。我々は、其を我々の世界自らの最大問題として考察しなければならないと思ふのである。勞農露國の現當事者の失敗と否とは、露國丈けの問題として、若くは少し大きく見て、社會主義的エキスペリメント上の一問題として、事は濟むかも知れないが、勞農露國の開國の成ると成らざるとは、決して左樣なる部分的問題ではなく、實に世界經濟其ものゝ死命に關はる全體的問題であると信ずるものである。

(六)

今此の『資本主義への降伏』を促進したと云はるゝ露國の經濟難中、最大なるものは、言ふ迄もなく、一昨年及昨年に於ける大飢饉是れである。

昨一九二一年に於ける露國の不作に就ては、書目に掲げた數論文によつて、粗ぼ其大要を窺ふことが出來る。殊に書目(十一)のクレピコフの論文は甚だ詳細に數字をあげて記述してある。今其等の要旨を紹介して見よう。

一九二一年不作地方一覽圖 (クレピコフ論文附載圖模寫)



一九二一年六月十五日に於ける豫想收穫狀態に關する中央統計局の報告によると 不作の有樣は次の如くである。不作に襲はれた地方はオルロフ縣、トオーラ縣及びバシユキリン共和國を除いた勞農露國の穀作地域全體、消費地方の一部即ちウオログダ、コストロマ、ニシエゴロドスク諸縣、ウクライネの一部即ちニコラエフ、アレキサンドロフスク、シムフエロポル、オデッサ及エカテリノスラフ諸縣、及び北カウカスス即ちスタフロポル、クバン、黑海地方是である。クレピコフは種々な計算の結果、穀物不足の計數を比較の爲め戰前の一九一三――四年及一昨年の數字と對照して、左の如く算出した。(ウクライナ及シベリアを除く)(單位一千プード)

	一九一三――四年(千プード)	一九二〇――一年	一九二一――二年
收穫總量	三五二六、五〇七	一二五四、二七七	七四四、七二四
不足量	――	八八、八六七	三五八、〇六七
消費量	一、八二六、四九六	一〇三五、三一四	八四一、一三五
種籾用	四七三、六四八	三〇七、八三〇	二六一、六五六
輸出量(國內又國外へ)	五四〇、三五一	――	――
餘剩量	六八六、〇一二	――	――

即ち戰前の最終年一九一三――四年に於て三十五億二千六百萬プード(一プードは我が四貫三百六十匁)あつた收穫が、昨年に於ては僅かに七億四千四百萬プード即ち五分の一に減つて仕舞つた。それに對する消費高の減少は十八億二千六百萬プードが、八億四千百萬プード即ち約半分になつたのである。一九一三――四年には餘穀量十二億二千六百萬プードあつたものが、一昨年は却つて八千九百萬プードの不足を示し、昨年に至つては更らに三億五千八百萬プードの不足を示めして居るのである。

此く作物の不足なる爲め、不作地方からの移出民の數は激增した。メスヤゼフ氏は其論文『饑饉地方からの移出民』Mesjazew, Die Auswanderung aus dem Hungergebiet に於て記述して、北露饑饉地方では、全人口の約二割五分は、何れも饑饉の爲めに鄕里を捨て丶他地方に移出したと云つて居る。

更らに書目（十四）一九二一年十二月刊 のウキノクロフ氏の『饑饉の延長と其救濟』によると、歐亞兩露の全作付面積三千七百萬デスヤーチン（一デスヤーチンは我一反一畝半）（此人口八千九百萬）の內千三百三十四萬デスヤーチン（此人口二千五百八十九萬）は饑饉地方で、之れにウクライナの饑饉地方を加算すると、饑饉面積は實に全作付面積五千萬デスヤーチン中二千萬デスヤーチンに及び、之を人口數から云へば、一億一千四百七十萬人中三千七百二十一萬人が饑饉に襲はれたのである。卽ち面積から云へば、全面積の約四割、人口から云へば、全人口の約三割三分が饑饉に陷つたのである。殊に其の甚しいのは露國中最も豐沃な地方であるウオルガ地方とウラル地方である。

今ウオルガ地方の內譯をあげると左の通りである。（單位一千プード）

	純收穫	種籾用	食料及餌畜用	消費總量	不足又は剩餘
アストラカン	一、〇八十・〇（チプード）	一五七・〇	四、六四三・五	四、八〇〇・五	不足 三、二四八・五
パシユキリエン	七、五八六・四	五、二二〇・〇	七、三九一・六	一二、六一一・六	不足 四、八七六・二
ウヤツトカ	一〇、七六五・〇	四、九二三・五	四、　〇四・八	九、四二八・三	餘 一、四三六・七
ウオツヤーケン	三〇、四五二・〇	一三、三六六・五	一二、〇五四・三	二五、四二〇・八	餘 五、六八一・二
ラルギシエン	一二、〇一五・）	六、五八〇・〇	一六、〇三三・九	二二、六一三・九	不足 九、三三八・九
ミリエン	二、七〇五・七	二、四四一・六	二、三七九・六	四八二一・二	不足 一、九八三・五
獨逸移住地	六七六・〇	九三一・五	二、七〇九・三	三、六四〇・八	不足 二、六六四・八
スサマラ	一二、八八七・三	八、二二五・〇	二〇、三五五・三	二八、五八〇・三	不足 一四、一九三・〇
スサラトプ	一九、六六八・一	一四、〇四六・一	二〇、九七七・三	三五、〇二三・四	不足 一四、六八五・三

シムビルスク	一一、六一五・〇	九、六一二・〇	一二、四九六・〇	二二、一〇八・〇	不足 九、五七七・〇
タタリエン	一八、七九四・〇	一五、五三三・〇	一六、九一八・二	三二、四五一・二	不足 一二、六七七・二
ウーフア	一〇、二八〇・〇	七、六七八・〇	一二、九〇六・四	二〇、五八四・四	不足 九、二五四・四
ザリジン	一三、〇二一・〇	四、七四八・五	九、四一八・二	一四、一六六・七	不足 七六五・七
チユワシエン	五、八五八・〇	三、六四四・〇	三、九五四・二	七、五九八・二	不足 一、五七〇・二
合計	一五七、四一〇・五	九七、一〇六・七	一四六、七四二・六	二四三、八四九・三	不足 八四、八三四・七 餘 七、一一七・九

餘裕のあるのはウヤツトカ縣とウオトヤーケン縣の二縣丈けで、跡は何れも不足を告げて居る。不足の總量ウオルガ地方丈けで實に八千五百萬プードに及ぶのである。

（七）

此くの如き大なる不作之れに伴ふ飢饉の蔓延は、勞農露國の存立に關する大事件である。露國の人が窮を告げて世界の援助を求むるは、誠に當然の事である。而して、人道の上から之に深い同情の注がれること、注がる可きことは、固より言ふ迄もない處である。去り乍らトロツキーは、書目（十）に揭げた論文（其は昨年八月三十日モスカウの勞農會に於ける演說の筆記である）に於て次の如く言つて居る。「勞農露國の飢饉否勞農露國其ものは、今日全文明人類の注目の中心となつて居る。到る處ウネルガ地方飢饉民救濟の事が語られ、書かれ、討論せられて居る。……歐洲及全世界の勞働者が勞露國に對する深き同情と益々加り來る援助とは、勞農國維持の根本條件であつた、も今亦其樣である、此れは十分に理解し得る所である。然し乍ら露國救濟の問題を凡てのブルヂオア國の支配階級や政府當局者が今になつて熱心に考究するようになつた一事は少しく諒解に困難な事である。……ワシントン、倫敦、巴里の人士が今になつてウ

オルガ地方の飢饉民の狀態を心にかけ出し、愛蘭問題、日本の海軍問題、希土戰爭等と同樣に、露國窮民の問題に注意を傾けるやうになつたのは人道、人間性、其他の高尙なる乍去外形的に測量し得られざる事の外に、何等か他の具體的に捕捉し得、又た測量し得る動機や力の爲めであることは、火を睹るよりも明白なことである。此くの如き深き根據なくしては、今日世界に起る事は全く諒解し得られざるのである。………其は外でもない。曰く、露國に於ける飢饉は、其深刻さに於て空前なる全世界の商業及工業恐慌と同時に起つたからである』と。而してトロツキーは、更らに言を續けて云ふ、『資本主義は、今日現在、戰爭の爲めに被つた破壞、荒廢に對する勘定を支拂はねばならぬ地位に立つて居る。而して資本主義は、此の支拂を爲さんとするに方つて、其の失つた所、其の破壞した所を計算すると同時に、今日現在の其の不足をも計算しつゝあるのである。世界經濟の棚卸勘定が、今日に於てブルヂオアジーを脅しつゝある事は、戰後直ちに歐洲を襲つた革命の波濤に劣るものではない。此の棚卸勘定は實にブルヂオアジーの支配、資本家其れ自らの據つて立つ所の基礎を搖撼しつゝあるものである』と。

キーンス氏の獨逸償金輕減論の依て立つ論據も粗ぼ同樣である。獨逸に其の堪へ得られざる負擔を課することは、獨り獨逸が仆れると云ふことであるのみならず、其は同時に世界經濟の破壞、混亂、若くは大なる衰微を意味すると云ふのが、氏が其『條約改修』『償金輕減』を力說する論據である。其れと同じく勞農露國を飢饉の淵に沈沒せしめると云ふ事は、世界經濟の混亂、若くは破壞を將來せしめる所以である。露國を救ふのは、實は、世界を救ふ事なのである。露國の經濟難は、端的に世界の經濟難其ものである。此點に於ては、トロツキーの言ふ所は、言葉の上は兎に角、其意味に於ては、決して事實を誣ふるものでないと私は確信するものである。(私は一昨一九二〇年九月小田原道德協會に於ける講演に於て『勞農露國の承認と救濟とは、世界自らの立場から當然に爲さる可き事である』と述べた事がある。

當日聽衆中から質問があつて、勞農露國を承認せよとは、不都合な斷言ではないかと詰問せられたとき、私は決してボルシエヴヰズムを學問上受け入るゝものではない、私は單に經濟學研究者の立場として、一の世界の問題と見て固く信ずるものであると答へて置いたが、今日に於ても亦た此の立場から言ふのである。一九二一年十一月の『露國通信』にトロツキーの右の言を讀んで、私は所信の誤らざることを見出して會心に思つたものである。

米國に對して對聯合國への貸付金を帳消にせよと云ふは、廻り廻つては、其れが米國の爲めであると信ずるから、遠慮なく主張するので、單に人道の上とか、世界の爲めとかの修辭丈けでは何んにもならないが如く、露國に對する貸付金の減免も決して、單に露國を憐むから斷行せよと云ふものではない。日本は、露國への貸付金を減免すると云ふやうな相談が出るから、ジエノヴア會議から脫退すると林大使が言明したとか云ふが、此位分の譯らぬ話はない。此の調子では今我利々々主義を以て國際的協調を亂しつゝある佛蘭西よりも、日本の方が遙かに、世界の恢復を妨ぐるものと言はれても辯することは出來まい。此日本に向つて、勞農露國の承認と救濟とは、世界が世界自らを救ふ所以であること、其れは結局廻り廻つて日本の爲めであることを、諒解せしむる迄には、尋常一樣の事ではなからう。さても厄介なる國、其名を日本と云ふと、世界の識者は痛嘆するであらう。

（八）

我々は、今大戰後の世界經濟の棚卸勘定を爲さねばならぬ地位に立つて居る事は、殊にトロツキーの言ふが如くである。此棚卸勘定に於て、最大の『サスペンス、アツカウント』は、實に勞農露國の經濟難と其救濟とである。獨逸償金問題は此れに次ぐものであるが、其現在に於ける重要さには、可なりの距離が存するのである。ジエノヴア會議は棚卸

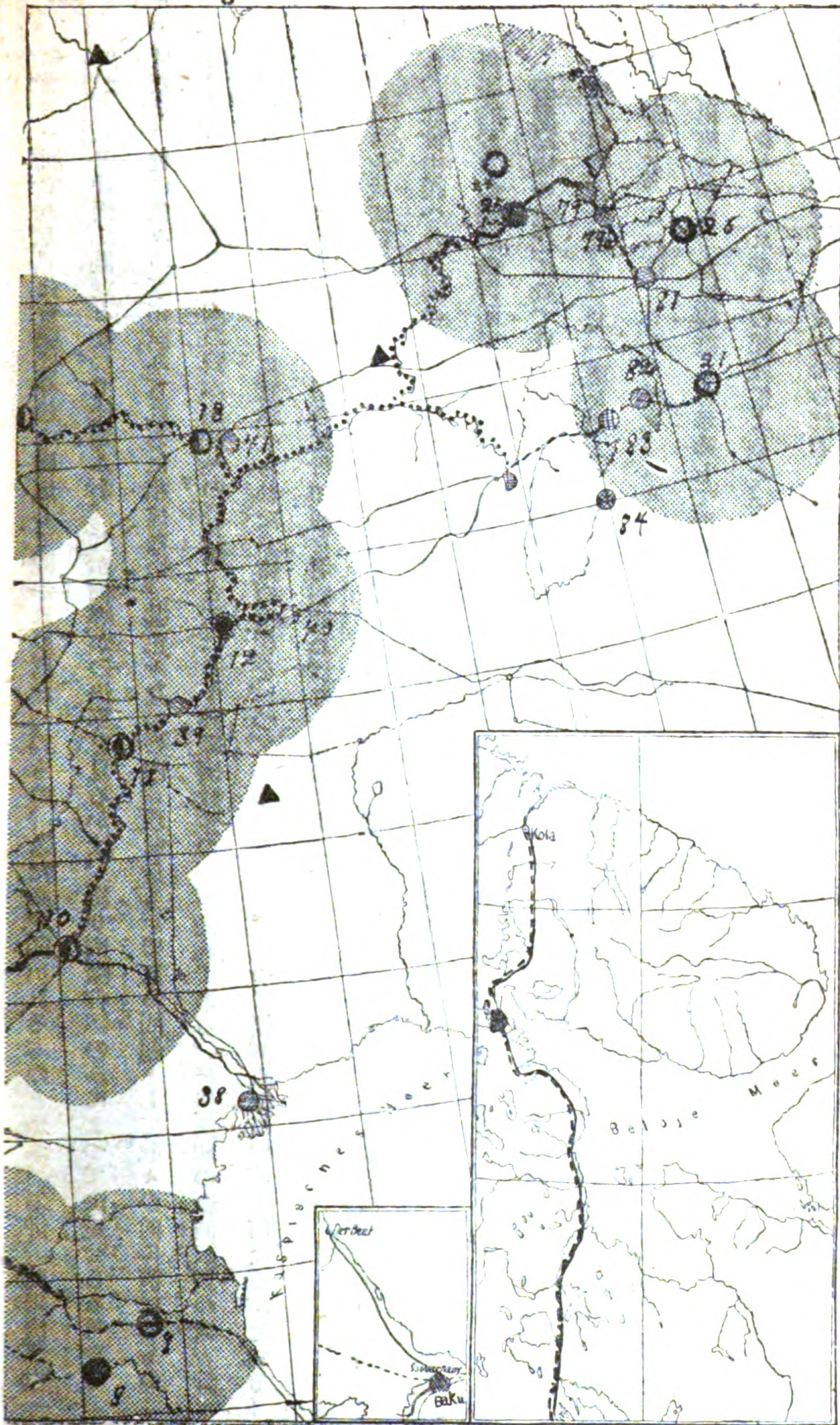
會議第一回である。此會議は今後も繰返して開かれねばならぬもの、又た必ず開かれるものと思ふ。乍併、此未決算勘定が果して貸倒れ勘定となつて仕舞ふか、其が何等かの決算を見るかは、獨り國際會議のみによつて決定せらる可きではない。他に色々の事が試みられるに相違ない。其色々な事の内、現前最も重要なる問題として我々の前に横はるものは、即ち所謂『勞農露國の資本主義への降伏』と云はるゝ其經濟政策の變革是れである。勞農露國の經濟政策の大方針は、レニンによつて、世界に宣示せられた全露の電化を以つて其基調とする。從つて經濟政策の變革の何なるかを知るに先て、我々は、此の電化計劃の進行如何を考察せねばならぬのである。

ラツセル氏は前掲の論文にレニンの次の言を引いて居る、『露西亞に行はれて居るような資本主義前の關係の狀態から、社會主義への直接の推移を實現することは可能であるが、然り、それは或程度までは可能である。けれども非常な科學的努力の經驗の御蔭で知り得た或一つの條件附きで丈け可能なのである。其の條件とは電化である』。

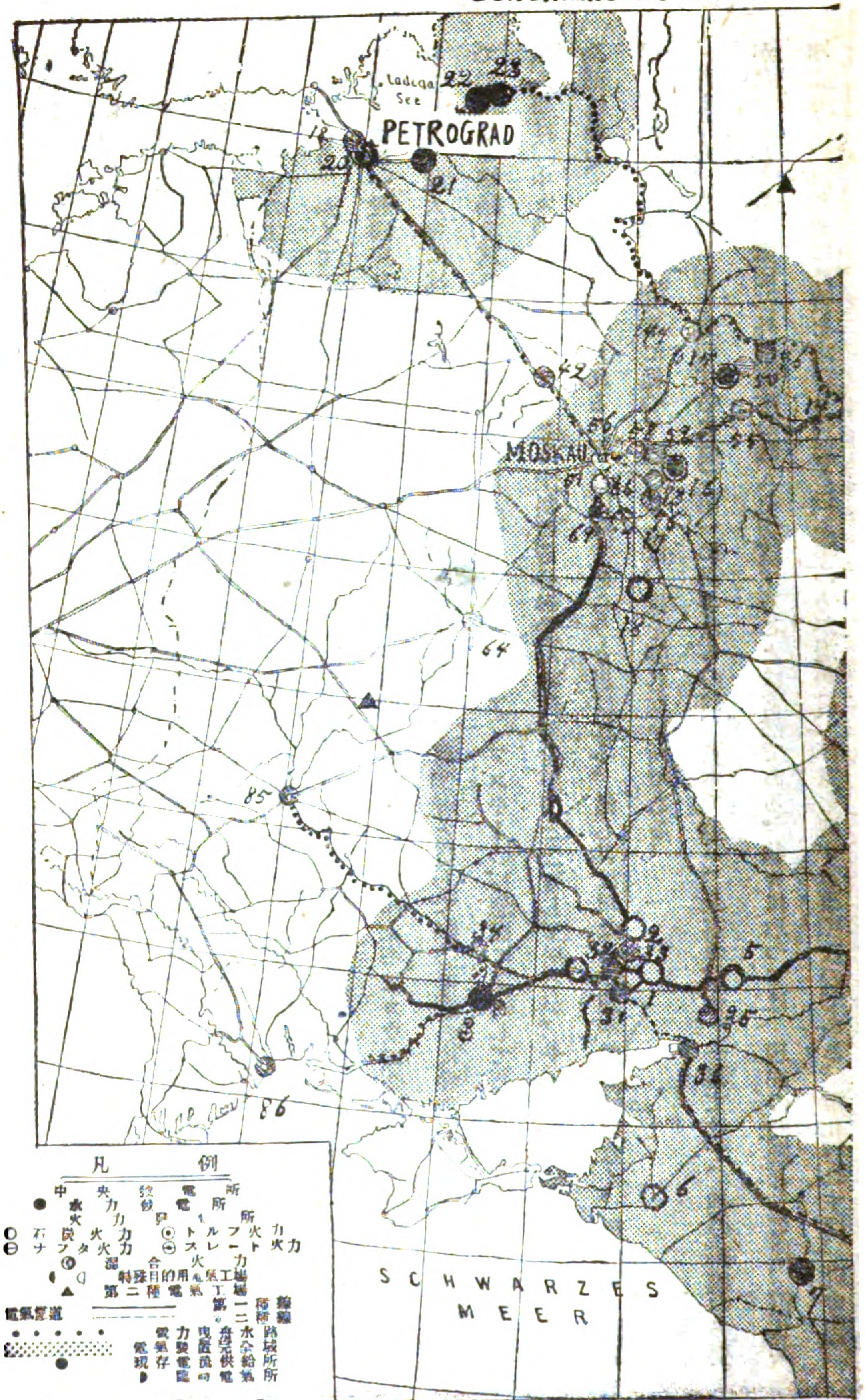
勞農露國の電化に就ては、書目(三)のクリシアノフスキーの論文と、書目(十五)の同じ人の第八回全露電氣工學大會感想錄とに就て、其一斑を窺ふことが出來る。更らに書目(十八)の『露國電化委員會』發行の『露國電化計劃圖』がある。これは、シユルギン、スミルノフ、ラピロフ・スコブロ三人の作成したもので、一目して其計劃を窺ふことが出來るから、左に複寫して示めして置く。

クリシヤノフスキーの記述によると、昨年七月迄に縣の首府五個、郡の中心町六十一個、及六十五の村落に於て、此計劃による新電氣所が設置せられ若くは舊電氣所が擴張せられ、四十八個の工場は電化せられ、三個の縣首府、二個の郡、二十四個の村落に於て、電流網が擴張せられた。同年の冬には、モスカウの電氣設備は一九一三年の平準にまで恢復せられる筈で、ボゴロドスク郡では、トルフ火力の使用を著しく增した爲め、モスカウへ電力を供給し得るようにな

Elektrisierung Rußlands.



Schematische Karte der



り、發電所では一九二一年に、トルフ火力用として八百萬プードの空氣乾燥トルフを使用するやうになり、其結果戰前に超ゆる約五割能率を增した。其外五十萬プードの含水トルフを收得した。其進步の趨勢は、他の歐洲諸國の發達を凌駕するのものなりと云つて居る。又た六ケ月乃至十ケ月後にカシラ工場の作業竣功すれば、モスカウに於て發電用に石炭を使用し得るやうになるであらう、此れが出來上れば、モスカウの電化は目覺しいものであらうと言つて居る。ペトログラードは餘程後れて居る、然しシユタウ工場の建築は着々進行し、次年度には、之が電化計劃に組入れるであらう、從つて之れによつてトルフ利用は著くし進むであらうと云ふ。ドン河流域に於ける電化計劃は具體的に進行して居る。三十五個の工場中十二個は著しく擴張せられ、其結果二百ヴエルストに亙る電流供給が出來るやうになるは近いことであらう、かくて二千萬プードの石炭が節約せられ得可しと云つて居る。而して露國政府は『全露電化計劃の實現並に其事業に一般國民を積極的に參加せしむ可き方法』を講究する爲めに、昨年末モスカウに全露電氣工學大會なるものを催した。此大會には出席者甚だ多く、專門の技師、學者は、勞働者と伍して熱心に議事に參加し、右實行の計劃に就て詳細なる審議を重ねた。其模樣は書目（十五）のクリシアノフスキーの感想記に記述してある。兎に角全露の電化と云ふ事は、中々の大事業で、レニンも十年の苦心慘憺たる經營を要すと公言して居るが、十年や十五年では、其計劃の全部は愚か、半分も實現せられることは困難であらうと思はれる、然し其は單なる空想や戲談ではなく、勞農國の識者は、眞劍に又た熱心に其事に從つて居ることは、疑を容れない所である。

然し乍ら、右の計劃を實行するに付て第一に必要なものは、資本である。全露の電化の一事丈けで、他の格段の必要がないとしても、露國が外國資本の輸入を切望することは當然である。我々に取つては、現在の問題としては、電化其事よりも、其爲めに外資を求むる切要と云ふ事の方が遙かに、注意を要する事項なのである。電化行れずば、社會主義

への推移の實現が不可能であると、レーニンの告白したことは、之を平易の語に翻譯すれば、資本なくしては、殊に外資の輸入なき限り、勞農主義の進行は不可能である事の告白となるのである。

鑛山の開發にも、外資が切要とせられる、森林の利用にも然り、否農業の恢復の爲めにも然り、茲に於て『開發特許』と『食料特許』との設定が斷行せられた。其事は近刊『商學研究』掲載の拙文『勞農露國の開國と資本主義降伏令』に少し述べ、且つ露國自ら公けにした特許區一覽圖をも添へて置いたから、本論文に於ては記述することを省いて置く。

斯くの如くに、今勞農露國に取つて第一の問題は、如何にして外資を誘致し得可きかの一事に存して居る。舊國債の承認の要求に讓歩したのは、其爲めに支拂ふ代價としてであることは、レーニン以下自ら卒直に告白して居る處である。

（九）

レーニンは、書目（十三）に掲げた『現在及び社會主義の完全なる勝利の後に於ける金の重要』と云ふ革命第四年を記念する一論文に於て次の如く論じて居る（以下大意を意譯す）

『此の大革命記念日を祝ふに最善の方法は、此革命がまだ釋き能はざる課題に對して我々の注意を向けることそれであらう。殊に刻下最も必要なるは、革命がまだ釋決せざる根本問題に資して新しい事を學ぶことと之れである。其の新らしいことの第一は、吾が革命は今や其の經濟的建設の根本問題に就て『改良的』、漸進的、愼重考慮的なる迂廻方法を取るの必要を學ぶこと卽ち之れである。此問題は理論上にも實際上にも、幾多の質問、驚愕、疑惑を喚起するであらう。理論上では、『汝等は革命の進行に於て勝利を占めたに拘らず、今一朝にして、革命的實行を捨てゝ、改良的實行に移ら

んとするは、何故なりや、其れは畢竟、自己立場の棄却、自家破産の告白ではないか』と云ふ疑問が起る。吾人の敵たる半封建的反動者流からメンシエヴヰキ及二半インテルナチョナール等に至るまで、此問に對して然りと答へる。吾人の友人すらも、此問に對しては全くは否定もせず曖昧な答を與へる。(レニンに言はせれば、ラツセル氏の如きも其一人であらう)。

一九二一年に至る三年間吾人が努力した方針は何であつたか。答、吾人は大工業を再興し、其が直接に小農經濟と交換するに至ること、而して同時に此等大工業を社會化することと是れであつた。大工業の再興の爲めには、吾人は强制徴發によつて、一時農民から大工業用の生産資料と原料とを借り上げんとした。此れは、舊時の狀態を端的に且つ完全に廢棄して、新なる社會的、經濟的秩序を以て之れに代ふると云ふ意味に於ての、一の革命的方法であつたのである。トコロが、一九二一年春以來、吾人は此方法、此實行に代ふるに、全く異つた實行法卽ち改良的方法を取ることにした。吾人は古き社會的及經濟的秩序、商業、小農經濟、小企業、資本主義を此以上滅ぼすことを罷め、却つて商業、小企業資本主義を再び復活せしめ、之れによつて愼重且つ漸次に此等を吾人の手に全く掌握するか、其れが出來なくとも、少くとも此等を——而して其は、其の復活した程度丈けに限つて——國家管理の下に置き得る可能を維持せんと欲するのである。卽ち、吾人は、從前とは全く反對の側から吾人の任務を遂行せんと欲するものである。此の方法は從前の革命的破壞法に比べて改良的なることは云ふ迄もない。革命は一の變革であつて、舊秩序を其基礎に於て、其根帶に於て滅ぼすものである。舊秩序を愼重に漸次的に、緩慢に、出來る丈け庇ひつゝ變へて行くと云ふのは、無論革命の方法ではない。ソコデ次の質問が生ずる。汝等は汝等の革命の方法を實驗した後の今に至つて、汝等自ら其失敗たることを認め、此方法を捨てゝ改良的方法を取ると云ふことは、畢竟汝等の革命其ものが全體として一の誤謬であつたことを宣言

する所以ではないか。汝等が革命を始めたこと共事が抑も間違ひであつて、寧ろ汝等は改良丈けに止めて置く可かりしことを立證する所以ではないかと。

メンシエヴヰキは斯く云ひ、此れに同ずるものも斯く云ふ。然し乍ら此れは、政治の何なるかを知らない者の言である。眞正なる革命家なるものに取つては、最大の、而して恐らく唯一の危險は、革命主義に熱中するの餘り、鹿を逐ふて山を見ざるの愚に陷り、革命的方法を適當に有效に適用するに必要な限界と條件とを忘れること是れである。(中略)革命家は自家の愚の爲めにのみ滅亡するのである。(中略)エンゲルスは『革命中に愚かな事の演ぜられることは他の時に於けるに異ならない』と云つた。誠に其通りである。我々は出來る丈け愚擧を演ずることを少くし、一度演じた愚擧に對して出來る丈け速かに善後の法を講じなければならぬ。(中略)吾人が今日迄爲し遂げた事は、革命のブルヂオア的デモクラシー的側の事項である。吾人は其成績を誇る可き權利を有す。而して革命のプロレタリア的又は社會主義的仕事は次の三大要項から成る。

第一、帝國主義的世界戰爭から革命的に脫退すること。資本主義的盜賊の二大世界的團體間の慘憺たる鬪爭の假面を剝き之鎭を壓すること。

此仕事は吾人は完全に之を遂行した。(下略)

第二、プロレタリア獨裁の實現形態としての勞農政權の確立。

世界の轉換期は既に始まつた、ブルヂオア的デモクラシー的議會政治の時代は既に去つた。世界歷史の新時期は開かれた。プロレタリア獨裁の時期は始まつた。勞農政權の最終的確立、プロレタリア獨裁の凡ての形態の樹立は、幾多の國が集つて始めて完成せらる可き事業である、我露國に於ても、此點に於て未だ終局を告げざる事項

が多々ある。此點を忘るゝことは許す可からざる事である。我々は此の完成の爲めには、向後に於ても、屢々吾人の仕事を變更し、絶へず始めからやり直さねばならぬ必要に迫まられるに相違ない。生産力と文化の發展上一歩にても前へ又は上への進歩は、我が勞農政權の完成と改造とによつて伴はれねばならぬ。吾人は未だ經濟上並に文化上甚だ低度に立つものである。されば向後多くの改造、やり直しは吾人の前に横つて居るのである。此れを無視するは愚の骨頂、若くは其以上の惡である。

第三、社會主義的秩序の基礎の經濟的建設。

此點に於ては、最重要な事、最根本的なるは未だ終りを告げて居ないのである。其終りを完することは、吾人當面の主要任務であつて、其れは單に理論上のみならず、實際上、露共和國の立場からも、將た亦た國際的立場からも主要の仕事であるのである。

即ち吾人は今此の主要任務に力を傾注せんとするものである。而して之を爲すに就ての最大困難は、其の過渡の形態を如何にす可きや之れであるのである。予は一九一八年四月に起草した『勞農政權の最近の任務』に於て云つた『我らは單に一の革命家たり、社會主義の信仰者たり、乃至は一の共産主義者であると云ふ丈けでは、事足りない。我らは凡ての瞬間に於て、全連鎖を確める爲めには、緊がつて居る一つ一つの鎖環を拉へ之を繋ぐ可き次の環への移り行きを、準備せねばならぬ。其れには各環の形態、其關係、歴史的過程に於ける其の差別は、決して單純なものでないことを學ばねばならぬ』と。吾人の實行に於て今考究せねばならぬ鎖環とは、規則的國家管理の下に内國商業を復活させることと之れである。商業は實に一九二一――二二年に於ける吾人の社會主義的建設事業の過渡的形態に於て、吾人の全力を擧げて確立することを要する歴史的連鎖中の一鎖環である。吾人にして此の一環を十分力強く確立することを得るならば、吾人は

近き將來に於て、必ず全連鎖を手に收むることが出來よう。然らざれば、此連鎖を手に入れることが出來ず、社會主義的、社會經濟的關係の基礎を樹立することは出來ないのである。予が此く言ふと甚だ奇異の感を抱いて云ふものがあらう。共產主義と商業!? 此二者は全く關係のない無意味な、奇體な事のように考へられよう。然し國民經濟上から觀察すれば、共產主義と商業の關係は、共產主義と小農、農家的農業との關係と少しも距離に於て異る所はないのである』と。レニンは斯く、一九二一年春以來の經濟政策の根本的變革の爲めに辨じて居るのである。

彼は更らに論點を轉じて、金に對する勞農露國の立場を說明して云ふ。『吾人が全世界に勝利を占める曉には、世界の首都の此處、彼處に黃金を以て大小便所を作るであらう。此れが金の爲めに屢々大戰爭を敢てした人類に金の正當なる使用法を知らしむ可き最も教訓的なる方法であらう』と。此着想は、恐らくトマス・モーアの『ユートピア』に、理想國では、金は主として犯罪人を縛る鎖を作るに用ゆるとある事から得來つたのであらう。何れにしても、マルキシストを以て自ら任ずるレニンとしては、甚しくユートピア的な一空想である。然し彼は此の如き滑稽な空想を語らんが爲めに此事を言つたのではない。否、其れとは正反對な新經濟政策を辨明する爲めに、一の假設を爲したのである。然らば彼の眞意は何であるか。曰く『如上の使用法こそ金の正當なる用法ではあるが、我々が此を實行し得るような狀態に達する爲めには、吾人は隱忍して數十年待たねばならぬ、否一九一七年より一九二一年間他の事業で成したと同じ程度に於て努力せねばならぬ。而も其力を注ぐ可き範圍は、一九二一年迄の其れよりは、遙かに大なるものである。即ち吾人は全力をあげて勞農國に於ける金を節約せねばならぬ、出來る丈け高く金を賣り、此金に對して出來る丈け安く外國商品を買入なければならぬ。狼の群に入つては狼と共に吼へなければならぬ。

農業が最高度に發達した機械的大工業並に大電線網と同時に併存するにあらざる限り、數千萬の小農と工業とを聯結

す可き唯一の可能なる經濟的連鎖は、商業あるのみである。トコロが、此の『あらざる限り』は既に世界全體としては實現せられて居る。然し乍ら世界の最も後れた國の一であつて、而して工業と農業との此の新聯結を一擧にして直ちに實現しようとする國は、此の仕事を突貫戰を以て成就することは出來ない。長期に亘る漸次的、熟慮的包圍戰によつて成就しなければならぬのである。卽ち商業を其權下に置き、それに方針を與へ、それに一定の範圍を與ふることは、プロレタリア國は必ず爲し能ふことであり、又た爲さねばならぬことである』と。是れが、彼の商業に對する態度變革の理由である。

彼は、此論文を結んで言ふ『プロレタリア全勝以前に於ては、改良は革命的階級鬪爭の一副產物である。全勝以後に於ては、副產物たる外に、更らに極度まで緊張した力を以ても猶及ばさる場合に、箇々の過渡の革命的完成を遂行するに必要にして正當なる休憩となるものである。（中略）之を要するに、吾人は今や國家資本主義へ退却した。乍去、吾人の退却は必要なる丈けの程度に止まるのである。吾人は今や國家の商業管理に退却した。此の退却は遠からず終りを告げると信ず可き理由がないではない。吾人が此退却戰を停止す可き地位に達することは遠い將來のことではあるまい。吾人は、今は、十分に此事を意識し、十分に結束し、先入の偏見を少くして、此退却を敢行すればする程、吾人の勝利的前進はより速かに、より廣汎に、より永續的となるであらう』と。（以下嗣出）

附記。國民經濟雜誌掲載の拙稿『ボルシエヴヰスム研究文獻小錄』に、ボルシエヴヰズム研究案內書として、甚だ有益なりと思はるゝものに、『ボルシエヴヰズム及び其反對文獻の栞』と云ふものがあるが、不幸にして之を見るを得ないと記して置いたら、河上博士から特に書を寄せられて、右は京大に藏してあるから、見せても宜しいと親切に報ぜられた。此頃私の手許にも右書以下四冊『ボルシエヴヰズム研究資料集』（伯林ボルシエヴヰズム研究事務局發行）一號から五號まで屆いた。第二冊は『勞農共和國の農業法規集』、第三冊は『勞農露國の經濟組織』、第四冊は『ボルシエヴヰキのプロパガンダ學校』、第五冊は『勞農共和國の司法制度』であつて、何れも勞農國研究に取つて有益の資料である。玆に附記して、河上博士に深謝の意を表する。（五、七）

生活に對する支配の道德

長谷川如是閑

一

古代の歴史は一様に、支配者が道德を作つたと報じてゐる。さういふ歴史の確實性は疑問であるにしても、——詳しく言へば、古代史そのものも亦支配者の作つたものであるから、その内に含まれてゐる事實を、支配の目的に依屬して採擇され、觀察され、時には曲庇されたものであることが想はれるにしても、——何か道德ヂミたものを支配者が作つたといふことは歴史的事實としてあつたらしいことである。

無論社會に關する學問の發達した今日、道德を或る特定の階級又は個人が作爲的に作り出したと考へる譯には行かない。然し道德や法律のやうな生活の上の約束は、何れの民族のそれに於ても、大抵神的起原を有つてゐるのであつて、決して人間の意志感情に起原したものとは信じられなかつた。如何なる民族にもさういふ信仰のなかつたものはない。既に起原が神的であるとすると、神意の仲介者が、道德法律の授け手であることは當然の順序である。而して神意の仲介者は、原始的の民族に於ては、神と人との仲間に位する長老即ち支配者その人に外ならないのである。

舊約でエホバがモーゼに與へてゐる極めて詳密な法度と律法とは、可なり進歩した當時のイスラエル人の道德に外ならなかつたのであるが、——言ひ換へれば、それは誰れが作つたといふ意味合ひのものではないのであるが、——歴史の上では確かに支配者が作つたことになつてゐる。堯舜の時代の支那は、埃及、バビロニア、アッシリア等のそれに比べてたゞ建造物だけが及ばなかつたかと思はれる位文明の或る域に達してゐたらしく、從つて、生活の約束は、既に可

なり進んだ内容を有つてゐたと思はれることは、皐陶の九德、禹の洪範によつても察しられるのであるが、歴史は、その時に、舜が皐陶をして道德を作らしめたかの如くに記載してゐる。而して此の東洋と西洋との何れの場合に於ても、支配者の意識が動機としても　又目的としても、生活の約束を作り上げる第一次的の條件であるかの如く記載されてゐる。『項の强き』イスラエルの民は、モーゼがエホバから與へられた教訓によつて、『智慧と了知と智識と』を得たのであつたのであつて、その道德は、決して、人民自からの生活の所産ではなかつたと解されてゐたのである。支那の古代政治は、支配者意識の强くなかつた點で、世界に珍らしい特徴を持つたものであるが、それでも古代史の開卷第一は、必らず帝王の道德意識が、始めて當時の社會生活を可能ならしたといふ意味の記載に始つてゐる。實際は、當時の社會道德の反映である法律が、支配者の個人的な意識の生活に發程せしめられてゐる。

二

然かも、かういふ古代史の記載が必らず一致してゐる面白ろい點は、當時の道德が、後代のそれに比べると、甚しく生活に即してゐることである。後代のそれは、その道德が思惟の生活の範疇に屬してゐて、明かに、思惟といふことが專門的鍛錬によつて特別の階級生活の裡に別種の世界を發展せしめてゐるとを想はせるのであるが、古代のそれは、何よりも生活そのものを目標としてゐたのであつた。そこには根本的の意味でいふ生活の約束が成り立つてゐて、約束の爲めの約束(道德の爲めの道德)といふやうな、生活と思惟との背中合せがない。例へばモーゼの道德にしても、極めて具體的な性の生活、生產の生活、又は原始民の生活に離れ難い祭祀に關する約束であつて、結婚制度の Tabu や、集團生活に適切な法規やを離れたものではない。皐陶の九德にしても、禹の洪範にしても、食物の生產に重大の關係ある天文や、性の生活の約束である所謂人倫關係や、住居問題や、娛樂祭事等を規定するものに外ならないのであつた。それが後代になると、仁とか義とか禮とか、煩瑣な思惟の法則だけから出來てゐるところの――少くとも思惟だけで存在を主張し得る處の――範疇的の構造となる。それだけ古代道德は後代のそれが哲學的なのに比べて、『生活的』又は『社會的』

であつたと云へる。それは何れの民族に於てもさうであつたと思はれるが、その事は他の一面に於ては、支配は、發生的には社會的であり得る——强ち政略的でなければならない譯はない——ことの證明である。實際の歴史的の支配が悉く攻略によつて成立してゐるにしても、古代の社會的性質の支配は、大抵の民族に於て歴史上存在したものと見て差支ないであらう。——少くとも、攻略による支配の發生以前の社會に、何等かの形の支配があつたとすれば、それは乾度社會的性質のそれであつたのであるが、そんな支配がなかつたにしても。攻略に基いた支配にもさういふ風の社會的性質が勝つてゐたと思はれる。舜が位に即いた時に、その政治の第一着が何から始められるべきかを大官に諮問した時に、大官等が『食なるかなこの時』と答たといふ歴史の記載は、如何にもよく、古代の社會的支配意識と後代の政治的支配意識との性質上の差違を示してゐると思はれる。後代の政治的支配では、支配そのことの完成を、生活の完成の後に置くやうなことは決して爲なかつたのである。無論堯舜の國家が創作的の理想國家ではなく、歴史上の國家であつたとすれば、——それは、やゝ疑はしいといふことであるが——攻略によらないで出來たものであり得る理由は乏ないであらうが、それでも、その國家の歴史が、古代の傳說と絡み合つた時には、右のやうに、後代の國家に比べて遙か社會的の性質を帶びたものになるのである。禹の洪範でも、支配の順位を、先づ食と、性と、住民、といふ生活の根本的のものから數へ始めてゐる。かういふことは、多分古代の傳說と歴史との混同から來た心理であらうとは思はれるが、——詳しく言へばその道德を組み立てた支配階級か、又はその道德を記載した歴史家かの何れかゞ、當時に於ける傳統的信仰を支配の理想に取り入れたのであらうと思はれるが——それだけ古代の支配者の道德の社會性を認めない譯に行かないのである。

三

であるから支配者が道德を作るといふ古代史の記載は、一般が社會生活の法則を意識する手續きを現はしたもので法則それ自からは、强ち支配者の階級的若くは個人的利害のみの產物ではなかつたと見ることも出來る。然し此事情は、

久しからずして、歴史の上で明かに變化してゐる。即ち特定の支配狀態の擁護の爲めの道德が、顯著な支配階級の意識の上に構成されることになる。例へば、堯舜の社會的道德は、儒教の發生に伴つて、特定の支配階級を保存する目的に役立たうとしてゐる。即ち周の王室を世襲的に保存しやうといふ意志となつて現はれて來る。堯舜時代には決して認められなかつた世襲の觀念が確實な道德と結び付くに至つたのもその理由からである。又道德といふものが、社會的生存の現實にして具體的な方面に働いてゐた堯舜時代の傾向は、儒教時代に至つて變化して、道德は特權階級の思惟の生活から産れた觀念の世界に於ける純精神的な若しくは叡智的な現象と考へられることになつた。言ひ換へれば、百姓（生産者）には徹底的に思惟も理解もされない、特權階級の觀念生活であるといふことになつたのである。

そこから發生した重大な差違は、大なる道德家は、同時に物質的生活の大なる建設者であつたといふ古代社會の生活樣式が變化して、大なる德道家は寧ろ物質生活とは沒交涉な、觀念的優越を占めてゐる精神生活者であるといふ生活樣式の發生したことである。即ち古代に於ては物質生活の建設者が道德的支配者で、王は同時に土木技師、農業技師、建築技師等であつた。舜が一個の天才的の土木技師であつた禹を王位の繼承者に撰んだのもその一例である。古代の王が多く魔術者であつたといふ事實は、他の一面に於て彼等が、今日の科學者のやうな位置を占めてゐたものであることを說明してゐるのであるが、そのことは古代道德が生活の自然科學及び應用科學と密接に結びついてゐた事實と一致してゐるのである。アナクシマンドロス等の自然科學が、當時の希臘の道德觀念と因果關係にあつたらしく後代のアリストートルが考へたのは、決して道理のないことではなかつたのである。生活の物質的完成の大なる努力者が同時に大なる道德家であつて從つて、所謂王者の德を備へた人間だつたのである。

後代の道德に至つて、かやうな性質は、根柢から覆された。――のではなく、實は如何なる時代に於ても道德は、一般社會生活の物質的條件の完成に於て興り、その條件を無視するに至つて滅びるものであつて、今日でも道德の危機が叫ばれてゐる所には、今の道德が少數階級の物質的精神的完成に貢獻する割合に、一般社會の物質的生存を無視してゐるからである。此一般の物質的生存の不完成は、同時に一般の觀念的生存を完成せしめまいとするので、さういふ組織から産れ

た道德は當然に崩壞しない譯に行かないのである、――後代の道德は、同じく物質生活との交渉を離れて成り立ち得る筈のものでないに拘らず、その觀念生活の文化的鍛錬によつて、特定のそれ自からの世界なるものを組み立てゝ、その別世界に於て、まるで天國のそれのやうな完然無缺の生活を成り立たせやうと企てるに至るのである。支那哲學の完成もさうなれば、希臘哲學の完成もさうであつた。從つて道德（後代の意味に於ける）の完成は大抵、生活の組織の崩壞に近い時に成り立つ。それは通常組織が崩れかけたからそれを引締める爲めに道德を必要とするので、崩壞の間に立派な道德が出來るのであるといふ風に說明されてゐるが、それはさうでなく、寧ろそんな階級的の道德が一般生活と沒交渉に成り立つやうな階級的構成の發達した社會だからその組織が自づから崩壞するのであると解するのが事實に近いであらう。戰前の獨逸の社會組織が動搖し出したから、あのやうな煩瑣な獨逸哲學でそれに箍をはめやうとしたのであるといふよりは、寧ろ、あんな煩瑣な獨逸哲學を發生せしめる位、階級的特權の際立つて強くなつた獨逸であるから、その組織が動搖し出したのだといふのが事實であらう。無論獨逸の哲學には動搖し出した現狀を擁護しやうとする無意識の努力があつたであらうが、然しそれは階級的特權の產物の當然の結果で、それが哲學であらうと學術であらうと、法律であらうと、鐵道であらうと、紡績機械であらうと。その點には變りはないことで、敢て打ぬだけにさういふ無意識が固着してゐた譯ではない。紡績機械が資本主義崩壞の過程を作り出すのではなく、あゝいふ機械をあんな風に作り出し、使用するに至る如き資本主義的特權の成立が、社會生活に影響して、そこに組織の動搖が起るのである。機械もその一部の責を負ふべきものであるのは無論だが、生活の偏倚つた發展そのことが生活組織の動搖を惹起すのである。儒教とても其通りで、周の王室の保存を困難ならしめるやうな封建割據の鬪爭が起つたので、儒教がそれを維持すべく起つたには違ひないが、周の國家組織に動搖を起した時には、特別の哲學を産み出すやうな階級的特權が成り立つてゐたのであつて、この特權生活から儒教の階級哲學が起つたのである。その哲學の起ることが崩壞の原因の內に働いてゐるのだから、その哲學で崩壞が救へないのは當り前である。それは覆滅せんとするボートに乘つた人の心理に發生した衝動的宗教心（或は念佛、題目等を唱へしめ、或は神を呼ばしめる心）がボートの轉覆を防ぎ得ないのと同じである。後代

に發生した觀念世界の道德（儒教）と、古代の生活意識に基く道德（堯舜以前の）とその力強さに差違があるのは、その事情に原因して居るのである。

四

同じく支配者が作つた道德ではあるが、古代のそれは、支配意識が原始的であつたゞけそれだけ生活的で、所謂政治的支配意識ではなかつたのである。そのことは支那古代のそれよりは遙か軍國的であり支配的であつたモーゼの律法に於てすら、その點は窺はれるのであつて、ハムラビその他の古代法典に於て益顯著である。無論周代の封建制度の完成する前の支那の支配道德が如何に生活的であつたかは想像するに餘りあるのである。然かもそれはあらゆる民族に於てさうであつたのである。日本の古代道德は、後に支那思想渡來後の思想で解釋された文献しか殘つてゐないからその點は明確ではないが、然し神話時代に、生活の荒廢者であつた素盞嗚男尊が支配階級の一人でありながら嚴罰を受けたといふことは、矢張り同じ事情を説明してゐると考へられる。それは支那で洪水を治めることの出來なかつた鯀が嚴罰を蒙つてゐると似てゐる。（鯀の方が一層烈しい生活道德の制裁を受けた譯ではあるが。）

考へるまでもなく、道德の根本的性質はそこに無ければならない、生きる事とは生活することでなければならない。生活するとは食ひ生み思ひ働くことの綜合の外に何もないし、そのうちのたゞ一つだけを指すのでもない。『朝に道を聽いて夕に死とも可なり』などゝいふのは、階級的特權生活の爲めに、生活意識が片輪になつて、たゞ『思ふ』ことだけが生きることであるといふ論理を思惟の上で組み立てた結果である。然もさういふ思惟が果して其の人の考へてゐる通り彼れ自からの生活の全部であつたか何うかは無論斷言出來ない。その證據には『思ふ』ことに卒業して（眞理を摑み了つた人即ちその人の解釋に從へばもう死んでいゝ人）でも地震に遭へば思はず逃げ出すのである。そこに生活の力強さがあるのである。されば道德の根柢は道を聞いてしまつた滿足の要求になくして、地震に遭へば逃げ出すといふ生活の要求の方に在るべきことと疑ひない。言ひ換れば、それは古代道德の方が後代の道德よりも根柢的であるといふことである。

この事は、道德の發達と思惟の發達との關係を考察すると一層よく解る。思惟は論理に於て發達し、論理に於て完成する。所が元來、論理の世界は、必ず生活の閑散（リークスパー）を豫件とする。火事、喧嘩等の場合に論理いないのは、その生活に閑散が伴つてゐないからである。無論外にも理由はあるが、如何に火事喧嘩が論理を必要としても、たゞ此閑散がないといふ一事の爲めに、そこに論理があり得ない結果になる。無論閑散が、必然に直接、論理の生活の發展となるのではないそこには、その閑散の生活を內容づける生產の生活の進步があることを條件とする。進步した生產の生活によつて內容づけられた閑散の生活に必然に原始的の思惟を次第に文化的に進展せしめる。これは歷史的事實を云つてゐるのである。卽ち生產的に立派な民族に於てゞなければ、そこにいくら閑散の生活があつても、決して文化的進展を見ない。言ひ換へれば、思惟の生活だけからは決して文化は產れて來ない。希臘文化は、希臘市民の思惟の生活の產物であるよりは寧ろ、ヨリ多く當時の奴隷の生產の產物であつたのである。無論その何れのが孤立的ではなく協同的であつたことはいふまでもない。

思惟の世界は、かく生活を離れては成り立ち得ないものであるに拘らず、思惟そのものが觀念の生活である爲めに、生活を離れて別個の發展を遂げ得ること、丁度夢の生活に似たものがある。『家を作る生活』は、實際家を作るそのことを離れては存在し得ないが、『家を思惟する生活に存在する家を離れて如何やうにも進展し得る。勿論人間の生活には、『家を作る』生活があると共に、『家を思惟する生活もあつて、その何れを壓迫しても生活の壓迫になるには相違ないが、然し『家を作る』生活は、何處まで行つても、『生活に於ける家』から離れられないに反し、『家を思惟する生活』は、『生活に於ける家』を離れて何處までも行くことを得て、結局『思惟に於ける家』なる別種のものを組立てる。さうしてそれが大抵の場合、『生活に於ける家』よりも立派な家ので甚だ誘惑的なのである。

而して『思惟に於ける家』は、『生活に於ける家』から見れば第二次的で、場合によつては何うでも好いのである。その『思惟の家』が『生活の家』と切り離し難い關係で成り立てゐる時には、それは『生活の家』の他の一面の觀念的生

活として盛り立てられてゐるが、餘りに『生活の家』と懸け離れゝば誰れにも顧みられないで、一部の人々の觀念界に於ける『家』たるに止まる。而して生活者の多數がさういふ生活と離れた觀念の家を盛り立てることの出來ないのは、生活に閑散のないことが、實際上の原因となつてゐるのである。觀念世界の甘味を味つてゐる道德家は、それ故に、すべての人に相當の閑散を與へて、今日の文化人の享樂してゐるやうな觀念的生活を享樂せしめることが生活の理想でなければならないと考へるがさういふ道德には重大な錯誤がある。今日の文化的觀念生活は、今日の生產狀態に特有の生活組織が產み出した生活である。從つてすべての人に今日のブロジア式生活を與へやうとすれば、必然に今日の生產組織は維持されなくなる。職工に重役同樣の給料を與へたい、今日の生產組織は成り立たない。それと同じく、重役に職工同樣の生活をさせたら今日の文化は成り立たない。だからすべての人間に閑散を與へるといふことは今日の組織のまゝでは不可能で、若し又組織を變へてそれを與へたら、今日の組織から出來た文化と同じものを成り立たせることは六かしい。）

今日の論理的生活は、希臘のそれと同じく、確かに、生活の右のやうな組み立を條件としてゐる。殊に近代の顯著な事相の一として、思惟が甚しく專門家の仕事となつたといふ事情は、一層このことを昇進せしめた。哲學といふものは、一般特權階級の間に普通的な思惟であつた。中世式の生活に於ては、それは希臘の哲學と同じ根柢的の生活を離れてゐたとは云へ、とに角、或る階級生活者には一般的の思惟で、謂はゞ、特權者の實際生活にだけはぴつたり合つてゐ、少くとも合ふことが要求されたのである。然るに近代に及んで、思惟にも極端な分業が行はれ、哲學的思索の如きは、特權階級的生活者中の一層少數な人々の專門的の仕事となつてしまつたのである。從つてその人々は、專門家であるといふ役目の爲めに、素人の思索し得る範圍を思索してゐたのでは、その專門の生活に對して相濟まないとでも考へたかの如く、極めて精密な思惟の過程を產み出すに至つたのである。それは精密ではあるが、科學的精密とは違つて、對象のある自然現象の認識を精密にするのではなく、全く思惟の技巧の混み入つた精密さで、云はゞ思惟の生活が何れほど複雜な派生的の生活を持ち得るかを展覽せしめてゐるやうなものである。かういふ傾向は思惟を專門家の手にのみ委ねさせ

ない英國では比較的極端に至らないが、獨逸では、獨逸人自から惱みとしたり誇りとしたりする位極度に達してゐる。道德がかやうな論理の過程の產物であるといふことになると、全く根柢的の生活を離れて、寧ろそれを壓迫する働きを手傳ふことになるのである。發達した文化に伴ふ道德的意識が、そんな風に發展して來れば、生活意識に密接した古代道德とは紛ふ方もなく違つた生活圈内の所產であることが見られる。而して現代人の生活を、その道德が如何ともすることの出來なくなつたのは、その道德を產んだ生活圈が崩壞しかけた結果に外ならない。

五

それにも拘らず、矢張り今日の特權階級の生活者は、その生活意識による道德を作爲してそれを一般に投げやうとし、その外に道德はないと思つてゐる。それは古代の支配者の考へたことを實行したことであるから、今日そのことが繰り返へされるに不思議はないが、前云つたやうに、古代の支配者は今日のそれに比べて、社會意識の强かつたことは疑ひなく、從つて、その作る道德、法律が、ヨリ生活的であつたことは歷史の示してゐる通りである。これに反して次第に後代に移るに從つて、支配者の社會意識は、生活的より支配的、換言すれば階級的になり、或る部分の生活を犧牲として、他の部分の生活を完成せしめるといふ後の生活組織の基礎を作つて行くことになつたのである。從つて、その道德も、儒教や希臘のそれの如く、生活よりは觀念を尊重する傾向を取るに至るのである。それは即ち生活の支配を生活そのものゝ上に置く組織の、思想上の根據を爲すものなのである。

そこで生活を離れた道德は、階級的特權者の生活——即ち寧ろ生活を離れた生活——を本位とした法則として成り立つ。而かもそれを把持する生活者は、一般生活の支配者であるから、一般生活を、さういふ法則の下に構成することが道德であると思惟するに至り、その道德を强制することが彼等の生活の必然の要求となる。

それは生活に充ち足りた生活意識を以て、必ずしもさうではない生活を管理することである。或は、生活に充ち足りた生活などが、歷史上實現された例はないといふであらう。然し或る他の生活の犧牲に於て、自己の生活を完成した例

は歴史上に澤山あることである。或は、歴史はたゞそれだけの事實しか有たないと云つて好い位、それは歴史の常態なのである。而してそこでは生活者の生活は、非生活者の生活理想に基く組織的手段によつて、その目的に適すべく構成され、生活者の觀念の世界すら、非生活者の階級的生活を維持するに都合のよいやうに指導されることは珍しくない。即ちその世界では人類が一樣に有つてゐる、觀念が生活よりも尊重され易いといふ本能を利用して、殊に構成された觀念の世界を一般の憧憬たらしめる。

支配はそれが如何なる種類の支配であるを問はず、必らず特殊の觀念の世界を作り、そこにその支配を安定せしめやうとする。それは必ずしも、支配者の譎詐手段ではなく、人間的本能の自然から出た現象なのである、從つてその事自身がそのまゝ生活の障碍となるに定つてはゐない。たゞその觀念の世界が生活的であるが、生活の障碍的であるかによつて、その觀念世界の運命が定まるのである。從つてそれは時代とその生活樣式とその觀念世界との關係如何といふ具體的事相から判斷されなければならない。今日の觀念的生活に就ても、その手續を忘れて絶對の價値若くは無價値をそれに宣言しやうとするのは危險なのである。

前にもいつた如く、近代の觀念生活の專門化は、その觀念の世界に於て、それ自身の絶對の世界を有つこと昔の形而上學的生活と大差のない點まで進んでしまつてゐるのである。そこでは論理の世界に組み立てられた思惟の機構が、何よりも決定的であり、權威的である。從つてさういふ世界に於ける道德は、論理の鐵骨で組み立てられた摩天樓の工學である。金屬の鐵骨で組み立てられた摩天樓には建築技術の上での制限があつて、天を貫いて無極に至る譯には行かないが、觀念の塔は、その制限から超越して無限の天井にさへ屆くのである。そこに、觀念の世界が有限の人間に無限の眩暈を與へてゐるのである。現代の道德的構造の偉觀もそこにある。

所が、さうなつた道德は最早生活の法則ではなく、或る範疇に屬する生活の圈内に於ける道德觀念自體の自己完成に過ぎない。それは道德が道德自からを完成せしめ、善が善それ自體を完成せしめる道なのである。生きた人間の生活は、全くさういふ範疇の外を歩いてゐる過程なのである。

生活の過程と意識された生活の法則とがこんな風の乖離を見る時は、大抵生活組織の動搖を來してゐる時なのであることは、前云つた通りである。がその觀念の世界が、階級的優越者の世界である爲めに、その意識が、その組織の動搖を調節すべく最後の努力を試みるのが、歴史の示すところである。その爲めには、觀念世界の思惟の機構も、種々に運轉する。餘りに極端にあつた生活乖離が、何となく自然の生活傾向と諧調を失つたといふことを無意識に意識すれば、今度は『思惟を超越した』思惟といふやうな思惟の運轉が始められる。『生命それ自體』といふやうな思惟の技術が案出される。そんな風な經過は、歴史的に幾度か〳〵繰返へされてゐるが、要するに、幾度繰り返しても、それが生活を離れた『或る物それ自體』の完成であることは依然たりである。從つて、生活組織の動搖は、何時でも、決して思惟の生活で救はれたことがない。

六

が人々は、さういふ生活も亦、私自身のうちの切なる要求から出た私自身に無くてはならない生活であるといふ。すべての人がパンを喰ふことを要求すると同じ必要さで、私はさういふ生活を要求する。こんな言葉が、何れの世にも、その人々によつて、煩どく繰返へされてゐる。誰れもそれを否定するのではない。何人も、希臘市民のやうな生活環境の下ではあのやうな哲學の生活と、あのやうな享樂の生活を――それ〳〵違つた樣式に於てゞはあらうが――實現することであらう。何人も、二十世紀のブルジョアの生活環境の下に置かれたら、今日の文化のやうなものを產み出したであらう。それは善いことであつたにしても、決して惡いことではない。然しながらさういふ生活が、それ自身果の知れない發展性を內藏してゐると思ふと間違ひなのである。成る程、その生活が產んだ『論理』は何處までも發展する性質をそれ自體のうちに內藏してゐるであらう。然し、さういふ論理の生活を可能ならしめる生活狀態が、決して永恒的でないことはすべての生活組織が進化的であつたことから當然考へさせられる事柄なのである。希臘文化の興廢は、その哲學組織に依據したのではなく。その生活組織に依據したのである、生活が崩れゝば哲學は崩れる。(然し希臘の哲學はそ

の文化が絶對に滅びてはゐないと同じく決して永久に崩れてしまつてはゐないともいへる。時々そのまゝ復興したり、その元素が別の形で現はれて來たりしてゐるといふであらう。さうである。希臘は決して滅びてはゐない。然しそれは、あの時代以來、今日までの生活組織に、依然希臘式生活型が存續してゐるからである。然かも、現代の社會的傾向の重大さは何處に存するかといへば、この數千年の傳統的生活組織の行き詰りに對する對應策であるといふ點に繋つてゐるのである。如何なる今日の社會思想も、在來の希臘式生活組織のそれとは全然異つた立場に立つてゐるものであることは事實である。異なつた立場といふ意味の要點は、奴隷の生産に寄食する生活組織の困難を指摘してゐる點に在る。だから今日までの生活系統に離るべからざるものであつたといふだけで、その現象の絶對性を固執することは出來ない。人類は數千年の現系統の生活を營む前に、十萬年間か別の系統の生活を營んで來たのである。――然しそんな馬鹿らしいほど當り前のことをこゝで繰返す必要はあるまい。)觀念の世界に於ける道德は、その觀念世界を成り立たせてゐる生活の組織に依據する。或る道德が、絶對的であるや否やを思惟することは、生活の閑散が産んだ思惟の享樂である。それが或る人に絶對の要求となつて現はれるのは、その人々の生活にそれだけの生活の閑散があるからである。

　現代の道德的意識が、現代の生活そのものに對する地位は、丁度儒教が、舜の『食なるかな、この時』の道德に對する地位に似て、さうして極端まで行つた形である。觀念的に亢進した道德が破壞される時は、必らず何等かの意味での『食なるかなこの時』の道德の復活する時なのである。支配の道德が、そこまで還元した時には、その社會的性質を取り戻す譯であるが、一度橋の下に流れ去つた水は再び橋の下には來ない。現代の支配意識にさういふ道德が成り立つか何うかは誰れも語り得ない。が問題はそこにあるのではなく、近代生活の結晶である傳統的道德の形而上學乃至哲學は現代の生活の崩壞に對して何んな役目が採り得るかといふ點にあるのである。私の此の論文は、それに對する消極的斷定の一片である。

解放前後

片上伸

インテリゲンツィヤといふ言葉が、ロシヤ文學の上にはじめて用ひられるやうになつたのは、——またその新語の發見流布を必要とするに至つたほどに、インテリゲンツィヤそのものが、ロシヤの社會生活の上にはじめて重要な一つの社會的勢力として、少くとも特殊の意義を有する社會的集團として現はれて來たのは、——何れも千八百六十年代のことである。インテリゲンツィヤの研究は、この意味で千八百六十年代を一つの重大な出立點とする。この時代を概說するのがこの一篇の意である。

一

クリミヤ戰爭は、ロシヤの內政の缺陷を暴露した。外での失敗は、內の革新を促した。ニコライ一世の治世の晩年に至つて、改革の必要は漸く明らかに認められて來たのである。千八百五十年代のロシヤに於けるこの傾向に就いては、同時代の人がしば〳〵指摘してゐる。殊に、穩健で、用心深くて、いつでも安全な中庸の立ち場を守るすべを知つてゐたとさへ謂はれてゐるポゴーディン（一八〇〇—七五）が、自から明らかに進步派を標榜して論じてゐるところは、いかに時代が改革の當然さ必然さを認め且つ感じてゐたかを知るに足るものである。「立派な報告に滿悅してをられる皇帝は、ロシヤの現狀に就いて眞の理解を持つてはくれない。到達しがたい高所にゐて、彼は聽くべき手段を有してをられない。いかなる眞實も彼のところまでは到達することを敢てせず、また到達し得ない。思想表現の凡ての道は閉ぢられてゐて、公論に決する手段も、社會の輿論も、愬へることも、抗議することも、監督することも出來ない」「大臣はめいめいその省に於ける獨裁君主であつて、これまたその管掌する部局の眞實を知り得べき何等の可能を有してゐない。何

人も彼に質疑を告げない、また告げることを敢てしない、それは注目せられ、疑惑を身に受けることをおそれるからである。誰も皆たゞ大臣の思ふところ望むところを豫想しその計畫を推測して大臣の氣に入るやうにとばかり考へてゐる「勤勞し、血を流し、凡ての重荷を負ひ、苦しみ、而かも皇帝と祖國とに對する愛、最も純粹な忠誠を以て呼吸してゐる國民に就いては、誰も考へもしない。國民は恰かも道德的に存在してゐないで、たゞ稅務局の報告によつてのみ知られてゐる。」而してこのロシヤの生活を立て直すためには、公論によることと、教育を普及することの二つが實現せられねばならぬ――これがポゴーディンの考へである。變革の近き兆候は、また民衆一般の間にも認られた。ロシヤ國民の忠實な奉公心はセヴストーポリの戰ひに見られたと同時に、農民としては地主への反抗を漸く大膽に露骨に表現して來た。この時代の農民の一揆反亂はこの事實を語つてゐる。アレキサンドル二世の即位は恰かもこの頃であつた。クリミヤから返つて來たゴルチヤコフは、皇帝に言つた「最初の仕事は、――農民を解放せねばならぬ、そこに一切の惡の結び目がある。」

內政の革新は、千八百四十八年以後文學乃至一般文化に向つて加へられた反動的手段の廢止を以て始まつた。たとへば、プーシユキン、ゴーゴリなどの增補新版が出版せられたのもその一つである。定期刊行物が內治外交の何れをも論じ得るやうになつたのもその一つである。隨つて新雜誌の出現したのもその一つである（ルースキ！ウエーストニク、ルースカヤ・ビエセーダなど）。大學教授たるべき青年の學徒を外國へ派遣することが再び許されたのもその一つである。ロシヤ臣民の外國旅行が一般に其禁を解かれ、外國旅行券の莫大な課稅が廢止せられたのもその一つである。漸く來らんとする革新を待ち望む心は、凡ての小異を棄てゝ自のづから一致結合せしめようとした。西歐派とスラヴ派との論爭が一時やゝ靜まつて見えたのなどがその例である。カウエーリン（一八一八――八五）がポゴーディンに書いた千八百五十五年十一月三日の手紙に、「今は、凡てのロシヤの尊敬すべき思慮ある人々の個人關係上、文學上、學問上相互の不滿を忘れ、思想上の不一致を第二に置き、一致、相互の信賴、せめて何等か一致し得るところに一致することを第一とすべき時である。而してかやうな一致點は思ひの外に甚だ多いのである。」と言ひ、チエルヌイシエフスキー（一八二

八一八九)が新雜誌『ルースカヤ・ビェセーダ』の創刊號に對して、千八百五十六年五月號の雜誌『ソウレメンニク』で、「ルースカヤ・ビエセーダがその機關であらうと欲するところのスラヴ派の信念と、そのスラヴ派が反對して立つところの一派の人々の信念との間に存する相異は、頗る重大な多くの問題に觸れてゐる。而かも更に他の一層重要な根本的な傾向要求に於いて、この相反する兩派は全く一致する、吾々はその事を信ずる。吾々は光明と眞實とを欲する、—ルースカヤ・ビエセーダも亦然り。吾々は力の限り凡俗な低卑な醜汚なものに反いて起つ、——ルースカヤ・ビエセーダも亦然り。吾々は無知から來る冷淡無關心を、死の如き心の空虚を、見かけだふしの力なき粉飾を、すべて吾々の根本的な敵と見る、——ルースカヤ・ビエセーダも亦然り。そこで、いかなる意見の相違があるにもせよ、ルースカヤ・ビエセーダがその本質に於いては、これ等の言葉を吾々とまさしく同じやうに理解してゐることを信ずる。本質的な傾向要求の一致は力強い、それ故論爭はたゞ抽象的な隨つて漠然たる問題に就いてのみ可能である。ひとたび現實の堅固な地盤に觸れ、學問上生活上何等か實際的なものに觸れるに至つて、根本的な相異の生ずる餘地はなくなる。たゞどちらかの側から偶然の誤謬はあり得る。しかしどちらの側にしても、そのうちの誰かゞ正しい結論を提出さへすれば、直ぐに喜んでこの誤謬は撤回するであらう、その場合教育あるロシヤ人の間に分裂はない、凡ての人々が一つのことを欲してゐるからである。全くのところ、吾々の凡ては何を欲してゐるか。——學ぶものと學べるものとの數の增加である、科學上文學上の活動の增進である、鐵道の布設である。經濟力の合理的分配その他である。」と言つてゐるのなどは、明らかにその心持ちを語つてゐるものである。而して、こゝで最後に「經濟力の合理的分配」と言つてゐるのは、勿論農奴制度の廢止を意味する。農奴制度の廢止といふことに就いては、千八百五十五年の頃には、まだ公然雜誌などで書くことは許されてゐなかつたのである。(コルニーロフ、十九世紀ロシヤ史)

二

アレクサンドル二世に上(たてま)つた當時のロシヤのさま〲な社會的傾向の代表者の改革案、改革意見は、いかにロシヤの社會が革新を翹望することに於いて一致してゐたかを示すに足りる。たとへばコンスタンティン・アクサコフ(一八一

七—一八六〇）の言ふところによると、獨裁君主の權威は凡て皇帝のものとして殘される、しかし皇帝は社會に良心と言葉、即ち信仰と言論との無制限の自由を與へ、國民の私的、共同的、社會的生活に對する一切の警察的干渉を廢止しなければならぬ。國家の權威と國民とは相互の不干渉の關係にあらねばならぬが、しかし政府は國民のために存すべきで、その反對であつてはならぬ。アクサコフの殊に力說してゐるのは意見を述べることの自由、言論の自由である。眞は自由な場合常に勝つ。この事を信じないのは、神の否定である。重大な場合には政府自から自發的に國民に諮るべきである、しかし千八百五十五年の今日に於いては昔のやうに地方民會を召集することは無益である、それは、ピョートル大帝の改革以來、ロシヤの各階級の間には共同が失はれ、隨つてロシヤ全土の意見を一般的に知ることは出來ないから、寧ろ個々の問題について個々の階級の意見を尋ねることが便利であらうといふ意が說いてある。輿論の勃發は當時の著しき事實であつて、同じ千八百五十五年にカヴェーリンの書いたところによると、當時のペティェルブルグでは誰も彼も、何かといへば、わけがわからぬながらも自分の意見といふものを述べ立て、論爭したり主張したりしてゐるうちに、自然に教育せられて行つたとある。かうして五六年も續いて行つたら、力強いものの分つた社會の輿論が出來て今までの暗愚は多少取りのけられるであらうとある。かくの如き智力の覺醒、社會的興味の生動は、ひとり中央の都會ばかりでなく、地方にも及んだ。千八百五十六年、ロシヤの南を旅行したイワン・アクサコフ（一八二三—一八六、前出のアクサコフの弟）の十月九日の手紙には、「地方では二種の人間に出くはす。一方では、收賄者、即ち肩章、勳章、位階を渇望してゐるところの、この言葉の十分な意味での官吏、それから思想家といふものを輕蔑して、自分のお殿さま風な勿體ぶりや農奴制度に固執してゐる、概して隨分横暴な地主たちである。これ等の人間から轉じて他の方面を見ると若い、正直な、惡と暴虐とに憤慨し、人道的思想を懷いてゐる、解放及び一切の自由の先驅者がある。」と書いてある。

革新は結局上から來た。アレクサンドル二世はモスクワに貴族の代表者を集めて、農奴制度が自然下から破壞せられ初めるのを待つよりは、寧ろそれを上から破壞する方がよいといふ意味を述べ、この事の實現のために熟慮考察せんことを求めた。解放に先だつ四年、千八百五十七年の十一月と十二月と、二回の勅旨はこの方向に對する再び引き返すこ

との出來ない前進であつた。ゲルツェン（一八一二―七〇）は千八百五十八年二月十五日の雜誌『コローコル』で、かう書いてゐる、「アレクサンドル二世の名は歴史に殘る。もし彼の治世が明日終つても、同じことだ。解放の手始めは彼によつて成された。未來の時代はこの事を忘れぬであらう。」チェルヌィシェフスキーも亦『ソウレメンニク』誌上でアレクサンドル二世の改革をピョートル大帝のそれに比べ、「平和を創造するもの心のまめやかなるものに約束せられたる祝福は、アレクサンドル二世を、ヨーロッパの皇帝のうちの何人もまだ得ざりし幸福によつて飾らうとしてゐる、即ち一身にしてその國民の解放に着手し且つ完成するの幸福によつて。」と言つてゐる。千八百六十一年二月十九日に農奴の解放は實現せられた。それに次いで、數種の改革が行はれた、千八百六十三年には新大學令、千八百六十四年には地方自治體に關する法令及び裁判に關する新法令、千八百六十五年には出版法、千八百七十年には新市制、千八百七十四年には國民兵役令。而かもこの間に漸くロシア社會の相對立する傾向が著しくなつて來た。進歩派からラディカリズムへ保守派から反動へ。

三

六十年代の文學に見られるロシヤ社會の智力的傾向は、上に述べたやうな外面的の事實と密接に關連する。スカビーチェフスキー（最近ロシヤ文學史、千九百九年、出版）六十年代の智力的傾向を三つに分つ。第一は民主的理想によつて支配せられてゐる政治思想の傾向である。第二は四十年代からの現實思想の進展である。第三は社會及び家庭の舊來の組織制度に對する新個人道德の主張である。即ち政治上、哲學上、道德上のこの三つの傾向が、この時代のインテリゲンツィヤの思想を支配してゐたとするのである。殊にスペンサー、ダーキン、その他の科學思想、現實思想が、新個性道德の主張と密接な交渉を有してゐたことは容易に了解せられる。因襲的權威の打破は實にその結果であり、謂はゆるナイヒリズムの運動はロシヤに於けるその實際上の表現である。

前にも述べたやうに、六十年代の初めに於ける改革は、凡ての思想傾向を結合一致せしめるに役立つたと言へる。しかしながらその待ち望まれてゐた改革を經て、反動的傾向さへも現はれようとするに及んで、これ等の思想傾向は、自

のづから分化するものは、中んづくラデイカルな傾向を有するものは、その往くべきところまで往かずにはゐられなかつたのである。政治思想の方面では、一つは政府の改革に全く滿足し得なかつた自由思想家の憲政主張となり、今一つは、單に農民の解放ばかりでなく、上流階級の搾取から農民を保障するところまで行からとする、謂はゆる民主的ラデイカリーズム、もしくは社會主義的傾向となつた。前者を代表する機關は、カトコフ（一八一八―一八八七）の『ルースキー・ウエーストニク』であり、ゲルツエンの『コーロコル』である。社會主義思想の機關はチエルヌイシエフスキーの『ソウレメンニク』である。この一方に於いて、實證論、自然科學思想を根據とする現實思想の道德的表現として、新個人道德、殊にナイヒリズム（ニギリーズム）の主張がある。この思想の代表者は『ルースコエ・スローヲ』に據るところのピーサレフ（一八四一―六八）である。以上の進歩派に對立する反動派は、主として自家の利害から打算して六十一年以後の改革に平かならぬ地主階級であり、またこの時代のラデカリーズムの思想傾向に既に早く革命運動の萠芽を見る社會一部の人々である。而して、時代を流るゝ諸思想傾向のうち、中んづく最もあざやかに自己を點出して相對立し、相對立することによつてます／＼あざやかに自己を表明するものの中にあつて、時代の文學乃至文學批評と最も密接な交渉を有するものは、ラデイカリーズム、ニギリーズム及び反動思想の三者である。

　六十年代のラデイカリーズムの代表機關は、雜誌『ソウレメンニク』（現代人）であり、その主宰者はチエルヌイシユフスキーである。彼が改造せらるべき新社會の基礎をロシヤ在來の共同村落制度に置くところは、スラヴ派の保守思想と一致するやうに見へるが、スラヴ派はロシヤ舊來の特殊の慣習としてこれを尊重するのであり、チエルヌイシユフスキー一派のラデイカリストはその社會主義的ユートピヤの未來の實現の爲めの一材料として意義を認めるのであつて、その間に重大な差異がある。民主的思想によつて根本的改革を實現せんとする一般の要求は、『ソウレメンニク』をしてこの時代に於ける最も有力な言論機關とならしめ、更にチエルヌイシユフスキーに代つてドブロリユーボフ（一八三六―六一）これを主宰するに至つて、この誌上の言論の勢力は一層加はつたと見られる。ドブロリユーボフは文學批評と社會批評とを兼ねて、單なる自由思想の主張傳播を以て滿足せず、その有名な論文『オブロモフシュチナとは何ぞや』

（千八百五十九年）に於いて假借なき社會批評を試みた。オブロモフは言ふまでもなくゴンチヤロフ（一八一二―一九一）の小說『オブロモフ』の主人公であつて、オブロモフシユチナは、オブロモフ氣質、オブロモフ的傾向オブロモフ主義などの意である。この論文に於いて、ドブロリユーボフは、たとへばオニエーギン（プーシユキンの長詩『エウゲーニー・オニユーギン』の主人公）、ペチヨーリン（リエールモントフの小說『現代男』の主人公）、ルーデイン（ツルゲーニエフの『ルーデイン』の主人公）及びゴンチヤロフのオブロモフなどによつて代表せられるところの、ロシヤのインテイエリゲンツイヤ、殊に貴族的インテイエリゲンツイヤの無爲の生活を手きびしく非難し、即ちこの無爲無活動の生活――オブロモフシユチナを以て、ロシヤ社會の根本的の敵であるとしてゐる。「もし私が今、人類の權利について、また個性の發達の必要について論じてゐる地主に出逢ふとすれば、その人の最初の一と言を聽ただけで、これはオブロモフだといふことが分るのである。もし事務取扱の混亂とその澁滯山積とに對して不平を言つてゐる官吏に出くはすとすれば、彼は即ちオブロモフである。………熱烈に人類の窮乏に同情し、多年の間に亘つて、減退することなき熱誠を以て、收賄に關し、壓迫に關し、一切の無法に關して、常に同じ物語を（時には新らしいものを）話してきかせる教養ある人々の仲間にあるとき、私は自然に私が昔のオブロモフカ（オブロフ家の所領地なる村の意）へつれて來られてゐるやうな氣がするのである」ドブロリユーボフはかういふ風にオブロモフシユチナを說明し、自由思想家風のオブロモフ流の人々の雄辯がいかに生ける行實から遠きものであるかを說き、「誰か遂によく彼等をかの前へ！といふ全能の一語を以て動かすものぞ。」これゴーゴリの甚だ翹望したところであり、ロシヤの久しく待ち勞れてゐるところである。この問に對しては、今に至るまで社會にも文學にも答へがない。」と言ひ、ゴンチヤロフはロシヤ人のオブロモフシユチナを理解してこれをロシヤ人の眼前に提出した。しかしロシヤの社會は今も尙強き迷妄の中にある、古きオブロモフカよ、お前の時代はもう過ぎたと言つても、ロシヤ人にとつてまだオブロモフカは故鄕であり、おの〳〵のうちにオブロモフがゐる、オブロモフを葬る言葉を吐くのはまだ早かつたのであるといふ意を述べてゐる。

貴族的インテイエリゲンツイヤの無爲受動的の自由思想を否定したドブロリユーボフは、眞の精神力と直接の力とを

民衆のうちに見た。彼は千八百五十九年の論文で、「然り、この民衆のうちには、善に對する力がある。それはかの頽廢せる半狂氣の社會に於いて斷じて見るべからざるものである。而かもその社會はひとり己れを以て教養あるものとし、何等かの有用なる事務に適するものの如く思ひ上つてゐる。民衆の群は、言葉の上にとゞまるすべをも、四方に消え行きしその響きを樂しむすべをも知らず、またそれを好まない。彼等の言葉はいつでも遊びではない。言葉が彼等に語られるのは、事への召呼としてであり。眼前に迫れる行動の條件としてゞある。」（「民衆の事」）と言つてゐる。

四

ニギリーズムの主張は政治上よりも寧ろ哲學上道德上の意義を有する。この主張はこの時代に於ける個人主義の主張であり擁護である。農奴制度は廢せられた。しかしながら二百五十年に亙るこの奴隷制度の養つて來た習慣は容易に一掃しがたきものがあつた。個性に對する侮蔑は尚到るところにその暴威をふるうてゐた。父の子に對する、夫の妻に對するデスポティーズム、妻子の表面的な服從、これ等は奴隷制度が自然に養ひ上げた道德的習慣であつた。十九世紀に入つても、かくの如きデスポティーズムは尚西ヨーロッパを支配してゐた。しかしその最も甚しかつたのは恐らくロシヤであつたらう。家庭の生活は勿論、上官と下僚、士官と兵士、主婦と雇人、これ等の關係は悉くデスポティーズムの支配の下に在つた。この支配の下には道德上の臆病が宿り、その底には無爲が根を張つてゐたのである。この時代に生きてゐる限り、すぐれた人々でさへこのデスポティーズムの氣風を脫し得なかつたのは事實である。法律の力もそれに對しては無力であつた。これを動かすものは、そのデスポティーズムの根柢を打つ强烈な社會的運動の力より他にはなかつたのである。デスポティーズムの支配の甚しかつただけ、ロシヤでは、これに對する個人尊重のための戰ひは、殊に强烈な勢ひを示した。その否定的の力は殆ど他に見られないほどの假借なき烈しさを示した。この反デスポティーズムは、ツルゲーニエフがその『父と子』の中ではじめてニギリーズムと呼んだところのものである。

個性解放の運動は、それが政治上社會經濟上の意義を着けて來ないかぎり、凡て個々人の事情によるものであり、特にその個々の場合が著しい影響を有してゐたわけではないかも知れぬ。しかしながら、その個々人の經驗が、社會的の

運動として、抑へることの出來ない根本動力となつたことは明らかである。一切の社會的意義の重心を自己の上に置く——この意氣を眞向にふりかざして出て來たものは、ツルゲーニエフのバザロフであつた。而して『ルースコエ・スローヲ』のピーサレフは、實にこのバザロフ式の批評家であつた。彼はその論文『十九世紀のスコラ哲學』の中で、文學の問題を論じ、文學はいかなる形式をとる場合でも、唯一つの中心を打たなければならぬ、即ち文學は「全力を注いでさまぐの束縛から人間の個性を解放しなければならぬ。それ等の束縛は個性の上に自己の思潮の臆病を、階級の僻見を、因襲の權威を、共通の理想を追ふ傾向を、生ける人間に自由に呼吸し四方に發達することを妨げるところの一切の朽廢せる殘滓を課するものに外ならない。」隨つてピーサレフの考へによると、時代の問題は「一切の先入見から人間の思想を解放すること」であり、そのための手段として最もよきものは、自然科學の知識の普及である。何故かといふに、自然の研究は、一切の神秘思想や一切の形而上學に對する戰ひを助けるからである。そこで神秘的形而上學的情緒的なものの支配の下にあるものとして、美學及び一般の藝術に對する否定的態度が生ずる。藝術に對して科學的の精神の傳達を期するところから、彼が認めるところの藝術は、わづかにゲーテ、シエークスピヤ、バイロン、ハイネの如きに過ぎず、ロシヤの文學では、彼の謂はゆるゴーゴリ派の文學、即ちオストローフスキー、ドストイエーフスキー、ピーセムスキー、殊に『父と子』の作者としてのツルゲーニエフなどに獨立の意義を認めるに止まる。

家庭生活其他の先入見因襲の打破とともに、ピーサレフは一切の理想と稱せられるもの、即ち一切の普遍的原理を否定した。彼の否定しなかつた唯一の原理は冷靜なエゴイズムである。その原理に從つて、リヤリストは結局一般的幸福に到達すべきであるといふのが彼の考へであつた。この點に於いて彼とチエルヌイシエフキー乃至ドブロリユーボフとの間に重大な差異が存する。チエルヌイシエフスキーは常に一定の理想を認めてゐた、それは新社會組織である。この意味の理想はピーサレフには明らかに考へられてゐなかつた。彼はラウロフ（一八二八—一九〇〇）を批評して、「ラウロフは人生のプロセス以外にその理想乃至目的を求める。私は人生に於いてたゞプロセスを見て、目的や理想を排する。ラウロフは禁慾主義者に特別の敬意を表してゐる。私は敢て禁慾主義者を憐むこと、あたかも盲人や手なしや狂人に對

するが如くする。ラウロフは人間性に於いて種々の道徳上の要素内容のある複雜な結果を見る。私は思ふ、人間性の最も十分な表現は、たゞ、全然技巧的でなく獨立性を失はず、いろ〳〵の理想などに奉任することによつて打撃を受けず自己との戰ひによつて力を失はずに、發達して來たところの、全き個性のうちに於いて可能であると。」——かう言つてゐる。尤もやゝ後に至つては、ピーサレフも亦共通の目的の存在を認め、解放のためにするといふ理想を認めてゐる。しかしピーサレフの思想の特色がバザロフ式な點にあることは否定するに及ばない。

反動思想の萠芽は、六十一年二月十九日以後直ちに現はれたとも言へる。改革に對する農民自身の不滿、大學生の騷動、ポーランドの反亂、革命的運動の端緒、すべてこれ等は政府と社會との反動を誘ふに十分であつた。而して以上の思想の諸傾向とこの時代の文學との交渉關係に就いては更に別に說くを要する。

農村法律問題（其の二）

末弘嚴太郎

第一　部落有林野と農村生活（續き）

部落有林野が所謂「入會權」の目的物として部落民共同收益の目的になつて居ることは稍ともすれば林野荒廢の原因になり易い。單に土地の合理的利用と云ふ點だけから考へると、兎角亂雜に陷り易い部落民の共同收益は一日も早く廢めるがいゝ。そうして殖林を施すなり其他統一的且合理的な經營方法を施して林產物の增收を計ると共に、林野、從つて又河川の荒廢を防止するがいゝ。けれども、入會林野から收穫される天產物が農村生活、殊に農村細民の生活にとつて必要缺くべからざる基礎を成せる以上、濫りに之を奪ひ去ることは出來ない。それは彼等日常生活の基根を脅すものであり、從つて農村生活の經濟的形式を變革せしむるものである。無論私は今日の農村生活の經濟的形式を目して理想的なりと云ふのではない。大に改革せねばならぬ點も多からうし、又敢て改革を企てずとも將來は必然的に又自然的に可成りの變化を來すであらう。けれども、現在の爲政者なり學者なりが、農村生活を成るべく現在のまゝに引き止めて置きたいと希望しながら、濫りに部落有林野の整理にのみ專念し、其結果農村細民の手から彼等生活の必需品が代償なしに奪ひ去らるゝことを多く意として居ないやうに思はれる。私は其態度を否なりとするのである。

私は部落有林野の整理を絕對に不必要なりとするのではない。反つて大に其必要を認むるものである。けれども、現在の制度の下に於て濫りに其整理を急ぐときは、農民細民の生活は之が爲めに脅かされて、農村に於ける貧富の懸隔は一層甚しきものとなるに違ひない。農業經營の企業化、農村生活の貨幣經濟化も亦之が爲めに誘發されるに違ひない。此故に私は、部落有林野の整理を計らむとせば、先づ第一に個々の部落について部落民の經濟生活と林野收穫物との關係を具體的に調査研究することが絕對的に必要だと思ふ。次には又其調査研究の結果作成された整理案を實現すべき合理的の手續を設けねばならぬと思ふ。現在は此點に付いて何等の合理的な法

慮もない。其結果何等の調査もなく何等合理的の手續をも顧むことなしに、奸策、陰謀、强迫其他あらゆる適法乃至違法の手段を用ひて極めて不統一的に此重大問題が解決々行せられつゝある。其結果部落有林野の整理、入會地廢止の問題は多くの場合農村紛擾の原因となり、時には隣族竹槍の騒ぎまでをも惹起す。於玆私は云ひたい。爲政者も學者も濫りに農村の細民を愚昧扱ひにしてはいけない。入會地の存置が森林政策上、治水政策上不合理な場合も多からう。濫りに之に反對するものは愚昧かも知れぬ。けれども、世の中に「人が生きて居る」と云より偉大な事實が何所にあるか。「人並に生きたい」と云ふ向上の願より熱烈な希望が何所にあるか。私は彼等の愚昧を嘲る前に「生命」と云ふ偉大な事實の前にひれ伏せよと謂ひたい。そうして自ら顧みて研究調査の足らざるなきやを想ひ、制度法規の缺けたるものなきやを變へよと謂ひたい。前々號に於て部落有林野と農村生活との間に存する密接な經濟的關係を說いて輕々しく其改廢を企つべからざる所以を說いた私は、之れより部落有林野整理問題の基本たる入會權の法律的性質を說明したい。そうして讀者諸君と共に將來の法制を考へる資料にしたいと思ふ。

六

一定の制度を改廢せむとする者は現在實際に行はれて居る制度の實相に付いて精確なる智識を有せねばならぬ。法律制度の改廢を論ずる者の最も思ひを致さねばならぬのは實に此點である。それが爲めには單なる法文の形式のみを賴りとして實際の「活きた法律」を空想してはならぬ。「活きた法律」は實生活の中に活きて內在する。それを具體的に實證的に調査し研究してこそ「活きた法律」の何たるかを知り得る。それを基礎として初めて吾々の法制の利弊を考へ其改廢を論じ得る。

所が從來法制の改廢を論ずる者は、若し其人が法律家であれば法文の表面のみを基礎として實際の「活きた法律」を無視し易く、若し其人が法律家以外の人であると現行法制の何物たるかを全く度外視し又は之に關する極めて不精確な素人考を基礎として議論を立てる。例へば現在吾國に於て婚姻制度、家族制度の改革を論ずる者の多くは、改革論者も現狀維持論者も均しく實際の「活きた制度」「活きた法律」に關する精密な智識を基礎として居らぬ。私は平素此點を最も遺憾

として居る

此故に、公有林整理の問題を論じ又は實際其事に當らるる方々にも、一方に於ては現在の公有林が農村生活とどれだけの關係があるものであるかを具體的に調査し研究して頂きたいと希望すると同時に、公有林に對する部落民の權利關係が實際上果して如何なるものであるかを事實に付いて具體的に考へて頂きたいと希望する。單なる法律の文字や自己の腦中を支配しつつある法律思想、經驗思想等のみを頼りとして架空な議論を樹てたり無理な政策を實行することは最も愼まねばならぬ事柄である。私が之れより以下に——法律家以外の方には稍や解り惜く從つて恐らく迷惑かとも思はれる——法律論をするものも實は右樣の趣旨に出づるのである。

七

部落有林野に對する部落民の法律關係、即ち「入會權」の法律關係を充分に理解するが爲めには、先づ第一に普通多數の人々が共同して一つの物を利用する場合には如何なる法律的形式を利用するものであるか又利用し得るものであるかを考へて見ねばならぬ。そうして當面の問題たる入會關係は果して其何れに屬するものなるかを考へて見ねばならぬ。

多數の人々が共同して一つの物を利用する場合の法律的形式を考へて見ると實に色々ある。博物館、美術館、圖書館の如き又道路、公園等の如きものにあつては「物」の所有權は國家其他の公共團體又は一私人に屬しつゝ一般公衆に向つて其利用が有償又は無償に許されて居る。此等の場合でも其「物」が之を利用する公衆の屬して居る國家其他の公共團體の所有に屬して居る場合には、實質上之を公衆の所有物なりと考へても差支ない。けれども法律の形式上より謂へば、其所有權は國家其他の公共團體に在つて、公衆は唯一定の條件の下に其利用を許されて居るに過ぎない。それが今日の法律の考へ方である。

所が一歩進むで、會社其他の社團法人の財産に對する社員の權利關係如何を考へて見ると、其形式は以上に述べた博物館や道路公園の場合と大差ないやうに見える。即ち同じく「物」の所有權は會社其他の社團法人に屬して居て社員は單

に之を利用する權利を有するに過ぎないやうに見える。けれども此場合に於ける社員の「物」に對する關係はもつと遙かに密接である。實を云へば「物」は社員の所有物である。併し、社員は其「物」を會社その他法人の目的とする事業の用に供せむが爲め、各社員の純然たる私財を引き離して置きたい。そうして各社員をして勝手氣儘に法人の目的と相容れないやうな權利主張を爲さしめないやうにさせたい。各社員の死亡其他變更に依つて直に法人が消滅したり變更せぬやうにさせたい。又各社員の個人的の債權者に依つて法人の財産的基礎を脅かされないやうにしたい。其等の目的を遂するが爲め、法律はかゝる財産は各社員の權利ではあるが其純然たる私財とは區別せらるべきものだと云ふ考を元として特殊の複雜な法規を設けても差支ない譯である。併し通常吾々は到底かゝる複雜な混み入つた法律關係を理解することが出來ず、實際上の不便も亦少くない。其所で便宜上考へ出されたものが「法人」である。即ち普通の人間が權利義務を有する。其形式を模倣假用して玆に一の「人格者」ありと想定し、之をして權利の持主たらしめ、以て其權利と社員の私財との分界を明かならしめたのである。故に實質的に觀察すれば、此場合と雖も「物」は各個社員の所有に屬するので、唯其私財との區分を明かにする爲め、形式上「法人」なる第三者の持物として取扱はれて居るのである。

次に又、一私人が自己の有する美術品や書籍類を公衆の用に供する場合にも、其等の「物」の所有權は尙依然としてその一私人に屬するが、事實上之を利用して利益を受けるものは公衆である。併し此場合に於ける公衆の利益は其一私人の「好道」のみを基礎とするものであつて、何等法律上の基礎を有つて居ない。其私人の個人的私財との區分も明かならず從つて其私人の死亡又は變心其他個人的境遇の變化は容易にかゝる公衆の利益を奪ふことになる。其恐れを除く爲めにはかゝる財産を純然たる私財と分別し得べき方法を考へねばならぬ。それが爲めに案出された制度は「財團法人」と「公益信託」とである。

前者は、前の「財團法人」を案出した場合と同樣、普通の人間が權利義務を有する場合の形式の模倣に依つて、一の人格者を想定し之をして公衆の利用に供せらるべき「物」の形式的所有者たらしめ、之に依つて不特定多數の公衆が其「物」の上に有すべき複雜なる事實上の利用關係を單純化し且强固ならしめたものであつて、歐洲大陸の法律思想の産物で

ある。反之英米人は同樣の目的を達するが爲めに別な方式を考へた。即ちかくして公衆の利用に供せらるべき「物」の所有權を——獨立の新なる權利主體を想定する代りに——既存の第三者——受信者 trustee に附託し、之をして其形式上の權利主體たらしめ、以て公衆をして其「物」を利用せしむる方法を案出した。それが即ち所謂「公益信託」charitable trust であつて、今年議會を通過した「信託法」は即ち其形式を我國に輸入することを計つたものである。從つて不特定多數の公衆をして一定の「物」の共同使用を爲さしめる方式は現在我國に二種類存在する譯である。而かも、

以上に述べた各種の法律形式は、何れも多數の人々をして一の「物」を共同的に使用收益せしめる方式である。而かも其すべてに共通する特色は「物」の形式的所有權はそれ等の利用收益に存せずして、或る第三者に屬せしめられて居ることである。

之と異なつて、「物」の形式的所有權までをも利用收益者たる多數の人々に歸屬せしめて置いて別に第三者たる權利主體を求めない場合がある。而して其中にも又全く根本精神を異にした二の場合が存在する。其一は、多數人各々獨立して物の上に權利を有する。あはよくば其「物」を獨占したい。併し同時に他の多數者も夫れ々々同樣の權利を有するが爲めに、彼等の權利は互に競合せねばならぬ。互に節制されねばならぬ。遺憾ながら一人の獨占を許さぬ。かゝる事情の下に於ける多數者相互の法律關係は即ち「共有」であつて、ローマ法系統の思想から出た制度である。此種の「共有」にあつては各共有者相互間には、不幸にして目的物が共同だと云ふことの爲めに起る諸問題を解決調停する爲めの法律關係がある以外、何等の共同的關係もない。各人は各々別々に權利を持つて居る。從つて各人は己れの欲するまゝに其權利——持分——を他人に讓渡して自らは共有關係から脫退することも出來れば、何時と雖も共有關係の廢止を請求し得る。所が之とは全く別に、假令多數人が共同して一個の「物」を所有しては居るものゝ、其多數人は互に競合せず排斥せず、寧ろ互に共力し協働して「物」の利用を完全ならしめ、以て多數者全部の福利を增進せむとする思想を根底として、多數人全部が一體として權利の持主たる場合がある。學者の所謂「總有」Gesamteigentum は即ちそれであつて、日耳曼民族の間に生まれた法律思想である。多數の人が「物」の所有者たる點に於ては「共有」と「總有」との間に何等區別せらるべきものがない。けれども前

者は個人主義的排他的のものなるに反し後者は團體主義的協働的であつて、二者は全く根本精神を異にするものである。

個人主義的な排他的な獨占的な所有權思想が骨身までも滲み込んだ現代の我國人には「共有」を理解し得る。又「社團法人」又は「財團法人」の如く――少くとも形式上だけでも――權利を或る「一個」の「人格者」――實はそれは事態を簡明にする爲めの方便に過ぎないのだが――に屬せしめる制度ならば、亦之れを理解することが出來る。所が「物」が多數人の全體に屬しては居るものゝ多數者各自は何等獨立の權利を其「物」の上に有せぬ、各人は共同の目的の爲めにそれを利用して全部の福利を增進しやうと云ふやうな團體主義的な協働主義的な制度は現代人の容易に理解し得ざる所である。併し例へば、夫婦共有の財産がローマ法流の普通の「共有」に過ぎぬとすれば、どうしてか能く其物を結婚生活の共同目的に利用し得やう。又獨立の「人格者」と認められない普通の「組合」の財産が組合員各個の單純なる共有に屬するに過ぎぬとすれば、どうしてか能く其財産を組合の共同目的に供し得やう。此等の場合には苟も共同目的の完成到達に重きを置く以上、共用に供せらるべき「物」をして單純なる「共有」たらしめて置くことは出來ないのである。

明治以來の法律思想は全く此「總有」思想を排斥して受け附けないやうに見える。現にかく信じかく主張する人が多い。けれども、事實は果してさうであらうか。私はそれを大に疑ふのである。

八

然らば、部落民が共同して入會地を利用する法律關係は以上の形式中何れに屬するものと見るべきであらうか。

此點について現行の民法は僅かに「共有」ノ性質ヲ有スル入會權ニ付テハ各地方ノ慣習ニ從フ外本節――即ち「共有」にする民法第二四九條以下――ノ規定ヲ適用ス」(第二六三條)及び「共有ノ性質ヲ有セザル入會權ニ付テハ各地方ノ慣習ニ從フ外本章――即チ「地役權」ニ關スル民法第二八〇條以下――ノ規定ヲ準用ス」(第二九四條)なる二箇條を設けて居るに過ぎぬ爲め、問題のすべては殆ど皆「各地方ノ慣習」を調査研究するに依つてのみ決定せられ得ることになつて居る

然るに、從來學者は法律の文字を過重し法律を以てすれば、如何なる法律關係をも一擧に變更し改定し得るもの也と考

へて、所謂「共有ノ性質ヲ有スル入會權」は尙一種の「共有」だと說明し、入會地の法律關係は民法施行前までは如何樣であらうとも、民法施行以後は普通の「共有」になつたものだと說明して居る。

所で民法に所謂「共有の性質を有する入會權」とは何を意味するのかと云ふに、今日學者及び、裁判所の一致した意見に依ると、共有ノ性質ヲ有スル入會權トハ地盤毛上——地盤に生立して居る樹木柴草の事を云ふ——トモニ入會權利者ニ屬スル場合ヲ指シかゝる場合には「本來共有ノ規定ニ依リテ其効力ヲ定ムベキモノナレドモ入會權ニ付テハ各地其慣習ヲ異ニスルモノアルヲ以テ先ヅ其慣習ニ準據スベク慣習ナキ場合ニ於テ共有ノ規定ニ依ルベキモノトス」と說明されてゐる。故に現在の通說は、入會權に付いては先づ「各地方ノ慣習」に從ふべきだけれども、權利の實體は尙一種の——ローマ法流の——「共有」に過ぎぬと考へて居るのである。

けれども、實際若しもかゝる場合に於ける林野の所謂「共有」が民法第二四九條以下の「共有」に相當するものだとすれば、現在我國に澤山ある入會地の法律關係は到底之を說明する事が出來ない。

先づ第一に、普通に吾々が他人と共用して一の土地を「共有」して居る場合に、若しも共有者の一人が死亡すれば其相續人たる子は親の共有持分を相續し以後代つて共有者となるべきである。從つて其子も親と共に從來共有者の一人であつたとすれば、親の死と共に子は從來親の持分たりしもの及び自己の從來有したる持分、即ち二人分の持分を有することになるべきである。所が一部落の人々のすべてが一定の林野に於て共同收益を爲すべき入會權を有する場合に、親も子も共に其入會權者であつたとしても、親の死に因つて子は以後二人分の入會權を有するに至るものではない。その場合は子は從來有したる自己の入會權をそのまゝ保有し得るけれども、親の——共有持分なりと一般に說明されて居る——入會權を相續するものではない。親の權利は其死と共に消滅して其子に移轉しないのである。從つて假りに或る村の入會慣行に於ては一家の戸主に限り入會權者になり得ることになつて居り、其結果從來入會權者たりし戸主が死亡して其子が戸主になつたとしても其依つて取得する入會權は前戸主のそれを相續するのではなくして、自らが戸主になつた爲め村の入會慣行所定の資格を取得したるに依つて新に權利者になるのである。して見れば、部落民各個が入會地上に有す

る權利を解して各人各別の獨立した個人主義的の持分的權利なりとする從來の通說は全く入會の實際と合致して居ないと云はねばならぬ。入會權は部落民全部が合同的に總有する所であつて、各個の部落民は單に部落民たるの故を以て他の部落民と共に其權利を總有して居るものと說明せねばならぬのである。

次に又、若しも入會權の法律關係が普通の共有であるとすれば、各個の入會權者は自己の持分を他人に讓渡しても差支ない譯である。從つて部落民中の或る者は自己の持分を他の部落民に賣却したり、抵當に入れたりすることが出來る譯であり、其結果終には入會地上の持分權がすべて一人の手に集中されることすらあり得る譯である。所が入會慣行の實際に付いて之を觀察すると、かゝる事實は全く存在しない。各個の部落民が入會地上に有する權利は——場合に依つて或は其權利者たる資格が限定されて居たり或は權利の內容が人に依つて差等付けられて居ることはあつても——決して一人より他人に移轉すべからざるものである。況んや之を一人の手に集中するが如きことは全くあり得べからざることである。して見れば、此點から考へても入會權を共有の一種なりと見ることは全く當らないのである。

殊に、入會權者の一人が其權利を部落以外の者に讓渡すが如きことは絕對にあり得ないことであり、又轉住其他の理由に因つて部落民たる資格を失つた者が引續き其權利を保有することも存在しないのであつて、此等も亦普通の「共有」觀念を以て說明し得べからざる所である。

又普通の共有にあつては「各共有者ハ何時ニテモ共有物ノ分割ヲ請求スルコトヲ得」るのみならず、不分割特約の如きも五年以上の期間を以て之を爲し得ない（民法第二五六條參照）。一物上に各個の共有者が相競合し相排斥し合つて存在するが如き狀態は「物」の利用上決して其能率を發揮せしむる所以でない。從つて共有者中の或る者が共有の存續を欲せざる以上何時と雖も之が廢止を請求し得ることとしたのが法典の考である。所が、全國の入會慣行に付いて之を見るに、入會權者の一人が入會地の分割を請求するに依つて當然分割の效果を發生せしめて居るものが何所にあるか。成程、部落民の協議に依つて入會地の廢止乃至縮少を計ることはあり得やう。けれども一人の請求に依つて分割の結果を生ずることと普通の共有に於けるが如き事實は全然存在し得ないのである。

以上の諸事實は何れのも入會地の法律關係が如何に普通の「共有」と異なるものであるかを明かに語るものである。若し夫等の點が普通の「共有」の性質中大して重きを成さゞるものであるならば兎も角、それ等は何れも共有の性質且其中樞を成すものである。之を缺く以上共有たるの性質は既に失はれたと謂はねばならぬ程のものである。して見れば、法文には如何に「共有」の性質を有する入會權に付ては各地方の慣習に從ふ外本節の規定を適用す」と書いてあつても共權利の本質は之を「共有」なりと見ることは出來ないのであつて、共有に關する諸規定は入會の本質と有容るゝ限りに於てのみ適用されるに過ぎないのである。

して見れば、入會權は各個部落民の個人主義的「共有」にはあらずして、部落民の全部が不分割的に協同的に所有する總有的の權利だと說明せねばならない。

九

かくの如く入會地の法律關係は普通の「共有」にあらずして一種の總有的關係であるとすれば、それは一體如何なる沿革をもつて今日に殘されて居るものであらうか。私は次に此點を考へたい。

それが爲めには、先づどうしても德川時代の「村」の法律的性質を知らねばならぬ。今日吾々日本人の常識に於て「村」と云へば、それは村民から組織された一の團體ではあるが、法律上各個の村民とは離れた一の獨立した人格者である。村の財產は全く村民の財產ではなく、村の債務は全く村民の債務と別物である。所が德川時代の「村」は、從來法制史家殊に中田博士の研究に依れば、獨逸中世の Genossenschaft に似たものである。村なる人格者は卽ち村民の全體であつて、村と村民とは相離隔し相對立する觀念ではなかつた。從つて、村は夫れ〳〵代表者を有し村として訴訟を爲し財產を有し、法律行爲を爲すこと今日の「村」と同一であつたけれども、村の負擔する公課租稅の類は當然村民全體の共同負擔であり、村の債務は同時に村民全體の共同債務であり、村持の土地は同時に各村民の共同利用地であつた。卽ち今日の「村」は之を組織する村民からかけ離れた抽象的の人格者なるに反し、當時の「村」は村民を以て組織し村民と離るゝことと

なき實質的の組織體であつた（中田博士「徳川時代に於ける村の人格」國家學會雜誌第三四卷第八號一頁以下參照）。從つて當時は、村持の林野の如きも今日の法律に所謂町村所有地とは全く異なつて村持たることは同時に當然村民の全體の共同利用地、即ち共總地——「總持」——なりしものである。當時の村は、此觀念を基礎として、或は「村中總百姓入會」乃至「總村入會」の林野を有し、或は數箇村入會にて共同の收益林野を有し、或は一村より他村持の原野へ入會して共同收益を許されてゐた。

所が、明治維新以來、政府は地租徵收の目的を以て官有地民有地の別を明かにせむと企てた。而して此の區別は入會林野に付いて殊に困難であつた爲め、當時の當局者は餘程此の點に付いて苦心をしたらしい。が兎に角、明治八年六月地租改正事務局乙第三號達に於ては「從來數村入會又ハ一村持等積年ノ慣行存在スル地所ハ假令簿冊ニ明記ナキモ其慣行ヲ以テ民有ノ證ト認メ之ヲ民有地ニ編入スベシ」と定め、又明治九年一月地租改正事務局議定山林原野官民所有區分處分方法に於ては「口碑ト雖何村持ト唱ヘ樹木草茅等其村ニテ自由ニシ來リタルカ如キ山野ノ類ハ舊慣ニ依リ其村持ト定メ民有地ニ編入スベ」く「從來村山村林ト唱ヘ樹木植付或ハ焼拂等其村所有地ノ如ク進退シ他ノ普通共地ヲ利用シテ天生ノ草木等伐採シ來リタルモノト異ル類ハ從前租稅ノ有無ト簿冊ノ記否トニ拘ラズ前顯ノ成績ヲ視認シ民有地ト定ムベシ」、反之「從前秣永山永下草錢冥加永等ヲ納ムルモ曾テ培養ノ勞費ナク全ク自然生ノ草木ヲ採伐シ來リタルノミナルモノハ官有地ト定ムベシ」と定め、此種の標準に依りて此區別を實行した。其結果從來村民の共同收益地たりし林野の或るものは官有となり、或るものは民有——多數は村有乃至區有——となつた。

かくして、從來の村持林野の或るものは村有乃至區有となつたけれども、同時に「村」の法律的性質が明治維新と共に全く異別のものとなつたことは、村持林野に對する村民の權利關係をして全く一變せしむるに至つた。即ち從來の「村」は之れを構成する村民の全體より成れる一の總合的團體なりしに反し、明治維新以來の「村」は當時輸入された羅馬法寺院法流の個人主義的法人思想の影響を受けて村民と全然離れた別箇獨立の人格者として考へらるゝに至つた。其結果從來村民の村持林野上に有したる權利は——他の村民全體との合同的權利ではあつたものゝ兎も角——自己の物を上に

有する自己の權利であつたのに反し、「村」が村民と全然離れた抽象的實在として考へらるゝに至つてより此方村民の村有地上に有する權利は忽に化して「村」なる他人の所有地を目的とする一種の他物權になつて仕舞つたのである。從つて、甚しきに至ると、例へば川瀨林學博士の如き我國に於ける入會關係の實際に最も精通せらるゝ學者すら、此の種權利は入會權なる私法的の權利にはあらずして、町村制第九〇條に所謂「舊來ノ慣行ニ依リ町村住民中特ニ財產又ハ營造物ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキ」の一場合に相當する一種の行政法上の權利に過ぎぬと說くに至り（川瀨博士「公有林及共同林役」二四六頁）、其當然の結論として――町村有產者の代表者に過ぎない――「町村會ノ議決ヲ經」さへすれば其――町村貧民にとつて必要缺くべからざる大切な――「舊慣を變更又は廢止」することが出來ると主張する者さへ出づるに至つたのである。けれど、元來村持の林野は卽ち村民全體の共同收益地であつた。それは村民の財產の一部――勿論今日の排他的獨占的なる個人所有權思想の下に於て所謂「財產」ではないけれど――を成し其生活の必要的基礎を成して居たのである。維新以來法人觀念の變革に因つて「村」と「村民」とが分離した結果として、「村山村林」の類は村の所有地――私有地――となり、從つて入會地所有權と入會權とが分離せらるゝに至つたけれども、村民が其林野上に有したる收益の權利――「入會權」――は依然として彼等の手中に存し毫も其性質を變ぜざるものと見ねばならぬのである。

殊に、維新の際官有地と民有地とがはつきり分別されてより此方、其民有地に編入された林野が現在に於て「村」なる獨立の法人又は大字等の如き「町村ノ一部ニシテ――獨立して――財產ヲ有シ」得べきもの（町村制第一一四條參照）に屬して居るか又は現行制度上それほどの獨立性を認められて居ない一地區の住民全體の「共有」に屬せしめられて居るかの如きは全く維新以來町村の分合がしきりに行はれた偶然の結末に過ぎぬ。從來一個の「村」として村持の林野を持つて居た部落が新制度の下に於て偶々獨立の法人格を與へられた場合には其林野も亦「村有地」となつた。反之其部落が極めて小いとか二箇町村に分屬せしめられたとか云ふやうな譯で獨立の法人格が附與されなかつた場合には、已むなく之を部落全體の「共有地」としたのである。從つて入會權の目的たる林野が「村有地」なりや「共有地」なりやの如き事實を標準として其權利の性質を區別せむとするが如きは全く合理的根據なき所說だと云はねばならぬ。

其種の說を爲す人は、若し村民が村有地上に存する共同收益權を入會權なりと解するときは、結局村民の集合體を以て其主體なりと解せざるべからず、從つて「町村法人中に町村夫レ自身の法人格ト町村ニ住居スル住民團體ノ法人格ト二樣ノ法人存在スルコト」となるべしと說いて居る（川瀨博士前揭二四四頁）けれども、かくの如きは實にローマ法流の法人思想と排他的獨占的個人所有權思想との外に Genossenschaft や Gesamteigentum の制度あることを理解し得ない現代我國人の思想を遺憾なく暴露したものたるに過ぎぬ。何故なれば德川時代の「村」が今日の如き「村」に變つた以上、入會地の「所有權」は村に屬し、村民が全體として其上に入會權を總有すると云ふ關係を認めるとは少しも變ではない。村民全體が入會權を總有する。何故にその際の村民全體を――ローマ法流――の法人でなければならぬと考へる必要があるか。權利は個々の個人又は――之に擬へたローマ法流の――法人にあらざれば之を所有し得ずと云ふが如き考は、民法施行後十數年の間あやまられたるロマニステン法學が一時吾國にはびこつた時代の夢に過ぎないのである。

之を要するに、現行の入會權は德川時代に於ける「村持」の林野が羅馬法寺院法流の法人思想を輸入した爲めに生じた「村」と村民との分離、及び維新以來しきりに行はれた町村の分合改廢の影響を受けて生じた、集產主義的所有權制度と個人主義的所有權制度との間に介在する一種の變態的制度である。現行民法の極めて濃厚なる個人主義的色彩とは全く相容れない制度である。從つて現在の世の中には寧ろ適合しないものかも知れぬ。從つて頓ては當然に亡び去るべき制度であるのかも知れない。併し現在の實際は兎に角かくの如きものである。而して此制度あるが故に農村がともかくも現在の形態を維持することが出來てるのだとも考へ得ること先に概述した通りである。

此故に私は世の公有林整理問題を考へる人々之が實施に當る人々に言ひたい。諸君は自己流の個人主義的法律思想を以て事を裁いてはならぬ。諸君は自己の腦中に「法律」を探してはならぬ。諸君自らの眼を以て現實を直視して自ら事實を考へねばならぬ。然らずして漫りに他人の「生活」の根底たる寶庫を破壞せむとするが如きは甚しき罪惡である。

次に入會權の種類に付いて聊か考へて見たい。

從來學者は一般に入會權を大別して「共有の性質を有する入會權」及び「地役の性質を有する入會權」の二種類とし、其區別の標準を入會地の所有權が入會權者自らに在りや他人に在りやに求めて居る。現に大審院の如きも此考を認めて「二者を區別する標準は入會權者の權利が其共有の地盤を目的とするや若くは他人の所有に屬する地盤を目的とするやに存す」ると說明して居ること上述の通りである。けれども、此區別は果して之を入會の實際に適合した合理的のものと謂ひ得るであらうか。其區別が不當な爲めに實際上の取扱が不便となり又は不當となるやうな事があつてはならない。

德川時代に於ても、數箇村が一定の林野に入會つて共同收益を行つた場合もあれば、或る村の「村山村林」へ他村から入會つて共同收益を行つた場合もあり、又一村の住民が自村持の林野に入會ふ場合もあつた。而して其何れなるかに依つてそれ〲特殊の法律問題が起り得た。卽ち第三の場合に起る問題は主として部落民相互の收益方法、其程度等に關する一部落内の事柄なりしに反し、第一の場合には其外更に數箇村相互の對立關係を生じ、第二の場合には入會村より地元村へ支拂ふべき入會料――山手米、山手錢等地方に依つて種々の名稱あり――に關する問題などが起り得た。

此種の問題は今日の入會地に付いても亦殆んど同じやうに起り得るのであつて、此點から考へると入會地の所屬を標準として入會權を區別することは今日も何大に意義あることゝ考へられる。けれども茲に最も注意せねばならぬのは、前にも一言した通り、「村」の性質が昔と今とで全く變つて仕舞つた爲め、今日では先きの第三の場合、卽ち部落民が自村の「村林村山」に入會ふ場合の他に、更らに部落民が自らの共有地上に入會權を有する第四の場合が生じたことである。「村」が Genossenschaft の性質を有し從つて「村持」の林野が總有の性質をもつて居た昔ならば小部落と雖ども獨立して「村林村山」の類を有することがあり得、而して其「村林村山」は部落の財産でもあり同時に部落民の財産でもあると考へられた爲め、「村林村山」の――今日の考で謂ふ――所有權が「村」なる法人にあるか又は村民の共有に屬するかと云ふやうな問題は全く起り得なかつた。所が明治維新以來法人思想が一變してより此方、從來「村持」なりし林野は或は「村」なる法人の所有となり或は地元村々民の共有地とならざるを得なくなつた。而も其區別は實際上如何にし

て生じたかと云へば、從來「村山村林」の類を有した部落が「村」なる獨立の法人格を與へられた場合又は他の部落と合して一村を成すに至つたけれども尙依然として獨立に「財產ヲ有シ」得ることを認められた場合（町村制第一二四條參照）には從來の「村持」林野化して——今日の法律思想に於ける——「村有地」乃至「區有地」となり、反之從來の部落が狹少なるが爲め又は其他の理由に因つて獨立に「財產ヲ有シ」得ないものと認めらるゝに至つた場合の如きは已むなく從來の「村山村林」等は部落民全體の「共有地」となつたのである。從つて事は極めて遇然である。

所が明治以來今日の法律思想を以てすれば、入會地の所有權が「村」にあるか又は「村民」にあるかは極めて重要なる區別である。何故なれば、若しも從來裁判所及び學者に依つて認められて居るやうに、入會地の所有權は入會權者の共有に屬するか又は他人に屬するかを唯一の標準として「共有ノ性質ヲ有スル入會權」及び「共有ノ性質ヲ有セザル入會權」を分別せむとする考を形式的乃至は概念的に適用すれば、入會地の所有權が「村」、卽ち今日の法律思想に於ては「村民」より見て寧ろ「他人」と認められねばならぬ「村」に屬して居る場合には、之を解して「共有ノ性質ヲ有セザル入會權」だと謂はねばならぬことゝなり、反之入會地の所有權が部落民の共有に屬する場合には「共有ノ性質ヲ有スル入會權」と認められることになるからである。

けれども、かゝる形式的な考へ方は絕對的に許すべからざるものである。入會地が「村」なり大字小字等の「區」に屬して仕舞つた場合と雖も、實を云へばそれは、單に法人思想の變化に依つて「村」と「村民」とが分離するに至つた當然の結果として入會地の「所有權」と「入會權」とが分離せねばならなくなつたまでのことである。それと入會地の「所有權」が偶々「入會權者」自らの共有に屬して居る場合とを區別して取扱ふべき何等實質的且合理的の理由は存在しないのである。此故に入會地の所有權が他村乃至他部落に屬する場合又は入會權が國有地乃至御料地上に存する場合を稱して「共有ノ性質ヲ有セザル入會權」と謂ふことは相當に理由がある。何故なれば、此場合には入會權者から土地所有者に向つて入會料を拂ふ等其他兩者の間に地主對借地人的の法律關係を生ずるから。けれども、入會地が入會權者の組織する部落自らに屬する場合の如きは入會地が入會權者の共有に屬する場合と全く區別せずに取扱はれねばならぬ。二者を

區別することは全く不合理である。

此最後の點を明確にすることは、入會地の整理問題に關して極めて重要である。何故なれば、現在全國に亘つて存在する入會地の多數は其所有權が村其他部落に屬する場合であり、而して現在事に當つて居る府縣其他山林關係の官吏は實際上入會地が「村有地」なりや村民の「共有地」なりやの區別を明かにせむと力め、之に依りて其處分方法を異別にせむと考へて居るからである、而して又甚しきに至つては、先にも一言した通り、入會地が「村」の所有に屬する場合には村民が其上に有する共同收益權は私法上の權利としての入會權にはあらずして「行政法上ノ權利」であり、從つて町村制第九〇條に依つて「町村會ノ議決」を經さへすれば之を「變更又ハ廢止」し得ると云ふやうな說を爲す學者すらあるからである。幸ひにも現在大審院は「町村制ニ揭グル町村又ハ區ノ營造物其他ノ財產ニ對スル行政法上ノ共用又ハ使用ノ權利ニ關スル規定中ニハ住民ガ其山林ノ天產物卽チ樹木柴草等ヲ各自採收スル權利ハ之ヲ包含セズ」と云ふて町村制第九〇條ニ所謂「舊來ノ慣行ニ依リ町村住民中特ニ財產又ハ營造物ヲ使用スル權利」と自村の山林を目的とする「入會權」とは嚴格に區別すべきものなることを認めた。從つて單なる「町村會ノ議決」を以て町村有の山林を目的とする村民の入會權を任意に「變更又ハ廢止」し得ると云ふ考は大審院の認めざる所であつて、私は權利の性質上どうしてもかくあらねばならぬものと確信して居る。

十一

之を要するに、一概に入會權と謂ふても、其中には、數箇町村——時には數十箇町村に及ぶ場合もある——が共同しての入會地を有する場合もあれば、一村の所有地へ他村より入會ふ場合もあり、又一村一部落の所有地上に其村其部落の住民が入會ふ場合もあれば、一地區の住民が自らの所謂「共有地」上に共同收益を行ふ場合もあり、其他色々の變態が存在するのである。而して其何れなるかに依つて、それ〴〵特殊の法律問題が起り得るのである。從つて大體入會地の「所有者」が何人なるかを標準として入會權を分別するは事必ずしも不可なしとせぬ。併し先づ第一に、一地區の住

民が其地區專屬の林野に入會ふ場合を、其林野所有權が「地區」自らに屬するや又は其「住民」の共有に屬するやを標準として二に分別し、以て二者其取扱を異にすべしとする考は絕對に之を排斥せねばならぬことと上述の通りである。

次に又從來の通說が爲しつゝあるが如く、入會地の所有權が何人にあるかを標準として入會權の種類を分つことは事實多少の實益はあるとしても、之に依つて二種の權利は全く種類性質の異なつたものだと考へることは不穩當である。私の考へでは、其何れの場合たるを問はず、入會權は一地區の住民が一定の林野其他に於て共同收益を行ひ得る慣行上の權利であつて、入會權者相互の內部關係は、偶々入會地が彼等の共有に屬するや又は他人に屬するやに關係なく、すべて之を「總有關係」だと說明すべきである、唯入會地が他人に屬する場合には其外對外關係に於て色々の特殊な問題が起るだけのことだと考へて居る。從つて民法は所謂「共有ノ性質ヲ有スル入會權」には「各地方ノ慣習ニ從フ外」「共有」に關する規定を適用し、「共有ノ性質ヲ有セザル入會權」には「各地方ノ慣習ニ從フ外」「地役權」に關する規定を準用すると謂つて居るけれども、實を云ふと、其所謂「共有ニ關スル規定ヲ適用スル」と云ふ法理は入會權が「共有ノ性質ヲ有スル」と否とに關係なく、すべて入會權者相互の內部關係に適用せらるべきものなのである。反之「地役權ニ關スル規定ヲ準用スル」と云ふ規定は、入會地の所有者と入會權者とが別人なる場合に兩者の間に存在する對外關係を地役權者と承役地所有者との關係に擬へて解決規律せむとするものたるに過ぎぬのである。

此故に、入會權の本體は其種類如何に拘らず部落民が一體として林野の共同收益權を總有する點に存するものだと考ふべきである。

十二

入會權が以上の如き法律的性質を有することは、公有林野の整理問題に直接利害關係を有する人々及び此問題の實施に從事する人々の充分に理解して置かねばならぬ根本問題である。

殊に、入會權は決して單純なる個人主義的の共有ではなくして總有の性質を有すること、從つて之が處分も亦單純なる

共有の場合と全然異別でなければならぬことは、最も注意されねばならぬ點である。

次に又、實際上入會權の最も多數の形式である所の、部落民が部落有地上に入會權を有する場合は、決して普通或る人が他人の所有地に他物權を有する場合と同一に取扱はれてはならぬことを、此權利の沿革に照して充分考へて頂きたいと私は希望する。それは明治維新の際ローマー法流の法人思想の輸入應用に依つて「村」の法律的性質が一變した爲めに法律上「村」と「村民」とが分離し、從つて從來土地の所有權も利用權も共に村民全部――即ち當時の意義に於ける「村」――に屬して居たものが忽ち分離して前者は「村」に後者は「村民」に、歸屬すべく餘儀なくされた爲めに起つた必然の結果に過ぎない。從つて「村民」の入會權は決して單なる他物權にはあらずして、「村」と「村民」とが從來の權利を分割して形式たる所有權は前者之を得、實質たる入會權は後者之を得たまでのことである。

此故に、「村民」の入會權は普通の借地權、小作權などゝは全く違つた、もつと遙かに強固な基礎を持つた權利である、「村民」は維新の際法制の變革に因つて已むなく「村」と「村民」とが分離した爲めに「形式」を失つた。けれども、彼等は此上「實質」までをも合法的理由なしにムザ〳〵と奪ひ去らるゝ譯がないのである。況んや其權利は農村生活の必需品であり農村細民の「生存」を確保するものである。之を奪はむとする者は先づ靜かに考へねばならぬ。「生命」と云ふ偉大な事實の前にひれ伏さねばならぬ。そうして彼等の權利を事實に就いて直感し事實に基いて彼等の權利の尊重すべき所以を知らねばならぬ。

十三

無論私は現在あの濫伐濫獲に因つて荒廢した入會地・愚昧な若くは其日々々の生活に追はれて遠きを慮るの念慮薄き部落民に依つて不合理的に且能率乏しく利用せられつゝある公有林野をあのまゝに放置せよと云ふのではない。農村の人々は富みたるも又貧しきもすべて心を合はせて此の農村生活の基礎たる寶庫の能率良き利用方法を考へ且實行せねばならぬ。かくしてこそ入會地の「總有」たる性質が充分に發揮されるのである。さらぬだに土地に乏しき吾國に於て自己の我慾と無智との爲め土地を荒廢のまゝ放置して置かうとするが如きは公衆に對する罪惡である。此故に政府當路者

も又農村の人々も正に公有林野の合理的な整理を策すべきである。けれども、鹿追ふ獵師山を見ざる例の如く、森林政策・治水政策・乃至は町村資源增殖の見地よりして無計算に入會地の廢止を企て、それが爲め農民細民の生活がどれだけの影響を受けるか又農村の經濟組織が如何程の變更を受けるか等の諸點を精細に且親切に考慮研究せざる者少からざるを見るとき、私は危しと云ふの外言ふべき言葉を知らないのである。殊に其策を實施せむとするに際して上記の如き「入會權」の特質を精査することなく、現在自らの頭腦を支配しつゝあるローマ法流の法人思想と個人所有權の思想とのみを唯一の武器として、遮二無二入會地整理を實行せむとし、其結果或は無用且困難なる訴訟を誘發して純朴なる農民をして費用と勞力とを浪費せしめ、或は竹槍蓆旗の騷擾をさへ惹起すが如きもの少からざるを見るとき、かくして荒びかくして亡び行く農村の行末を想ふて誠に寒心の至りに堪えないのである。

私は從來とても當局者が入會慣行の調査をして居らるゝと聞いて居る。けれども、其調査未だ完からざるに輕々しく「入會地」の整理、公有林の統一、官行造林の奬勵等を急いで居られる諸君の遣方には私は遺憾ながら感服することが出來ない。殊に吾々が今日時々耳にする所によると、公有林統一、入會權廢止を實行せむが爲め可成無理な所爲――相手の無智に乘じて甘計を以て誘つたり、無理强ひに連判せしめたり、地主から小作人を壓迫するやうなこと――が各地に於て可成りに行はれて居るやうである。私はそれを必ずしも惡意だとは解したくない。けれども「生產」と「理智」とを追ふ獵師が兎角「分配」と「人間性」とを顧みない。其の現下の有樣を私は深く遺憾とするのである。

此故に、私が此際是非とも提唱して置きたいものは、入會慣行の調査研究を完成すること及び之に基いて公有林整理の合理的なる手續を制定することである。或は農村有力者の機關たる「町村會ノ議決」に依り、或は不法なる各種の奸策僞計等に依つて、農村生活の基礎たる寶庫が濫りに破壞せられ、從つて農村細民の生活が根底的に脅かされるのを私は默視して居ることが出來ない。かくの如きは實に獨り農村の平和を害する罪惡たるのみならず、國民生活の大本たる「農」の衰頽を惹起する國家に對する犯罪である。

人は他人の愚昧を笑ふ前に自らの思慮或は足らざるなきやを三思せねばならぬ　（此項終）



フイヒテの社會主義の哲學的基礎

ハインリッヒ・リッケルト

社會主義と學

凡そ（社會主義にして學的てふ賓辭に値す可きもの）――學的社會主義と謂はる可きものが有るであらうか。換言するならば、社會主義的方向を取る何れかの政策にして、其の前提となるもの乃至其の要求する所が、また理論的に基礎附けられ得る様なものがあるであらうか？　此の問題に對しては、甚だ異別なる様々の解答が與へられてゐる。

近代の社會民主主義（ゾチアルデモクラチィー）は、カルル・マルクスを祖述する限りに於いて、人の知るが如く、其の保持する所の綱領が、學的反省の歸結である事を表示する所に、最も重きを置くものである。例へば、近頃、エドウアルド・ベルンシュタインが、此の雜誌に於いて、此の點を擧示してゐた。また夙に、此の問題は、フリードリッヒ・エンゲルスの、力を極めて高唱した所である。彼に從へば、勿論マルクス以前にも、また、社會主義は存在してゐたとは言へ、けれども、夫れは『空想的』なるものに過ぎずして、理論的に之を支持する何物もなく、徒らに虛空に漂ふものであつた。此の空想（ウトーピー）の世界より、甫めて、學（ヴィッセンシャフト）の世界へと導いたものは、實に、『資本論』の學說であつた。夫れ故にこそ、マルクス主義は、彼以前の社會主義に對して、原理的に優越するものである。而してマルクス主義をして、此の優越に値せしめたるものは、主として、其の剩餘價値論と、其の所謂唯物史觀とである。されば、學的社會主義は、純粹に自然主義的なる哲學の上に建設されたるものと言ひ得るであらう、そして、特に顯著なる其の特徵は、此の學的社會主義は、自己の政治的要求の爲めに、あらゆる倫理的基礎を拒斥すると言ふ點にある。

斯樣なる確信に對して、一つの異つたる見解が、粗暴なる對立の地位に立つてゐる。即ち、若しも總ての倫理的契機を、學の範圍から除外しようとするならば、政治的諸綱領一般が、是を理論的に基礎附ける事が出來なくなると言ふ見解である。けれども、此の見解もまた、二つの相反する形を採る事が出來る。一つは謂ふ――社會主義は、恒に、斯くある可きである所の社會的秩序への運動を意味してゐる、夫れ故に、利害關心の如何に依つて導かれ、若くは、一黨派の理想に依つて運ばれて行く。然るに、苟くも學なるものは、是れとは全く異つて、傾向なるものから自由でなければならない。そして、事實の認識として、特に、社會的過程の自然必然的關係の認識として、如何なる黨派にも屬してはならない。されば、社會主義てふものが、一政治的綱領として理解せらるる限りは、學的社會主義なるものは存在し得ない。

此の見解のためには、人々は、また、カントがquaestio juris（權利問題）とquaestio facti（事實問題）との間に試みたあの區別をば、そこに、確證したのである。——然るに、他面に於いては、まさしくカント哲學の眞正の代表者たちが、社會主義と學との間の緊密なる聯繫を主張してゐる。彼等は、即ち、カントの倫理學を以つて、——他の諸理論と等しく——黨派に超越する學說たる事を認め、しかも同時に、彼等は、此の學說の底に、學的社會主義的政策の基底を見出してゐる。例へば、ヘルマン・コーエンは、カントを以つて、獨逸社會主義の眞實にして而して現實なる創始者と見る。是に相呼應して立つカント學徒の一群は、カントの道德哲學を取つて根底とし、玆にまた社會民主々義的政策を倚托して、斯くて、嚴密にマルクス主義を奉ずる彼等の與黨にありて社會主義の倫理的据礎を拒斥するに對立する。

以下の論究は、此の論爭問題に決定を與へる事を目圖するものではない。玆に專ら論究せんとする所は、寧ろ、既に吾が獨逸の哲學者ヨーハン・ゴットリープ・フイヒテが——彼の多くの重要なる述作が、新たに、佐竹哲雄氏によつて、日本語に移植されてゐる——哲學者としてまた、顯著に、社會主義的見解を代表したと言ふ事實である。そして、其の際、（何らの學外的要素を混入する事なく）、ただ彼の（知識）學的理論からの推論の展開をのみ確信してゐたと言ふ事實に關してである。抑も、フイヒテの謂ふる哲學の容貌は如何。如何にして、彼は、彼の哲學から社會主義へと達したか？　彼にあつては、學と政治との間に、眞實に、必然的聯繫が存立するのか？

此の問題に關する釋明を獲んがためには、フイヒテの思想の總てを、一々知悉するの必要はない。寧ろ、彼が、彼の社會主義的國家學を、哲學的に權利附けるに使用した、一般原理の上に制限する事が出來る。社會主義と學との聯繫——もとより、人々は、此の哲學者に於いて此の連繫の存する事を否みはしないであらう。けれども、彼は、決して、現代の社會主義者の多數が有するが如くに、『社會主義的世界觀』を所有してゐたのではない。彼の社會主義上の主著、即ち

鎖國的商業國家は、彼自らに由つて、明らかに、法律哲學への補遺。として、銘記されてゐる。そして、彼は、決して、社會主義を取つて、之を彼の哲學體系の核心たらしめた事はなかつた。社會主義的政策は、恒に常々、單なる補遺として止らなければならなかつた。併し乍ら、(既にそれは補遺である)。さればこそ、彼に於いては、社會主義は、全く、學的原理からの歸結である。それは、如何なる場合にも決して、理論の外なる何らかの關心に依つて導かれたるが如き黨派的主義主張として、理解せらるるを許さない。併し乍ら、玆に直ちに、フイヒテに對する非難の聲が擧げられる。即ち、彼がその社會主義的『勞働權』要求の主張に到達するに當つては、彼は、現實なる經濟關係の反省考察に依つて導かれる所すくなく、寧ろ、論理的自然法的演繹の道程に依據してゐたと言ふ非難である。されど、此の事情こそまさしく、社會主義と學との關係を闡明するための一例として、彼を興味ある者たらしめてゐる。此の事情こそまさしく、彼に於いて、純粹理論と社會政策的要求との連鎖を構成するものは、抑も如何なる概念であるかと言ふ疑問を釋くものである。

八、フイヒテとカント

フイヒテの思考を支配する所の最普遍的原理は、彼は、是をカントに負ふものであると信じてゐた。批判主義を通してこそ、甫めて、彼は哲學者となつた。そして、既に玆に、吾人にとつて重要なる彼の思考の特質が露はれてゐる。學と社會主義との關係の問題は、理論と實踐、乃至、思惟と行爲との關係如何を問ふ一般的問題の一つの特殊なる場合である。抑も、純粹なる學的命題から、一般に、吾々の實行のための論結が生起するであらうか？　吾々の思惟は、吾々の行爲の上に、必然的の作用勢力を有つものであらうか？　カントの學説が、如何樣に、フイヒテの生活の上に作用したか、其の仕方は、玆に此等の問題を顧慮するとき、甚だ顯著なるものである。

『知識學』の創始者、(わがフイヒテ)は、多年の研究のあとで、己れは、專門の學者たる可く、こよなくふさはしからざる者であると言ふ確信に到達した。殊に、抽象的なる哲學は、彼の同情に値ひせざるものと思はれた。『私は思惟したくはない、私は行爲したいのだ。』尙ほ未だ二十八歲の靑年として、彼はかう書いた。思惟は、彼を驅して、行爲への對立に導く。斯くて、彼は、理論的態度を以つて、實踐的態度と結合する事の不可能なるを思ふ。抑も、何處にか、其の根據はあるものぞ? 彼の識つてゐた哲學は、主觀をば、活動的なる人間をも包括して、――其の主觀をば、諸客觀中の客觀として、即ち、因果關係の不斷の結帶に織り込まれたる非獨立的なる肢節として、考察してゐた。されば、自我(イッヒ)は、外部から、餘す所なく、規定されてゐた。從つて、世界の何處にも、決して、自由てふものは存在し得なかつた。此の事は、フイヒテにとつては、語の本來の意味での行爲なるものは、結局思惟する處の人にとつては、全く不可能であると言ふ事を意味するものであつた。學の人、その人は、動かず活かず、唯だ自然の流動經過を觀望する事だけに、自らを制限しなければならないのであつた。學の人にとつては、實に、爾餘の如何なる生命の意味も、悉く、無であつた。斯くて、フイヒテに殘されたるものは、ただ、思惟と行爲との間の撰擇のみであつた。しかも、彼にとつては、世界に於いて活動する事が、就中、問題であつたが故に、彼は、彼の活動性の阻害であり脅威であつた所の思惟と、必然的に離絕したのであつた。

然し乍ら、彼が一度びカントを讀むや否や、學に對する彼の態度は、根底から更まつた。今や彼は、先づ取り別けて、思惟者(デンカー)たらん事を欲する。抑も、斯る事は、如何にして可能であつたのか? 彼が、今や玆に、相識り相學んだ所の哲學は、二樣に働いた。即ち、先づ、此の哲學は、自我が客觀の世界に推し込められてゐると言ふ思想から、彼を解放する。人間は盲目なる自然諸力の玩具に過ぎないものであると言ふ忍び難い觀念から、彼を救濟する。夫れと同時に、

他面に於いて、此の哲學は、一の目標を表示する。此の目標に奉仕し追從する所に、今やまた彼は、まさしく哲學者且つ思惟者として、彼の自由なりとして解放せられたる活動性の開展を果し得たのである。此處には、カントが、彼の學說に與へた其の據礎を識認する事が問題ではない。唯だ、フイヒテが之を正當なるものと考へたと言ふ事で十分である。そして、フイヒテが、何故に其處から社會主義的歸結を導き出したかと言ふ事を、理解するに必要なる限りに於いてのみ、吾々は玆に其の理論を敍述すれば足りるのである。

人間をば、自由なるものとして考へ得る可能性、――カントは、是を、認識作用に關する理論から、確保した。彼の先驗的理想主義の示す所に由れば、自然は、向自的に己れ自ら獨立に存立する所の絕對的存在ではない。寧ろ反對に、或る關係に於いて、自我に依屬するものとして考へられなければならない。既に然りとすれば、吾々は、主觀が全く因果關係の鐵鎖に縛り上げられると言ふ恐怖を抱くの要はない。自然は、『表象』となる。されば、其の特殊なる內容がではなく、然し乍ら確かに其の普遍的形式が、特に其の法則性が、自我そのものの裡に息ふてゐるのである。尠くとも、其の自我が、經驗的個人的主觀以上のものである限りは――即ち、理性的で、若くは、フイヒテの詞語を用ふれば、『純粹自我』である限りは、然うである。從つて、自然が、理性的主觀を司配するのではない。寧ろ反對に、純粹自我こそ、自然生成現象の上に君臨する自由なる司配者として、理解されなければならないのである。フイヒテは、斯樣に、カント哲學の理論的方面をば、理解した。そして、是を以つて、既に、彼にとつて、『自由』は救はれた。この自由こそは、彼が思惟者(デンカー)としてまた同時に活動的なる人間であらんがために、使用した所であつた。今や彼にとつて、思惟は、もはや以前の如くに、行爲を拒外しはしない。寧ろ全く反對に、自由の存立を外(よそ)にしては、決して思惟なるものは存在し得ないと言ふ事の理由を、思惟が彼に示したのである。

然し乍ら、尚ほ、此れ丈けで總てではなかつた。カントに依つて確保された純粹自我の自由は、空虛なるものとして止まつてはゐなかつた。吾人は、ただに、表象を有するのみではない。更に、義務意識を有つてゐる。そして、此の意識が、吾々の上に、吾人の積極的規定（本分）の確信を與へる。夫れは、吾々は何を爲す可きであるかと言ふ事を、吾々に告げる。斯くて、夫れは、思惟をば――義務なるものを、斯樣に、其の倫理理性的意義に於いて認識したる此の思惟をば、吾々の活動性との十分なる統一に齎らすのである。かくて、良心の聲は、現象の彈機（ばね）に於ける靜極（ポール）となる。世界は、其の最奥の根柢に於いては、自由にして且つ倫理理性的なるものとして、妥當しなければならない。蓋し、世界は、自律的なる、自己立法的なる行動の生産であるからである。斯くて、自由にして且つ理性的なる行爲は、因果的に制約せられたる自然の存在に、先行する。窮極なる世界原理は、自律的なる『事行（タートハンドルング）』――始原的行爲である。かくて、倫理的に自由なる自我は、絶對なるものとなる。

フイヒテが、斯樣に、カントを理解したとき、彼にとつては、思惟と行爲との反對は――――嘗ては、彼を哲學から遠ざけてゐたほどの、あの對立は、餘す所なく消え失せてしまう。自己立法的なる、自律的活動性の裡にこそ、理論的にも實踐的にも犯す可からざる生命の意味が、秘められてゐると言ふ事を、今や、まさしく理論的思惟そのものが、彼に告げるのである。斯樣にして、フイヒテの成り得た所のものは、哲學の展開史上に彼をして獨歩の地位に立たしむるものであつた。即ち、行爲する所の思惟者、認識する所の實行者、靜觀と活動とを込めて包容する所の哲學者、自己の理論をば同時に實踐的に生活する所の哲學者。

此の點に關する根據が明らかになつた後で、今や、吾々は、次の問題を理解す可く試みやう。如何にして、フイヒテは、彼の行の哲學から、一般には政治的生活のための、而して、殊別には經濟生活のための、推論を索き出して來るか？

此等の推論の根基となつた事柄を理解するが爲めに、吾々は玆に、フイヒテが始めて政治上の問題を取扱つた著述の上に、一瞥を投じやう。即ち、夫れは、彼がカント哲學と相識つた直ぐ後で、一七九三年に、書かれたものであつて、『フランス革命に關する公衆の判斷を匡正するための論文』と命名されたものである。勿論、此の著述は、未だ、本來社會主義的なるものと呼ばれる事は出來ないけれど、併し乍ら、其後數年ならずして、フイヒテを社會主義に導いた所の諸概念は、旣に、此の著述に包含されてゐる。されば、後年に至つて精しく展開せられたる彼の社會主義的思想の、窮極の理論哲學的基礎の何であるかは、まさしく此の書に依つて、判明されるであらう。

フイヒテは、直接にカント哲學に接合しつゝ、フランス革命に對して、自己の態度を決定せんと試みた。此の問題を、哲學的に處置し得んがために、彼は、先づ、彼の普遍的なる文化の概念の展開を試みた。是を以て、彼は、即ち、純粹乃至理性的なる自我から、此の感性世界に於いて實踐的に活動せんと欲む經驗的乃至感性的なる人間への、橋梁を架したのであつた。此處から出發して、彼は、次に、殊別なる經濟生活の問題へと赴く。然かも、此の際、彼が此の問題を考察するに際して、立脚した所の視點は、經驗的なる人間は、感性的に働き得んがためには、財產を要すると言ふ見解であつた。實に、財產とは何であるか？ 而して、社會の經濟生活に對する國家の任務にとつて、此の概念からは、如何なる歸結が生れて來るか？ フイヒテの最初の此の政治的著述の中で、此等の諸關係を、注意して考察するならば、彼に於ける哲學と社會主義との結合は、他の本來社會主義的なる制作――一七九六年の『自然法の基礎』、並びに、一八〇〇年の『鎖國的商業國』――に於いてよりも、恐らくは一層判明に、玆に顯はれて來るであらう。夫れ故に、吾々は、其の根本原理を闡明せんがためには、唯だ、此のフランス革命に關する著述にのみ賴らうと思ふ。況んや、此の著述は、大概の論述の中に――フイヒテの社會主義の最後の理論的源泉を擧示するを任とする場合にも、未だ十分に重要視され

てはゐないのであるから、愈々玆に此書を推擧するの價値がある。カントの學説との直接の連結と言ふ事が、此處で特に、明らかになる。

フイヒテの文化の概念

フランス革命に關する研究は、もとより、歴史的たらんとするものではない。此の政治上の大事件——當時、ヨーロツパの殆んど總ての思想家の問題となつた此の大事件は、フイヒテにとつては、言はゞ、人間の權利と人間の價値と言ふ原典に付いての、豐富なる敍述としての意味があつた。そして、殊に彼の關心を喚起した問題は、一國民が、其の國家の憲法を改修するの權利を有するか否かと言ふ問題であつた。此の問題は、同時に、財産の概念に、從つてまた、社會主義への道程に、彼を導いて行つた。抑も、憲法の變更と言ふ事は、如何なる原則から、判定さる可きであるか？

吾は何を爲す可きであるかと言ふ事に附いての法則をば、既に爲されてある所のものから、是を採用し、若くは、後者に依つて前者を限定せんとする事の、如何に最も非難さる可きであるかと言ふ事は、既にカントの解明した所であつた。同樣に、フイヒテも、既存の歴史的關係から、一つの決定を試みるが如きは、彼の思考し能はさる所であつた。さればこそ、彼に、普遍的なる文化の概念を擧げて、玆からして、フランス革命てふ特殊なる文化問題に關しての判斷を成立せしめる。若しも、彼が、彼の哲學的原理に忠實である事を欲するならば、彼は、彼の認識したる人間生命一般の意味に對する其の意義てふ視點のもとに於いて、此の文化なるものを考察しなければならない。然るとき、彼にとつては、文化とは、吾々自身ならざるもの、即ち、吾々の純粹理性的自己ならざるものの總てから、全く不羈であると言ふ事——即ち、完全なる自由てふ目的を追求する吾々の全勢力の實行に外ならない筈である。カントの道德律に依つて、吾々に

は、吾々の眞實にして窮極なる最終目的が規定される。そして、それ故に、吾々の裡にあつて、吾々を感性的存在たらしめる總てのものは、夫れ自身目的ではあり得ない。寧ろ、單なる手段である。決して、夫れが、吾々を規定してはならない。反對に、夫れは、吾々に内在する理性によつて、規定せらる可きである。

然し乍ら、此處に於いては、必然的に、吾人の感性に對する、倫理的理性の戰鬪が開始されなければならない。而して、此の戰鬪に於いては、斯くして、吾人の生命の意味が充されるがためには、二様の事が起らなければならない。即ち、感性は、先づ第一に、克制せられ、且つ、制服されなければならない。蓋し、感性は、司配者たる可きに非ずして、寧ろ反つて奉仕者たる可きが故である。然かも、此れ丈けでは未だ十分ではない。更に尚ほ一歩進んで、感性は、當然、機敏で役に立つ忠僕たる可き筈である。感性は、使用せらる可きである。そして、吾々は、此の感性の、有らん限りの力を追求し、此れを、あらゆる方法に於いて教養し、斯くして、此れを無限に高め且つ強める事が必要である。此處から、感性文化の思想が成立する。其處では、自然と自由とは、相提携する。そして、此の感性文化こそは、人間が感性界の一部分である限りは、實に、人間にとつて唯一可能なる窮極目的である。凡そ單に受動的なる態度は總て、まさしく、文化に反するものである。何人と雖も、文化されるのではない、否反對に、如何なる人も、(進んで)、己れ自らを文化しなければならない、とフイヒテは謂ふ。實にや、教化なるものは、恒に、自己活動を通してこそ、將來せらるゝものであり、且つ自己活動そのものをば、目圖するものである。吾々は理解する、此の文化理想こそは、フイヒテの行の哲學——彼が、カントの先驗的理想主義と道徳的自律説とに直接に接合しつゝ、その展開を果し獲たる彼の行の哲學の、必然の歸結である。そして此處から出でて、彼れフイヒテは、今や、政治の問題に手を染める。自由への感性文化、夫れは、また實に、國家生成の唯一の意味である。夫れ故に、憲法變更の權利は、此の見地から、判定されなければならない。自

由なる自己規定てふ目的の、達成せられざる場合には、國家は展開を遂げて、此の目的に適ふものとならなければならない。沈滯不變と言ふ事こそは、人類の眞精神に反する最大の矛盾であらう。海狸は、千年の昔彼等の祖先が營むだと同樣の巢窟を、今日も尙ほ、依々として、營むでゐる。けれども、人間は、此れに反して、愈々益々完全たらんとする國家形式を通じて、絕對的なる自己規定の目標をめざして、向上の道を登る事に由つてのみ、彼は甫めて、まことの人間――即ち自由活動者である。此の努力にいそしむ吾々をば、若しも國法が阻害し脅威するものであるならば、斯る國法は變更されなければならない。此の事たるや、實に、自由の目的を追求せんとする感性の武裝としての、文化の普遍的概念からの、必然の歸結である。

フイヒテの財產(所有)の概念

偖て、フイヒテは、此の一般原則を、如何に、經濟生活の上に應用するか？　此れが、吾々にとつて決定的の問題である。彼は、所有（財產）の概念を通して、經濟問題へと導かれて行く。抑も、所有（財產）とは何であるか――この事は、自由行爲(フライエスフーン)の哲學、行の哲學の窮極原理から理解されなければならない。そして、フイヒテが此の問題を闡明するに際して、彼の到達し得た思想は、他の何處に於けるよりも著しく、彼の社會哲學上の特質を顯著ならしめてゐる。

彼は、此處に於いてもまた、彼の出發點を、純粹自我、即ち自由人格に索める。彼は謂ふ、元來、吾々自身は、吾々自身の所有である。何人も吾人の主(ヘル)にあらず、且つ、何人たりとも、吾人の主(ヘル)たる事を得ない。吾々は、吾々自らの免許狀を、吾々自身の胸奧に深く、保有するものである。けれども若し、吾々が「吾々は、吾々の所有である」と言ふならば、玆に即ち、吾々は、二重の者を――所有者と、所有（財產）とを、假定するものである。而して、此の事は、

フイヒテにとつては、唯だ、次の事を意味し得るにすぎない。――――吾々の裡なる純粹自我、即ち理性は、吾々の感性の、即ち、吾々の精神的並びに身體的全動力（クレフテ）の、主（ヘル）（所有者）である。理性は、實に、感性をば、自己の目的のための手段として、使用する筈である。此の意味に於いて、感性は、理性の『所有（財產）』である。斯くて、人格（者）の生命に於ける所有（財產）の概念は、玆に、フイヒテの哲學的根本原理から、一義的に規定されたのである。

けれど、これ丈けでは、問題は未だ盡きてはゐない。人格の外に、物財なるものがある――即ち、吾々を圍繞する「物（ザッヘ）」なるものがある。此の「物」は、吾々自身の如く、自由なるものではないから、其の物自身の所有であると言ふ事は出來ない。併し乍ら、此等の物財は、本源的には、また、吾々の所有（財產）でもない。蓋し、物財は、直接に吾々の感性的自我に屬するものではないからである。けれども、尙ほ未だ一般に所有（財產）ではない所のものは、吾々は、これを、理性的目的のための手段として、使用しても宜い。そして、若しも、吾々が、一と度び、此等の「物」に、吾々の目的のための手段たるの形式を賦與し了つた曉には、（斯樣な形式を賦與した當人ではない所の）他の如何なる者も、其の「物」を使用する事は許されないのである。即ち、若しも斯る事が許される場合には、（如上の形式を賦與した當人ではない所の）他者が（其の當人たる）吾々自身の所有（財產）である所の吾々の力の働き（ウィルクング）（結果）を、彼（他者）自身のために私用に供する事になるであらう。（これ即ち掠奪である）。そして、斯る事は、旣に、道德律の禁ずるところである。苟も、一自由者の自由なる働き（ウィルクング）を阻止するが如きは、許す能はざる所である。此處から、次の歸結が生れる。凡そ、吾々が吾々自らの力に由つて構成したる物財、乃至は、吾々自らの形式を賦與したる物財に關しては、吾々は、如何なる他者に對しても、其の物財の使用を拒絶するの權利を有つてゐる。そして、此の權利は、則ち、物財にあつては、所有である。――――斯くて、フイヒテの所有（財產）の概念は、完成する。

文學博士 三宅雪嶺先生序
法學士 高田雄種先生著

聖雄ガンヂー

最新刊

三宅雪嶺博士は本書に序して曰く

「印度にガンヂーが活動する時米國でガーヴエーが黑人を代表して活動しつゝある、埃及の獨立も何事かを暗示するでないか、前に白人を標準としたのは二十世紀を一轉機として異なる標準を求める樣なことがないか、何でも珍らしい物が流行したがガンヂーに注意を拂ふのは珍らしいばかりでなく他に意義があるでないか、本書は其眞面を知るに有益な參考となる」と。

本書は著者が最近印度より齎らせる此巨人の印象にして左手に眞理・愛・國産の旗を擧げ右手に文明的不服從の盾を執る神の如き聖的英雄の閱歷人格—主張文藻—宗教、哲學、經濟、教育其他—及び印度國民運動の沿革現狀を詳述せるもの、讀者は本書によりて此巨人に親炙し、其謦咳の裏に蘊藏せる幾多人生改造の寶玉を翫味せらるべく、併せて氏の逮捕監禁と英國印度事務大臣の辭職とによりて天下の耳目を聳動せる印度國民運動の徑路を遡りて其進展に注意すべく、特に教育者は氏の修道院規律によりて顧みて反省すべく、婦人は氏の婦人論によりて其本領を會得さるべく、更に青年は氏の入獄記によりて其靈力を振すべきである。勞資の爭鬪暴力の濫用頻々たらんとするの秋、切に憂國經世の士の一讀を推奨す。

四六判總布 三百八十頁　金貳圓七拾錢　書留送料 金十七錢

發兌　東京日本橋數寄屋町 振替東京一三七五番　大阪屋號　電話本局 三七三七番 四二八九番

斯様に、所有（財産）は、唯だ、活動若くは勞働に由つてのみ、基礎づけられるものであり、其の限り、謂はゞ、物財に對する活動乃至勞働の權利を意味するものであると言ふ此の思想から出でて、次に、フイヒテはまた、土地所有に就いて敎へる。凡そ、本源的には、何人も、土地の所有者ではあり得ない、從つて、如何なる人もすべて、國家の土地に對する權利を有つものでなければならない、と考へられる。併し乍ら、土地と雖も、總ての物資一般と、其の性質關係を異にするものではない。何らの勞力も加へられざる生の儘の物資は、未だ何人の所有にも屬してはゐない。從つて、斯る物資に對しては、吾々は、唯だ、占取權（之を自分のものと爲す權利）を有するものであつて、未だ所有（財産）權を有するものではない。蓋し、所有（財産）權なるものは、實に、如何なる場合に於いても、唯だ、吾人自らの自由活動に由つて形成せられたる物資に對してのみ、成立し得るものなるが故である。此の故に、總ての人は、均等なる部分の土地に對して、法的要求の權能を有すと言ふ考へ――土地は、平等なる部分に分つて、總ての人に分配せらる可きであると言ふ考へは、フイヒテに從へば、謬りである。吾々自身の勞働に由つて、是を占取する事に依つてのみ、甫めて、所有（財産）が成立するものなる限り、より多くの勞働をなす者は、また、より多くを所有して當然であり、全く勞働せざる者は、法的には全く何物をも所有してはゐない。所有（財産）の根源は、國家に非ずして、寧ろ、理性、即ち人間の「自由」である。吾々は、國家の中に生れ育ち、然かも、その國家の中には、空氣と光りとを除いては、尙ほ未だ全く何等勞力の加へられざる生硬なる素材物資と云はる可きものの、殆ど一物も存在してはゐないと言ふ事情があつたにしても、――斯る事情と雖も、如上の原則に關しては、些かたりとも、是を變更するの力はない。蓋し、決して、國家そのものが、總てを所有してゐるのではない。寧ろ、各個々人にこそ、すべては屬するのである。

世襲財産の事實も、此のフイヒテの（財産の）概念に對する攻擊となる事は出來ない。何人かが死歿するや否や、彼の

財産は、再び、謂はゞ未加工の生の儘の物資と等しきものとなる。されば、此の場合に於いては、總ての人は、此の素材物資に對して、自己の勞働に依つて是を占取するの權利を有するであらう。唯だ、此の占取權（の主張）は、闘ひと爭ひとに導くであらうと言ふ理由に由つてのみ、相續權なるものが成立した。されば、此の相續權の意義は、また、唯だに次の如きものでなければならない。——即ち、或る規定の人格が、一素材に自己の勞働を加へる事に由つて、此の素材を、自己の所有（財産）と爲さんがために、彼の占取權を行使するものである。是を以つて、フイヒテは、ゲエテが後年有名な言葉に表現したあの思想に、合致するものである。即ち、ゲエテは言ふ、『汝が汝の父祖から承け繼いだものは、これを（眞に）汝の所有となさんがために、（汝の骨折りに由つて）これを取得するがいい』と。されば、如何なる意味に於いても、相續財産に關してもまた、其の唯一なる權利の根原は、「自由」の目的に適ふが如くに感性的素材を形成する事即ち文化への奉仕に於ける、人間の理性的活動と言ふ事である。斯くして、フイヒテの政治的見解と、カントの先驗的理想主義並に自律説との、聯繋は、相續財産に於いて、殊に顯著になる。

フイヒテの思想には、唯だ其の字句の上にのみ拘泥するならば、確かに、理想主義哲學とは何の關はる所もない樣な種々の臆見を、想はせるものがある、即ち、吾々は、かの自然主義的重農主義的理論を——財産（所有）を以つて、素材に加へられたる勞働によつて將來せられたる價値となし、從つて、同樣に、勞働に由つてのみ初めて、財産（所有）が成立する、と說く農本主義的理論を、考へる事が出來るであらう。然し乍ら、フイヒテの社會主義の哲學的基礎と言ふ事にとつては、外的事情との符合と言ふ事が、多くの意義を有つてゐるのではない。事實上、財産は何處から成立するか、と言ふが如きは、實に全く、フイヒテの問ふ所ではない。寧ろ反對に、唯だ權利の根據のみが、彼の關心を喚起する。夫れ故に、重農主義の財産の概念に對して、宛て嵌める事の出來る樣な議論は、玆フイヒテに對しては、役に立たないの

である。彼は、史實的研究に依托して、彼の財產概念を支持せんとするものではない。否、唯だ、哲學的原理の上にのみ、是を確立せんと欲するものである。而して、吾々にとつては、全くたゞ、人間生命の窮極的意味としての自由行爲の哲學と、此の財產（所有）の解釋とが、如何に概念的に聯繫するかと言ふ事だけが、玆に、吾々の考察に來る可き問題である

經濟的歸結

以上の事を明かにしたあとで、吾々の此の研究に結末を與へんがためには、吾々は、尙ほいますこしく、次の事を闡明しなければならない。フイヒテは、彼の最初の政事的著述の中で、一般には感性文化の概念から、而して、特殊には勞働のための權利としての所有（財產）の概念から、經濟生活に關する如何なる歸結を、引き出してゐるか？　此の事を明かにした場合には　フイヒテの社會主義と、彼の學的哲學とを結合する根本原理に關しては、最早、何等の疑ひも存立しないであらう。

凡ての人は、不可讓的なる活動の權利を有つてゐる。而して、此の地上の生活に於いて、感性なしには、此の活動なるものは存在しないのであるから、凡ての活動的なる勞働者は、また、感性的存在の權利を有つて居る。夫れ故に、必然的に、フイヒテは訓へる、『勞力の補修に必要なる量の身體營養食糧、氣候風土の關係に應じて健康なる衣服と、健康なる住居、此の三者をば、凡て勞働する者は有たなければならない。』此れが基本原則である。然るに、斯る權利は、全然唯だ、勞働に由つてのみ、克ち獲らるゝものであるが故に、フイヒテは、他面に於いて、等しき必然さを以て、『勞働せざる者はまた食ふ可からず。』と言ふ。勿論、勞働せざる者と雖も、若しも誰人かゞ彼に食糧を贈與するの意志ある

場合には、彼もまた食ひ得るであらう。けれども、彼は、決して、此の事に對して、法的効力ある要求權を有つものではない。蓋し、彼は、如何なる他人の力をも、自己のために奪用してはならない筈である。何人も、彼に、自由意志的に、何物をも與へないならば、彼は、己れ自ら何物かを搜し出さんがために、彼自身の力を使用しなければならない。然らざれば、彼は饑死するであらう。而して、此の事は、實に、正當である。此處に、經濟生活の統整に關する、フイヒテの見解の、最も一般的なる基礎がある。而して、是を以て、吾々は、社會主義の問題に當面する。

偖て、此の基礎からして、更に一つの歸結が生れる。一國家内にありて、彼の勞働に由つて、生存に必須なる物を、收得し能はざる者は、彼の生活しつゝある其の國家に對して、最早、何等の義務(負擔)をも、負ふものではない。國家は、此の點を整齊しなければならない。然かも、特に、フイヒテが、『偏惠に浴する者(ベギュンスチグテン)』と呼ぶ人々に對する關係に於いて、此の點を整合しなければならない。夫れは、必須なるものより以上を所有する人々である。富者と、吾々は呼ぶ事が出來るであらう。勿論、彼等も、勞働に由つて收得せられたる彼等自身の所有(財産)に對する權利を、有する事は確かである。國家は、その限りに於いて、彼等を保護しなければならない。併し乍ら、此の權利には、一の限界が置かれる。然かも、其限界は、所有(財産)權乃至勞働權そのものの基礎を確立したる彼の同一の原理から、歸結されなければならない。フイヒテは言ふ、偏惠に浴する者――(特權階級)の存在の故に、必須なるものを收得する事が不可能であると言ふ樣な人が、猶ほ一人たりとも存在する限りは、奢侈は、些かの容赦もなく、制限されなければならない。それ故に、若しも、自己の勞働に依つては、健康なる狀態に於いて生存を維持する事が出來ないと言ふ樣な人々が存在するならば、直ちに、經濟的生活への國家の干渉が强要される。斯く謂ふ意味は、所謂偏惠に浴する者がすべての懶惰者を養ふと言ふ意味ではない。吾々の既に知つてゐる樣に、勞働せざる者は、また、食ふ可からざる者である。けれども、

勞働するものにして、然かも、食ふ可からずとか、若くは、食ふに堪へざるものを食ふ可きであるとか言ふ事は、到底、思考し能はざる所である、とフィヒテは考へてゐる。

もとより、所謂偏惠に浴する者は、慣習の力に運ばれて、たゞ多くを消費し得て、而して、何ら勞働し能はざるものとなつてゐるかも知れない。若し、何人かゞ、實際に、勞働する事が出來ないのであるならば、その人を助けなければならないと言ふ事は、其の限りに於いて、正しい。然し乍ら、此の事は、たゞ、其の人が勞働を習得し得るに到るまでの期間だけ、あてはまるのみである。夫れ故に、フィヒテにとつて確かな事には、偏惠に浴する者即ち富者は、勞働する事を習得しなければならないのである。地上の如何なる人も、自己の力を使用する事なくして、他者の力に由つて生存するの權利を、有する者はない。フィヒテにとつては、此の事は、先驗的理想主義、並に、自律的自由行爲の哲學からの歸結である。

行の哲學から政治的要求を演繹せんとする彼の試みに於いて、フィヒテは、經濟的生活への國家の干渉が實に避く可からざるものであると言ふ見解に、如何にして、到達しなければならなかつたか。吾々は既に、此の事を理解する。從つて、彼の學的確信と、社會主義に導く思想傾向との、結合は、既に、明らかである。國家は、所謂偏惠に浴する者即ち富者が、實際に、勞働を習得するや否やに就いて、これを監督するの權利を有つてゐる。そして、吾々が、彼をば、放縱華奢なる懶惰者の狀態より救つて、勤儉質朴なる勞働者たらしめ、益もなく徒らなる大地の重荷たるの境涯より救つて、人間社會の有用なる一員たらしめた事に對して、彼の所謂偏惠に浴する者は、必ずや一と度び、吾々に感謝するであらう、とフィヒテは考へてゐた。もとより、フランス革命に關する此の著述は、未だ尙ほ、本來の意味に於いて、社會主義的ではない。蓋し、此の著述には、經濟的に個人主義的乃至自由主義的なる――重農主義者の說に一致するが

如き——議論があらはれてゐる。併し乍ら、他面に於いては、此處に既に、フィヒテは、社會主義への途上にあつたと言ふ事も、同樣に確かである。勞働權の概念と一致する彼の所有(財產)の概念は、個人主義的なる經濟說と、永く、調和してあるを得なかつた。數年ならずして、彼が、新たに、社會政策的問題を論じた時、フィヒテ自ら、此の事を洞見したのである。

彼の思想の、完全なる社會主義への成熟の問題は、他の特殊の論述に俟つ可きものである。(原註。此の問題に關しては、マリアンヌ・ウェーバーの著『フィヒテの社會主義と其のマルクス學說への關係』を參照)。たゞ、社會主義的思想傾向の最普遍的哲學的基礎は、多くの詞語を須ひずして、これを表現する事が出來るであらう。人間の根本權利は、自由なる行爲の權利である。所有(財產)の權利もまた、たゞ獨り、此の根本權利の裡にのみ、其の根蒂を有し得るものであつて、此處から、必然的に、文化に奉仕應合するが如くに素材物資に作用す可き形成的活動の權利となる。フィヒテの政治論を、其の學的なる意味に於いて、理解せんがためには、吾々は、フィヒテの哲學的思想と經濟的思想との間に存する此の聯繫を注意しなければならない。就中、茲に問題である所の事を、能ふ限り、闡明するがために、また吾々は次の如く言ふ事が出來る。未だカントの哲學に就いて何事をも識らなかつた批判哲學以前の思想家は、すべての「物」(ディング)を以て、自我若くは主觀が受動的に受け取るところの、完成せる對象乃至目的物であると考へる。彼は財產(所有)(アイゲンツーム)とは死せる所有(財)(ベジッツ)であると、信ずる事が出來る。カントの批判主義は、此れに反して、教へる。與へられたるがまゝに、受動的に、受け取るもの、それは全く單に、素材である。此の素材から『物』を造り出す所の形式は、一般に、自由なる自我より、由來するものである。從つて、經濟的所有(財產)もまた、決して、死せる所有(ベジッツ)である筈はない。死せるものとは、一般に、唯だ、生のまゝの素材物資のみである。而して、斯かる素材物資は、未だ決して、財產(所有)ではない。

吾々は、斯る素材に對して、勞働に由つて、その形式を附加し當用する。かくて、吾々自らの活動を通じて形成せられたるものとなつてこそ、甫めて、吾々の所有(財産)たるを得るのである。此處からこそ、吾々は、國家に於ける經濟生活を、批判しなければならない。そして、此の自由行爲の哲學が、結局、經濟問題の範圍に於いて、自由主義的なる放任主義の理論との、抗爭に導かれなければならなかつた所以をば、吾々は、此處からこそ、理解するのである。アイヒテが、彼の、哲學的なる、勞働權の所有の概念を、愈々徹底的に展開したるにつれて、實際、彼の見解は、後年愈々益々、社會主義的になつていつたのである。(括弧内は譯者の註)

勞働階級教育運動

ジー・ディ・エッチ・コール

教育に對する勞働階級の要求は、同時に力と弱點との自覺から起つてゐる。力の自覺から起つてゐるといふのは、勞働者が、現に表はれて居らぬまでも、可能的な自己の力を覺り始めるまでは、勞働階級的教育に對する要求を起す刺戟が缺けて居るからである。またこれが弱點の自覺から起つたといふのは、可能性を覺ると同時に、勞働階級の力を實際に用ゐるには教育が必要であるといふことを覺るからである。教育に對する勞働階級の要求は、中流階級の政治家の『吾々は吾々の主人を教育せねばならぬ』といふ要求とは全然趣を異にして居る。即ちそれは自己實現及び管理の道具を探し求めることなのである。

始めて英國に組織せられたる勞働運動が起つて以來、勞働階級の首領らの心は、自然に教育上の努力に向かつた。それまで孤立してゐた勞働團體が一致して全國的產業運動を形成し、勞働階級の政治家達は、在來彼等が大體に於てその指導を受容れて來た中流階級の急進主義者と手を分ち始めた。そして吾々は截然たる勞働階級的教育に對する要求を、鋭意機械工教習所の設立に奔走してゐたグラスゴウの工匠、及びマルクスの先驅者たる最初の無產階級の經濟學者らが、倫敦に或學院を創らうとした企てに關する陳述の中に明かに認めることが出來る。グラスゴーのロバートソンと共に英國の勞働階級教育の先驅者と呼ばれてよいトーマス・ホツヂスキンは、一八二三年十月の『機械工評論』に次のやうに書いた。

『自由な民衆の教育は、丁度その財產と同じやうなものである。人々がそれを自分の手中に握らぬ限りは、決してそ

の目的に添ふことは出來ぬ。政府がこれに干渉する場合には、政府は人民を賢く且つ幸福にするよりも、從順な御し易いものにしようとする。政府は思想を管理しようと望む……人はその主人から教育を受けるよりは、寧ろ教育を與へられぬ方がよい——但し私が茲にいふ教育とは狹義の教養をさすのである、何故なら自然そのものは吾々に幾多の重要な眞理を教へるものであるから——』

ホッヂスキンは更に倫敦の勞働者にすゝめて、『化學、機械學、及び富の生産分配に關する科學に就て、彼等が眞に知らねばならぬことを學ぶために、自費で新しい學校を設立せむ』ことを促した。

當時に於ける最大の民衆教育家が、一世紀前に述べた、この勞働階級の教育の目的に關する短い言葉は、今なほ其まゝ通用する。勞働階級の教育に對する要求は、今日と等しく當時に於ても、被支配階級としての勞働者の經濟的地位と明白に關聯し、且つ社會的及び經濟的自由に對する彼等の向上心に明白に言及されて居つたのである。そして現今と同じく、當時に於ても、經濟上の問題が中心となつて居つた。それは勞働者が『その主人から』彼等を賃銀勞働より解放する教育を受けることは望み難いからである。

ホッヂスキン及びロビンソンの計畫は經濟上の困難によつて一八二三年に難破せしめられた。倫敦機械工教習所は設立せられはしたものゝ、それは中流階級の金錢上の補助を得て出來たので、そのために最初から中流階級が政策を左右することゝなつた。ホッヂスキンは教習所の保護の下に、その力ある民衆（今日ならば無産階級と名づくべき）經濟學——英國勞働階級の思想の一典範となつてゐる——の講義をすることが出來た。然し大體に於て教習所は經濟的寡頭政治の支配の下に陷り、その勞働階級的性質を急速に失つてしまつた。それは今日倫敦大學の中のバークベック學校として殘存して居るが、無論近代の勞働階級教育運動の一部分ではない。

けれどもホッヂスキンの大望をかけた計畫が頓挫したことは、その次の十年間に於ける勞働階級教育の非常な發達を妨げることはなくて濟んだ。一八三〇年には、チアーチスト運動の一先驅者である全國勞働階級合同會は、倫敦の各方面に學級を組織し、教育上の努力を以て、その最大の仕事の一部として居つた。協同組合その他ロバート・オーウェン

の勢力の保護の下に設立せられた團體は、教育を最も重要視し、その會員中の成人のための學級と、會員の子供のための學校とを組織した。總ての協同組合の、商賣上得た餘剩の中の一定額を教育事業のために積立てねばならぬ規定は、初期のオーウエン主義の團體の遺口を直接受けついだものである。また一八三〇年代には教育上に於ける勞働組合の直接の行動も既に知られて居つた。一八三三年に建築工組合が組合自身のギルド會館をバーミンガムに建てた時には、その目的は勞働組合の集會のために會合所を提供するのみでなく、教育上の學級が集まる中心と、會員の子供のために學校を組織することをも目的として居つた。

チヤーテイスト運動の活動の中では、教育は大に尊重せられてゐた。一八三六年の倫敦勞働者協會はその先行者たる全國勞働階級合同會と同じく、その會員を教育し、その紳士や勞働者を訓練するために學級を組織してゐた。ラヴエツトは最初のチヤーテイスト大運動の崩壞の後、獄中で書物の著述に時を過したが、その書物の中に彼は全國的な民衆教育の組織の計畫を概說し、勞働者の教育を以て、政治上經濟上に於ける彼等の勢力の鍵であると看做した。

これまで說いて來た總ての運動や計畫は、勞働者自身、若くはその成り立ちから云つても見地から云つても、勞働階級が優勢を占める團體の運動であつた。彼等は勞働者及び勞働階級の同情者によつて、勞働階級の管理の下に遂行せらるゝ意味に於ての勞働階級教育の初期の例を味はうたのである。けれども勿論、これとは異る『勞働階級教育』、即ち資本家の支配する現行制度の同情によつて、それの利益のために行はれたる勞働者の『教育』がある。資本家制度の擁護者は、一世紀前に於て早くも教育の武器の重要さを解するほどに明敏であつた。ホツヂスキンがその『民衆經濟學』の中に資本家的搾取の理論を教へ始めた處で、ブーガム卿及び『有用なる知識普及會』の彼の仲間は、產業上に於ける資本家制度の有利と完全性とを勞働者に信じさせることを目がけた。彼等は小冊子や廉い教科書を廣く撒布した。製造業地方を通じて、教習所や地方教育團體を組織した。一方の手では彼等は新しい科學的知識の基礎、即ち大發明、生產及び運輸の組織を一變しつゝあつた所の新しい過程を知らしめ、今一方の手では、それ以上に盛んに、新しい機械の擁護それが必然に勞働者の地位に好影響を及ぼす證據、新しい經濟學を用ゐて、資本と勞働との相對的價値は絕對に決定的

なもので、需要供給の曲げ難き法則及び『賃銀の鐵則』のために、勞働階級の力では全然左右し難いものであるといふ科學的示威運動を行ふたのである。此時代の經濟學史と共に是等の小冊子や敎科書を研究することは、今日に至つては面白い讀物である。新しい經濟組織が必然的に有利な働きをする證據として擧げられたことは、産業革命によつて作られた新しい町の飢餓や疾病や悲慘と一致せぬものであつた。

新興資本家階級が、その傭員に對して、その受けつゝある恩惠を覺らせようとした敎育の企てが、革命に對する『社會的保險』の動機によつてのみ促されたものだとも、またその結果が全然有害であつたとも斷言することは出來ぬ。中流階級の急進主義者の中には、資本主義的經濟學と同樣に敎育を正直に信仰し、勞働階級の敎育は資本制度の殘餘の缺點を除去し得るもので、敎育ある勞働者は新しい資本家制度の有利な結果をよりよく解し得るものであると考へた者も多かつた。確かに、敎育は事實上多くの勞働者の自覺と、行動及び組織に對するその能力を增進したのである。意識的にせよ無意識的にせよ、その動機が混合的なものであつたとすれば、その結果もまた混合的なものであつたのである。

けれども私が此論文の中で主として論ずるのは、他の階級が勞働者に與へる敎育のことではなくして、勞働者階級自身の敎育的要求である。私は上に統一的に思想し行動し得る勞働運動が始まつて以來、勞働者の心が敎育的努力に向ひ、公然社會的及び革命的目的を有する所の、明白なる勞働階級的敎育に對する要求が、既に實現されたことを示さうとした。性格、環境、及び訓練に及ぼす結果についてのロバート・オーウエンの敎へは、敎育の發達に注意を向けさせる上に、確かに重大な影響を與へたものである。けれども産業革命によつて放たれた經濟力に對する勞働者自身の直接の反動も、少くともそれと同等の力をもつてゐたのである。勞働者中の活動的な分子は、彼等がどうあつても理解せねばならぬ所の、新しい力の支配の下に屈服せしめられてゐたことを感じた。彼等はその力の働き方を知りさへしたなら、そして特に、若しも彼等が、變化した經濟狀態の下に於ける、彼等自身の階級の新しい地位を先づ解しさへしたなら、是等の巨大な力を統御し得るものであることを覺つたのである。故に彼等は、個人的敎養を目的とせず、行動の上に必要な理解を目的とする敎育を得ようとしたのである。彼等の目的は實際的であつて瞑想的ではなく、彼等の背後の推進す

る力は、資本主義の新しい暴政から解放される手段を發見しようとする欲求であつた。

此實際的な目的は勞働階級の教育的活動を最初から支配し、今日もまた支配して居る。それ自身を目的とする個人的教養は、勞働者の緊急な階級的要求が滿足された後まで、待たねばならぬ。一九一九年に發表せられた改造省の報告でさへ、教育を求める勞働者の主たる動機は社會的な動機であることを認めたのである。

一八二〇年代に始まつて、一八四〇年代にいつとはなしに死滅した、勞働階級の活動の一期間がすぎた後、私が述べて來た廣般な教育上の目的は大抵忘れられてしまつた。全國勞働組合總聯合が、傭主と政府との一致した攻擊の前に崩壞した一八三四年の產業的潰滅、四〇年代に於けるチャーティスト運動の敗亡は、商業の非常な擴張や運輸制度の急速な展開と共に、勞働者の心を革命の見込を勘考することより轉じて、現にあるがまゝの資本主義を極力利用する方向に向かはせた。一八四四年のロッチデール・パイオニーヤスの成功の後協同組合運動は多くその理想を忘れて、單なる取引の成功を以て納まつてしまつた。一八三四年の敗北以來、勞働組合運動は戰鬪的な產業的行動よりも、共濟團體的活動の方向に添うて再建せられた。同盟罷工は大に阻止せられ、規則的な手當の制度や基金の積立によりて安定を圖ることに、注意が集中せられた。一八五〇年代の組織し直された、徹底的に改良主義的な勞働運動には、教育的努力に對する何等の強い刺戟もなかつた。資本主義の哲學は通例受け入れられ、勞働階級の首領連によつて積極的に奉ぜられてゐる場合も多かつた。勿論かような狀態の下に於いては、個人的教養に對する欲求、及び出世の手段として教育を受けようとする欲求、ヴイクトリア時代の道德家が好んだ所謂『自助』に對する欲求の存在する餘地はあつた。けれども是等の動機は階級的な動機でなかつたから、それは勞働階級的教育運動の基礎となることは出來なかつた。彼等の目的は個人的なもので、或個人の自助は、その性質上、他人にとつては何等特殊の關係もないものであつた。故に勞働階級教育の歷史が、四〇年代に於ける最初の運動の死滅と、十九世紀の末葉に當つて新しい解放運動が勃興するまでの間は、事實上空隙となつて居たことは怪むに足りない。勞働者は讀書もすれば、種々の宗教家及び教育家によつて組織せられた學會に出席もした。今日の年老いた炭坑夫や織工の中には、ラスキンやカーライルの作品に就いての智識を示す者が、幾

らもあるが。それより若い人々は、それと匹敵する知識を示すことが極めて困難である。けれどラスキンやカーライルは産業組織の鋭利な批評家であり、その批評はその産業組織の負擔を自分の仕事の上にも、他の何人の仕事の上にも感ぜぬ讀者に彼等を愛しさせはしたが、眞の勞働階級教育運動は、ヴイクトリア後期の不利な狀態の下に建設せらるゝことは出來なかつた。基督教社會主義者らは、多少餘りに恩惠的にその教育を施した。そして現存の勞働者大學はその記念碑である。けれどもこれからも、又その時代の他のいかなる企てからも、民衆的若くは民衆的な運動は發達し得なかつたのである。

此事實は勞働階級教育の成功と、それが備へねばならぬ特殊の性質に必要な、特殊の條件を明白に指示してゐる。ホツヂスキン・オーウエン及びチヤーテイトらの古い經驗は、痛切に必要を感ぜられたことに對する直接の反應であつたが故に、それは方向を誤まつたものではなかつた。それらは、それ自ら明白に勞働階級的な要求や必要の自覺から起つたものである。勞働者は彼等自身の心の中に、或る明確な思想と向上心とを抱くようになつた。彼等は、その經濟的環境に意識的に反感をもち、彼等が心を合せて働き得る所の、新しい環境の可能性を考へて居つた。まさしく此理由のために、彼等はその環境に對する理解と、それに對する彼等の活動力を增加させる所の、知識の武裝の必要とを感じたのである。教育に對する要求は、經濟的條件そのものゝ中からでなく、經濟的條件に對する勞働階級の自覺の反應から生れたものである。

今日に於ても同じことである。英國、合衆國、及び他の多くの諸國に於て、教育に對する勞働者の要求は、勞働者が實際に、彼等が其下に生活して居る經濟組織に對して挑戰してゐるがために、再び新たに起つたものである。彼等は本能的叛逆から起つた彼等の實際的挑戰は、現行制度の實狀に對すると共に、其假說や原則に對する挑戰をも含むものであることを忽ち感ずる。これは現行制度の基礎、それについての不利な點と有利な點とに對する理解と知識をも伴ふものである。けれども猶その上に現行制度に對する勞働階級の挑戰は、理論上それに取つて代るものを提示するよりも、それに代る制度を建設する仕事を易々と引受けることを含まぬ限り、無意味にして無效である。玆に於て教育の必要が再

び明白となる。何故ならば、知識がなければ、勞働者は建設の場合に際して、破壞の場合より一層無能であるからである。

そこで勞働階級の自覺が企圖せられたる或行爲を實行する域に達した總ての時代に於ては、嚴正に勞働階級的な見地から見られた教育問題が重要な位置を占めて來る。此教育は有效な行動の手段であり、必要な道具であつて、その目的がその性質を決定する。それは、第一に未信者に對して訴へられる宣傳と混同されてはならぬ。それは旣に改宗した人々が、更に今一層の啓發に對する要求——勞働階級の成員として、及び將來建設せられねばならぬ社會の市民としての仕事のための技術的訓練——に對する要求の反應である。

さういふ教育の內容には、宣傳的な所は毫も必要でない。それは教師に對しても生徒に對しても同樣に、單なる勞働階級的同情を要求するのみならず、勞働階級の主義と積極的に合體することを要求する。けれどもそれは自由な討論の雰圍氣の中に繁榮するものであつて、批難よりも理解を必要とする。それは大體に於て歷史的な方法を以て行はれる所の、科學的及び經濟的環境の內容の科學的研究である。そしてその產物は政策ではなくて、その環境に對する、勞働階級の行動の技術である。

偏見を伴はぬ教育は存在せぬ。總ての教師は、最も抽象的な問題についてすら、自分自身の理論を有し、信ぜんとする意思を有する。それが彼の思想や說明を誣ふるのである。勿論信ぜんとする意思は、社會的研究の場合には、抽象的な科學の場合より遙かに强大である。不偏不黨は望み難いことで、それを十分に望むことすら、思想や教育の內容暴露に終るであらう。けれども單に人の偏見や信念に合致せぬ事實を明白に陳述するのみならず、その人の知つて居るのと反對の說をも陳述することが必要である。總ての事を理解する結果が、總ての事を許すことになるかも知れず、ならぬかも知れぬ。けれどもそれは確かに總ての事を有效に處分する緖ぐちとなるのである。

勞働階級の教育は不偏不黨であるべきか、宣傳的であるべきか。マルクス主義であるべきか、非マルクス主義であるべきか。是等の問題に關する論爭が、近代勞働階級教育運動の間に激しくなつて來た。英國の勞働階級運動は今日是等の論爭のために四分五裂せられてゐる。初期の勞働階級教育家には、この問題は起らなかつた。彼等は、彼等が宣傳者

たると教育者たるとを問はず、勞働者の求めるものを教へようとした。けれども彼等には、勞働者の教育管理といふ、遙かに現實的な問題が既に起つてゐたのである。ホッヂスキンの言葉を藉れば、彼等は、勞働者は教育を自己の手中に握るまでは、決して自己の要求する教育を受け得ぬことを認めたのである。この勞働階級管理の問題にして解決せられたならば、不偏不黨説と宣傳説との論爭の如きは、自ら解決せらるゝものだと私は考へる。何故ならば、管理の形式が教育の目的と性質とを決定するからである。

今や、英國の勞働階級教育は、將に一大前進を遂げようとして居るように見える。マルクス主義を標榜し、それ自身の言葉によれば『率直ではあるが、不偏不黨ではない』プレブス・リーグと、マルクス主義若くは非マルクス主義の假説に拘泥せず、勞働階級の管理と兩立し得る條件で協力が得らるゝ限り、諸大學や文部省との協力を基礎とする勞働者教育協會とが、産業的不安の復活と、團結せる勞働者の新しき社會的秩序に對する要求によつて與へられた基礎の上に働いて、結局勞働組合の注意を呼ぶに至つた。勞働組合は漸くにして教育の問題を眞面目に取扱ひ、これを以て單に勞働組合員を作るのみならず、彼等にその社會的及び産業的責任に對する準備を與へることを、組合の仕事の一部分と認むるに至つた。私は此論文を、勞働階級教育の運動の基礎に關する、大要を歴史的な考察に宛てた。恐らく私は、その現下の發達とその可能性とを説く一文を以てこれに次ぐかも知れぬ。

to settle itself. For the form of control will determine the object and character of the education.

At this moment, we seem to be on the eve of a great forward movement in British working-class education. The Plebs League and the Workers' Educational Association, the former Marxian and in its own words, "candid, but not impartial," the other working, without Marxian or non-Marxian assumptions, on a basis of collaboration with the Universities and the Board of Education, where this collaboration can be secured on terms compatible with working-class control, have between them at length aroused Trade Union attention, working on the basis provided by the revival of industrial unrest and the demand of the organised workers for a new social order. The Trade Unions are at last beginning seriously to take up the question of education, and to recognise it as a part of their task, not merely to make Trade Unionists, but to equip them for their social and industrial responsibilities, I have devoted this article to a largely historical, consideration of the basis of the movement for working-class education: perhaps I may follow it up with another dealing with its present developments and its possibilities.

ingless and of no effect unless it includes, not so much the proposal of a theoretical alternative, as the readiness to assume the task of constructing an alternative order. Here again, education is clearly implied; for, without knowledge, the workers are even more impotent to create than to destroy.

It is, then, natural and inevitable, that, in every period when working-class consciousness reaches the point of discharge in attempted action, the problem of education, regarded from the strictly working-class standpoint, should force itself to the front. This education is a means, a necessary instrument of effective action, and its purpose determines its character. It is not to be confused with propaganda, of which the appeal is primarily to the inconverted: it is the response to the demand of those who have been converted for more enlightenment—for technical training for their task as members of the working-class and as citizens of a community that has to be created.

There need be nothing propagandist about the content of such an education. It demands indeed from teacher and student alike, not merely a keen working-class sympathy, but a positive identification with the working-class cause. But it thrives in an atmosphere of free discussion, and its need is far more to understand than to condemn. It is a scientific study, largely historical in its method, of the content of the social and economic environment: and its product is not a policy, but a technique, of working-class action in face of that environment.

Education without bias does not exist. Every teacher, even on the most abstract question, has his theories and his will to believe which twist his thought and his exposition. The will to believe is, of course, a far more potent factor in social studies than in the abstract sciences. Impartiality is not to be expected: and even to seek it fully would result in the evisceration of thought and teaching. But it is necessary to state clearly not only facts which square ill with one's prejudice or belief, but theories opposed to one's known. To understand everything may or may not be to pardon everything: it is certainly the beginning of effective dealing with everything.

Controversies on these questions have become acute in the modern working-class educational movement. Should workers education be impartial or propagandist? Should it be Marxian or non-Marxian? The workers' educational movement in Great Britain is to-day riven in sunder by these disputes. To the early working-class educators this problem had not presented itself. They set out to teach what the workers wanted without enquiring whether they were propagandists or educators. But for them already had arisen the far more real problem of working-class control in education. They saw, in Hodgskin's phrase, that the workers would never get the education they needed, until they took it into their own hands. If this problem of working-class control is once solved, the controversy about impartiality and propaganda can, I think, be left

advancement, for the "self-help" beloved by the Victorian moralists. But these motives could not form the basis of a working-class educational movement, because they were not class-motives. Their end was individual, and, from their very nature, the self-help of one individual was of no special concern to others.

It is therefore not surprising that the history of the working-class education is practically a blank between the dying down of the first movement in the forties and the uprising of a new movement of emancipation towards the end of the nineteenth century. Workmen read, indeed, and attended classes organised by various religious and educational agencies. Many an aged collier or textile worker of to-day shows a knowledge of the work of Ruskin and Carlyle for which the men of younger generations would be hard put to it to find an equivalent. But, although Ruskin and Carlyle were sharp critics of the industrial system, and their criticism endeared them to readers who felt its burden, neither upon their work nor upon anybody else's, could a real working class educational movement be built under the adverse conditions of the later Victorian period. The Christian Socialists, somewhat too paternally, tried their hand and the existing Working Men's College is their monument; but neither out of this, nor out of any other attempt of the time, did a popular or democratic movement develop.

This fact is a clear indication of the special conditions which are necessary to the success of working-class education, and to the special character which it must possess. The early experiments of Hodgskin, Owen and the Chartist were on the right lines, because they were the direct response to a keenly felt need. They arose out of a demand, a consciousness of need, which was itself distinctively working-class. The workers had formed in their own minds certain positive ideas and aspirations. They were consciously hostile to their economic environment, and they had conceived the possibility of a new environment with which they would be able to work in harmony. They felt, precisely for this reason, the need for an understanding of their environment, and for an equipment of knowledge which would increase their power of acting upon it. The demand for education arose directly, not out of the economic conditions themselves, but out of the response of working-class consciousness to the economic conditions.

It is the same to-day. In Great Britain, in the United States, in many other countries, the workers' demand for education has grown up afresh precisely because the workers are in practice challenging the economic order under which they exist. Their practical challenge of instictive revolt, they speedily feel, involves a challenge to the assumptions and principles, as well as to the practice, of the existing order. This implies understanding and knowledge of its basis, of the case for it as well as of the case against it. But, in addition, it becomes increasingly evident that the working-class challenge to the existing order is mean-

educational effort and the need for a distinctive working-class education, with an explicitly social and revolutionary aim, had already been realised. The teaching of Robert Owen concerning the effect on character and environment and training was doubtless an important influence in directing attention to educational development, but the direct reaction of the workers themselves to the economic forces loosed by the Industrial Revolution counted for at least as much. The more active among the workers felt themselves subjected to the control of a new power which it was imperative for them to understand. They realised that they could hope to command these gigantic forces only if they first understood their operation, and above all, if they first understood the new status of their own class under the changed economic conditions. They set out, therefore, to get education with the object not of personal culture, but of understanding with a view to action. Their aim was practical and not contemplative, and the driving force behind them was the desire to discover a means of emancipation from the new tyranny of capitalism.

This practical aim has dominated working-class educational action from the beginning, and dominates it again to-day. Personal culture, as an end in itself, has to wait until the pressing class needs of the workers have been satisfied. Even the Adult Education Report of the Ministry of Reconstruction, issued in 1919, recognised that the predominant motive of the workers who seek education is a social motive.

After the period of interim working-class activity which began in the eighteen twenties and slowly died out in the eighteen forties the wide educational aims which I have been describing were for the most part forgotten. The industrial debacle of 1834 when the Grand National Consolidated Trades Union went down before the combined assaults of the employers and the Government, the rout of Chartism in the forties, joined with the momentous expansion of trade and the rapid development of the transport system to turn the minds of the workers away from the contemplation of revolutionary prospects to making the best of capitalism as it was. After the succes of the Rochdale Pioneers of 1844, the Co-operative movement largely forgot its ideals and settled down to a career of solid business success. Trade Unionism reconstructed itself, after the defeat of 1834, on lines of friendly society activity rather than of militant industrial action. Strikes were strongly discouraged, and attention was concentrated on the achievement of stability by the provision of regular benefits and the accumulation of funds. In the reconstituted and thoroughly reformist Labour movement of the eighteen fifties, there was no strong incentive to educational effort. The philosophy of capitalism was usually acquiesced in, and to a great extent positively accepted, by the working-class leaders. Under such conditions, there was room, of course, for the desire for personal culture and for the desire to get education as a means to personal

themselves, or of societies predominantly working-class in composition and outlook. They are early instances of working-class education in the sense in which that education is carried out by workers and working-class sympathisers, and under working-class control. But there is, of course, another kind of "working-class education," an "education" of the workers by sympathisers of, and in the interests of the existing system of capitalist control. The advocates of the capitalist order were not slow, a century ago, to understand the importance of the educational weapon. Where Hodgskin set out to teach in his "Popular Political Economy" the theory of capitalist exploitation, Lord Brougham and his associates of the Society for the Diffusion of Useful Knowledge aimed at convincing the workers of the advantages and the perfectibility of the capitalist regime in industry. They scattered tracts and cheap text books broadcast: they organised classes and local educational bodies throughout the manufacturing districts. With one hand they spread among the workers the rudiments of the new scientific knowledge, the great inventions, the new processes which were transforming the system of production and transport: with the other they scattered, even more lavishly, justifications of the new machinery, proofs of its inevitably beneficent influence on the position of the workers, scientific demonstrations, in terms of the new economies, that the relative shares of Capital and Labour are absolutely determined, beyond all possibility of working-class influence, by the inexorable laws of supply and demand and by the "iron law of wages." These tracts and text-books, studied in conjunction with the economic history of the period, make amusing reading to-day. Proofs of the inevitably beneficient action of the new economic system accord ill with the facts of starvation, desease, and misery in the new towns created by the Industrial Revolution.

It must not be concluded that these attempts of the rising capitalist class to educate its employees into a sense of the benefits conferred upon them were either wholly directed by motives of "social insurance" against revolution, or wholly bad in their effects. Many of the middle-class Radicals honestly believed in education as well as in capitalist economics, and thought that working-class education would serve to remove the remaining defects of the capitalist regime, and that educated workers would be better able to appreciate the beneficent effects of the new capitalist system. Much of the education, no doubt, actually resulted in increasing working-class consciousness and capacity for action and organisation. If the motives, conscious and unconscious, were mixed, so were the effects.

My main concern in this article is, however, not with the education which other classes offer to the workers, but with the educational demand of the working-class themselves. I have tried to show that, during the years when there first began to be a Labour movement capable of united thought and action, the minds of the workers had already turned to

This first brief statement of the aims of working-class education, made a century ago by the greatest popular educationalist of his time, holds good to-day. The demand for working-class education, then as now, was made in definite relation to the economic position of the workers as a subject class, and with definite reference to their aspirations for social and economic freedom. And, then as now, the financial problem presented itself as central; for the workers could not expect to receive "from their masters" an education which would make for their emancipation from wage-slavery.

The financial difficulty brought the plan of Hodgskin and Robinson to shipwreck in 1823. The London Mechanics' Institute was indeed founded, but only with the aid of middle-class money, which brought with it, from the outset, middle-class direction of policy. Hodgskin was able to deliver under the auspices of the Institute his powerful lectures on Popular (or, as we should say now, proletarian) Political Economy, a classic of British working-class thought, but, as a whole, the Institute passed under the sway of economic orthodoxy and speedily lost its working class character. It survives to-day as the Birkbeck College of the London University, certainly no part of the modern working-class educational movement.

But the failure of Hodgskin's ambitious plan did not prevent, in the ensuing decade, a big development of working-class education. In 1830 the National Union of the Working Classes, one of the pioneers of Chartism, was organising classes in all parts of London, and treating educational effort as one of the most important aspects of its work. The Co-operative organisations and the other Societies founded under the auspices or influence of Robert Owen, laid the greatest stress on education, and organised both classes for adults and schools for the children of their members. The rule under which every Co-operative Society sets aside for educational work a fixed proportion of its trading surplus is derived directly from the practice of the early Owenite Societies. Nor was direct Trade Union action in education unknown in the eighteen thirties. When the Builders' Union set out, in 1833, to build its own Guild Hall in Birmingham, its aim was not only to provide halls for Trade Union meetings, but a centre at which educational classes might meet, and schools be organised for the children of the members.

Education figured largely in the activities of the Chartist movement. The London Working Men's Association of 1833 like its predecessor, the National Union of the Working Classes, was active in educating its members, and organising classes for the training of its speakers and workers. Lovett, after the collapse of the first great Chartist agitation, devoted his time in prison to the writing of a book in which he sketched the plan for a national system of popular education, and treated the education of the workers as the key to working-class power in politics and in Society.

All the movements and plans hitherto described were movements of the workers

The Origins of Working Class Education in Great Britain

By G. D. H. Cole.

The working-class demand for education arises out of a consciousness at once of strength and of weakness. It is born of a consciousness of strength; for until the workers begin to realise their own power, potential if not actual, the incentive to a demand for working-class education is lacking. And it is born of a consciousness of weakness; for, with the realisation of potentialities come also the realisation that education is necessary to the actual exercise of working-class power. The demand of the working-class for education is something quite different from the "We must educate our masters" of the middle-class politician: it is the search for an instrument of self-realisation and control.

In the days when there first began to be an organised Labour movement in Great Britain, the mind of the working-class leaders turned naturally to educational effort. It was in the eighteen twenties that the hitherto isolated Trade Clubs began to draw together into a national industrial movement, and the working-class politicians to separate themselves from the middle-class Radicals whose leadership they had largely accepted. And, early in the eighteen twenties we find the demand for a distinctively working-class education plainly stated by the Glasgow artisans, busy with the formation of their Mechanics' Institute, and by the first of the proletarian economists, forerunners of Marx, in connection with the attempt to found an Institute in London. Thomas Hodgskin, who, with Robertson of Glasgow, deserves to be called the pioneer of working-class education in Great Britain, wrote as follows in the London *Mechanics' Magazine* in October, 1823.

"It is with the education of a free people as with its property: it will never be well adapted to its end, unless the people takes it into its own hands. When the Government intervenes, it looks to make the people obedient and docile, rather than wise and happy. It desires to control thought......It would be better for men to be deprived of education—I mean education in the narrow sense, for nature herself teaches us many important truths — than to receive their education from their masters."

Hodgskin went on to urge the workers of London to "found at their own expense a new Institute, where they will learn all that is really indispensable for them to know of chemistry, or mechanics, and of the science of the production and distribution of wealth."

Staat hat das Recht der Aufsicht, ob die Begünstigten oder Reichen wirklich arbeiten lernen, und Fichte meinte, der Begünstigte werde es uns einst noch danken, dass wir ihn uns einem verschwenderischen Müßiggänger zu einem frugalen Arbeiter und aus einer unnützen Last der Erde zu einem brauchbaren Mitgliede der menschlichen Gesellschaft gemacht haben. Im eigentlichen Sinne sozialistisch ist freilich die Schrift über die französische Revolution noch nicht, denn es finden sich in ihr wirtschaftlich individualistische oder liberalistische Ausführungen, die mit den Lehren der Physiokraten übereinstimmen. Aber andererseits ist ebenso sicher, dass Fichte sich schon hier auf dem *Wege* zum Sozialismus befindet. Sein Eigentumsbegriff, der mit dem eines Rechtes auf Arbeit zusammenfällt, blieb auf die Dauer mit der individualistischen Wirtschaftsdoktrin unverträglich. Das sah Fichte selbst ein, als er wenige Jahre später von neuem sozialpolitische Fragen behandelte.

Die Ausgestaltung seiner Gedanken zum vollen Sozialismus bleibt einer besonderen Darstellung vorbehalten.* Die allgemeinste philosophische Grundlage der sozialistischen Tendenz lässt sich mit wenigen Worten zum Ausdruck bringen. Das Urrecht des Menschen ist das Rechte auf freies Handeln. Auch das Recht auf Eigentum kann allein in diesem Urrecht wurzeln und gestaltet sich dann notwendig zu einem Recht auf formende Tätigkeit an der rohen Materie im Dienste der Kultur. Diesen Zusammenhang zwischen den philosophischen und den wirtschaftlichen Gedanken Fichtes muss man beachten, um seine Politik in ihrem wissenschaftlichen Sinne zu verstehen. Damit das, worauf es vor allem ankommt, möglichst deutlich wird, kann man auch sagen: der vorkritische Denker, der noch nichts von der Kantischen Philosophie weiss, sieht in allen Dingen fertige Gegenstände oder Objekte, die das Ich oder das Subjekt passiv hinnimmt. Er kann glauben, dass Eigentum toter Besitz sei. Kants Kritizismus dagegen lehrt: gegeben und passiv hinzunehmen, ist lediglich die Materie. Die Form, welche daraus die Dinge macht, stammt überall aus dem freien Ich. Dementsprechend darf auch das wirtschaftliche Eigentum kein toter Besitz bleiben. Tot ist überall nur die rohe Materie, und die ist noch kein Eigentum. An sie bringen wir die Form durch Arbeit heran, und erst das durch unsere Tätigkeit geformte kann als unser Eigentum gelten. Von hier aus haben wir das wirtschaftliche Leben im Staate zu beurteilen, und von hier aus verstehen wir, weshalb die Philosophie des freien Tuns schliesslich auf dem wirtschaftlichen Gebiet zu einer Bekämpfung mit der liberalistischen Theorie des „Laissez aller, Laisser faire" führen musste. In der Tat gestalteten sich die Ansichten Fichtes später umsomehr sozialistisch, je konsequenter er seinen philosophischen Eigentumsbegriff des Rechtes auf Arbeit entwickelte.

*Man vergleiche dazu die Schrift von Marianne Weber, Fichtes Sozialismus und sein Verhältnis zur Marx'schen Doktrin.

tität, eine nach Verhältnis des Klimas gesunde Kleidung und gesunde Wohnung muss jeder haben. Er arbeitet: das ist Grundsatz. Da jedoch ein solches Recht ausschliesslich und allein durch Arbeit erworben wird, sagt Fichte andererseits mit derselben Notwendigkeit, dass wer nicht arbeitet, auch nicht essen soll. Er darf zwar essen, wenn ihm jemand etwas zu essen schenken will, aber er hat keinen rechtskräftigen Anspruch darauf, denn er darf keines anderen Kräfte für sich verwenden. Gibt niemand ihm freiwillig etwas, so muss er seine eigenen Kräfte brauchen, um sich etwas aufzusuchen, oder er wird Hungers sterben, und das von Rechts wegen. Daran haben wir die allgemeinste Grundlage für Fichtes Auffassung einer Regelung des wirtschaftlichen Lebens, und damit kommen wir zu den Problemen des Sozialismus.

Aus der Grunnlage ergibt sich dann eine weitere Folgerung. Wer im Staate durch seine Arbeit das zum Leben Unetbehrliche nicht erlangen kann, hat auch keine Verpflichtungen mehr gegen den Staat, in dem er lebt. Hiernach muss der Staat sich richten, und zwar besonders in seinem Verhältnis zu denjenigen, die Fichte die „Begünstigten" nennt. Das sind die Menschen, die mehr besitzen als das Unentbehrliche, die Reichen, wie wir auch sagen können. Gewiss haben sie ein Recht auf ihr durch Arbeit erworbenes Eigentum. Der Staat hat sie darin zu schützen. Aber diesem Rechte ist eine Grenze gesetzt, und zwar folgt sie aus demselben Prinzip, welches das Recht auf Eigentum oder Arbeit selbst begründet. Solange noch *einer* da ist, sagt Fichte, dem es um der Begünstigten willen unmöglich ist, das Unentbehrliche zu erwerben, muss der Luxus ohne alles Erbarmen eingeschänkt werden. Es wird also ein Eingriff des Staates in das wirtschaftliche Leben gefordert, sobald es Menschen gibt, die von ihrer Arbeit nicht in gesunder Weise existieren können. Das heisst nicht, dass der Begünstigte alle Müssiggänger ernährt. Wir wissen, wer nicht arbeitet, soll auch nicht essen. Aber es ist undenkbar, meint Fichte, dass allein der welcher arbeitet nicht essen oder dass Unessbarste essen soll.

Freilich könnte der Begünstigte sich auf die Kraft der Gewohnheit berufen, nichts zu arbeiten und viel zu verzehren, und das ist insofern berechtigt, als wenn jemand wirklich arbeiten *kann*, für ihn gesorgt werden muß. Jedoch gilt das nur so lange, bis er *gelernt* hat, zu arbeiten, und daher steht für Fichte fest: der Begünstigte oder Reiche muss arbeiten lernen. Kein Mensch auf der Erde hat das Recht, seine Kräfte ungebraucht zu lassen und durch fremde Kräfte zu leben. Das folgt für Fichte aus dem transcendentalem Idealismus und der Lehre vom autonomen, freien Tun.

So verstehen wir, wie Fichte bei seinem Versuch, aus der Philosophie der Tat politische Forderungen abzuleiten, zu der Ansicht kommen musste, dass Eingriffe des Staates in das wirtschaftliche Leben unvermeidlich sein können, und damit schon ist die Verbindung seiner wissenschaftlichen Überzeugung mit Tendenzen klar, die zum Sozialismus führen. Der

Besitz genommen hat, sodern die einzelnen sind es, denen alles gehört.

Ebensowenig kann die Tatsache des *vererbten* Eigentums einen Einwand gegen Fichtes Begriff bilden. Sobald jemand stirbt, wird sein Eigentum wieder so gut wie rohe Materie, und darauf hätten dann alle durch ihre Arbeit ein Zueignungsrecht. Nur weil dies zu Kampf und Streit führen würde, ist das Erbrecht entstanden, und auch dieses Recht darf nur die Bedeutung haben, dass eine *bestimmte* Persönlichkeit ihr Zueignungsrecht benutzt, um einen Stoff durch Arbeit an ihm zu ihrem Eigentum zu *machen*. Fichte vertritt damit denselben Gedanken, dem Goethe später mit den bekannten Worten Ausdruck gab: Was du ererbt von deinen Vätern hast, erwirb es um es zu besitzen. Jedenfalls: die einzige Rechtsquelle auch des Erbeigentums bleibt die vernünftige Tätigkeit des Menschen im Dienste der Kultur, d. h. der Formung des sinnlichen Stoffes zum Zwecke der Freiheit. So wird am Erbeigentum der Zusammenhang von Fichtes politischen Ansichten mit Kants transdendentalem Idealismus und der Autonomielehre besonders deutlich.

Allerdings erinnern Fichtes Gedanken, solange man nur auf ihren Wortlaut achtet, an Meinungen, die mit der idealistischen Philosophie nichts zu tun haben. Man kann an die physiokratische Theorie denken, nach der Eigentum der durch Arbeit an einem Rohstoff hervorgebrachte Wert ist, also ebenfalls erst durch Arbeit Eigentum entsteht. Für die *philosophische* Grundlage des Fichtischen Sozialismus bedeutet jedoch die äusserliche Übereinstimmung nicht viel. Fichte fragt ja garnicht danach, woraus *faktisch* Eigentum entsteht, sondern allein der Rechtsgrund interessiert ihn, und daher sind gegen ihn auch die Argumente nicht brauchbar, die man gegen den physiokratischen Eigentumsbegriff geltend machen kann. Er will seinen Eigentumsbegriff nicht auf historische Untersuchungen, sondern allein auf philosophische Prinzipien stützen. Für uns kommt ausschliesslich der begriffliche Zusammenhang der Auffassung vom Eigentum mit der Lehre vom freien Tun als dem letzten Sinn des menschlichen Lebens in Betracht.

Die wirtschaftlichen Folgerungen.

Nachdem dies klargestellt ist, haben wir, um unsere Untersuchung zum Abschluss zu bringen, nur noch zu zeigen, welche Konsequenzen für das wirtschaftliche Leben Fichte in seiner ersten politischen Schrift aus den Begriffen der Kultur der Sinnlichkeit im allgemeinen und des Eigentums als des Rechtes auf Arbeit im besondern zieht. Dann wird über das Grundprinzip, das Fichtes Sozialismus mit seiner wissenschaftlichen Philosophie verknüpft, kein Zweifel mehr bestehen.

Jeder hat ein unveräusserliches Recht auf Tätigkeit, und weil es diese im irdischen Leben ohne Sinnlichkeit nicht gibt, hat jeder tätige Arbeiter auch ein Recht auf sinnliche Existenz. Daher lehrt Fichte mit Notwendigkeit: eine dem menschlichen Körper zuträgliche Nahrung in der zur Ersetzung der Kräfte nötigen Quan-

es werden. Wir tragen unseren Freibrief tief in unserer Brust. Doch wenn wir sagen: **wir sind unser** Eigentum, so nehmen wir damit ein zweifaches an, einen Eigentümer und ein Eigentum, und das kann für Fichte nur bedeuten: das reine Ich in uns, die Vernunft ist Herr unserer Sinnlichkeit, d. h. aller unserer geistigen und körperlichen Kräfte. Die Vernunft darf sie als Mittel zu ihren Zwecken gebrauchen. In diesem Sinne sind sie ihr „Eigentum," und damit ist der Eigentumsbegriff für das Leben der *Personen* aus Fichtes philosophischem Grundprinzipien eindeutig bestimmt.

Aber das genügt für sich allein noch nicht. Ausser den Personen gibt es *Sachen*, d. h. um uns herum sind Dinge, die nicht ihr eigenes Eigentum sein können, da sie nicht frei sind wie wir selber. Diese Sachen aber sind *ursprünglich* auch nicht unser Eigentum, denn sie gehören nicht unmittelbar zu unserem sinnlichen Ich. Trotzdem dürfen wir das, was überhaupt noch nicht Eigentum ist, als Mittel für vernünftige Zwecke verwenden, und wenn wir einmal den Dingen die Form eines Mittels für unsere Zwecke gegeben haben, dann darf kein anderes sie gebrauchen. Er würde nämlich dabei die Wirkung unserer Kräfte, die unser Eigentum sind, für sich verwenden, und das verbietet das Sittengesetz. Die freie Wirkung irgend eines freien Wesens zu *stören*, kann nicht erlaubt sein. Daraus aber folgt, wir haben das Recht, jeden anderen von dem Gebrauch einer Sache auszuschliessen, die wir durch unsere Kräfte gebildet, oder der wir unsere Form gegeben haben, und dieses Recht heisst bei Sachen das Eigentum. So wird der Eingentumsbegriff Fichtes vollständig.

Von dem Gedanken, dass Eigentum allein durch Tätigkeit oder *Arbeit* begründet ist und insofern soviel wie ein Recht auf Tätigkeit oder Arbeit an einer Sache bedeutet, ergibt sich dann auch das, was Fichte über das Grundeigentum lehrt. Man meint, dass niemand ursprünglich Eigentümer des Landes sein könne, und dass daher jeder das Recht am Boden vom Staate haben müsse. Doch mit dem Acker steht es nicht anders als mit aller Materie überhaupt. Die rohe, unbearbeitete Materie gehört noch Keinem. Wir haben auf sie nur ein Zueignungsrecht, kein Eigentumsrecht, denn dieses kann ja immer nur auf eine durch unsere freie Tätigkeit geformte Materie bestehen. Daher ist es nach Fichte falsch, dass alle Menschen auf einen gleichen Teil des Landes rechtlichen Anspruch besitzen, und dass der Erdboden zu gleichen Portionen an alle zu verteilen sei. Insofern erst durch Zueigung vermittels unserer Arbeit Eigentum entsteht, darf der Mensch, welcher mehr arbeitet, auch mehr besitzen, und der, welcher nicht arbeitet, besitzt rechtlich garnichts. Nicht der Staat, sondern die Vernunft oder die Freiheit des Menschen ist die Quelle des Eigentums. Sogar der Umstand, dass wir im Staate geboren werden, in dem es ausser Luft und Licht kaum noch unbearbeitete rohe Materie gibt, vermag daran nichts zu ändern, denn es ist ja nicht der Staat, der alles schon in

sinnlichen Wesen macht, nicht selbst Zweck, sondern blosses Mittel sein. Es darf uns nie bestimmen, sondern soll durch die Vernunft in uns bestimmt werden.

Hieraus jedoch entsteht notwendig ein Kampf der sittlichen Vernunft mit unserer Sinnlichkeit, und in ihm muss zweierlei geschehen, damit der Sinn unseres Lebens sich erfüll. Die Sinnlichkeit muss erstens bezähmt und unterjocht werden, da sie nicht zu gebieten, sondern zu dienen hat. Aber das allein genügt nicht. Sie soll ausserdem ein geschickter, tauglicher Diener, sie soll zu gebrauchen sein, und dazu gehört, dass man all ihre Kräfte aufsuche, sie auf alle Art bilde und sie ins Unendliche erhöhe und verstärk. Hieraus entsteht der Gedanke einer *Kultur der Sinnlichkeit*, in der Natur und Freiheit zusammengeben, und sie ist der einzig mögliche Endzweck des Menschen, insoweit er ein Teil der Sinnenwelt ist. Alles bloss leidende Verhalten ist das gerade Gegenteil der Kultur. Niemand *wird* kultiviert, sagt Fichte, sondern jeder hat sich selbst zu kultivieren. Bildung geschieht immer durch Selbsttätigkeit und zweckt auf Selbsttätigkeit ab. Wir verstehen: dieses Kulturideal folgt notwendig aus Fichtes Philosophie der Tat, wie er sie im unmittelbaren Anschluss an Kants transcendentalen Idealismus und die Lehre von der sittlichen Autonomie entwickelt hat. Von ihr aus nimmt Fichte nun die Fragen der Politik in Angriff. Kultur der Sinnlichkeit zur Freiheit ist der einzige Sinn auch des Werdeganges der *Staaten*, und von hier aus muss deshalb das Recht der Verfassungsänderung beurteilt werden. Wo der Zweck der freien Selbstbestimmung unerreicht bleibt, sind die Staaten so zu entwickeln, dass sie zu diesem Zwecke taugen. Unveränderliches wäre der härteste Widerspruch gegen den Geist der Menschheit. Der Biber baut heute, wie seine Vorfahren vor 1000 Jahren gebaut haben. Der Mensch dagegen ist nur dadurch Mensch, das heißt ein frei tätiges Wesen, dass er fortschreitet zu dem Ziel der absoluten Selbstbestimmung durch immer vollkommenere Staatsformen hindurch. Droht eine Verfassung, uns bei einem solchen Streben zu hemmen, so muss sie geändert werden. Das folgt notwendig aus dem allgemeinen Begriff der Kultur als dem Wehrhaftmachen der Sinnlichkeit zum Zweck der Freiheit.

Fichtes Begriff des Eigentums.

Wie wendet nun Fichte diese allgemeinen Grundsätze auf das *wirtschaftliche* Leben an? Das ist die für uns entscheidende Frage. Auf ökonomische Probleme wird er durch den Begriff des Eigentums geführt. Was Eigentum ist, muss aus den letzten Prinzipien der Philosophie des freien Tuns verstanden werden, und indem Fichte dies versucht, kommt er zu den Gedanken, in denen mehr als anderswo seine sozialphilosophische Eigenart sich ausprägt.

Seinen Ausgangspunkt nimmt er auch hier wieder vom reinen Ich oder von der freien Persönlichkeit. Ursprünglich, sagt er, sind wir selbst unser Eigentum. Niemand ist unser Herr, und niemand kann

Anschluss an die Kantische Philosophie, zur französischen Revolution Stellung zu nehmen. Um diese Probleme philosophisch behandeln zu können, entwickelte er zunächst seinen allgemeinen Begriff der *Kultur*. Damit schlug er die Brücke vom reinen oder vernünftigen Ich zum empirischen oder sinnlichen Menschen, der sich praktisch in der Sinnenwelt betätigen will. Von hier aus kam er dann auf das wirtschaftliche Leben im besonderen, und zwar betrachtete er es unter dem Gesichtspunkt, dass der empirische Mensch, im sinnlich wirken zu können, des *Eigentums* bedarf. Was ist in Wahrheit Eigentum? Und was folgt aus diesem Begriff für die Aufgaben des Staates gegenüber dem ökonomischen Leben der Gesellschaft? Sobald man auf diese Zusammenhänge in Fichtes erster politischer Schrift achtet, tritt die Verbindung von Philosophie und Sozialismus bei ihm vielleicht noch deutlicher zutage als in den eigentlich sozialistischen Werken, in der „Grundlage des Naturrechts“ von 1796 und in dem „geschlossenen Handelsstaat“ von 1800. Wir wollen uns daher, um das Grundprinzip klarzulegen, allein an das Buch über die französische Revolution halten. Das empfiehlt sich umsomehr, als diese Schrift in den meisten Darstellungen nicht genug beachtet worden ist, wo es galt, den letzten theoretischen Ursprung von Fichtes Sozialismus aufzuzeigen. Die unmittelbare Verknüpfung mit den Lehren Kants wird hier besonders deutlich.

Fichtes Begriff der Kultur.

Die Untersuchung über die französische Revolution will nicht geschichtlich sein. Das grosse politische Ereignis, welches damals fast alle denkenden Köpfe in Europa beschäftigte, bedeutet für Fichte ein reiches Gemälde über den Text: Menschenrecht und Menschenwert, und vor allem interessiert ihn die Frage, ob ein Volk das Recht hat, seine Staatsverfassung abzuändern. Dies Problem hat ihn zugleich auf seinen Begriff des Eigentums und damit auf den Weg zum Sozialismus geführt. Aus welchem Grundsatz ist eine Verfassungsänderung zu beurteilen?

Schon Kant erklärte, er sei höchst verwerflich, die Gesetze über das, was ich tun soll, von demjenigen her zu nehmen oder dadurch einschränken zu wollen, was getan wird. Ebenso kann Fichte an eine Entscheidung aus den bestehenden geschichtlichen Verhältnissen nicht denken. Deshalb stellt er einen allgemeinen Begriff der Kultur auf, aus dem sich ein Urteil über das besondere Kulturproblem der französischen Revolution gewinnen lässt. Will er seinen philosophischen Grundsätzen treu bleiben, so muss er die Kultur unter dem Gesichtspunkt ihrer Bedeutung für den von ihm erkannten Sinn des menschlichen Lebens überhaupt bringen, und dann darf für ihn Kultur nichts anderes sein als Uebung aller unserer Kräfte auf den Zweck der völligen *Freiheit* der Unabhängigkeit von allem, was nicht wir selbst, das heißt unser reines, vernünftiges Selbst ist. Durch Kants Sittengesetz wird uns unser wahrer letzter Endzweck bestimmt, und daher kann alles in uns, was uns zu

dieses mehr als ein empirisches, individuelles Subjekt, das heisst, soweit es vernünftig oder, wie Fichte sagt, „reines Ich" ist. Infolgedessen beherrscht die Natur das vernünftige Subjekt so wenig, daß das reine Ich vielmehr als freier Herrscher über das Naturgeschehn angesehen werden muss. In dieser Weise verstand Fichte die theoretische Seite der Kantischen Philosophie, und bereits damit war für ihn die Freiheit gerettet, die er brauchte, um auch als Denker ein tätiger Mensch zu bleiben. Das Denken schloss jetzt für ihn das Handeln nicht mehr wie früher aus, sondern es zeigte ihm im Gegenteil, warum es ohne Freiheit nicht einmal ein Denken gibt.

Aber das war noch nicht alles. Die durch Kant gesicherte Freiheit des reinen Ich blieb nicht leer. Wir haben nicht allein Vorstellungen, sonnern ein Pflichtbewusstsein, und das versichert uns unserer positiven Bestimmung. Es sagt uns, was wir tun *sollen*, und es bringt damit das Denken, welches die Pflicht in dieser ihrer sittlich-vernünftigen Bedeutung erkannt hat, vollends zur Einheit mit unserer Tätigkeit. Die Stimme des Gewissens wird so zum ruhenden Pol in der Erscheinungen Flucht. Die Welt muss im tiefsten Grunde als frei und sittlich-vernünftig gelten, denn sie ist das Produkt der autonomen, sich selbst das Gesetz gebenden Handlung. So geht das freie und vernünftige Tun dem Kausal bedingten Sein der Natur voran. Das letzte Weltprinzip ist die autonome Tathandlung, und das sittlich freie Ich wird zum Absoluten.

Indem Fichte Kant so auffasste, verschwindet für ihn der Gegensatz von Denken und Handeln, der ihn früher von der Philosophie entfernt hatte, bis auf den letzten Rest. Gerade das theoretische Denken sagt ihm jetzt, daß in der sich selbst das Gesetz gebenden, autonomen Tätigkeit der theoretisch ebenso wie praktisch unantastbare Sinn des Lebens liegt. So konnte Fichte zu dem werden, was ihn in der Entwicklung der Philosophie einzig macht: zum handelnden Denker, zum erkennenden Täter, zu einem Philosophen, bei dem Kontemplation und Aktivität zusammenfallen, der seine Theorie zugleich praktisch lebt.

Nachdem der Grund hierfür klar ist, suchen wir nun zu verstehen, wie Fichte aus seiner Philosophie der Tat Folgerungen für das politische Leben im allgemeinen und für das wirtschaftliche Leben im besonderen zieht. Um die Sache bei ihrer Wurzel zu fassen, werfen wir einen Blick auf das Buch, in dem Fichte zum erstenmal politische Probleme behandelte. Er schrieb es im Jahre 1793, bald nachdem er die Kantische Philosophie kennen gelernt hatte, und er nannte es: **Beiträge zur Berichtigung der Urteile des Publikums über die französische Revolution.** Zwar kann man diese Schrift noch nicht eigentlich sozialistisch nennen, aber sie enthält bereits die Begriffe, die Fichte wenige Jahre darauf zum Sozialismus hinführten, und gerade dadurch wird deutlich, welches die letzten theoretisch-philosophischen *Grundlagen* seiner später ausgeführten sozialistischen Gedanken sind.

Fichte versuchte, im unmittelbaren

und Handeln. Ergeben sich aus rein wissenschaftlichen Sätzen überhaupt Folgerungen für unser Tun? Hat unser Denken auf unser Handeln einen notwendigen Einfluss? Die Art, wie Kants Lehre auf Fichtes Leben wirkte, ist mit Rücksicht auf solche Probleme sehr bezeichnend.

Der Schöpfer der „Wissenschaftslehre" war nach vieljährigem Studium zu der Ueberzeugung gelangt, dass er zu einem Gelehrten von Fach so wenig Geschick wie möglich habe, und besonders die abstrakte Philosophie schien ihm unsympatisch. „Ich will nicht denken, ich will handeln," schrieb er noch als achtundzwanzigjähriger Mann. Das Denken hatte ihn zum Handeln in Gegensatz gebracht, sodass er das theoretische Verhalten mit dem praktischen für unvereinbar hielt. Woran lag das? Die Philosophie, die er kannte, betrachtete das Subjekt mit Einschluss des tätigen Menschen als Objekt unter Objekten, das heisst: als unselbständiges Glied in der lückenlosen Kette von Ursachen und Wirkungen. So war das Ich von aussen her restlos bestimmt. Freiheit konnte es danach nirgends in der Welt geben, und das bedeutete für Fichte, dass Handeln im eigentlichen Sinne des Wortes für den konsequent denkenden Menschen ganz unmöglich sei. Der Mann der Wissenschaft musste sich darauf beschränken, untätig dem Ablauf der Natur zuzusehen. Jeder andere Sinn des Lebens war für ihn vernichtet. So blieb Fichte nur die Wahl zwischen dem Denken und dem Handeln, und da es ihm vor allem darauf ankam, in der Welt zu wirken, sties ihn das Denken, welches seine Aktivität zu hemmen drohte, notwendig ab.

Doch seine Stellung zur Wissenschaft änderte sich von Grund aus, sobald er Kant gelesen hatte. Jetzt wollte er vor allem Denker sein. Wie war das möglich? Die Philosophie, die er nun kennen lernte, leistete zweierlei. Sie erlöste ihn zunächst von dem Gedanken an eine Einzwängung des Ich in die Welt der Objekte, von der unerträglichen Vorstellung, daß der Mensch nichts anderes als ein Spielball blinder Naturkräfte sei, und sie wies ausserdem auf ein Ziel hin, in dessen Dienst er nun auch, ja gerade als Philosoph und Denker seine frei gewordene Tätigkeit stellen konnte. Es kommt hier nicht darauf an, die Begründung kennen zu lernen, die Kant seinen Lehren gegeben hat. Es genügt, dass Fichte sie für richtig hielt, und wir brauchen sie uns so weit zu vergegenwärtigen, als nötig ist, um zu verstehen, weshalb Fichte aus ihnen sozialistische Konsequenzen zog.

Die Möglichkeit, den Menschen für frei zu halten, gewinnt Kant durch eine Theorie des Erkennens. Sein transcendentaler Idealismus zeigt, daß die Natur nicht ein für sich bestehendes, absolutes Sein ist, sondern in gewisser Hinsicht als abhängig vom Ich gedacht werden muss, und dass wir schon deshalb nicht zu fürchten brauchen, der Kausalzusammenhang vermöge das Subjekt völlig in Fesseln zu schlagen. Die Natur wird zur „Vorstellung". Nicht ihr besonderer Inhalt, wohl aber ihre allgemeinen Formen, zumal ihre Gesetzlichkeit, ruhen im Ich, soweit

über den Parteien steht, und sie finden in ihr die Basis einer wissenschaftlich-sozialistischen Politik. Hermann Cohen z. B. bezeichnet Kant als den wahren und wirklichen Urheber des deutschen Sozialismus. Dementsprechend gibt es eine Anzahl von Kantianern, welche auf Kants Moralphilosophie auch die sozialdemokratische Politik stützen und so zur Ablehnung der ethischen Begründung des Sozialismus bei ihren streng marxistisch gesinnten Parteigenossen in Gegensatz kommen.

Die folgenden Ausführungen beabsichtigen nicht, diese Streitfragen zu entscheiden. Sie beschäftigen sich vielmehr mit der Tatsache, dass schon der deutsche Philosoph J. G. Fichte von dem neuerdings mehrere wichtige Schriften von T. Satake in die japanische Sprache übersetzt sind, auch als Philosoph ausdrücklich sozialistische Ansichten vertreten hat und dabei der Überzeugung war, nur Konsequenzen aus seinen wissenschaftlichen Theorien zu entwickeln. Wie sieht die Philosophie aus, die Fichte lehrt, und wie kam er von ihr zum Sozialismus? Besteht bei ihm zwischen Wissenschaft und Politik in Wahrheit ein notwendiger Zusammenhang?

Um hierüber Klarheit zu gewinnen, braucht man nicht alle Einzelheiten der Gedanken Fichtes zu kennen, sondern kann sich auf das allgemeine Prinzip beschränken, mit Hilfe dessen er seine sozialistische Staatslehre philosophisch rechtfertigt. Einen Zusammenhang zwischen Sozialismus und Wissenschaft wird man bei diesem Philosophen nicht leugnen. Zwar besass er keine „sozialistische Weltanschauung“ wie viele unter den Sozialisten unserer Zeit. Sein sozialistisches Hauptwerk, der **geschlossene Handelsstaat**, ist von ihm ausdrücklich als *Anhang* zur Rechtsphilosophie bezeichnet worden, und niemals hätte er den Sozialismus in das Zentrum seines Systems gestellt. Die sozialistische Politik musste ein blosser Anhang bleiben. Aber sie folgt darum bei ihm nicht weniger aus wissenschaftlichen Grundsätzen, und sie lässt sich auf keinen Fall als eine durch aussertheoretische Interessen geleitete Parteinahme verstehen. Hat man doch gegen Fichte geradezu den Vorwurf erhoben, dass er zu seiner sozialistischen Forderung des „Rechtes auf Arbeit“ mehr auf dem Wege logisch-naturrechtlicher Deduktion als durch eine Reflexion auf die realen wirtschaftlichen Verhältnisse gelangt sei. Gerade dieser Umstand macht ihn interessant als Beispiel für die Erörterung des Verhältnisses von Sozialismus und Wissenschaft und legt die Frage nahe, welche Begriffe es sind, die bei ihm die Verbindung zwischen reiner Theorie und sozialpolitischen Forderungen herstellen.

Fichte und Kant.

Das allgemeinste Prinzip, das Fichtes Denken beherrscht, glaubte er, Kant zu verdanken. Erst durch den Kritizismus wurde er zum Philosophen, und schon dabei tritt ein für uns wichtiger Zug seines Denkens zutage. Das Problem des Verhältnisses von Wissenschaft und Sozialismus bildet einen besonderen Fall der allgemeinen Frage nach dem Verhältnis von Theorie und Praxis oder von Denken

Die philosophischen Grundlagen von Fichtes Sozialismus.

Von Heinrich Rickert (Heidelberg).

Sozialismus und Wissenschaft.

Gibt es wissenschaftlichen Sozialismus, d. h. kann man die Voraussetzungen und Forderungen einer sozialistisch gerichteten Politik auch theoretisch begründen? Auf diese Frage sind sehr verschiedene Antworten gegeben worden.

Die moderne Sozialdemokratie, soweit sie sich auf Karl Marx stützt, legt bekanntlich grossen Wert darauf, zu zeigen, dass ihr Programm ein Ergebnis wissenschaftlicher Ueberlegungen sei. Darauf hat z. B. kürzlich Eduard Bernstein in dieser Zeitschrift hingewiesen. Mit Nachdruck hebt das schon Friedrich Engels hervor. Nach ihm gab es zwar Sozialismus auch vor Marx. Aber er blieb „utopisch" und schwebte theoretisch haltlos in der Luft. Erst die Lehren des „Kapitals" führten von der Utopie zur Wissenschaft, und deshalb ist der Marxismus dem Sozialismus der früheren Zeiten prinzipiell überlegen. Er verdankt das hauptsächlich der Mehrwertstheorie und der sogenannten materialistischen Geschichtsauffassung. Danach wäre der wissenschaftliche Sozialismus auf eine rein naturalistische Philosophie aufgebaut und besonders dadurch gekennzeichnet, dass er jedes ethische Fundament für seine politischen Forderungen ablehnt.

Solchen Ueberzeugungen tritt eine andere Meinung schroff entgegen. Nach ihr lassen sich politische Programm überhaupt nicht theoretisch begründen, falls man alle ethischen Momente aus der Wissenschaft ausschliessen will. Doch kann auch diese Ansicht zwei entgegengesetzte Formen annehmen. Der Sozialismus, sagen die einen, bedeutet stets eine Bewegung zu einer gesellschaftlichen Ordnung hin, die sein *soll*, ist also von Interessen geleitet oder wird von Idealen einer Partei getragen. Die *Wissenschaft* muss im Unterschied hiervon tendenzlos sein und darf als Erkenntnis der Tatsachen, insbesondere des naturnotwendigen Zusammenhanges der gesellschaftlichen Vorgänge, keiner Partei angehören. Solange man daher unter Sozialismus ein politisches Programm versteht, kann es wissenschaftlichen Sozialismus nicht geben. Für diese Ansicht hat man sich auch auf die Unterscheidung berufen, die Kant zwischen quaestio juris und quaestio facti macht. Andererseits haben aber gerade Vertreter der Kantischen Philosophie einen engen Zusammenhang zwischen Sozialismus und Wissenschaft behauptet. Sie sehen nämlich in der Ethik Kants eine Lehre, die wie jede andere Theorie

中澤臨川著

電子說から見た世界

◇四六版上製函入◇ 定價金壹圓八拾錢 ◇送料金拾五錢◇

臨川の論壇に於ける盛名は誰知らぬものもない、しかも彼の志業は又別天地を有す、彼は本來東大工科の出、本書は彼が生涯中の最大快心の作と稱せらるる電子說より見たる世界觀の長篇を收む。詩より科學に入り美文を以つて理學を說きたるは本書を以つて嚆矢とす、量子說、相對性、原子、電子論、熱、エネルギー、X光線、飛動說、等が何人にも了解さるる樣に說きたる有益な書、本書は「新社會の基礎」が一ケ年半も品切であつたのを改訂したものだ。

東京芝區愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

理學博士石原純著

アインスタインと相對性理論

◇四六版上製函入◇ 定價金貳圓貳拾錢 送料金拾七錢◇

增補廿五版

ニユートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された。本書を一讀せずして教育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

東京芝區愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

長編小説

赭土に芽ぐむもの

中西伊之助著

◇定價金參圓◇
◇送料金拾九錢◇

近來簇出した小説の中で、尤も深刻を極め、そして讀みごたへのあつたのは本書であるとは堺さんも、荒畑寒村さんも、武林無想庵さんも均しくそして力強く明言されて居ます。本社も固く左様に信じています。單に朝鮮人の内面生活を窺はんとする人にも唯一の良書であることを推薦します。

◇東京芝愛宕下町一ノ一◇
改造社
◇振替東京八四〇二番◇

GK問答

桑木嚴翼

G　珍客の御入來だね。如何なる風の吹き廻しかとでも言ひたくなる。

K　是は御挨拶だ。丁度其樣な挨拶を獨逸で或る學者から言はれて、たゞさへ口綱を諸持ちにしなければならない言葉が、益ゝ出なくなつて困つたことを憶ひ出した。然し今日は御互ひに日本語で話すのだから別に怯むことはない。實は雜誌の原稿に困つて智慧を借りに來たのサ。

G　すると談話筆記といふ奴かね。其れとも御互の無駄口を其儘何々問答とやるのかね。僕も昔しAB問答といふのを二三度書いたことがあるが、何だか近頃よく似た形の文章を見ることだ。

K　其れが君のを眞似たのだなどゝ自惚れたなら大間違ひだ。あれを書くと、誰でも大抵同じやうな筆致になるものと見える。僕の知つて居る所では、故上田氏の「獨語と對話」や鷗外博士の文章などが嚆矢らしいやうだ。

G　確かにあの文體が傳はつて居るやうだ。然しもつと詮索したら、必しも其の二家に限つたこともあるまい。問答體の意見は他の文豪も屢書いて居たやうだ。然も問答體で哲學を說いた御手本には、例のプラトーン大聖が控へて居るぢやないか。近代で例を取つても、ジオルダノ・ブルーノの諸著は思想もプラトーの衣鉢を傳へた所があるが、形式まで其の通りだ。デカルトは獨白で自分の思想を物語つたが、バークレーはハイラスとフイロナスとの二人物を點出して、物質論者と心靈論者とを對論せしめた。ライプニッツがロックの新著を批評する時には、又、其書を讀む者と話す者との對話の形を用ゐた。ヤコビがヒュームの說を紹介する時にも同樣の形式により、シエリングはブルーノを中心人

物として久し振りに希臘古典風の對話を書いた。堂々たる哲學論さへ對話で記るせるものなら、時事の論議などに此形式が適しないこともあるまい。

K　相變らず講釋が出て來たね。左樣に古歌を引き給はゞ何とて僧正遍昭は……といふ格で、僕も一つ增補をして見よう。プラトーンの對話篇を絕好文辭と賞めるならば、佛經の中には同樣の賞賛を値するものが少なくないだらう。否、對話で意見を述べたのは論語が其一例だが、あれは斷片的で構想がないと言へるかも知れないが、孟子に至つては梁惠王だとか齊宣王だとかを相手にして明かに戲曲的場面に富んで居る。……

G　まあ待ち給へ。君はまさか對話文の考証にやつて來たのぢやあるまい。何を題目にして僕の談話を求めようといふのだ。

K　成程是は少々脫線の氣味かね。然し必ずしも然らずサ。我々はよく「知の知」、即ち知の對象を外に求めずして内に求めることが最も深い知だと聞かされて居る。然らば即ち「對話の對話」は最も深い對話といはざるを得ずとなるだらう。」

G　其んな論理主義張りの理屈はまあ拔きにして早く本文に取り掛つたらいゝぢやないか。

K　別に本文も結論もない。今述べて來たことが既に本文の中なのだ。

G　すると今の人が對話で意見を述べるのがいけないとでも言はうといふのかい。

K　別に對話が不可だといふのではない。對話の形式にも既に先蹤があるならば、其を無視するのが惡いと言へるやうに、何事も自分が創めたやうに思ふのが其が即ち惡いといふのだ。

G　成程、君は稍々後進が禮を欠くことを憤慨して居たやうだが、其の不平を述べに來たのか。御尤もな感慨と言ひたいが、其がつまり時勢の轉移を知らないのだらう。君が先蹤の有無を檢べて居る間に、今の若い人は用捨なく先輩を葬ることを考へて居るのだ。

K　然し又案外若い人が保守的な場合もあるね。よく或人々は、現代の民衆が保守的で、新思想を壓迫することは又

て官憲に勝る、といつて居るが、實際今の若い人は斷乎として改革を實行する人に反對する傾きもある。學校などで其の眞の發達の爲に多少の情實を無視して淘汰を實行する人があると、其に感謝すべき學生の側から反て反對が出て來るやうになる。其故に民衆は、學校に於ても、反て先驅者を迫害する傾きがある。

G　ハヽア、其れで例の文化主義に對する民衆主義の嘲罵を受けた鬱憤を洩さうといふのかい。

K　イヤ僕は其んな事に拘泥しちや居ない積りだ。全體文化主義なんて言葉は僕などが言ひ出したには違ひないが、別に其んなに是非主張しようと思つて居るのではない。

G　それ、其れが悪いのだ。其が不徹底だと言はれる所なのだ。もつと感激の生活を送り給へ。

K　フン、昔の哲人の言つた「美しい狂氣」にでもなれといふのかい。然しさういふ君に其れだけの熱があるかね。此歳になつて情熱でも無いぢやないか。人が文化を嫌ふなら、其を言はないぢやまでサ。然しまさか、文化其ものを嫌ひな人もあるまいと思つて居ると、案外なる哉だ、そんな贅澤な事をとか、そんな柔弱なことを、とかいふ人のあるには驚く。

G　まだ驚くのは、其が獨逸主義だとか、官僚軍閥資本家の手先に使はれるものだとか決め込んで居る人が中々多いことだ。

K　其等はまあ爲にする議論だらうから何うでもよいが、今少し專門的になると、其がヰンデルバントやリツケルトの受賣だといふ議論があることは一寸心外だ。一體全體、是等の人々が何所に文化主義なるものを說いて居たのだらう。成程、先生達は歷史哲學とか文化哲學とかいふことを說いては居る。そして僕も、其等の說が文化主義論者に影響して居ないとは言ふまい。然し、何も其れでなければ文化が說けない、といふ譯ではないぢやないか。コーエンの一派だつて文化哲學を說いて居る。文化だか文明だか知らないが、其を鼓吹する人なら、斗を以て量るべしだらう。

G　然し文化主義が文化の絕對價値などを說く所に其の特色があるのだから、其點から言へば、其が必しもヰンデルバントやリツケルトに限らないかしらぬが、とにかく批評哲學の一派に最も緣の深いものたることは疑はれないだらう。

文化主義の唱道者は必しも是等の哲學者のみを鼓吹する譯でもないが、其處に思想上の聯絡の存することを疑はれない。所が世間にはヰンデルバントとかリツケルトとかいふと、目の敵のやうに惡く言ふもの丶あるのは不思議だ。ヰンデルバントは既に沒したから、其事業は最早完結したと言つてよからうが、之を通覽すると、或は組織とか體系とかいふ點に於ては確かに十分とは言へないが、種々の示唆に富むことは承認してよい。其說を精細にして間々矛盾を指摘せんことを試みたリツケルトや、其他直接間接の學徒を輩出せしめた所に、文壇批評家などの大言壯語的罵倒を許さぬ所があらう。リツケルトも亦未た一切の問題を十分に說き盡すには至らないが、然しヰンデルバントよりは遙かに精細に時としては精細過ぎる程論證を試みて居る所に、とにかく進步發展を認められる。周密なる論理は天才的直覺を欠くやうに想はせるが、然し論理必しも平凡な知識のみではない。

K　所がリツケルトに對しては獨り直覺派ばかりが反對して居るのではない。哲學を嚴密科學として論究したいと思ふ一部の學究は、リツケルトのでもなほ論理が不徹底で分析が不十分だと考へて居る。殊に其說が自然科學や數學に關して無理會であるやうに言ふものが多い。成程彼は自然科學的概念構成の限界を論して居る。主として文化科學、文化哲學の問題を說いて居る。然し文化を說くから自然に關して知識がないと如何して斷言せられようか。數學の論理を說くことも人々の隨意である。恐らくは其方面にも、數學者以外に哲學者の力を施す場所が存して居るかも知れない。然し數學と離れた哲學の問題が無いなど丶はどうして言へるであらう。現に、少し意味は違うが、カントは極力數學と哲學とを區別して、前者の論法を後者に應用すべからざることを說いたではないか。

G　イヤ、其事は少し此場合には適しないだらう。僕は寧ろ數學を哲學者の方から研究することが、果して數學者の承認を得るやうな結果になるか、といふことを疑ふ者だが、とにかく之を一の研究とすることに異存はない。たゞ之をのみ哲學の問題と見るのは、社會問題をのみ改造哲學の對象と見るのと同樣の偏見といはねばならぬ。

K　成程、社會問題即哲學とする論者から見たら、リツケルトは抽象的で人生と沒交涉に見えるだらう。然し又現代の社會問題など丶風馬牛の態度をとる人の目には、生の哲學といふ流行思潮を論ずるやうな哲學者は一者の本分に違さ

かつたものと思はれるであらう。斯くして板挾みになることは遂に哲學者の運命なのであらうか。

G　大層歎息したものだね。若し反對に形而上學者が其の論理の精鋭を賞し、社會論者が其の思潮論を喜んだら如何であらうか。其はとにかく、對手の論者の目的が那邊に存するかを知らない批評ほど揚足取り的なものはない。其點からヰンデルバントや、溯つてカントなどの論理說が、形式主義と稱せられて內容の空疎なことの非難を受けるのも同樣の迷惑と言はねばならない。實に批評家は、其對象の中に住して論辨を試みる內在的批評をしなければならぬではないか。

K　イヤ、君も矢ツ張り歎息して居るぢやないか。又話を元に復すが、リツケルトの文化哲學歷史哲學は其原理に於て非難すべき所がないと許しても、其の結論に於て多少自國の文化や歷史を本位とするやうな傾きがあるのは、少し面白くないやうな氣がする。

G　成程歷史を個別的に說く上から、自然に各個體を本位とするやうになるであらうが、然し其場合には其個體中に普遍妥當性を具有して居るべき筈だから、無意味なショーヰニズムに陷いる譯ではあるまい。ゲーテを獨逸の理想主義哲學に結び付けたのを、世界的にするよりも狹いと見る論者があるが、然し其等は元來十九世紀初頭の理想主義に興味を有する人として已むを得ない所であらう。獨逸人がゲーテを說くと何となく獨逸主義鼓吹のやうに聞えるが、リツケルトのを其と同列に編するのは當を得ないのではあるまいか。

K　リツケルトが獨逸文化に對して如何なる偏見を有つて居るか知らないが、戰時中に公けにした『認識の對象』三版の緖言に、戰歿した少壯有爲の學者ラスクを悼む語句があつて、其れは確かにオイケンやヘツケル、ヴント等の當時發表した意見とは異なるものがあつた。然しリツケルトの事は分らないが、ヰンデルバントなどはまだ少し歐州民族を本位とする思想があつて、我々所謂有色人種には一寸氣になる文句が其の歷史哲學講義中にあつた。

G　是りや面白い。國際聯盟、軍備縮小、永久平和、あらゆる事柄に贊成して一派の論者と正反對な立場にある君が、悲憤慷慨人種平等を主張して其爲に戰を辭せさる人々の同一步調に出ようとは思はなかつた。

K　イヤ眞正に國際聯盟を欲すればこそ苟くも故なく或る國土を本位とする思想に反對したいのだ。キンデルバント等の眞意は文化なき人格の低い種族を他と同一視することの不可を說くことにあるのだから、我々としては其の點に於て、自己が文化の上から遜色なきことを示せば足りるのだ。其を其點は考へないで、或は現在の文化に貢獻し得ることを示さずしてたゞ徒らに過去の文化をのみ誇示したり、或は武力のみを振廻して恰も昔日の中亞民族のやうに誤解されるのは、愚の至りだと思つて居る。其れにつけても最大の急務は、我々が現代の文化中に生活して居る、といふことを天下に知らせたいことだ。

G　其れが例の大勢順應と大勢屈辱との區別に關する君の持論なのだらう。其れなら度々拜聽して居るからもう澤山だ。とにかく歐洲文化といふやうな言方では、我々にはまだ物足りない。それで世界文化とかたゞ文化とか言つて貰ひたいのだが、それでもまだベルグソンのやうに、今だに獨逸文化を罵倒憎惡する人が佛蘭西に多く、又其の思想を受繼ぐ人が他國にもあるのに比べれば、まだまあ廣いと言つてよいだらう。其所になると、是もやはり多少歐洲といふことに拘泥しては居るが、ロマン・ロランなどの態度は立派なものだ。然し少し前に先生が獨逸の學者に對して聯合の勸誘をしたことがあるが、其折の多數の返事によると、獨逸の學者の方では英佛等の學者の處置に對してまだ十分得心しては居ないらしい。尤も其の返事を書いた學者は、多くは昔し獨逸主義を振りかざした人のやうだから、一概に言へない所がある。とにかく學者が今だに愚圖々々言つて居るのは餘り沒分曉過ぎる。

K　近頃またアナトール・フランスが佛國民に公開狀を書いて、昔日の敵國に對して過重の賠償を求めることの不可なることを力說して居る。是は然うありさうな事で、此所哲學者の方は一體に遜色があるやうだ。然しアナトール・フランスもゲーテの文句を引用して、我々は先づ歐洲人とならなければならぬと說いて居るのは、文字通りにすると少し氣になる所がある。とにかく具眼の士は追々昔風の自國至上主義を撤回して行くから、此所へ哲學的根據を與へれば、一般的文化の絕對價値を認めるやうになるだらう。

G　今の所佛蘭西には、割合にまだ昔風の思想が勢力を行つて居るやうだが、英國は流石に自由思想の國だ。例のア

インスタインを世界に紹介したのは獨逸よりは寧ろ此國だらうから、獨逸人がシエイクスピアを眞に理會するといふ意味で我々のシエイクスピアといふ如く、英國人は我々のアインスタインといふかも知れないが、近頃では又獨逸で一方に勢力あるフツサールを招聘して講演を聽いて居るさうだ。フツサールは僕の友人の手紙によると、自分の講義を聽く者は日本人だらうが何國人だらうが、其樣な事には關心しないと言つて居るさうだ。其程世界的な人なのだから、此際英國で講演するのは最も適切であるかも知れない。戰時中にはベルグソンやブトルーなどを聘したが、今はまた獨逸學者とも早く握手する所に、其の思想の流動的な所を示して居る。

K　大層英國贔負になつたものだね。然し英國では又近頃西班牙のウナムノなどを飜譯して居るが、あの人は嘗てクルツール即ち獨逸文化だと看做して之を攻撃して居た事がある。して見ると英國には、種々の思潮があると言はなければならぬが、是が又其の大をなす所以かな。

G　成程 Mignel de Unamuno が其の書物はまだ能く讀まないが、其の Tragic Sense of Life の序文に、其人をバスク種族の面影を傳へたものと言つてエールス人と比べてあるが、愛蘭文學の次には此民族の文學が流行するのかね。サンタヤーナが英國に居る筈だが今如何して居るかしら。――イヤ話が妙な方面に外れて仕舞つた。全體何を話しに來たのだつたかね。

K　ナニも別に決つた事はないのさ。もう是れで十分だ。こゝらで御暇申すことにしよう。

彩管餘語

岸田劉生

○如實感（前號寫實の缺除及び劉生畫集所載寫實論參照）

藝術に於て、單なる如實といふ事は、それだけでは、藝術的生命を持たぬものである。といふ事は、余がしば〳〵述べたところである。

が、それは、「如實感」といふものゝ持つてゐる、藝術的なものを造り得る要素、を否定したものではない。「如實」といふ事は藝術的生命を作り出す可き一つの要素として考察する事が出來ると思ふ。

無論この場合の「如實」といふ事は、余がこれらしば〳〵述べたところの、藝術的生命ある如實感を指すものではない。（劉生畫集及藝術觀所載寫實論の項參照）そこに藝術的生命又は美のあるのは當然で、論をまたない。

余が今こゝに、美術上の一要素として考察しやうとするのは、それよりも、もう一段下の、美的内容を持たぬ、寫實的な只の如實感、本物らしい表現についてゞある。

もとより、かゝる如實感は、藝術的に見て低劣なもので、それだけでは藝術的な美を畫面に生かすどころかその反對のだるい氣持や醜い氣持を畫面に漲らす素因となる。しかし又ひるがへつてもう一度この藝術的に低劣な如實感を拾ひ上げて省察してみる時、其處に猶或る種の藝術的感銘への一要素を感じる事が出來ると思ふ。

即ち、如何にも本當らしい、本物の通りだといふ事には、何等の美的內容が加はらなくともそれだけで一つの「感じ」を持つてゐる。例へば「猫八」の樣な藝人が非常に巧妙に何か動物の聲色をつかつた場合など其處に何等の、美的要素がないにかゝはらず人は其處に或る「巧妙」といふ事に對する感銘を興す。又吾々が何か、他人の癖とか、顏形などを物眞似してみる時、もしそれがさながらにうまく行つた時、自分自身或る快感を感じる。

これ等の事は、自己又は他人の技巧の優越を意識するところから來る快感のみに止らず。「物を再現し得た。」といふ事自身が持つ、一種の魅力であると思ふ。

事實人間には「物事を再現し得た」といふ事に對して一種の魅力を感じる本能があると思ふ。

美術の上にもこの事はあるので、肖像畫などを描く場合、それが當人に似てゐなくても藝術的生命に關係がないものであるにかゝはらず、作者にとつて「似たり」といふ自覺は「似ず」といふ自覺よりも嬉しいものであるのはこの事の一例だと思ふ。

似る、似ないといふ事は、無論、その當人を主とした問題で、その描かれた人を知らなければ問題が興らない。似る似ないといふ事は、藝術的には大切な問題でないにかゝはらず、似なければ氣になる。何となく、缺陷の樣な感じがするといふのは、むしろ作畫心理の上から自然の現像であると思ふ。

近代に至つて、藝術の內容に對する意識がはつきりした結果、さういふ事がまるで問題にならぬ人もあらうが、余から見るとそれは惡い事ではないが、似ない事を氣にするといふ事よりも偉れた事ではない。

むしろ、肖像など描く場合は似る似ないを氣にかけるところに、製作上の複雜な經驗が生じる。其處に、又、「再現の藝術境」といふ樣なものが滲み出して來る。とも角もその方が自然的であつて、さういふ事をあまり枝葉視して蔑視す

るのは多少、機械的な理想論の感じがすると思ふ。とも角も肖像などの似る似ないを氣にするところには微妙な藝術家の、形に對する神經が、動いて、面白い味があると思ふ。

それならば、其處に、「似た」といふ事で伺う、確實感を、畫の上に加へる一つの要素となるといふ事は事實である。「貴人」を描いたといふ味と、單に、人物畫の美を描いたといふ味では、其處に自づとちがつた味があると思ふ。肖像畫の相似といふ事には、この、「貴人」をかいたといふ、リアルな、感じが出てゐる。

事實、我々は、そのモデルを知らない肖像畫をみても、「似て居さうだナ」といふ感じをうける事が度々ある。さういふ畫にどこか、リアルに對する觀照が鋭く、いゝ意味で、現實味が强い。ヴイヴイツドである。

これはもとより、その藝術的寫實味がもたらす嚴しさであるけれど、その藝術的寫實味を構成する要素の一つとして、「似せる」といふ神經が生きてゐる事はあらそはれない氣がする。何となれば、其處には「似てゐさうだ」といふ感じが、具象され美化されてゐるから即ち、「似顔」といふ事が持つ獨特な美術的要求の感銘である。

もとよりこの「似顔」といふ事はそれだけでは只の手巧の問題や興味で藝か、藝術的なものが加はるのであらうか。少くとも、作者の主觀上にはそれがあるのを感じる。即ち、「似た」といふ事の滿足は、その畫面に一層確實感を與へるところのものであつて、もしそれが似ない場合には、作者はどうも、その確實感の缺乏を感じ、その作の上に生んだ美が何となく、しまりが惡く、茫漠としてゐる樣な感がある。それが反對に似て來ると、その美や作の藝術的生命が一層緊密な感じがし、確實な感じがして來る。

この事は、その作の對照、（被描者）を知らぬ人にとつては、別に意義のない事かもしれないが、もし、考察してみると、强ち、意味のない事とのみは云へないものがある。

即ち、作者の主観上の、確實感は、必ずしも主観の心理上の一時的な經驗に終つて、そのまゝ消へてしまふものとのみは云へないで、そこに經驗された確實感は、その對照を知らぬ第三者にも、何等かの「感じ」で傳へられる客觀性を持つ、といふ事が云へると思ふ。

事實其處には似るといふ事を問題外にして只、藝術的生命のみを追つたものにはないところの「現實味、」深いリアールの確實さ、それへの愛、さういふ、藝術を一層確實な、現[illegible]なものにするものが加へら[illegible]ると思ふ、藝術には、超現實の感じは無論大切である。それの不足な[illegible]術は、「深」さが[illegible]い、し[illegible]、[illegible]一[illegible]であつて又藝術には、現實のもの、この世のもの、地上のものといふ、白[illegible]や生への[illegible]かな[illegible]とする と夢や幻の様に、なりたがる藝術にリアールな味を加へ、たしかにこの世界のものであるといふしつかりした感じを加へることの事については寫實論に於てくわしく述べた。

肖像畫に於ける「相似」といふ事はそれ自身藝術的な事ではないとしても、とも角、こういふ藝術的生命はないけれど、それが、藝術的な寫實味を助け、藝術的寫實によりて生かされる時、それは一つの藝術的要素となつて、藝術の上にそれ自身獨特の美術的効果の一域を持つに至る。

以上は、肖像畫に於ける「似る」といふ事について考察したのだが、この「似る」といふ事は即ち、こゝに考察するところの藝術的生命なき如實感の一つである。かくてこの肖像畫に於ける「相似」といふ事と同じ事がこの如實感の場合にも當て嵌めて云ふ事が出來る。即ち、如實感はそれ自身藝術的なものではないけれど、此處に美が加はれば、「寫實の美」「物質に即したる生命」といふものが生れるだけの、或る半藝術的な要素はある。

即ち、「再現」といふ事は、それだけでは藝術的な事ではない。しかしもしそれが深い美によつて、生かされ、その

「再現」といふ事は即ち、如實感の別名であつて、人間が如實なるもの〻、それが、藝術的でなくとも、動かされるといふのは即ち、それが再現の力を持つてゐるからである。

吾々の摸倣本能は、これを遠く、生物時代から遺傳され進化して來た自然の法則であるが、人間は、その記念欲、一時的なるものを後まで樂しみたい慾望、及び、事物と同化し、共樂したい慾望等によつて、この摸倣本能をうまく生かした。

如實感に對する吾々の感じる或る牽引にはこの再現欲、記念欲、同化欲等の摸倣本能の滿足を見出す事が出來る。

勿論、如實感が如上の如き理由から蔑視される可らざるものにしても、只それだけで終るならば畢竟、藝術的生命とは關係ないもので、むしろ、かへつて、淺薄又は低劣な感じをともないやすいものであるのは繰りかへす迄もない。

只それは、或る「如實の美」「再現の確實感の美」等を生む一つの要素であるといふ事を考察した迄である。

前號の寫實の缺除の考察に對して、その反對の一要素を抉出して考察したのである。（一九二二、五、一四）

勞農ロシア見聞記

——雜誌改造のために——

パンカースト

勞農ロシアについて、今私の思ひ出の中から浮び出るものは、立派な力强い國民が、逆境に沈みながらも、尚ほ熱心にその國を立て直さうとしてゐるあの姿である。平等の基礎の上に、——經濟的平等、社會的平等、敎育や、休憩時間や、任用その他身分についての平等の基礎の上に、新に國を建てようとしてゐる姿である。

千五百人の共産黨員が、ポーランドの戰線に向つてペトログラードを出發した時のあの光景は、最も私を感動させた事の一つである。赤色ペトログラード、これこそ革命を成就せしめたものであるが、此所から革命軍に加つた人々の數は、この都市に割當てられた兵士の數を遙に超えてゐた。この千五百の人追徴、それは一般の人民からではなくて、ペトログラード共産黨の黨員から召集されたのであるから、この頑剛な人々の集團から、非常に多數を奪ひ去つたわけになるのである。既に今まで幾度も幾度も、黨員の中の一番强く一番勇敢な人々は戰線に派遣せられ、靑年は丁年に達するや否や戰場に送り出されたのである。

その日、ペトログラードを出發した共産黨員は、十中の八九は死なければならないものと覺悟をきめてゐた。實際、生きて歸るものは殆んどないであらう、彼等は一番危險の多い所を引き受けて、全軍を引率し、激勵しようとするのであるから。彼等に別れを告げるために、ペトログラードの中心では示威運動が行はれた、勞働者は工場から樂隊と共に旗をふりかざしながら行列した。そして赤い旗が窓に掲げられて、そこから群集に對して演說する者もあつた。それから兵隊が、その後から一般の人々があちらこちらを、ぐるぐると歩き廻つた。これから川

かけて行く若い兵士たちの側には母や、妻や、戀人が花を持つて歩いて行つた。一人として涙を流すものもなく、總ての人は歡喜に滿ちてゐるように輝きを見せた。しかし婦人たちの瞼は赤く膨れてゐた。今こそ勞働者の共和國に對する彼等の義務と誇りの氣持が、涙を乾かしてはゐるけれど、この一夜をまんぢりともせずに泣き明かしたのであらう。

私の側にはリガから來た一人の婦人がゐた。この女は敵軍の幾度も引續いての來襲をうけてから、あの戰禍に荒され果てた町を脫れ去つて、ペトログラードに來たのであつた。兵隊も、その側に附添ふ婦人たちも、朗かな音樂につれて行き過ぎてしまつた時、私は少からず興奮してこの女に尋ねた。

「また餘分の兵隊を派遣するといふ命令が下つても、人民はちつとも不平をいひませんか。」

彼女はかう答へた。

「たとへ私等が、不平を云つても、私たちはそれに耳を傾けはしない、兵士たちは何處へでも喜んで出て行く、誰のために戰ふのですもの。勞農ロシアの兵隊ほど強い兵隊はない、彼等は自分の愛する主張のために戰ふのだから、資本主義や皇帝(ツァー)のために戰ひに出て行つた昔の兵隊とは異ふ、しかしあの人たちが出て行くのを見て泣かない女は一人もない、私は主義の讃者でもなく、黨員でもないが、資本主義が永續出來ないことや、共產主義が世界△△△△△△ないといふことは、私にもよく了解される。資本家に何故それと戰ふのであらう。進步に對してこのやうな戰ひを續けるのは殘酷である、――この「×××」ことの出來ない「××」に對して。ロシアの青年たちを、進步のために「×××××××」といふことは殘酷だ。」

× × × × × ×

當時ペトログラードの市は非常に物資が缺乏してゐた。ライ麥のパンが常食で、それに副食物も極めて少しきりなかつた。牛乳は殊に得難かつた。しかし彼等は、私が一所に長年住んでゐた東ロンドンの人々より健康さうに見えた。ムルマンスクや、北ロシアの漁村の村々の住民は常に粗末な食物で、魚とパンと、牛[illegible]である。夏[illegible]のこと、夜[illegible]で耀かしい日が照りつけるのに冬は殆んど絕え間なく長い夜が續いて、そして北極地方の寒さが襲つてくるといふ酷い氣候である。それにも拘らずこの邊陲の不毛の荒野に住む人々は、非常に健康さうに見え、子供たちは肥えて元氣であつた。この北海岸の沖で、私たちの乘つてゐた木の葉のやうな小さな船は、嵐のために、一番近い港を求めて避難しなければならなくなつ

た。私たちの上陸したのはこのような小さな村の一つであつた。私たち一行五人は第三インターナショナル大會から歸國する途中であつたが、思ひがけなく到着したことではあり、知人もないので、ソヴイエットの大臣の家へ招ぜられた。無線電信局の赤軍の兵士たちは、共産黨代表の到着を聞いて赤旗を掲げ、またその次の日晩餐を差上げたいと招待して來た。

これは、英國の遠征隊が此所に侵入してゐた間に、分捕つたものだと話しながら、私たちに、英國の罐詰の牛肉や、白い麥粉で作つた菓子を饗應した。水兵の中には英國や佛國の軍服を着てゐる者もあつた。實際、北部ロシア一帶に、ロシアの陸兵や水兵や、また大勢の市民たちが、聯合軍の服を着てゐた。人々はこんな戰利品について誇らしげに冗談を云ひあつてゐた。

北ロシアで、私たちは資本主義の軍隊との戰についていろいろな話を聞いた。

このうへなく粗末な武裝で、實際、殆んど武器なしで、農民は「谷間の狼の如く」勇敢に戰つた。橋梁を破壞したり、聯合軍を沼澤地に誘ひ入れたり、すべて、その地の利に就ての智識と勇氣と絕望とが、郷土と自由とを脅される人々に對して、執らしめるような、あらゆる戰術を用ひて戰つた。農民たちの日用品も、武器も、主として聯合國の侵入軍の武器や軍需品を分捕することによつて得られた。

ペトログラードの人々に節約を強いてゐる物資の缺乏は、モスコーではそれほどでも無く見えた。私たち第三インターナショナル大會への代表者たちは充分な食物を得た。尤も私たちの分前は一般の人々のより多かつたには違ひないけれど。

コロムナといふのはモスコーから六十哩ほど離れた小さな田舍町で、大きな軍需品供給の中心であるが、そこには食糧が山ほど積まれてあつた。私たちは町の食堂で晝食をとつたが、スープと鹽魚、肉、カシヤ、パン、新しい胡瓜を出された。林檎もトマトも新鮮な野菜も澤山あるし、牛乳や卵までも食べることが出來るほど贅澤であつた。都會でも、小さな町々でも、人々の服裝は、一體に驚くほど善かつた。夏であつたので男も女も、明るい色の木綿の上衣をゆるやかに着てゐた。見渡したところ、皆、質素ではあるけれど氣持よく優雅な着物を着てゐるやうに見えた。第三インターナショナルのための大會のときに、總ての聽衆は男も女も、ロシアの上衣を着て、婦人たちは殆んど皆、頭被をつけずにゐるか、色のあるハンケチを頭のまはりに縛つて端をひらひらさせてゐた。所が劇場では昔の富裕な貴族や富豪の婦人たちが立派な着物を着て寶石を着けてゐるのが見えた。ロシアの統治者階級が所有權を剝奪されてから、非

es werden. Wir tragen unseren Freibrief tief in unserer Brust. Doch wenn wir sagen: **wir sind unser Eigentum**, so nehmen wir damit ein zweifaches an, einen Eigentümer und ein Eigentum, und das kann für Fichte nur bedeuten: das reine Ich in uns, die Vernunft ist Herr unserer Sinnlichkeit, d. h. aller unserer geistigen und körperlichen Kräfte. Die Vernunft darf sie als Mittel zu ihren Zwecken gebrauchen. In diesem Sinne sind sie ihr „Eigentum," und damit ist der Eigentumsbegriff für das Leben der *Personen* aus Fichtes philosophischem Grundprinzipien eindeutig bestimmt.

Aber das genügt für sich allein noch nicht. Ausser den Personen gibt es *Sachen*, d. h. um uns herum sind Dinge, die nicht ihr eigenes Eigentum sein können, da sie nicht frei sind wie wir selber. Diese Sachen aber sind *ursprünglich* auch nicht unser Eigentum, denn sie gehören nicht unmittelbar zu unserem sinnlichen Ich. Trotzdem dürfen wir das, was überhaupt noch nicht Eigentum ist, als Mittel für vernünftige Zwecke verwenden, und wenn wir einmal den Dingen die Form eines Mittels für unsere Zwecke gegeben haben, dann darf kein anderes sie gebrauchen. Er würde nämlich dabei die Wirkung unserer Kräfte, die unser Eigentum sind, für sich verwenden, und das verbietet das Sittengesetz. Die freie Wirkung irgend eines freien Wesens zu *stören*, kann nicht erlaubt sein. Daraus aber folgt, wir haben das Recht, jeden anderen von dem Gebrauch einer Sache auszuschliessen, die wir durch unsere Kräfte gebildet, oder der wir unsere Form gegeben haben, und dieses Recht heisst bei Sachen das Eigentum. So wird der Eingentumsbegriff Fichtes vollständig.

Von dem Gedanken, dass Eigentum allein durch Tätigkeit oder *Arbeit* begründet ist und insofern soviel wie ein Recht auf Tätigkeit oder Arbeit an einer Sache bedeutet, ergibt sich dann auch das, was Fichte über das Grundeigentum lehrt. Man meint, dass niemand ursprünglich Eigentümer des Landes sein könne, und dass daher jeder das Recht am Boden vom Staate haben müsse. Doch mit dem Acker steht es nicht anders als mit aller Materie überhaupt. Die rohe, unbearbeitete Materie gehört noch Keinem. Wir haben auf sie nur ein Zueignungsrecht, kein Eigentumsrecht, denn dieses kann ja immer nur auf eine durch unsere freie Tätigkeit geformte Materie bestehen. Daher ist es nach Fichte falsch, dass alle Menschen auf einen gleichen Teil des Landes rechtlichen Anspruch besitzen, und dass der Erdboden zu gleichen Portionen an alle zu verteilen sei. Insofern erst durch Zueigung vermittels unserer Arbeit Eigentum entsteht, darf der Mensch, welcher mehr arbeitet, auch mehr besitzen, und der, welcher nicht arbeitet, besitzt rechtlich garnichts. Nicht der Staat, sondern die Vernunft oder die Freiheit des Menschen ist die Quelle des Eigentums. Sogar der Umstand, dass wir im Staate geboren werden, in dem es ausser Luft und Licht kaum noch unbearbeitete rohe Materie gibt, vermag daran nichts zu ändern, denn es ist ja nicht der Staat, der alles schon in

sinnlichen Wesen macht, nicht selbst Zweck, sondern blosses Mittel sein. Es darf uns nie bestimmen, sondern soll durch die Vernunft in uns bestimmt werden.

Hieraus jedoch entsteht notwendig ein Kampf der sittlichen Vernunft mit unserer Sinnlichkeit, und in ihm muss zweierlei geschehen, damit der Sinn unseres Lebens sich erfüll. Die Sinnlichkeit muss erstens bezähmt und unterjocht werden, da sie nicht zu gebieten, sondern zu dienen hat. Aber das allein genügt nicht. Sie soll ausserdem ein geschickter, tauglicher Diener, sie soll zu gebrauchen sein, und dazu gehört, dass man all ihre Kräfte aufsuche, sie auf alle Art bilde und sie ins Unendliche erhöhe und verstärk. Hieraus entsteht der Gedanke einer *Kultur der Sinnlichkeit*, in der Natur und Freiheit zusammengeben, und sie ist der einzig mögliche Endzweck des Menschen, insoweit er ein Teil der Sinnenwelt ist. Alles bloss leidende Verhalten ist das gerade Gegenteil der Kultur. Niemand *wird* kultiviert, sagt Fichte, sondern jeder hat sich selbst zu kultivieren. Bildung geschicht immer durch Selbsttätigkeit und zweckt auf Selbsttätigkeit ab. Wir verstehen: dieses Kulturideal folgt notwendig aus Fichtes Philosophie der Tat, wie er sie im unmittelbaren Anschluss an Kants transcendentalen Idealismus und die Lehre von der sittlichen Autonomie entwickelt hat. Von ihr aus nimmt Fichte nun die Fragen der Politik in Angriff. Kultur der Sinnlichkeit zur Freiheit ist der einzige Sinn auch des Werdeganges der *Staaten*, und von hier aus muss deshalb das Recht der Verfassungsänderung beurteilt werden. Wo der Zweck der freien Selbstbestimmung unerreicht bleibt, sind die Staaten so zu entwickeln, dass sie zu diesem Zwecke taugen. Unveränderliches wäre der härteste Widerspruch gegen den Geist der Menschheit. Der Tiber baut heute, wie seine Vorfahren vor 1000 Jahren gebaut haben. Der Mensch dagegen ist nur dadurch Mensch, das heißt ein frei tätiges Wesen, dass er fortschreitet zu dem Ziel der absoluten Selbstbestimmung durch immer vollkommenere Staatsformen hindurch. Droht eine Verfassung, uns bei einem solchen Streben zu hemmen, so muss sie geändert werden. Das folgt notwendig aus dem allgemeinen Begriff der Kultur als dem Wehrhaftmachen der Sinnlichkeit zum Zweck der Freiheit.

Fichtes Begriff des Eigentums.

Wie wendet nun Fichte diese allgemeinen Grundsätze auf das *wirtschaftliche* Leben an? Das ist die für uns entscheidende Frage. Auf ökonomische Probleme wird er durch den Begriff des Eigentums geführt. Was Eigentum ist, muss aus den letzten Prinzipien der Philosophie des freien Tuns verstanden werden, und indem Fichte dies versucht, kommt er zu den Gedanken, in denen mehr als anderswo seine sozialphilosophische Eigenart sich ausprägt.

Seinen Ausgangspunkt nimmt er auch hier wieder vom reinen Ich oder von der freien Persönlichkeit. Ursprünglich, sagt er, sind wir selbst unser Eigentum. Niemand ist unser Herr, und niemand kann

Anschluss an die Kantische Philosophie, zur französischen Revolution Stellung zu nehmen. Um diese Probleme philosophisch behandeln zu können, entwickelte er zunächst seinen allgemeinen Begriff der *Kultur*. Damit schlug er die Brücke vom reinen oder vernünftigen Ich zum empirischen oder sinnlichen Menschen, der sich praktisch in der Sinnenwelt betätigen will. Von hier aus kam er dann auf das wirtschaftliche Leben im besonderen, und zwar betrachtete er es unter dem Gesichtspunkt, dass der empirische Mensch, im sinnlich wirken zu können, des *Eigentums* bedarf. Was ist in Wahrheit Eigentum? Und was folgt aus diesem Begriff für die Aufgaben des Staates gegenüber dem ökonomischen Leben der Gesellschaft? Sobald man auf diese Zusammenhänge in Fichtes erster politischer Schrift achtet, tritt die Verbindung von Philosophie und Sozialismus bei ihm vielleicht noch deutlicher zutage als in den eigentlich sozialistischen Werken, in der „Grundlage des Naturrechts" von 1796 und in dem „geschlossenen Handelsstaat" von 1800. Wir wollen uns daher, um das Grundprinzip klarzulegen, allein an das Buch über die französische Revolution halten. Das empfiehlt sich umsomehr, als diese Schrift in den meisten Darstellungen nicht genug beachtet worden ist, wo es galt, den letzten theoretischen Ursprung von Fichtes Sozialismus aufzuzeigen. Die unmittelbare Verknüpfung mit den Lehren Kants wird hier besonders deutlich.

Fichtes Begriff der Kultur.

Die Untersuchung über die französische Revolution will nicht geschichtlich sein. Das grosse politische Ereignis, welches damals fast alle denkenden Köpfe in Europa beschäftigte, bedeutet für Fichte ein reiches Gemälde über den Text: Menschenrecht und Menschenwert, und vor allem interessiert ihn die Frage, ob ein Volk das Recht hat, seine Staatsverfassung abzuändern. Dies Problem hat ihn zugleich auf seinen Begriff des Eigentums und damit auf den Weg zum Sozialismus geführt. Aus welchem Grundsatz ist eine Verfassungsänderung zu beurteilen?

Schon Kant erklärte, er sei höchst verwerflich, die Gesetze über das, was ich tun soll, von demjenigen her zu nehmen oder dadurch einschränken zu wollen, was getan wird. Ebenso kann Fichte an eine Entscheidung aus den bestehenden geschichtlichen Verhältnissen nicht denken. Deshalb stellt er einen allgemeinen Begriff der Kultur auf, aus dem sich ein Urteil über das besondere Kulturproblem der französischen Revolution gewinnen lässt. Will er seinen philosophischen Grundsätzen treu bleiben, so muss er die Kultur unter dem Gesichtspunkt ihrer Bedeutung für den von ihm erkannten Sinn des menschlichen Lebens überhaupt bringen, und dann darf für ihn Kultur nichts anderes sein als Uebung aller unserer Kräfte auf den Zweck der völligen *Freiheit* der Unabhängigkeit von allem, was nicht wir selbst, das heißt unser reines, vernünftiges Selbst ist. Durch Kants Sittengesetz wird uns unser wahrer letzter Endzweck bestimmt, und daher kann alles in uns, was uns zu

dieses mehr als ein empirisches, individuelles Subjekt, das heisst, soweit es vernünftig oder, wie Fichte sagt, „reines Ich" ist. Infolgedessen beherrscht die Natur das vernünftige Subjekt so wenig, daß das reine Ich vielmehr als freier Herrscher über das Naturgeschehn angesehen werden muss. In dieser Weise verstand Fichte die theoretische Seite der Kantischen Philosophie, und bereits damit war für ihn die Freiheit gerettet, die er brauchte, um auch als Denker ein tätiger Mensch zu bleiben. Das Denken schloss jetzt für ihn das Handeln nicht mehr wie früher aus, sondern es zeigte ihm im Gegenteil, warum es ohne Freiheit nicht einmal ein Denken gibt.

Aber das war noch nicht alles. Die durch Kant gesicherte Freiheit des reinen Ich blieb nicht leer. Wir haben nicht allein Vorstellungen, sonnern ein Pflichtbewusstsein, und das versichert uns unserer positiven Bestimmung. Es sagt uns, was wir tun *sollen*, und es bringt damit das Denken, welches die Pflicht in dieser ihrer sittlich-vernünftigen Bedeutung erkannt hat, vollends zur Einheit mit unserer Tätigkeit. Die Stimme des Gewissens wird so zum ruhenden Pol in der Erscheinungen Flucht. Die Welt muss im tiefsten Grunde als frei und sittlich-vernünftig gelten, denn sie ist das Produkt der autonomen, sich selbst das Gesetz gebenden Handlung. So geht das freie und vernünftige Tun dem Kausal bedingten Sein der Natur voran. Das letzte Weltprinzip ist die autonome Tathandlung, und das sittlich freie Ich wird zum Absoluten.

Indem Fichte Kant so auffasste, verschwindet für ihn der Gegensatz von Denken und Handeln, der ihn früher von der Philosophie entfernt hatte, bis auf den letzten Rest. Gerade das theoretische Denken sagt ihm jetzt, daß in der sich selbst das Gesetz gebenden, autonomen Tätigkeit der theoretisch ebenso wie praktisch unantastbare Sinn des Lebens liegt. So konnte Fichte zu dem werden, was ihn in der Entwicklung der Philosophie einzig macht: zum handelnden Denker, zum erkennenden Täter, zu einem Philosophen, bei dem Kontemplation und Aktivität zusammenfallen, der seine Theorie zugleich praktisch lebt.

Nachdem der Grund hierfür klar ist, suchen wir nun zu verstehen, wie Fichte aus seiner Philosophie der Tat Folgerungen für das politische Leben im allgemeinen und für das wirtschaftliche Leben im besonderen zieht. Um die Sache bei ihrer Wurzel zu fassen, werfen wir einen Blick auf das Buch, in dem Fichte zum erstenmal politische Probleme behandelte. Er schrieb es im Jahre 1793, bald nachdem er die Kantische Philosophie kennen gelernt hatte, und er nannte es: Beiträge zur Berichtigung der Urteile des Publikums über die französische Revolution. Zwar kann man diese Schrift noch nicht eigentlich sozialistisch nennen, aber sie enthält bereits die Begriffe, die Fichte wenige Jahre darauf zum Sozialismus hinführten, und gerade dadurch wird deutlich, welches die letzten theoretisch-philosophischen *Grundlagen* seiner später ausgeführten sozialistischen Gedanken sind.

Fichte versuchte, im unmittelbaren

und Handeln. Ergeben sich aus rein wissenschaftlichen Sätzen überhaupt Folgerungen für unser Tun? Hat unser Denken auf unser Handeln einen notwendigen Einfluss? Die Art, wie Kants Lehre auf Fichtes Leben wirkte, ist mit Rücksicht auf solche Probleme sehr bezeichnend.

Der Schöpfer der „Wissenschaftslehre" war nach vieljährigem Studium zu der Ueberzeugung gelangt, dass er zu einem Gelehrten von Fach so wenig Geschick wie möglich habe, und besonders die abstrakte Philosophie schien ihm unsympatisch. „Ich will nicht denken, ich will handeln," schrieb er noch als achtundzwanzigjähriger Mann. Das Denken hatte ihn zum Handeln in Gegensatz gebracht, sodass er das theoretische Verhalten mit dem praktischen für unvereinbar hielt. Woran lag das? Die Philosophie, die er kannte, betrachtete das Subjekt mit Einschluss des tätigen Menschen als Objekt unter Objekten, das heisst: als unselbständiges Glied in der lückenlosen Kette von Ursachen und Wirkungen. So war das Ich von aussen her restlos bestimmt. Freiheit konnte es danach nirgends in der Welt geben, und das bedeutete für Fichte, dass Handeln im eigentlichen Sinne des Wortes für den konsequent denkenden Menschen ganz unmöglich sei. Der Mann der Wissenschaft musste sich darauf beschränken, untätig dem Ablauf der Natur zuzusehen. Jeder andere Sinn des Lebens war für ihn vernichtet. So blieb Fichte nur die Wahl zwischen dem Denken und dem Handeln, und da es ihm vor allem darauf ankam, in der Welt zu wirken, sties ihn das Denken, welches seine Aktivität zu hemmen drohte, notwendig ab.

Doch seine Stellung zur Wissenschaft änderte sich von Grund aus, sobald er Kant gelesen hatte. Jetzt wollte er vor allem Denker sein. Wie war das möglich? Die Philosophie, die er nun kennen lernte, leistete zweierlei. Sie erlöste ihn zunächst von dem Gedanken an eine Einzwängung des Ich in die Welt der Objekte, von der unerträglichen Vorstellung, daß der Mensch nichts anderes als ein Spielball blinder Naturkräfte sei, und sie wies ausserdem auf ein Ziel hin, in dessen Dienst er nun auch, ja gerade als Philosoph und Denker seine frei gewordene Tätigkeit stellen konnte. Es kommt hier nicht darauf an, die Begründung kennen zu lernen, die Kant seinen Lehren gegeben hat. Es genügt, dass Fichte sie für richtig hielt, und wir brauchen sie uns so weit zu vergegenwärtigen, als nötig ist, um zu verstehen, weshalb Fichte aus ihnen sozialistische Konsequenzen zog.

Die Möglichkeit, den Menschen für frei zu halten, gewinnt Kant durch eine Theorie des Erkennens. Sein transcendentaler Idealismus zeigt, daß die Natur nicht ein für sich bestehendes, absolutes Sein ist, sondern in gewisser Hinsicht als abhängig vom Ich gedacht werden muss, und dass wir schon deshalb nicht zu fürchten brauchen, der Kausalzusammenhang vermöge das Subjekt völlig in Fesseln zu schlagen. Die Natur wird zur „Vorstellung". Nicht ihr besonderer Inhalt, wohl aber ihre allgemeinen Formen, zumal ihre Gesetzlichkeit, ruhen im Ich, soweit

über den Parteien steht, und sie finden in ihr die Basis einer wissenschaftlich-sozialistischen Politik. Hermann Cohen z. B. bezeichnet Kant als den wahren und wirklichen Urheber des deutschen Sozialismus. Dementsprechend gibt es eine Anzahl von Kantianern, welche auf Kants Moralphilosophie auch die sozialdemokratische Politik stützen und so zur Ablehnung der ethischen Begründung des Sozialismus bei ihren streng marxistisch gesinnten Parteigenossen in Gegensatz kommen.

Die folgenden Ausführungen beabsichtigen nicht, diese Streitfragen zu entscheiden. Sie beschäftigen sich vielmehr mit der Tatsache, dass schon der deutsche Philosoph J. G. Fichte von dem neuerdings mehrere wichtige Schriften von T. Satake in die japanische Sprache übersetzt sind, auch als Philosoph ausdrücklich sozialistische Ansichten vertreten hat und dabei der Überzeugung war, nur Konsequenzen aus seinen wissenschaftlichen Theorien zu entwickeln. Wie sieht die Philosophie aus, die Fichte lehrt, und wie kam er von ihr zum Sozialismus? Besteht bei ihm zwischen Wissenschaft und Politik in Wahrheit ein notwendiger Zusammenhang?

Um hierüber Klarheit zu gewinnen, braucht man nicht alle Einzelheiten der Gedanken Fichtes zu kennen, sondern kann sich auf das allgemeine Prinzip beschränken, mit Hilfe dessen er seine sozialistische Staatslehre philosophisch rechtfertigt. Einen Zusammenhang zwischen Sozialismus und Wissenschaft wird man bei diesem Philosophen nicht leugnen. Zwar besass er keine „sozialistische Weltanschauung“ wie viele unter den Sozialisten unserer Zeit. Sein sozialistisches Hauptwerk, der **geschlossene Handelsstaat**, ist von ihm ausdrücklich als *Anhang* zur Rechtsphilosophie bezeichnet worden, und niemals hätte er den Sozialismus in das Zentrum seines Systems gestellt. Die sozialistische Politik musste ein blosser Anhang bleiben. Aber sie folgt darum bei ihm nicht weniger aus wissenschaftlichen Grundsätzen, und sie lässt sich auf keinen Fall als eine durch aussertheoretische Interessen geleitete Parteinahme verstehen. Hat man doch gegen Fichte geradezu den Vorwurf erhoben, dass er zu seiner sozialistischen Forderung des „Rechtes auf Arbeit“ mehr auf dem Wege logisch-naturrechtlicher Deduktion als durch eine Reflexion auf die realen wirtschaftlichen Verhältnisse gelangt sei. Gerade dieser Umstand macht ihn interessant als Beispiel für die Erörterung des Verhältnisses von Sozialismus und Wissenschaft und legt die Frage nahe, welche Begriffe es sind, die bei ihm die Verbindung zwischen reiner Theorie und sozialpolitischen Forderungen herstellen.

Fichte und Kant.

Das allgemeinste Prinzip, das Fichtes Denken beherrscht, glaubte er, Kant zu verdanken. Erst durch den Kritizismus wurde er zum Philosophen, und schon dabei tritt ein für uns wichtiger Zug seines Denkens zutage. Das Problem des Verhältnisses von Wissenschaft und Sozialismus bildet einen besonderen Fall der allgemeinen Frage nach dem Verhältnis von Theorie und Praxis oder von Denken

Die philosophischen Grundlagen von Fichtes Sozialismus.

Von Heinrich Rickert (Heidelberg).

Sozialismus und Wissenschaft.

Gibt es wissenschaftlichen Sozialismus, d. h. kann man die Voraussetzungen und Forderungen einer sozialistisch gerichteten Politik auch theoretisch begründen? Auf diese Frage sind sehr verschiedene Antworten gegeben worden.

Die moderne Sozialdemokratie, soweit sie sich auf Karl Marx stützt, legt bekanntlich grossen Wert darauf, zu zeigen, dass ihr Programm ein Ergebnis wissenschaftlicher Ueberlegungen sei. Darauf hat z. B. kürzlich Eduard Bernstein in dieser Zeitschrift hingewiesen. Mit Nachdruck hebt das schon Friedrich Engels hervor. Nach ihm gab es zwar Sozialismus auch vor Marx. Aber er blieb „utopisch" und schwebte theoretisch haltlos in der Luft. Erst die Lehren des „Kapitals" führten von der Utopie zur Wissenschaft, und deshalb ist der Marxismus dem Sozialismus der früheren Zeiten prinzipiell überlegen. Er verdankt das hauptsächlich der Mehrwertstheorie und der sogenannten materialistischen Geschichtsauffassung. Danach wäre der wissenschaftliche Sozialismus auf eine rein naturalistische Philosophie aufgebaut und besonders dadurch gekennzeichnet, dass er jedes ethische Fundament für seine politischen Forderungen ablehnt.

Solchen Ueberzeugungen tritt eine andere Meinung schroff entgegen. Nach ihr lassen sich politische Programm überhaupt nicht theoretisch begründen, falls man alle ethischen Momente aus der Wissenschaft ausschliessen will. Doch kann auch diese Ansicht zwei entgegengesetzte Formen annehmen. Der Sozialismus, sagen die einen, bedeutet stets eine Bewegung zu einer gesellschaftlichen Ordnung hin, die sein *soll*, ist also von Interessen geleitet oder wird von Idealen einer Partei getragen. Die *Wissenschaft* muss im Unterschied hiervon tendenzlos sein und darf als Erkenntnis der Tatsachen, insbesondere des naturnotwendigen Zusammenhanges der gesellschaftlichen Vorgänge, keiner Partei angehören. Solange man daher unter Sozialismus ein politisches Programm versteht, kann es wissenschaftlichen Sozialismus nicht geben. Für diese Ansicht hat man sich auch auf die Unterscheidung berufen, die Kant zwischen quaestio juris und quaestio facti macht. Andererseits haben aber gerade Vertreter der Kantischen Philosophie einen engen Zusammenhang zwischen Sozialismus und Wissenschaft behauptet. Sie sehen nämlich in der Ethik Kants eine Lehre, die wie jede andere Theorie

中澤臨川著

電子說から見た世界

◇四六版上製函入◇ 定價金壹圓八拾錢 ◇送料金拾五錢◇

臨川の論壇に於ける盛名は誰知らぬものもない、しかも彼の志業は又別天地を有す、彼は本來東大工科の出、本書は彼が生涯中の最大快心の作と稱せらるる電子說より見たる世界觀の長篇を收む。詩より科學に入り美文を以つて理學を說きたるは本書を以つて嚆矢とす、量子說、相對性、原子、電子論、熱、エネルギー、X光線、飛動說、等が何人にも了解さるる樣に說きたる有益な書、本書は「新社會の基礎」が一ケ年半も品切であつたのを改訂したものだ。

東京芝區愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

理學博士石原純著

アインスタインと相對性理論

◇四六版上製函入◇ 定價金貳圓貳拾錢 ◇送料金拾七錢◇

增補廿五版

ニュートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された。本書を一讀せずして教育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

東京芝區愛宕下町一ノ一

◇改造社◇

振替東京八四〇二番

長編小說

赭土に芽ぐむもの

中西伊之助著

◇定價金參圓◇
◇送料金拾九錢◇

近來簇出した小說の中で、尤も深刻を極め、そして讀みごたへのあつたのは本書であるとは堺さんも、荒畑寒村さんも、武林無想庵さんも均しくそして力強く明言されて居ます。本社も固く左樣に信じています。單に朝鮮人の內面生活を窺はんとする人にも唯一の良書であることを推薦します。

◇東京芝愛宕下町一ノ一◇

改造社

◇振替東京八四〇二番◇

GK問答

桑木嚴翼

G　珍客の御入來だね。如何なる風の吹き廻しかとでも言ひたくなる。

K　是は御挨拶だ。丁度其樣な挨拶を獨逸で或る學者から言はれて、たゞさへ口綱を諸持ちにしなければならない言葉が、益ゝ出なくなつて困つたことを憶ひ出した。然し今日は御互ひに日本語で話すのだから別に怯むことはない。實は雜誌の原稿に困つて智慧を借りに來たのサ。

G　すると談話筆記といふ奴かね。其れとも御互の無駄口を其儘何々問答とやるのかね。僕も昔しAB問答といふのを二三度書いたことがあるが、何だか近頃よく似た形の文章を見ることだ。

K　其れが君のを眞似たのだなど〻自惚れたなら大間違ひだ。あれを書くと、誰でも大抵同じやうな筆致になるものと見える。僕の知つて居る所では、故上田氏の「獨語と對話」や鷗外博士の文章などが嚆矢らしいやうだ。

G　確かにあの文體が傳はつて居るやうだ。然しもつと詮索したら、必しも其の二家に限つたこともあるまい。問答體の意見は他の文豪も屢書いて居たやうだ。然も問答體で哲學を說いた御手本には、例のプラトーン大聖が控へて居るぢやないか。近代で例を取つても、ジオルダノ・ブルーノの諸著は思想もプラトーの衣鉢を傳へた所があるが、形式まで其の通りだ。デカルトは獨白で自分の思想を物語つたが、バークレーはハイラスとフイロナスとの二人物を點出して、物質論者と心靈論者とを對論せしめた。ライプニッツがロックの新著を批評する時には、又、其書を讀む者と話す者との對話の形を用ゐた。ヤコビがヒユームの說を紹介する時にも同樣の形式により、シエリングはブルーノを中心人

物として久し振りに希臘古典風の對話を書いた。堂々たる哲學論さへ對話で記るせるものなら、時事の論議などに此形式が適しないこともあるまい。

K　相變らず講釋が出て來たね。左樣に古歌を引き給はゞ何とて僧正遍昭は……といふ格で、僕も一つ增補をして見よう。プラトーンの對話篇を絕好文辭と賞めるならば、佛經の中には同樣の賞贊を値するものが少なくないだらう。否、對話で意見を述べたのは論語が其一例だが、あれは斷片的で構想がないと言へるかも知れないが、孟子に至つては梁恵王だとか齊宣王だとかを相手にして明かに戲曲的場面に富んで居る。……

G　まあ待ち給へ。君はまさか對話文の考証にやつて來たのぢやあるまい。何を題目にして僕の談話を求めようといふのだ。

K　成程是は少々脫線の氣味かね。然し必ずしも然らずサ。我々はよく「知の知」、即ち知の對象を外に求めずして內に求めることが最も深い知だと聞かされて居る。然らば即ち、「對話の對話」は最も深い對話といはざるを得ずとなるだらう。

G　其んな論理主義張りの理屈はまあ拔きにして早く本文に取り掛つたらいゝぢやないか。

K　別に本文も結論もない。今述べて來たことが既に本文の中なのだ。

G　すると今の人が對話で意見を述べるのがいけないとでも言はうといふのかい。

K　別に對話が不可だといふのではない。對話の形式にも既に先蹤があるならば、其を無視するのが惡いと言へるやうに、何事も自分が創めたやうに思ふのが其が即ち惡いといふのだ。

G　成程、君は僕々後進が禮を欠くことを憤慨して居たやうだが、其の不平を述べに來たのか。御尤もな感慨と言ひたいが、其がつまり時勢の轉移を知らないのだらう。君が先蹤の有無を檢べて居る間に、今の若い人は用捨なく先輩を排ることを考へて居るのだ。

K　然し又案外若い人が保守的な場合もあるね。よく或人々は、現代の民衆が保守的で、新思想を壓迫することは反

て官憲に勝る、といつて居るが、實際今の若い人は斷乎として改革を實行する人に反對する傾きもある。學校などで其の眞の發達の爲に多少の情實を無視して淘汰を實行する人があると、其に感謝すべき學生の側から反て反對が出て來るやうになる。其故に民衆は、學校に於ても、反て先驅者を迫害する傾きがある。

G　ハヽア、其れで例の文化主義に對する民衆主義の嘲罵を受けた鬱憤を洩さうといふのかい。

K　イヤ僕は其んな事に拘泥しちや居ない積りだ。全體文化主義なんて言葉は僕などが言ひ出したには違ひないが、別に其んなに是非主張しようと思つて居るのではない。

G　それ、其れが惡いのだ。其が不徹底だと言はれる所なのだ。もつと感激の生活を送り給へ。

K　フン、昔の哲人の言つた「美しい狂氣」にでもなれといふのかい。然しさういふ君に其れだけの熱があるかね。此歳になつて情熱でも無いぢやないか。人が文化を嫌ふなら、其を言はないぢやまでサ。然しまさか、文化其ものを嫌ひな人もあるまいと思つて居ると、案外なる哉だ、そんな贅澤な事をとか、そんな柔弱なことを、とかいふ人のあるには驚く。

G　まだ驚くのは、其が獨逸主義だとか、官僚軍閥資本家の手先に使はれるものだとか決め込んで居る人が中々多いことだ。

K　其等はまあ爲にする議論だらうから何うでもよいが、今少し專門的になると、其がキンデルバントヤリツケルトの受賣だといふ議論があることは一寸心外だ。一體全體、是等の人々が何所に文化主義なるものを說いて居たのだらう。成程、先生達は歷史哲學とか文化哲學とかいふことを說いては居る。そして僕も、其等の說が文化主義論者に影響して居ないとは言ふまい。然し、何も其れでなければ文化が說けない、といふ譯ではないぢやないか。コーエンの一派だつて文化哲學を說いて居る。文化だか文明だか知らないが、其を鼓吹する人なら、斗を以て量るべしだらう。

G　然し文化主義が文化の絕對價値などを說く所に其の特色があるのだから、其點から言へば、其が必しもキンデルバントヤリツケルトに限らないかしらぬが、とにかく批評哲學の一派に最も緣の深いものたることは疑はれないだらう。

文化主義の唱道者は必しも是等の哲學者のみを鼓吹する譯でもないが、其處に思想上の聯絡の存することを疑はれない。所が世間にはヰンデルバントとかリツケルトとかいふと、目の敵のやうに惡く言ふものゝあるのは不思議だ。ヰンデルバントは既に沒したから、其事業は最早完結したと言つてよからうが、之を通覽すると、或は組織とか體系とかいふ點に於ては確かに十分とは言へないが、種々の示唆に富むことは承認してよい。其說を精細にして間々矛盾を指摘せんことを試みたリツケルトや、其他直接間接の學徒を輩出せしめた所に、文壇批評家などの大言壯語的罵倒を許さぬ所があらう。リツケルトも亦未だ一切の問題を十分に說き盡すには至らないが、然しヰンデルバントよりは遙かに精細に時としては精細過ぎる程論證を試みて居る所に、とにかく進步發展を認められる。周密なる論理は天才的直覺を欠くやうに想はせるが、然し論理必しも平凡な知識のみではない。

K　所がリツケルトに對しては獨り直覺派ばかりが反對して居るのではない。哲學を嚴密科學として論究したいと思ふ一部の學究は、リツケルトのでもなほ論理が不徹底で分析が不十分だと考へて居る。殊に其說が自然科學や數學に關して無理會であるやうに言ふものが多い。成程彼は自然科學的概念構成の限界を論して居る。主として文化科學、文化哲學の問題を說いて居る。然し文化を說くから自然に關して知識がないと如何して斷言せられようか。數學の論理を說くことも人々の隨意である。恐らくは其方面にも、數學者以外に哲學者の力を施す場所が存して居るかも知れない。然し數學と離れた哲學の問題が無いなどゝはどうして言へるであらう。現に、少し意味は違うが、カントは極力數學と哲學とを區別して、前者の論法を後者に應用すべからざることを說いたではないか。

G　イヤ、其事は少し此場合には適しないだらう。僕は寧ろ數學を哲學者の方から研究することが、果して數學者の承認を得るやうな結果になるか、といふことを疑ふ者だが、とにかく之を一の研究とすることに異存はない。たゞ之をのみ哲學の問題と見るのは、社會問題をのみ改造哲學の對象と見るのと同樣の偏見といはねばならぬ。

K　成程、社會問題即哲學とする論者から見たら、リツケルトは抽象的で人生と沒交涉に見えるだらう。然し又現代の社會問題などゝ風馬牛の態度をとる人の目には、生の哲學といふ流行思潮を論ずるやうな哲學者は、其の本分に遠さ

かつたものと思はれるであらう。斯くして板挾みになることは遂に哲學者の運命なのであらうか。

G　大層歎息したものだね。若し反對に形而上學者が其の論理の精鋭を賞し、社會論者が其の思潮論を喜んだら如何であらうか。其はとにかく、對手の論者の目的が那邊に存するかを知らない批評ほど揚足取り的なものはない。其點からキンデルバントや、溯つてカントなどの論理説が、形式主義と稱せられて內容の空疎なことの非難を受けるのも同樣の迷惑と言はねばならない。實に批評家は、其對象の中に住して論辨を試みる內在的批評をしなければならぬではないか。

K　イヤ、君も矢ツ張り歎息して居るぢやないか。又話を元に復すが、リツケルトの文化哲學歷史哲學は其原理に於て非難すべき所がないと許しても、其の結論に於て多少自國の文化や歷史を本位とするやうな傾きがあるのは、少し面白くないやうな氣がする。

G　成程歷史を個別的に說く上から、自然に各個體を本位とするやうになるであらうが、然し其場合には其個體中に普遍妥當性を具有して居るべき筈だから、無意味なショーヰニズムに陷いる譯ではあるまい。ゲーテを獨逸の理想主義哲學に結び付けたのを、世界的にするよりも狹いと見る論者があるが、然し其等は元來十九世紀初頭の理想主義に興味を有する人として已むを得ない所であらう。獨逸人がゲーテを說くと何となく獨逸主義鼓吹のやうに聞えるが、リツケルトのを其と同列に編するのは當を得ないのではあるまいか。

K　リツケルトが獨逸文化に對して如何なる偏見を有つて居るか知らないが、戰時中に公けにした『認識の對象』三版の緖言に、戰歿した少壯有爲の學者ラスクを悼む語句があつて、其れは確かにオイケンやヘツケル、ヴント等の當時發表した意見とは異なるものがあつた。然しリツケルトの事は分らないが、キンデルバントなどはまだ少し歐州民族を本位とする思想があつて、我々所謂有色人種には一寸氣になる文句が其の歷史哲學講義中にあつた。

G　是りや面白い。國際聯盟、軍備縮小、永久平和、あらゆる事柄に贊成して一派の論者と正反對な立場にある君が、悲憤慷慨人種平等を主張して其爲に戰を辭せさる人々の同一步調に出ようとは思はなかつた。

K　イヤ眞正に國際聯盟を欲すればこそ苟くも故なく或る國土を本位とする思想に反對したいのだ。キンデルバント等の眞意は文化なき人格の低い種族を他と同一視することの不可を說くことにあるのだから、我々としては其の點に於て、自己が文化の上から遜色なきことを示せば足りるのだ。其を其點は考へないで、或は現在の文化に貢獻し得ることを示さずしてたゞ徒らに過去の文化をのみ誇示したり、或は武力のみを振廻して益々昔日の中亞民族のやうに誤解されるのは、愚の至りだと思つて居る。其れにつけても最大の急務は、我々が現代の文化中に生活して居る、といふことを天下に知らせたいことだ。

G　其れが例の大勢順應と大勢屈從との區別に關する君の持論なのだらう。其れなら度々拜聽して居るからもう澤山だ。とにかく歐洲文化といふやうな言方では、我々にはまだ物足りない。それで世界文化とかたゞ文化とか言つて貰ひたいのだが、それでもまだベルグソンのやうに、今だに獨逸文化を罵倒憎惡する人が佛蘭西に多く、又其の思想を受繼ぐ人が他國にもあるのに比べれば、まだまあ廣いと言つてよいだらう。其所になると、是もやはり多少歐洲といふことに拘泥しては居るが、ロマン・ロランなどの態度は立派なものだ。然し少し前に先生が獨逸の學者に對して聯合の勸誘をしたことがあるが、其折の多數の返事によると、獨逸の學者の方では英佛等の學者の處置に對してまだ十分得心しては居ないらしい。尤も其の返事を書いた學者は、多くは昔し獨逸主義を振りかざした人のやうだから、一概に言へない所がある。とにかく學者が今だに愚圖々々言つて居るのは餘り沒分曉過ぎる。

K　近頃またアナトール・フランスが佛國民に公開狀を書いて、昔日の敵國に對して過重の賠償を求めることの不可なることを力說して居る。是は然うありさうな事で、此所哲學者の方は一體に遜色があるやうだ。然しアナトール・フランスもゲーテの文句を引用して、我々は先づ歐洲人とならなければならぬと說いて居るのは、文字通りにすると少し氣になる所がある。とにかく具眼の士は追々昔風の自國至上主義を撤回して行くから、此所へ哲學的根據を與へれば、一般的文化の絕對價値を認めるやうになるだらう。

G　今の所佛蘭西には、割合にまだ昔風の思想が勢力を有つて居るやうだが、英國は流石に自由思想の國だ。例のア

インスタインを世界に紹介したのは獨逸よりは寧ろ此國だらうから、獨逸人がシエイクスピアを眞に理會するといふ意味で我々のシエイクスピアといふ如く、英國人は我々のアインスタインといふかも知れないが、近頃では又獨逸で一方に勢力あるフッサールを招聘して講演を聽いて居るさうだ。フッサールは僕の友人の手紙によると、自分の講義を聽く者は日本人だらうが何國人だらうが、其樣な事には關心しないと言つて居るさうだ。其程世界的な人なのだから、此際英國で講演するのは最も適切であるかも知れない。戰時中にはベルグソンやブトルーなどを聘したが、今はまた獨逸學者とも早く握手する所に、其の思想の流動的な所を示して居る。

K　大層英國贔負になつたものだね。然し英國では又近頃西班牙のウナムノなどを飜譯して居るが、あの人は嘗てクルツール即ち獨逸文化だと看做して之を攻擊して居た事がある。して見ると英國には、種々の思潮があると言はなければならぬが、是が又其の大をなす所以かな。

G　成程 Mignel de Unamuno が其の書物はまだ能く讀まないが、其の Tragic Sense of Life の序文に、其人をバスク種族の面影を傳へたものと言つてエールス人と比べてあるが、愛蘭文學の次には此民族の文學が流行するのかね。サンタヤーナが英國に居る筈だが今如何して居るかしら。――イヤ話が妙な方面に外れて仕舞つた。全體何を話しに來たのだつたかね。

K　ナニも別に決つた事はないのさ。もう是れで十分だ。こゝらで御暇申すことにしよう。

彩管餘語

岸田劉生

○如實感（前號寫實の缺除及び劉生畫集所載寫實論參照）

藝術に於て、單なる如實といふ事は、それだけでは、藝術的生命を持たぬものである。といふ事は、余がしば〳〵述べたところである。

が、それは、「如實感」といふものゝ持つてゐる、藝術的なものを造り得る要素、を否定したものではない。

「如實」といふ事は藝術的生命を作り出す可き一つの要素として考察する事が出來ると思ふ。

無論この場合の「如實」といふ事は、余がこれらしば〳〵述べたところの、藝術的生命ある如實感を指すものではない。（劉生畫集及藝術觀所載寫實論の項參照）そこに藝術的生命又は美のあるのは當然で、論をまたない。

余が今こゝに、美術上の一要素として考察しやうとするのは、それよりも、もう一段下の、美的內容を持たぬ、寫眞的な只の如實感、本物らしい表現についてゞある。

もとより、かゝる如實感は、藝術的に見て低劣なもので、それだけでは藝術的な美を畫面に生かすどころかその反對のだるい氣持や醜い氣持を畫面に漲らす素因となる。しかし又ひるがへつてもう一度この藝術的には低劣な如實感を拾ひ上げて省察してみる時、其處に猶或る種の藝術的感銘への一要素を感じる事が出來ると思ふ。

即ち、如何にも本當らしい、本物の通りだといふ事には、何等の美的內容が加はらなくともそれだけで一つの「感じ」を持つてゐる。例へば「猫八」の樣な藝人が非常に巧妙に何か動物の聲色をつかつた場合など其處に何等の、美的要素がないにかゝはらず人は其處に或る「巧妙」といふ事に對する感銘を與す。又吾々が何か、他人の癖とか、顏形などを物眞似してみる時、もしそれがさながらにうまく行つた時、自分自身或る快感を感じる。

これ等の事は、自己又は他人の技巧の優越を意識するところから來る快感のみに止らず。「物を再現し得た。」といふ事自身が持つ、一種の魅力であると思ふ。

事實人間には「物事を再現し得た」といふ事に對して一種の魅力を感じる本能があると思ふ。

美術の上にもこの事はあるので、肖像畫などを描く場合、それが當人に似てゐなくても藝術的生命に關係がないものであるにかゝはらず、作者にとつて「似たり」といふ自覺は「似ず」といふ自覺よりも嬉しいものであるのはこの事の一例だと思ふ。

似る、似ないといふ事は、無論、その當人を主とした問題で、その描かれた人を知らなければ問題が與らない。似る似ないといふ事は、藝術的には大切な問題でないにかゝはらず、似なければ氣になる。何となく、缺陷の樣な感じがするといふのは、むしろ作畫心理の上から自然の現像であると思ふ。

近代に至つて、藝術の內容に對する意識がはつきりした結果、さういふ事がまるで問題にならぬ人もあらうが、余から見るとそれは惡い事ではないが、似ない事を氣にするといふ事よりも偉れた事ではない。

むしろ、肖像など描く場合は似る似ないを氣にかけるところに、製作上の複雜な經驗が生じる。其處に、又、「再現の藝術境」といふ樣なものが滲み出して來る。とも角もその方が自然的であつて、さういふ事をあまり枝葉視して蔑視す

るのは多少、機械的な理想論の感じがすると思ふ。とも角も肖像などの似る似ないを氣にするところには微妙な藝術家の、形に對する神經が、動いて、面白い味があると思ふ。

それならば、其處に、「似た」といふ事で何う、確實感を、畫の上に加へる一つの要素となるといふ事は事實である。「貴人」を描いたといふ味と、單に、人物畫の美を描いたといふ味では、其處に自づとちがつた味があると思ふ。肖像畫の相似といふ事には、この、「貴人」をかいたといふ、リアルな、感じが出てゐる。

事實、我々は、そのモデルを知らない肖像畫をみても、「似て居さうだナ」といふ感じをうける事が度々ある。さういふ畫にどこか、リアルに對する觀照が鋭く、いゝ意味で、現實味が強い。ヴイヴイツドである。

これはもとより、その藝術的寫實味がもたらす嚴しさであるけれど、その藝術的寫實味を構成する要素の一つとして「似せる」といふ神經が生きてゐる事はあらそはれない氣がする。何となれば、其處には「似てゐさうだ」といふ感じが、具象され美化されてゐるから即ち「似顔」といふ事が持つ獨特な美術的要求の感銘である。

もとよりこの「似顔」といふ事はそれだけでは只の手巧の問題や興味で藝か、藝術的なものが加はるのであらうか。

少くとも、作者の主觀上にはそれがあるのを感じる。即ち、「似た」といふ事の滿足は、その畫面に一層確實感を與へるところのものであつて、もしそれが似ない場合には、作者はどうも、その確實感の缺乏を感じ、その作の上に生んだ美が何となく、しまりが惡く、茫漠としてゐる樣な感がある。それが反對に似て來ると、その美や作の藝術的生命が一層緊密な感じがし、確實な感じがして來る。

この事は、その作の對照、(被描者)を知らぬ人にとつては、別に意義のない事かもしれないが、もし一層考察してみると、強ち、意味のない事とのみは云へないものがある。

即ち、作者の主觀上の、確實感は、必ずしも主觀の心理上の一時的な經驗に終つて、そのまゝ消へてしまふものとのみは云へないで、そこに經驗された確實感は、その對照を知らぬ第三者にも、何等かの「感じ」で傳へられる客觀性を持つ、といふ事が云へると思ふ。

事實其處には似るといふ事を問題外にして只、藝術的生命のみを追つたものにはないところの「寫實味」「深いリアールの確實さ、それへの愛、さういふ、藝術を一層確實な、現[illegible]なものにするものが加へら[illegible]ると思ふ、

藝術には、超現實の感じは無論大切である。それの不足な[illegible]術は、「深」さが[illegible]い、しか[illegible]、[illegible]であつて

又藝術には、現實のもの、この世のもの、地上のものといふ、自[illegible]や生への[illegible]がな[illegible]と[illegible]する

と夢や幻の様に、なりたがる藝術にリアールな味を加へ、たしかにこの世界のものであるといふしつかりした感じを加へることの事については寫實論に於てくわしく述べた。

肖像畫に於ける「相似」といふ事はそれ自身藝術的な事ではないとしても、とも角、こういふ藝術的生命はないけれど、それが、藝術的な寫實味を助け、藝術的寫實によりて生かされる時、それは一つの藝術的要素となつて、藝術の上にそれ自身獨特の美術的効果の一域を持つに至る。

以上は、肖像畫に於ける「似る」といふ事について考察したのだが、この「似る」といふ事は即ち、こゝに考察するところの藝術的生命なき如實感の一つである。かくてこの肖像畫に於ける「相似」といふ事と同じ事がこの如實感の場合にも當て嵌めて云ふ事が出來る。即ち、如實感はそれ自身藝術的なものではないけれど、此處に美が加はれば「寫實の美」「物質に即したる生命」といふものが生れるだけの、或る半藝術的な要素はある。

即ち、「再現」といふ事は、それだけでは藝術的な事ではない。しかしもしそれが深い美によつて、生かされ、その

「再現」といふ事は即ち、如實感の別名であつて、人間が如實なるものゝ、それが、藝術的でなくとも、動かされるといふのは即ち、それが再現の力を持つてゐるからである。

吾々の摸倣本能は、これを遠く、生物時代から遺傳され進化して來た自然の法則であるが、人間は、その記念欲、一時的なるものを後まで樂しみたい慾望、及び、事物と同化し、共樂したい慾望等によつて、この摸倣本能をうまく生かした。

如實感に對する吾々の感じる或る牽引にはこの再現欲、記念欲、同化欲等の摸倣本能の滿足を見出す事が出來る。

勿論、如實感が如上の如き理由から蔑視される可らざるものにしても、只それだけで終るならば畢竟、藝術的生命とは關係ないもので、むしろ、かへつて、淺薄又は低劣な感じをともないやすいものであるのは繰りかへす迄もない。

只それは、或る「如實の美」「再現の確實感の美」等を生む一つの要素であるといふ事を考察した迄である。

前號の寫實の缺除の考察に對して、その反對の一要素を抉出して考察したのである。(一九二二、五、一四)

勞農ロシア見聞記

——雜誌改造のために——

パンカースト

勞農ロシアについて、今私の思ひ出の中から浮び出るものは、立派な力強い國民が、逆境に沈みながらも、尚ほ熱心にその國を立て直さうとしてゐるあの姿である。平等の基礎の上に、——經濟的平等、社會的平等、教育や、休憩時間や、任用その他身分についての平等の基礎の上に、新に國を建てようとしてゐる姿である。

千五百人の共產黨員が、ポーランドの戰線に向つてペトログラードを出發した時のあの光景は、最も私を感動させた事の一つである。赤色ペトログラード、これこそ革命を成就せしめたものであるが、此所から革命軍に加つた人々の數は、この都市に割當てられた兵士の數を遙に超えてゐた。この千五百の人の追徵、それは一般の人民からではなくて、ペトログラード共產黨の黨員から召集されたのであるから、この頑剛な人々の集團から、非常に多數を奪ひ去つたわけになるのである。既に今まで幾度も幾度も、黨員の中の一番強く一番勇敢な人々は戰線に派遣せられ、青年は丁年に達するや否や戰場に送り出されたのである。

その日、ペトログラードを出發した共產黨員は、十中の八九は死なければならないものと覺悟をきめてゐた。實際、生きて歸るものは殆んどないであらう、彼等は一番危險の多い所を引き受けて、全軍を引率し、激勵しようとするのであるから。彼等に別れを告げるために、ペトログラードの中心では示威運動が行はれた、勞働者は工場から樂隊と共に旗をふりかざしながら行列した。そして赤い旗が窓に掲げられて、そこから群集に對して演說する者もあつた。それから兵隊が、その後から一般の人々があちらこちらを、ぐるぐると步き廻つた。これから出

かけて行く若い兵士たちの側には母や、妻や、戀人が花を持つて歩いて行つた。一人として涙を流すものもなく、總ての人は歡喜に滿ちてゐるやうに輝きを見せた。しかし婦人たちの瞼は赤く膨れてゐた。今こそ勞働者の共和國に對する彼等の義務と誇りの氣持が、涙を乾かしてはゐるけれど、この一夜をまんぢりともせずに泣き明かしたのであらう。

私の側にはリガから來た一人の婦人がゐた。この女は敵軍の幾度も引續いての來襲をうけてから、あの戰禍に荒され果てた町を離れ去つて、ペトログラードに來たのであつた。兵隊も、その側に附添ふ婦人たちも、賑かな音樂につれて行き過ぎてしまつた時、私は少からず興奮してこの女に尋ねた。

「また餘分の兵隊を派遣するといふ命令が下つても、人民はちつとも不平をいひませんか。」

彼女はかう答へた。

「たとへ政府が、不平を云つても、私たちはそれに耳を傾けはしない、兵士たちは何時でも喜んで出て行く、主義のために戰ふのですもの。勞農ロシアの兵隊ほど強い兵隊はない、彼等は自分の愛する主張のために戰ふのだから、資本主義や皇帝のために戰ひに出て行つた昔の兵隊とは異ふ、しかしあなたたちが出て行くのを見て泣かない女は一人もない、私は勞働者でもなく、黨員でもないが、資本主義が永續出來ないことや、共產主義が世界△△△△△△△ないといふことは、私にもよく了解される。資本家は何故それと戰ふのであらう。進步に對してこのやうな戰ひを續けるのは殘酷である、——この「×××」ことの出來ない「××」に對して。ロシアの青年たちを、進步のために「×××××××」といふことは殘酷だ。」

× × × × × ×

當時ペトログラードの市は非常に物資が缺乏してゐた。ライ麥のパンが常食で、それに副食物も極めて少しきりなかつた。牛乳は病人に得難かつた。しかし彼等は、私が一所に長年住んでゐた東ロンドンの人々より健康さうに見えた。ムルマンスクや、北ロシアの[illegible]村々の生活は[illegible]に粗末なもので、魚とパンと、牛[illegible]である。[illegible]のこと、夏季でも輝かしい日がほとんど[illegible]けるのに、冬には[illegible]く長い夜が續いて、そして北極の寒さが襲つてくるといふ酷い氣候である。それにも拘らずこの荒涼な不毛の荒野に住む人々は、非常に健康さうに見え、子供たちは肥えて活潑であつた。この北海岸の沖で、私たちの乘つてゐた木の葉のやうな小さな船は、嵐のために、一番近い港を求めて避難しなければならなくなつ

た。私たちの上陸したのはこのような小さな村の一つであつた。私たち一行五人は第三インターナショナル大會から歸國する途中であつたが、思ひがけなく到着したことではあり、知人もないので、ソヴイエットの大臣の家へ招ぜられた。無線電信局の赤軍の兵士たちは、共産黨代表の到着を聞いて赤旗を揭げ、またその次の日晩餐を差上げたいと招待して來た。

これは、英國の遠征隊が此所に侵入してゐた間に、分捕つたものだと話しながら、私たちに、英國の罐詰の牛肉や、白い麥粉で作つた菓子を饗應した。水兵の中には英國や佛國の軍服を着てゐる者もあつた。實際、北部ロシア一帶に、ロシアの陸兵や水兵や、また大勢の市民たちが、聯合軍の服を着てゐた。人々はこんな戰利品について誇らしげに冗談を云ひあつてゐた。

北ロシアで、私たちは資本主義の軍隊との戰についていろいろな話を聞いた。

このうへなく粗末な武裝で、實際、殆んど武器なしで、農民は「谷間の狼の如く」勇敢に戰つた。橋梁を破壞したり、聯合軍を沼澤地に誘ひ入れたり、すべて、その地の利に就ての智識と勇氣と絕望とが、鄕土と自由とを脅される人々に對して、執らしめるような、あらゆる戰術を用ひて戰つた。農民たちの日用品も、武器も、主として聯合國の侵入軍の武器や軍需品を分捕することによつて得られた。

ペトログラードの人々に節約を强いてゐる物資の缺乏は、モスコーではそれほどでも無く見えた。私たち第三インターナショナル大會への代表者たちは充分な食物を得た。尤も私たちの分前は一般の人々のより多かつたには違ひないけれど。

コロムナといふのはモスコーから六十哩ほど離れた小さな田舍町で、大きな軍需品供給の中心であるが、そこには食糧が山ほど積まれてあつた。私たちは町の食堂で晝食をとつたが、スープと燻魚、肉、カシヤ、パン、新しい胡瓜を出された。林檎もトマトも新鮮な野菜も澤山あるし、牛乳や卵までも食べることが出來るほど贅澤であつた。都會でも、小さな町々でも、人々の服裝は、一體に驚くほど善かつた。夏であつたので男も女も、明るい色の木綿の上衣をゆるやかに着てゐた。見渡したところ、皆、質素ではあるけれど氣持よく優雅な着物を着てゐるやうに見えた。第三インターナショナルのための大會のときに、總ての聽衆は男も女も、ロシアの上衣を着て、婦人たちは殆んど皆、頭被をつけずにゐるか、色のあるハンケチを頭のまはりに縛つて端をひらひらさせてゐた。所が劇場では昔の富裕な貴族や富豪の婦人たちが立派な着物を着て寶石を着けてゐるのが見えた。ロシアの統治者階級が所有權を剝奪されてから、非

常に苦しんでゐるといふ話は随分喧しく吹聽されてゐるが、それが非常に誇張して傳へられてゐるといふことは、これを見てもわかる。靴が非常に缺乏してゐるといふことは聞いてゐたけれど、町を歩いてもその様子は見えなかつた。田舍の方では、ロシアの農民が何時も夏には使つてゐた木皮の靴を、大勢の人が用ひてゐた。また中にはカンバスの靴を穿いてゐる者もあつた。その底は木が三重に、拇指の下で合著されて、歩きよいやうになつてゐた。これは最近の變化である。

ロシアの或る地方では非常に物資の缺乏の爲めに苦しんでゐたがそれは主として輸送の困難のためであつた。即ち、元來非常に不充分な鐵道や車輛が破壞され、勞農ロシアの主な炭坑や油田が反革命軍によつて占領されたり、休業してゐるため、また資本家の封鎖によつて、海外から製造品を輸入することも妨げられてゐたがためである。しかし、こゝで考へて見なければならないのは、ロシアでは前から、國民の大部分が窮乏に苦しみ、悶えてゐたといふことである。――農夫は苛斂誅求せられながら、少しばかりの賃金で地主の仕事をしたり、自分の小つぽけな地面を、幾百年來使ひふるした不充分な農具で耕したりしてゐた、みじめな有様、搾取され壓迫された、町の無產勞働者の窮乏がやつぱりこのロシヤで見られてゐたといふことである。

私がロシヤを見たのは一九二〇年の夏で、今の恐ろしい飢饉の初まる前であつた。勞働者の共和國の建設以來、人々の窮乏に苦しむ程度は、前の時代よりも少くなつてゐた。ソヴイエツトの統治の下では、總てロシアにある物は一樣な割合で全國民に分配されてゐたからである。この年の始の頃、私は獨逸に行つたが、今、ロシアへ來て見ると、その國民と、獨逸の町々の疲れ果てた、みじめな、飢えたような勞働者との對照に驚かさるを得なかつた。

私が勞農ロシアにゐた頃、主な日用品――住居とか、家具、燃料、燈火、或は必要な食物、衣服といふようなものは、割當制度によつて無料で供給されてゐた。餘分のものも、金で買へるようになつてゐた。殘念なことには、家賃も家屋賣買もこの年から行はれるようになり、總てのものの賣買交換――小工場を私企業者に貸すこと、商店を開くこと、また燃料、燈火、旅行の費用の徴收、それから學校の月謝までも復活されたことである。反動の力はソヴイエツトによつて爲し遂げられた事業の多くを顚覆しつゝあつた。私はこれから、その理由を考察してみよう。

ソヴイエツトが愈々政權をとつた時に、彼等は、食糧割當の

ために總ての大人を三階級に分けた。第一は筋骨勞働者と赤軍とでこれが一番多い給與を受けた。それから坐業勞働者が中等の給與、次は勞働しない人々や、勞働を拒絕した人達で一番少い割前を受けた。この三階級の各々の中では、割當は皆同樣であつた。子供や病人の場合も同じで、この二階級は、一番よく一番滋養分の多い食物を貰つてゐた。

一九二〇年に重大な割當步合の差別が行はれるやうになり、これが非常に平等の原則を破壞した。所謂「責任勞働者」は食物についても衣服についても廣い特權を與へられ、これらの特權の恩澤は「責任勞働者」の家族にまで及ぶことになつた。この變化は實に遺憾とすべきことで、唯、緊急已むを得ない必要といふ口實によつてのみ、兎に角辯解できるだけである。

賃銀は前から食糧割當よりも不公平で、その不公平の程度もだんだん加つて行つた。出來高拂や時間拂の複雜な步合表が總ての工業で行はれ、支配人や專門家は澤山の給料を貰つてゐる。この不公平は主義に於て社會主義に反對なことである、しかし勞農ロシアに於て最も甚しい經濟的差別でさへも、總て資本主義國家に於ける貧富の懸隔とは、比較にならないといふことは認めなければならない。

食物、衣服についての不平等、住居の割當や、快樂を求めるための金についての不平等は、階級的差別を發生せしめ、また永續せしめて、共產主義の方への進步發達を遲延せしめるものである。この爲めに絕えず嫉妬や競爭が起つて來る。これ等は實に太陽の照らす下、到る所に於て罪を釀す所の主な原因なのである。眞の「××××」下に於ては、賃銀制度は勿論消滅し、貨幣は不用となり、誰も彼も、「×××××」を以て、思ふまゝに自分の「××××××××」やうになるであらう。豐富な生產物が、總ての人の使用するに任せられるから、切詰めた經濟などは不必要になつて終ふ筈である。所がロシアは、農業も、工業もその發達が幼稚であり、封鎖やボイコットのために外國の生產物を自由に輸入することも出來ないので、共產主義的社會組織を打建てようとするためには、不都合な狀態にあるのである。何となれば、物質の豐富といふことは眞の共產主義には必要缺くべからざるものであり、豐富な貨物なくしては、個人々々の食慾や競爭を抑へつけることが出來ないからである。原始的共產主義が人類を窮乏から救ふことが出來なかつたのは、當時人間が、缺乏を感じないで濟むだけのものを生產し得なかつたからである。資本主義は勞働者を奴隷にして、企業家達の生產を增加せしめた、また自由な勞働者の到底堪へ得られないやうなひどい經濟狀態に於て、使用人を働かせるやうにした。

人智の進歩は遂に、その生産者の生活を苦しめることとなしに莫大なる生産をなし得るに至らしめた。しかし、これは、猶幼稚なロシアに於ては不可能なことである。それ故に共産主義者の試みも、今までのところでは僅に一部分の成功を見たに過ぎない。實際、共産主義者は、それを共産主義の試みとは決して云はないで、國家社會主義の極めて部分的な適用であると云つてゐる。

勞農政府は、豐富な物資無くしては到底共産主義の行はれ難いことを知つて、直にこの目的に向ひつゝある。この方針の下になされた大事業の一つは、ペトログラード及びモスコーの電化であつた。工場には動力を供給し、家庭には光と熱とを送り、人々の洗濯も、市街の點燈も皆これによるやうにして、この中心となる大發電所の燃料は、今まで用ゐられなかつた泥炭地から供給するといふ計畫であつた。勞農政府は到る所で產業を合併して、有利な工場に集中するようにし、小さな工場や、機械の不完備なものは閉鎖しようとしてゐた。勞農政府が總ての大工業を國有化してしまつてからは、その集中も合併も、資本主義國家に於ける如く私人の利害を顧慮する必要なしに行ふことが出來た。露國の企業家達は、勞農政府がロシアの產業進步の路を拓いたのは偉大なる貢獻であるといつたさうである。彼等は、うまく勞農政府が倒壞した曉には、その殘した仕事によつて一儲けしようと待ちかまへてゐるのである。

勞農政府が產業發達の必要を痛切に感ずる餘りに、人的要素を非常に閑却するに至つたのは殘念なことである。その爲めに所謂勞働者一揆なる反抗運動を誘起するやうになつてしまつた。この勞働者一揆は無產黨員の中から起つたもので、黨員中の最も熱心な徹底的な革命主義者から成つてゐる。彼等は實に狂熱的な人々で、革命成就の後にも、勞農政府の安易な地位を辭して或は現役赤軍の困苦や危險に曝されることを願ひ、またはもとの通り、工場の一員として、無產階級の人々を指導したり慰撫したりしてゐたのである。勞働者一揆の指導者の中で、國際的に一番よく知られてゐるのはアレキサンドラ・コロンタイである。彼女はボルセキキが政權を得た時に治安委員を命ぜられて、行政官としての才幹をも示したさうであるがやがてこの地位を辭してしまつた。

前に擧げた外に勞農政府の處置で、急進的共產主義者の非難の的となつてゐるのは、資本家に對する利權讓渡である、例へば、米國資本家のヴアンダーリツプに對して、東經百〇六度から北極洋に到るまでのシベリア及、ベーリング海峽、ベーリング海の占有を許した如きである。ヴアンダーリツプは、石炭、

石油、魚類の豐富なこの地方に、再び、資本主義を輸入して、勝手な勞働狀態を建設するであらう。彼は、行政權はロシア政府の掌中に在るとはいふ。如何にも、埃及でさへも英國の主權の下で立派に行政權を握つてゐたには違ひない。彼の言ふところによれば、ロシア政府は、勞働者に關する限りに於ては、單に形式に過ぎないものである。彼は續けてまたかうもいふた。

「租借地の範圍內に於ては、醫師やその他衞生についての專門家を特定の數の勞働者たちの爲めに備へるといつたような、總ての文明國でなくてはならない設備をする以外には、政府は何の權力をも行使してはならない。支那や朝鮮の苦力はどんな場合にも、アメリカの技術者によつて使役されなければならない。」と。

この利權讓渡に關する折衝の間に、勞農政府は、ソヴイエツトの勞働制度は、租借地內に於ても、たとへ一部分でも保存されなければならないと主張したけれど、ヴアシダーリップは（彼の言葉によれば）「アメリカの資本はロシアに於ても、アメリカに於けると同樣の取扱をうけなければならない」と固執した。アメリカの資本家は、英國や獨逸に於けるよりも、遙かに自由勝手に勞働者を取扱ふことが出來るといふことは、周知の事實である。

共產主義の理想を離れて、ヴアンダーリップに對するが如き利權の讓渡をなすのは非常に重大な問題である。勞農政府は、このように主義を拋棄したことの口實を、ロシアの產業發達の必要が焦眉の急であることや、私が前に云つたように、物資の豐富なくしては共產主義の存立し得ないことなぞに求めてゐる。

このような妥協を排する共產主義者はこれに對して、資本主義に對する讓步は常に終局に於て勞農ロシアの不利益を齎すべきことを警告する。またロシアに外國資本家の利害關係を生ずることは單にロシアの勞働者を再び資本主義の賭博場裡に投ぜしめるのみならず、これ等投資家の本國なる列强の干涉を惹起する危險があることを主張する。外國資本家に對する利權の讓渡と、これに引き續いて起つた外國政府の干涉によつて、遂に多くの弱國が隸從させられるに至つたことは、世界歷史の上に明なる事實である。

ソヴイエツト・ロシアが資本主義に對してなした讓渡――それによつて勞働者一揆までも起すに至つた妥協――は單に外國資本家に一定の地域を割き與へるといふ一事に止らない。私たちの目擊したところによれば、住宅の社會化も拋棄されて、金のあるものは、自分で家を買ふことも出來るようになり、ソヴ

イエットによつて保管されてゐた家は、無料で住民に與へる代りに、賃貸するようになつてしまつた。燃料も燈火も費用を徴收されることになり、住居人がソヴイエット官憲に支拂ふ料金表までも、また作製された。

食糧その他總ての貨物の賣買を絶滅しようとする企ても止められてしまつた。勞農ロシアは最早、始めのように共有財産制度、全生産物の自由分配を目標として進んではゐない。個人々々の賣買も法律上許されるようになり、資本家も、今はどんな製造企業をも始め得るようになつた。

恐ろしい飢饉は、既に始まつてゐた、それは退轉的傾向に油を注いだようなものであつた。何十萬、何百萬といふほど人が死んでゆくのに、資本家も、專門の技術家も、手を拱いで傍觀するのみである。自分たちのやる仕事が、確に金になるといふ見極めがつかない限り、また彼等の手助けによつて、共產國家を建設せんとするソヴイエットの企てが失敗に終るといふことが確かでない限り、必要な手助けをするのはいやだと云ふのである。

ソヴイエット政府は最初から、教育の普及に多大の力を注いでゐた。教育の普及といふことは衣食住の豐富と同樣に、共產主義に必要なものであるといふ、その主張は正當である。七年間の戰禍がロシアの力を枯渇せしめたにも拘らず、勞農政府の樹立以來數個の新大學や、數千の諸學校が開設された。

ソヴイエットによつて採擇された古い法律の一つによつて、教育は總て無料といふことになり、教育期間も、擴張されて二十才までのすべての青年に及ぶこととなつた。この期間延長といふことは早速に實施するわけにはゆかなかつた。從來大部分の人民を無學のまゝに拋棄しておいたこの國で、校舍や教師の不足を補充するといふことは、たとへ周圍の事情がどんなによくあつたとしても、一朝一夕によくする所ではないからである。

今、ロシアから來る通信によれば、この大飢饉が勞ロシアの再現を促す力は、遂に授業料までもまた徴收するに至らしめ、或る高等の學校はソヴイエットの官吏の子弟のみを收容するようになつたといふことであるが、殘念なことである。

私がロシアにゐた間には、教育が非常に重んぜられてゐて、そのために多大の力が費されてゐるのを見た。子供の中の六十五パーセントはソヴイエット普通學校に入れられてゐた、その學校の數も一九一一年には五五、八四六に過ぎなかつたのに反して八八、〇〇〇に達してゐた。その他五千の幼稚園と、三千の初等學校があつて五十萬の子供を收容してゐた。これは、そ

の年齢の子供の七、八パーセントに相當する。高等の學生は三萬四千人ゐた。一九一一年には四千人ゐたのみである。チエレッオヴエツツ州だけでも五千八百人の大人が、またイヴエノヴオズ・ネセンスクでは五千人が、無學者を敎へる學校を卒業し、六百五十萬冊の初步讀本が發行された、勞働組合の中にはその組合員の、技術的敎育のために講習會を開いてゐるものもあつた。その生徒は工場委員によつて選擇されて、敎育の期日內は生活費用を給されることになつてゐた。

邊僻な北極洋岸のツイプナヴアロクといふ村でさへも、私にちは生徒の兩親から、學校が改善され、その課程も延長されたといふことを聞いた。また數哩離れたヴアイダ・グーベでも學校（それと一所に浴場も）が始めて建てられてゐるところであつた。

幼兒の敎育には特に注意が拂はれてゐた。敎育學者の知つてゐる限りの最新最善の方法が行はれてゐた。マリア・モンテッソリー氏の說が一般に信奉されてゐた。手工を非常に重んずる「勞働學校」の試みも、著しい成功を見たし、韻律體操も、大規模に、特にモスコーに於て行はれた。食糧の缺乏の結果子供の農村植民の制度が盛になつた。その植民地で都市の子供たちは、田園の景色を樂しみ、戶外で學課を習ふのである。

勞農ロシアの孤兒は特殊な取扱をうけてゐる。ソヴイエツトの子供は兩親を失つても、少しも輕蔑されることもなく、將來の望みを妨げられることもない。實際、敎育と物質的な幸福との點については、孤兒院や子供植民地の子供たちは、兩親と一所に住んでゐるものよりも遙にいゝ境遇にゐると云はれてゐる。コロムナの孤兒には八十人の小さな男の子や女の子がゐた。彼等はその家に附屬した大きな果樹園で遊んでゐた。そして自分が病氣にならないように氣をつければ、すきなだけ果物を食べることを許されてゐた。その孤兒院の幹部は一人の料理人と、植木屋と、洗濯女と、二人の家庭敎師とであつた。子供たちは每日その地方の小學校に通つて、特別の先生たちから、音樂や繪や遊戲などを習つてゐた。

子供たちは先生の許可をうけて私たちに音樂をやつて聞かせて吳れたが、彼等の才能は實に驚歎すべきものがあつた。十一歲の男の子が立派なグランドピアノで、コーラスに伴奏した。またもう一人同じ年位の子供が呼ばれて、クラシックな曲を奏したが、これも非常に巧みであつた。

ロシアは長い間、小兒死亡率の恐ろしく高いのに苦しんでゐた。戰爭前にはモスコーだけでは二十六パーセント、全國では二十五パーセントに達してゐた。これを改善するために、非常

の努力がなされつゝある。小兒科や、産科の臨床講義や、産婦や幼兒の保養所が出來るだけ早く開かれることになつてゐる。このような保養所は「母子保養院」と呼ばれてゐる。モスコーで、私はこのような建物の一つを訪問したが、そこには二十人の母たちがゐた。その一人は四ケ國語の教師で、一人は大學の圖書係で、學生も、工場の不熟練勞働者もゐた。彼等は皆愉快に暮してゐるように見えた。幼兒の食物も、衣服も、世話も無料で爲され、母たちが働いてゐる間は、病院で教育をうけた看護婦たちが子供の守りをしてゐた。赤坊の着物やベッドの敷布を洗ふために二人の洗濯女が傭はれてゐた。母たちは自分の着物の洗濯をした。彼女たちは自分の宿泊料として二百留を拂ふ、これは當時のロシアでは僅かなものである。しかも、下着は唯で給與されることになつてゐたのである。晝食にはスープとパンとカシヤとが與へられ、夕食にはスープが出される。一日にパンが一ポンド、一月にバタが三ポンド、砂糖が三ポンド、それから茶と珈琲はいくらでも、ほしいだけ給與される。彼等の出入は自由である。彼等が既婚であるか、未婚であるか、或は誰が子供の父であるかは、一言も問ふところはないのである。この保養院は二歳以下の子供をもつ母の爲めのもので、それより年上の子供の母たちのためには別に保養院があつた、なかには二人の子供のある母も一人ゐた。

ロシアに於ける共産主義の普及が、母と子供といふことに及ぼした最大の影響と云ふべきは、性的關係や母子關係に於ける「小法」の觀念を絶滅したことであらう。勞農ロシアの結婚法は、夫婦のどちらからでも請求すれば、離婚が出來ると定めてゐる、しかし急進的共産主義者の主張は猶徹底して、「××××」そのものが資本主義社會の一つの特徴であり、私有財産制度の延長であるが故に、共産主義の下では、それが全く「×××」あると主張する。

合法なる結婚の信頼すべきを誇る××××の英國に於ては、新聞は離婚事件の記事で一杯である。喧嘩ずきな人々の性的の紛擾沙汰の細密に亙つた、時には醜いまでの詳細な記事に充滿してゐる。夜になれば、町々の中を淫賣婦がさまよひ歩いて、その職業につとめてゐる。この不幸な人々を買ふ人たちも、離婚をした人々も、勞農ロシアの道徳を、恐ろしい有樣だと蔑んで得意顔であるが、ロシアには、我國ほど淫賣婦はゐない。もつとも、未だ全然なくなつたとは云へないが、その原因は、「×××」に必要な「物資の豊富」がなくて、今猶缺乏が感ぜられてゐるためである。それ故に治安委員は、各省聯合の委員會を組織して淫賣を征伐することが必要だと考へた。そして性的關

係に關して物質的計量をするのは有害であり、男女の平等及び協同を破るものであると宣言した。しかし委員會は、淫賣が勞働を度々なまけさせる(「惡意を以て懶ける」といふような意味で)といふ場合には兎も角も、淫賣のために直に男か女を罰することは出來ないと決議した。勞働を懶けたとして取扱はれる淫賣婦は、他の怠惰者と異つた取扱ひは受けない。必要に應じて、勞働分配所へ送られたり、或は教育所、療養所、病院へ送られる。

大勢の名も知れない微賤な人々が、喜んで困苦と不快とに堪へ、共同目的のために嚴格な訓練を受けながら、共産主義の生活を打建てるために惡戰苦鬪をつづけてゐる、その熱心と献身的犧牲の精神とは、實に忘れることの出來ない印象を與へて呉れた。勞農ロシアの見聞は、新社會の建設が實に恐ろしいほど長く、また艱難多き仕事であることを思はしめた。しかし、それはまた今の世界に生きる者にとつて「××××××××××」といひ得るのである。

新刊紹介

△土地と自由(第四號)

賀川豐彦氏を中心としたる日本農民組合の機關として創刊された、十二頁の月刊雜誌だ、農民問題は漸く喧囂たらんとしておる、又當然農民問題が我國社會問題中の最大要素とならなくてはならぬ運命にあつた、本誌の發行は蓋し時宜に適したもの、本誌の卷頭には賀川氏が「人間畑の開拓」の論題の下に、田を耕す前に人間を耕せ、土を耕す前に魂の世界から開拓せと高唱しておる、人類愛、相互扶助の精神を強調としてよくかゝれておる、其他杉山元治郎氏(小作爭議對寺院に對する一考察)行政長藏氏(土地と自由)鈴木文治氏の(農民運動と工場勞働運動)等の論說があり、日本農民組合第一回大會の記事等が載錄されてある(一部拾錢　神戸北本町六ノ二二〇　日本農民組合發行)

文藝管見（四）

里見弴

第四章　内容と表現

第三節　表現

前號「表現」の冒頭に述べるべきであつたが、こゝで、この言葉の意義を明めて置かなければなるまい。例によつて、定義めかして云ふなら、「表現とは、總の存在の謂だ」――云ひ換へれば、總の存在が表現なのだ。から云ふといやに小むづかしいが、「現れとは、そこに在ること、在るとは、ものゝ現れだ」こんな解りきつた、寧ろくだらないことになる。特に斷るまでもなく、「實在」ではなくて「存在」なのだから、形の有無は問はない。尤も、藝術の用語としての場合は、主にこの「現れ」の意味ではなくして、「現し」の意味になつてゐるが、まづこゝから話を進めた方がいゝだらう。もうこのうへ例をとるまでもないけれど、例へば、私と云ふ人間を、「里見弴」で表現するならば、私の存在がすなはち里見弴、里見弴すなはち私の存在なので、「現れ」も「現し」も、紙の裏表と云ふよりも更に近い、つまりは同じことになるのだ。里見弴が「實在」の人間ではなくして、例へば物語のなかの架空の存在だらうと、或はまた、目も利かず、表情もないところの、一箇の屍骸であつて、何ら「現し」の方法をもたないものだらうと、「里見弴」と云ふ「表現」がそのまゝ「存在」であり、その「存在」が、それによつて「表現」されてゐることに變りはないのだ。

この本來の意味をもつてすれば、甲なる存在の表現として、は「甲」には、寸分の嘘いつはりもあり得ない。「甲」に加

ふるに、「千萬分の一の乙」をもつてしたものでもが、決して表現ではあり得ないのだ。それを、「表現」以外の別の名で呼ぶか、或は「詐の表現」と、條件つきに呼びなすか、或はまた、甲なるものを、「嘘つき」「贋もの」として取扱ふか、より他はない。即ち、甲を甲だと云ふのが表現で、「そこに在る、と云ふことが在ることだ」と云ふ、殆ど馬鹿らしいほどに簡單明瞭な意味合になる。この「表現」本來の字義に、寸分の嘘いつはりもあり得ない、と云ふ點には、特に注意を拂つて頂きたい。そのために、以上、解りきつたことを、娓く述べて來たのだから。

さて、次には、宇宙の森羅萬象、――すなはち總の存在に、一として「同じもの」がない、と云ふ事實を考へて頂かなければならない。幾何學の初步に說く「同じ」と「等し」との別を、こと改めて云ふまでもあるまいけれど、俚諺「同じことは一つこと」で「同じもの」が、二つあつてたまつた話ではない。幾何學では、說明の必要上、假想的の「同じ」を「等し」と呼ぶのだけれど、自然の存在に、同じものが二つないことは、自明の理だ。甲はどこまでも甲、乙はどこまでも乙で、つまりこゝまで來ると、またもとの「そこに在る、と云ふことが在ることだ」に還り、そして更に蛇足として、「そこよりほかには決してないのだ」の一句を加へたまでのことになる。で、既に解りきつてはゐようけれど、これをまとめて、もう一度云つて置かう。「そこに在る、と云ふことが、在ることで、ほかには決してないことだ」――これが「表現」本來の面目でなければならない。

飜つて、文藝の用語としての「表現」を考へるに、往々にして、この本來の面目を、全く失つて了つたものになつてゐる。「種々な內容の解釋」並に「內容即表現」の條にも云つたことだが、「內容」と云ふ存在を離れて、全く別に「表現」と云ふものがあるやうに考へられてゐるのが普通だ。例へば、某の小說は、うまいことは實にうまいが、たゞそれだけのことで、內容がない、とか、某は、文章はゴツ／＼してゐて讀み辛いが、然し思想は立派なものだ、と云ふやうな批評は、日本ばかりではなく、西洋でも平氣で通用してゐるらしい。否、ひとりたゞ藝術の上ばかりではない、同じものに與へられたこの二つの呼び名が、いつかそれ／＼に自分の主人公をもち、別な二つの納りどころへ、一袂を分つて行つた有樣は、萬物の靈長たる、人の世の至るところに見られ、そして、動植物の世には見られない奇觀の一つであるのだ。

何故か。

人が嘘をおぼえたからだ。犬や馬の表現は信じられる、――云ひ換へれば、そこに、或る感情が「在る、と云ふことが、在ることで、ほかには決してないこと」――この「表現」本來の面目が、純粹に保たれてゐるからだ。然るに人間はどうだ。……餘談に亘るやうだが、淺草あたりの酒場で、一人の男が、自分は里見弴だと云つて、頻りと酒を飲んでゐるのを見て、私の本名が山内英夫で、里見弴は筆名であることを知つてゐた傍の人が、「では、あなたが山内さんですか」と云つたところ、「冗談云つちやアいけない、俺は里見だよ」と沸然色をなして、その男が答へたと云ふ話を聞いたが、前に解り切つた例として、「私の存在がすなはち里見弴、里見弴すなはち私の存在なので……」などゝ書いたのも、この話をもつてすれば、はなはだ適切な引例とは云へなくなるくらゐの人の世なのだ。固有名詞ですら、或る存在を表現してゐるかどうかゞ當にならないとすれば、口で喋り、筆で書くにあたつて、「内容」と「表現」との間に、――どんな游刄でも切り入れる隙間もない一つのものゝ間に、雲泥萬里の隔りを見なければならないことも、恐らく當然すぎるほどの當然であらう。

然らば、前に述べた如く、これは「表現」以外の別の名で呼ぶか、或は「詐の表現」と條件つきに呼びなすか、或はまた、表現するものを「嘘つき」「贋もの」として取扱ふかしなければならない場合だ。藝術よ！ もし耳あらば來りて聞けよ！ 今お前の「表現」には、「詐の」條件を附せられ、お前の製作者たちは「嘘つき」「贋もの」の汚名を著せられ、お前は、犬畜生よりも油斷のならない「術」と見なされたのだぞ！

何故そんな侮辱をうけたか……。

「内容」と「表現」とを、平氣で、別々な、二つのものと考へ得る人々よ！ 恥しくはないか。「内容」と「表現」とが、ピタリと抱き合はない苦みを知つてゐる仲間よ！ みづから恥じようではないか。さうして精進しようではないか。

思はず激越の調に陷つたが、靜に自省してみて、私のやうな未熟なものでも、製作中、あながち「詐らう」とか、「誤魔化してやらう」とか云ふ惡意を働かしながら、筆を執つてゐるわけではない。書きたい、と思ふことを書くので、ち

よいともの知り顔をしてみたり、讀者にアッと云はせてやらうとたくらんだりするくらゐの幼稚さは、時に顏を出すけれども、そんな大それた惡意などは決してもたないのだ。またそんなことを企てみたところで、證書の僞造をするほどにも、うまく行くものではない。見る人の目には、そのたくらみも、はつきりと映つて、結局それが「內容」となり、「表現」本來の正直に現はれるわけで、謂はゞ罪はないのだから、「恥しくはないが」といきり立つほどのことでもないのだけれど、さうかと云つて、決して、「これでいゝや」で、納つてゐてはならない境地だ。さう云ふ締りのない心持で、製作や批評をしてゐれば、「內容」と「表現」とは、見るまに相隔て行つて、だん／＼うはつ調子になり、空々しくなり、馬鹿げたものになる。騙さうと云ふ惡意こそないが、なんと云つても「噓」には違ひないものが、火傷のあとの水腫れのやうに、肉と皮との間にたまつて、ブク／＼と、締りのない心境を、哀にも曝露することになるものと覺悟すべきである。

そこで、前號の終にも述べたやうに、表現は、人の裡の「他」に相當するもの、生れながらの身についたものでなく、——すなはち後天の「人」によつて造られたものによるので、これを文藝で云へば、「言葉」と云ふ傳統、約束だ。どんな靈妙不可思議な思想でもが、言葉なしに成立したためしはない。感じとしては、所謂「言語に絶した」ものがあるだらうけれど、「言語に絶し」てゐる限りは、思想にはならない。尙更その思想を「文字」に移して、紙上に述べるとなれば、徹頭徹尾、傳統、約束の力で、まづ文字、それから「　」や、！や？や……や——や、や○などの約束的符號によるよりほかはない。さう云ふ意味で、不自由と云へば、云へないこともないのだ。よく講談、落語で、口不調法な江戸ツ兒などに、「あゝぢれツてえ、俺がこれほど云つてるのに、分らねえかなア」と云はせてあるが、いくらぢれツたくつても、言葉に云へない氣持と云ふものは、どうしたつて表現できないのだ。さうかと云つて、吾々は、日常、言葉の不足を訴へたり、そのためにぢれたりしてる人を、殆ど見かけはしない。議論などして、つまると、

「さアなんてつたらいゝか」

と、前額に手をあて、「よく解つてるんだけれど、ちよいとうまい言葉が……」

などゝ云ふ男にも、時々出逢ふことがあるけれども、さう云ふのは、十中八九まで、「よく解つて」ゐないので、——

つまり言葉が見つからないのではなくして、思想そのものが見つからないのを、ちよいと誤魔化してゐるまでのことだ。「うまくない言葉」でもいゝから、云へるなら云つてみるがいゝ、云へないのは、大抵は、そこになんにもない證據だ。ごく稀な場合として、ほんとに「うまい言葉」を探してゐるのもあらうが、要するに、言葉なしに存在してゐる思想などと云ふものは、決してあり得ないのだ。この實感が、やがて内容即表現の基とならなければならない。うまく云へると云ふことは、思想があたまのなかで、はつきりした形をとつてゐる證據だし、云ひ廻しがへただと云ふことは、考へ方があやふやだ、とみて差支ないのだ。高くあげてある水槽(タンク)に、うんと水が湛えられてゐれば、そこから導かれた水勢は、いやでも鋭く、停滯なく走り出るのと同じ理合で、ホースの太さによつては、彈丸のやうに遠くまで飛んだり、またドツと溢れ流れたり、それはいろ〳〵の形を取らうけれど、涸(か)れ〳〵に、ショビ〳〵タラ〳〵と、もの哀に滴る筈はないではないか。反對に、干いた水槽からは何も出る道理がない。人間が、自分たちの便利のために、自分たちで拵へた「言葉」なのだから、餘計な、使ひ道のないのもあるまいし、云ひたいだけのことは、十分とまでいかなくとも、結局云ひ表はせなければならない筈だ。どうしても云ひ表はせない思想が、あたまにだけは宿つてゐる、――もしそんなことがあつたら奇蹟だ。

思想は言葉ではない、然し言葉なしに、どんな思想でもが成立たないのだ。

定義的に云へば、かうなる。可なり婉く述べたから、この關係はもう解つて頂けたことゝ思ふ。

次には、或る一つの思想の表現でも、言葉の撰擇によつて、いろ〳〵に云へることを考へてみよう。例へば、私は行かうと思ふ、と云ふ思想だ。勿論そのまゝでもよい。「予は行かんと欲す」「僕は行きたい」「われ行かばや」「俺ア行くぜ」いろ〳〵になる。もつと複雜な思想になれば、それだけに變つた云ひ廻し方の數も多くなるわけだ。そこで「文藝的表現」――もつと解り易い言葉で云へば小説なら小説の「技巧」として、言葉の選擇の上に、どう云ふ心がけが要るか、と考へるに、それは第一に各作家の自由で、是非ともかくあるべし、と云ふほどのことはなく、作品によつて、作中の場合々々によつて、めい〳〵思ひ〳〵にやつて差支ないことだ。たゞ、ほんの大體的に、押つけがましくならないほど

の輕さで、私の心がけを述べるならば、第一には、「嘘」を書かないことだ。前にも云つた通り、嘘では、どだい表現にならないのが當り前で、文藝として、これは致命傷だ。「嘘」とは何かと云ふに、つまり「心にもないこと」だ。しつかりした實感がないことだ。この「實感のあるなし」と「經驗のあるなし」とを混同してゐる人々が、可成多いやうだ。勿論直接の經驗から得た實感ほどしつかりしたものはないわけだが、經驗はあるが、そこから大した實感を摑んでゐない人もあれば、直接の經驗こそないが、いくつかの間接の經驗が積もり積もつて、しつかりした實感になつて了ふ人もあるのだ。もし經驗のないことが書けないとなると、小說家は、社會百般のあらゆるところを、身をもつて經て來なければならないわけになるが、我田引水でなく、決してそんなものではない。男に生れながら、立派に女の實感を摑んでゐる作家がいくらもあるし、人殺しの氣持でもわからないと云へない。たゞ自分ばかり解つたつもりで、すつかり「嘘」になつてゐるやうな場合もあるが、そのへんの詳しいことは、後に行つて述べよう。

次には、誰にでも解り易く書くことだ。成可は、日常普通に使ふ言葉だけで、古事出典の小むづかしいのや、一部の流行語や、外國語などは、出來るだけ避けたい。云ふまでもなく、その主意は、一人でも多くの人に解つて貰ひたいからだ。と云つたところで、解らさうがために、纖細、微妙を缺き、匂や味や餘韻を失ふやうな場合には、勿論低級な讀者は犧牲にしても、藝術的良心につくべきだが、さう云ふ差支の起らない範圍內では、出來るだけ平易な言葉をよしとすると云ふ意味だ。それから、無駄をなくすることだ。無駄な言葉とは實感はあるのだが、その強度が伴はない場合だ。「つく〴〵いやになつた」などゝ力を入れて云つてみても、その實あんまりさうでもなさゝうなら、その「つく〴〵」だけは、遊んだ言葉になつて了ふ。また、「そいつがどうも、誠になんですが、兎に角なにしようぢやアありませんか……」などゝ何々づくしの無駄ばかり云つてゐても、そこに實感が充ち溢れてゐれば、すつかり生きて來る。遊んだ言葉の多い話は、聞いてゐて、馬鹿々々しく、退屈だ。文藝の表現と云つたところで、格別日常使つてゐる言葉と飛び離れたものではなく、しつかり解るやうに話せる人なら、――或は考へられる人なら、またそのやうに書けなければならない筈のものなのだ。

これを要するに、表現本來の意味は、ものそれ自身であり、第二の意味は、そのものそのまゝの影である。ものなくして影はない。ものがあり、これに光を投ずれば、必ず影がうつる。ものなしに、影だけを描かうとすれば、間違ひが出來るのは當然のことだ。」

前號までの章、節の切り方、並に標題を、少しく變更いたしましたから、序に初からそつくり、次に掲げることにいたしました。」

山櫻廿五首

若山牧水

伊豆天城山の北麓狩野川の上流なる湯が島の溪谷に山櫻はなはだ多し、この春其處の溫泉に遊びて朝夕に詠み出でたる歌のなかより廿五首を錄す

○

うすべにの葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花

○

うらうらと空のひかりにけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花

○

水あさぎうるほひわたる曙(あけぼの)のみそらのもとの山ざくら花

○

花も葉もひかりしめらひわれのうへに笑(ゑ)みかたむける山ざくら花

○

朝づく日しめらひ照れる木(こ)がくれに水漬(かづ)けるごとき山ざくら花

○

かきすわる道ばたの芝(しば)は枯れたれや坐りてあふぐ山さくら花

○

清らかさいまは言葉のほかに見ゆる山ざくらの花を拜みまをす

○

つめたきは山ざくらの性にあるならむながめつめたき山ざくら花

○

おほぞらは光りけぶらひ山ざくら咲ける木蔭の雨のかがやき

○

瀬々走るやまめうぐひのうろくづのうつくしきころの山ざくら花

○

若木散り老木おくれて咲きいづる渓のはたなる山ざくら花

○

岩かげに立ちてわが釣る淵のうへに櫻ひまなく散りてゐるなり

○

山ざくら散りしくところ眞白くぞ小石かたまる岩のくぼみに

○

吊橋のゆるるあやふさわたりつつおぼつかなくも見し山ざくら

○

椎松の木むらに風はこもりたれ咲きまじらへる山ざくら花

椎の木のしげみがしたのそば道に散りこぼれたる山ざくら花

○

とほ山の峰越の雲のかがやくや峰のこなたの山ざくら花

○

刈りならす枯萱山の山はらに咲きかがよへる山ざくら花

○

萱山にとびとびに咲ける山ざくら若木にしあれや葉のみかがやく

○

日は雲に影を浮かせつ山なみの疊れる峰の山ざくら花

○

つばくらめひるがへりとぶ渓あひの山ざくらの花は褪せにけるかも

○

今朝の晴青あらしめきて渓間より吹きあぐる風に櫻ちるなり

○

散りのこる花びらのいろ葉がくれに漏れ見えて白き山ざくら花

○

山ざくら散りすぎにけり昨日けふ雨にいよいよ葉のうつくしく

○

山ざくら散りのこりゐてうすいろにくれなゐふふむ葉のいろぞよき

新獨逸の獨裁王

室伏高信

一

スチンネスのことは日本にも大分評判になつてゐるようである。革命後の獨逸でスチンネスの評判が高くなることは獨逸革命への大きな皮肉であるが、實際に、獨逸革命がカイゼルをポツダムからアメロンゲンへ追ふてから、この國を支配する力は大統領のエーベルトでもないし、總理大臣の何にそれでもない。獨逸の議事堂の石段から「血のなき革命」を宣言したシャイデマンの得意時代はとうに過ぎ去つてしまつて、彼は今は田舎の一市長に靜まりかへつてゐる。獨逸の共產黨は嘗てはもう一息といふところまで進んだが、リープクネヒトもロオザ・ルクセンブルとも殺されてからは、指導的人物の欠乏難に苦しむでゐるし、獨立社會黨も既に久しく感激を失つてゐる。獨逸の勞働組合は逝けるレギエンの異常な組織的才能のもとに、今まは一千三百萬からの會員を網羅してゐて世界最大のものではあるが、しかしこの頭數をもつてしても革命獨逸の無產階級は尙ほ依然として奴隷階級から脫けることはできないでゐる。この獨逸革命の無能を前にして、一人の巨人が、傷ける支配階級を鼓舞しながら、そして冷やかに革命の無能を嘲りながら、新らしい獨逸に君臨しつゝある。フーゴー・スチンネスがこれである。

彼は新獨逸の『王(ケーニッヒ)』であるといはれてゐた。否、獨逸共和國が『スチンネス共和國(レプブリーク)』であるとさへいはれてゐるのである。實際今の獨逸へ旅行する者は、大統領が誰れであるかを知らないでも居られるのである。またハウプトマンや、ラーテナウや、アインシタインなぞのような才能を知らないでも居られるのである。しかしスチンネスの名を聞かなくては、學者でも、政治家でも、實業家でも、新聞記者でも、若しくは勞働者でも、一日もこの國に止まることができない、といつても、說

して誇張でも何んでもない。政治に、産業に、信用に、輿論に、スチンネスは實にその手に獨逸の國民生活の大動脈を握りしめてゐるからである。

二

伯林のウンタア・テン・リンデンの街は長さにしても、八丁もあるであらう。一方の端には舊王城が昔ながらに聳えてゐるが、今は田舍からの見物人が、三々五々この門に出入するのを見るだけである。他の一方の端に凱旋門があつて、門を挾んで獨逸國會議事堂と、そしてホテル・アドロンとを見る。議事堂は外觀も非常に壯麗だし、革命後の獨逸の政治上の權力はこゝから流れでてくる筈なのであるが、しかし實際には、世界の凡ての國におけると同樣に、國會はたゞ饒舌家の討論場であり、陣笠連の喝采場であるに過ぎなくなつてゐるのである。新獨逸における、ほんとうの王城は却つてホテル・アドロンだとさへいはれてゐるのを聞く。

ホテル・アドロンは勿論一私人の經營になるものではあるが、伯林第一のホテルとして、常に貴族や大金持ちやがこゝに出入する。一夕一萬マークもするといふ賣女が狂態をたゞよわせる。左程立派な外觀ではないが、何にしろ伯林きつての、華美と榮華の中心であると見られてゐる。こゝの三階にスチンネスが止宿する。

スチンネスは社交や虛榮やには無關涉な無骨漢である。彼は何時でも有名な山高帽をかぶつて、太い金鎖を胸にぶら下げて、針のような髯を生やして、この華美の中心に横行する。彼の顏は丸で鐵のようである。毛虫のような眉毛をしかめて、眉間に二すぢの皺を隆起させてゐるところは、どうしても血の通ふ人間だとは思はれない。實際彼は人間ぢやない。彼はたゞ力なのである。彼がその頑丈な靴でホテルの廊下を歩るいてゐる時に、足の先きから頭の頂邊まで、彼の姿は一本の鐵の棒である。廊下をすれ違つても、彼に話しかけるものもないし、また彼には他人から話しかけられるような餘裕を示してゐないのである。彼はウオール街を急ぐアメリカ人のようにホテルの廊下を急ぐのである。食堂へ下りて行く時だつて、彼のすきな音樂を聽きに行く時だつて、何時でも彼は馬車馬のような歩るき方である。彼は音樂にだけは趣味をもつてゐて、ホテルの音樂手は、彼から少からぬ酒手（トリンクゲルト）をもらふといふ話であるが、その音樂を聽くのさへ、彼にとつては實業（ゲシエフト）の一つなのである。彼の食卓には、美しい食物と珍らしい酒の限りとが運ばれるのであるが、それも彼にとつては矢張り實業（ゲシエフト）の一つなのであらう。

あらゆる資源も彼にとつてはたゞ實業の一つなのである。實業の目的のためなのである。彼の食卓には始終幾人かの客が腰掛けてはゐるが、たゞの一人だつて、社交上の目的から撰まれたものなぞはない。

彼の室はパリザア・ブラックを見下ろしてゐるから、また從つて佛蘭西大使館をも、國會議事堂をも眼下に見下ろしてゐるのである。そこには始終訪問客が詰めよせてゐるといふが、しかもそれはこうした人にあり勝ちな訪問記者や、若しくはかれこれ屋の類ひではなくて、スチンネス王國の大臣、宰相、支配人、頭取といつたような人々、もつと詳しくいふと、彼の號令のもとに立つ政治家や、新聞の主筆や、銀行の總裁や、炭坑會社の支配人や、船會社の重役や、こうした人々の一群なのである。こうした人々を集めて、ホテル・アドロンの一角から、産業に、信用に、政治に、輿論に號令する。ホテル・アドロンこそ新獨逸におけるほんとうの王城である。ボーヘンツオレルン家がルスト・ガルテンに滅びて、スチンネス家がパリザー・ブラックに君臨したといはれてゐるのである。

三

フーゴー・スチンネスは一八七〇年二月十二日にミユールハイムの町に生れた。ミユールハイムは彼の故郷であるとともに、またスチンネス王朝の發祥地である。そこは獨逸の富、或は歐羅巴大陸の富の中心地ともいふべきラインランドの中にあつて、ケルンの町と隣り合ひつゝ、豊かなラインの河の河べりに添ふてゐる工業の町である。

スチンネス王朝の礎石を据えたのは、彼の祖父のマチアスであつた。マチアス・スチンネスは、最初はライン河を上下する一水夫であつた。小供の時から勇敢で温柔で、學校を勉強する性質であつたが、青年になるとともに水夫の生活に入つた。こゝに彼の歴史が始まつたのである。そして同時にスチンネス王朝の歴史が始まつたのである。マチアスの傳記家に從へば、少年マチアスは、既に彼の十八歳の時に、彼の後年の大事業が如何なる礎石のうへに立つべきかを知つてゐた。航運と、炭礦業と、そして石炭商賣との、所謂『三企業の聯合』がこれであつた。そしてこの三企業聯合（ヘライニイグング、ドライエル、ウンタアネームンゲン）こそ、また實にスチンネス王朝の礎石であつたのである。この大計劃の夢想者であつたマチアスが、この大計劃のために、最初に投じた金は一千二百四十ターラーにしか過ぎなかつた。しかし彼が一八四五年に死んだ時には、彼の會社の資本金は既に五十萬ターラーに達してゐたし、彼の三百六十人の水夫がライン河に働き、四十人の技術人

夫と、二十人の運送人夫とが彼のために働いてゐた。マチアス家はもうミユールハイムでは動かすべからざる基礎を築きあげてゐたのである。その息に第二世マチアスがあり、その後に養子が嗣ぎ、最後に第三世マチアスの末子が支配者となり、そしてその兒としてフーゴー・スチンネスが生れたのである。スチンネスが世を嗣いだのは一八九二年、彼が二十二歳の時であつた。

彼は初め商業學校に通つてゐたが、その後に親戚の經營する一會社の雇員になり、後に少しばかりの鑛山學校生活を送つて、再び祖父の會社に働いた。父が死んだ時に、彼はもうラインランドに於ける富豪の主人として、鑛山の持主として、押しも押されもしない大實業家の地位に据えられてゐたのであるが、彼は鑛山業についての實際上の知識をうるために、自ら進んで坑夫となつて、坑内のうす闇い中で、鶴嘴を手にして働いたのである。その鶴嘴を握つた手がやがて全獨逸の大動脈を握りこめる手となつたのである。

四

スチンネスの祖父マチアスの事業上の根本礎石が三企業聯合のうへにあつたように、彼の事業上の根本觀念もまたこの事業聯合のうへにあるといふことができるであらう。彼がこの考から最初に成功した大事業はライン・ウエストハリア電氣工場とドイッチ・ルクセンブルヒ鑛山及鎔鑛爐會社との連合であつた。このドイッチ・ルクセンブルヒ鑛山及鎔鑛爐會社即ち『ドイッチ・ルクス』こそ彼の志を爲すべき第一の舞臺であるが、それは、その會社の事業のためだけ、二億五千萬圓金貨マーク（株式及信用）の大銀行が設けられてゐるほどの大企業である。そしてこの會社の重役には前大臣デルンブルヒのような人が坐つてゐた。スチンネスがそれを指導するようになつたのは一九〇七年からである。この會社には四十二人の重役がゐるが、しかし決議權のあるものはたつた三人の委員であり、しかもその三人の決議權なるものも、實は一人の委員長——フーゴー・スチンネス——の獨裁權に服從するの組織となつてゐるのである。これがスチンネス・スタッートの特色なのである。一企業を手に入れると更にそれと關係する他の企業へ、スチンネス傳の一記者の言葉でいふと大（グロス）から比較大（グロエセル）へ、比較大から最大（グロエスト）へと、彼はそれからそれへと、彼の勢力を擴めて行くのである。一九一〇年には、「ドイッチ・ルクス」は最早やクルップやゲルゼンキルヘンなぞと並んで、獨逸における第一流の鑛山王としての地位を占めたのである。

しかも世界戰爭の始まるまでは、彼の威望はまだラインランドの一角に及んでゐたに過ぎなかつた。彼が全獨逸の財界に巨腕を動かすやうになつたのは戰爭からである。彼はこの戰爭で大儲けをした獨逸きつての親玉であつた。戰爭の始まる當時には、彼の財産はまだ二、三千萬マークだといはれたものを、今日の彼は、どう少く見積もつても十億金貨マーク以上の大資産家であるとされてゐる。卽ち戰爭が始まつてから、七、八年の間に彼の財産は優に三十倍內外にも達したのである。

世界大戰中に、スチンネスの演じた役割は異常なものであつた。クルップの名は戰前に高かつたのであるが、戰爭中においてそして戰後においては勿論、クルップの盛名は最早や一つの傳說と化した。戰爭中に、獨逸軍の背後にあつて、軍需品其他の物質の供給のために、異常な才能と威力とを現はしたものとしては、ヴアルタア・ラーテナウとフーゴー・スチンネスの二人であつた。最高戰爭會議における巨人の一人としてのスチンネスはカイゼルや、ルーデンドルフや、若しくはヒンデブルヒ等を助けて、或はこれ等の政治的若しくは軍事的獨裁官をとほして、戰爭における經濟關係を思ふ存分に指導した。獨逸軍の白耳義における、若しくは佛蘭西國境內における破壞行動は、單なる軍事上の必要なり、目的からばかりでなくて、經濟上の目的から離れては考へることのできないものであるが、この破壞こそ、スチンネスの限りなき慾望と、そしてその慘忍無慈悲な方寸とから生れ出たものであるとされてゐるのである。

戰爭が敗けた時に、そして革命が始まつた時に、戰爭中の凡ての英雄兒は相繼いで零落の底へと落とされた。しかしヒンデブルヒがどこかの下宿屋の隅に身を隱くしてゐた時に、カイゼルが巨大の富を抱いて和蘭へ逃れたやうに、スチンネスの巨富は、少からず和蘭の會社に投資されて、戰敗と革命との脅威から保障されてゐたのであつた。

五

スチンネスが今日の獨逸の財界にもつてゐる勢力範圍、スチンネス王國の經濟的頭域を正確に知ることは容易でないが、先づその最大の基礎は疑ひもなく「ライン・エルベ・ウニオン」である。そは「ドイッチ・ルクス」において結晶されてゐる。十四の炭坑と、千五百のコークス竈、七つの鐵坑、五つの製鐵鋼所その他がそれに屬してゐる。

「ドイッチ・ルクス」はゲルガンキルヘン礦業株式會社と永續的利益團體契約の關係にある。後者は十六の炭坑、九つの製鐵鋼所とをもつてゐる。ボヒユーマー聯盟もまたドイッチ・ルク

スに對してゲルゼンキルヘンと同樣の關係にあるが、それも四つの炭坑と二つの製鐵鋼所を所持してゐる。そしてこの三企業聯合の資産は六億マーク（大部分金貨マーク）と計算されてゐる。またこの「ライン・エルベ・ウニオン」の一年の生產額は一千六百萬噸の石炭と三百二十萬噸のコークス、一百十萬噸の壓搾炭であり、「ライン・エルベ・ウニオン」の全資本の五分の一はスチンネス家の所有に屬してゐる。その上にスチンネスはまた「ミユールハイム礦業聯盟」の社長でもあり、更に中央獨逸における褐炭業にも手を伸ばしてゐる。即ち三十五の褐炭坑、十五の壓搾炭工業その他の所有者としてのリーベック礦業會社を手に入れてゐるのである。次はライン・ウエストリハリア電氣會社で、それは一九一九——二〇年に六億二千六百萬キロワツトの電力を計量されてゐるほどの會社で、またこの會社と關連してスチンネスの手はロッデル礦山會社にも及ぶ。ロッデルの一年の褐炭の產額は六百萬噸と計へられてゐる。こういふわけでスチンネスの手は全獨逸における炭礦業中、七十餘の炭坑を支配するの地位にあつて、炭礦業者としては勿論獨逸きつての親玉である。しかしスチンネスはたゞ炭礦王として收まつてゐるような簡單な事業家ではない。

彼は先づ炭礦業と鐵礦業との密接な關係に目をつける。またそれ等の事業にとつて海陸運輸事業の密接な關係に目をつける。南獨鐵道會社、「ライン航運」なぞは彼の勢力のもとに至つてゐる。東アフリカ線、ハンブルヒ交通株式會社なぞもまた彼の勢力下に屬する。彼はまた伯林、ハンブルヒ、フランクフルト・アム・マインなぞにおける多くのホテルの所有者である。彼の手は更に化學工業に及ぶ。ハノーバアの化學工業株式會社、伯林の化學製造所、その他の化學事業が彼の勢力下に屬する。彼はまた製紙事業にも手を擴ろげ、ケーニツヒ製紙會社、北獨製紙會社なぞは彼の勢力に屬するし、また書籍會社にも關係し、現に北獨書籍印刷出版會社を初め數種の出版會社を經營する。シーメンス・シユッケルトともまた彼の勢力範圍として計へられる。

彼の手は殆んど獨逸のあらゆる產業に及んでゐる。曰く炭礦、曰く鐵礦、曰く造船、曰く製紙、曰く銀行、曰く劇場、ホテル、活動寫眞、曰く染料、それから兩替相場と、彼の勢力の及ばないところはないといつてもいゝ位ひである。彼は現に二十一會社の社長でもあり、更に他の二十六會社の重役でもあり、そして勿論現代獨逸における隨一の富豪であり、六十萬の勞働者はスチンネスのために働くところの使用人なのである。

六

こういふわけでスチンネスは獨逸の實業界きつての巨人であつて、その獨逸における地位はロツクフエラーやモルガンが米國におけるそれよりも遙に偉大なものだとされてゐるのである。彼が經濟上において、なさんとして爲しえられざるものはなく、如何なる困難な事業であつても彼が一度舞臺に現はれると忽ち成功の緒に就くとさへいはれてゐるのである。彼は實に獨逸經濟界の主なのである。その獨裁王なのである。しかも彼の勢力は獨逸の國境を破つて既に墺太利にも波蘭にも、そして今やロシアにも及ぼうとしてゐるのである。しかし彼の求むるものは單なる富ではない。凡ての資本家がそうであるごとく、彼の求めるものは單なる富ではない。彼の求めるものは實に權力（マハト）なのである。こゝにおいて彼は單なる實業界の巨人としては滿足ができない。彼の眼は政治のうへに光る。

政治家としてのスチンネスは獨逸人民黨（ドイチエフオルクスパルタイ）に屬する。人民黨は獨逸國會に六十五人の代議士をもつてゐるから社會民主黨、中央黨、及び獨逸國民的人民黨（ドイツチナチヨナーレ）に次いでの第四番目の政黨であるに過ぎないが、しかし獨逸の政界における彼の地位はこうした頭數によつてのみ判斷するわけにはゆかない。何となればこの人民黨は獨逸における大資本家の代表的政黨であつて、從つてその立場は常に大資本家、從つて獨逸の財權を代表してゐるものであるからである。

獨逸人民黨は獨逸國民的人民黨のような軍國主義的保守黨ではないのであるが、しかし資本主義的保守主義を奉じ、君主主義を奉ずる。この政黨の表面に立つて代辨しつゝあるはストレーゼマンであるが、しかし實際の權力を握りしめてゐるのはスチンネスであり、ストレーゼマンのやうな政治家はたゞスチンネスの代辨人にしか過ぎないとさへいはれてゐるのである。

獨逸の政界は、今日八つの政黨に分れてはゐるが、中心の勢力をなしてゐるものは社會民主黨と獨逸人民黨の二つであるといつてもいゝであらう。この二大勢力の接觸、若しくは鬪爭を中心として今日の獨逸の政界は動くのである。またこの二大勢力の接觸若しくは鬪爭によつて今日の獨逸の諸政策が決定されてゆくのである。資本主義を奉ずる人民黨と社會主義を奉ずる社會民主黨、社會化を主張する社會民主黨と自由經濟を主張する人民黨、財産税を主張する社會民主黨と間接税を主張する人民黨、つまり資本主義と社會主義との接觸と鬪爭の舞臺なのである。そして一方は頭數がこれを支配し、他方はフーゴー・スチンネスがこれを支配する。

「大統領エーベルトは、一九一九年三月の告査のうちで、社會化が行進するといつたことがある。しかし行進するのは社會化ではなくて、スチンネス化である。Stinnesierung marschiert.」——合同共產黨の機關紙「赤旗」にこういふ記事が現はれたことがあつた。社會民主黨が昨年のゲールリッツの會議で人民黨との妥協を決議してから、スチンネヂイエルングは、益々得意の時代にと入つてきたようである。今年二月になつてからのヴヰルト內閣の租稅政策はスチンネヂエルングの勝利だとして左翼社會黨から猛烈な攻擊をうけつゝある。スチンネスも、その黨與も、無論ヴエルト內閣の一つの椅子をも占めてはゐないが、この租稅政策の妥協によつて、この內閣はスチンネスとの聯立內閣 Stinneskoalition 若しくは「大聯合」Grossse Koalition といはれるようになつた。

七

政治上の權力、經濟上の權力とともに、スチンネスの眼の光つてゐるのは、輿論の權力である。彼は新聞事業が資本主義の權力にとつて必要缺くべからざる一部分であることを早くから見ぬひてゐた。彼は新聞紙が輿論なるものを商品化するの力をよく知つてゐた。そこで彼は新聞を自分の手に入れて、それを彼の資本主義の一部分として、多くの新聞記者を彼のための合唱の機關として、スチンネス王國の權力を、輿論のうへにも築こうとしたのである。つまり新聞紙とは、スチンネスにとつては、他の凡ての新聞資本家にとつてと同樣に、商品としての輿論を製造し、販賣し、指導するための合唱機關であるに過ぎないのである。勿論彼の新聞は、他の資本主義の凡ての諸新聞と同樣に、眞理（ワールハイト）と正義（ゲレヒチフロカイト）とを標榜するのであるが。

スチンネスの中央機關紙として知られてゐるのは「ドイッチエ・アルゲマイネ・ツアイツング」である。この新聞はカイゼルの時代には獨逸政府の半官報として知られてゐたが、今日はスチンネス王朝の中央機關として、獨逸の財界、政界に重きをなしてゐる。伯林における最大新聞の一つである。これと並んで「ベルリーナー・ロカール・アンツアイゲル」がある。これもまたスチンネス新聞として知られてゐる有力新聞の一つである。それから「商工新聞」、「ドイッチエ・ヴアルヲ」、「ポスト」、「ライユッシ・ヴエストハリッシユ・ツアイツング」、「ミユンヘン・アウグスブルゲル・ツアイツング」なぞもまた彼に屬する。有名な諷刺週刊のシ「ムプリシシムス」もまたスチンネスの手に入つた。通信機關としての「テレゲラーヘンウニオン」も彼の勢力のもとに立つ。ヴヰーンにも有力な新聞を買ひ入れた。フーゴー・スチンネ

スの所有に屬する新聞紙は實に七十の多きに達するとのことである。炭礦王である彼はまた新聞王である。英國のロンダ卿に比べられる彼は、また英國のノースクリフ卿に比べられる。石炭の價をつり上げて、そして新聞で合唱させる。六十萬の勞働者を毎日絞り取つて、新聞記者に讃美させる。彼の行く所、彼の爲すところ、彼の一顰一笑に、新聞記者の一團が相和する。輿論とはかくのごとくにして生れる。スチンネスこそ世界における最大の「輿論」の代表者である。何となれば資本主義の新聞紙によつて代表される近代の輿論なるものは商品の一種であるに過ぎないからである。

八

『權力は金から生れる。』——スチンネスの生涯は、近代資本主義の諸國家における、この偉大なる眞理を證據立てるための、偉大な記錄である。世界戰爭は、獨逸一國に、六百萬人からの犧牲を課した。その犧牲のうへに、スチンネス王朝が建設された。戰爭後の大混亂のうちに、スチンネス王朝の權力は限りなく伸びてゆく。獨逸共和國は衆人の代りに一人が支配する。人間の代りに黄金が支配する。わがスチンネスこそ近代資本主義が產み出した最大の英雄兒である。現代の資本主義は、彼によつて最大の代表者を見出した。彼は現代資本主義のあらゆる暗黒面を代表する。階級鬪爭の面前において、斷末魔の資本主義が、到るところに醜惡面をさらけ出してゐるように、フーゴー・スチンネスは、その目的のためには、如何なる醜惡な手段でも撰まない。彼にはたゞ一つのものだけが價値のあるものであるからである。金、そして權力。彼はこの意味で、現代の資本主義の世界における、時代精神の權化である。

博物學者の登山

――ファブルの昆虫記から――

大杉榮

一

其の孤立してゐるところから、四方八方自由に空氣の作用の影響に曝らされ、又其の高く聳えてゐるところから、アルプスやピレネの國境山脈の手前でフランスの最高點となつてゐる、プロヴアレスの禿山ヴアントウ山は、氣候による植物の分布の研究に非常にいゝ山である。

麓には、寒がりのオリイヴの木や、其の香ばしい香が地中海地方の太陽を要求するたちぢやかう草のやうな半木質の植物の數々が、繁盛してゐる。又、一年の少くとも半分は雪で蔽はれてゐる頂きには、北方の植物相、しかも其の或者は北極の海濱から借りて來たものが、地を蔽ふてゐる。半日の登山は、同じ子午線に從つて南から北へと行く長い旅行の間に出遇ふ主なる植物を次ぎ次ぎに見せてくれる。先づ出かける時には、諸君の足は麓の坂に敷きつめた毛氈のやうになつてゐる、たちぢやかう草の香ばしい繁みを踏みにじる。が、數時間の後には、諸君の足は、七月にスピッツベルゲンの峯に上陸した植物學者が始めて出遇ふ植物の、對生葉のゆきのしたのくすんだ座布團の上を踏むであらう。麓の垣根では、諸君はアフリカの空の友達であるざくろの赤い花を摘む。が、上の方では、小さな石のかけらの屋根の下に其の莖を寄せてゐる、毛もじやくしやの小さなけしの花を摘むであらう。これはグリインランドやノオス・ケエプの氷原の中には、此のヴアントウ山の頂上の坂に於けると同じやうに、其の大きな黄色い花を開いてゐるのだ。

かう云つた對照はいつでも新しみがある。そしてそれは、二十五度も登つて見た私に、まだそれを飽きさせる事が出來ないのだ。一八六五年の八月に、二十三回目の登山をやつた。皆んなで八人ゐた。其の三人は植物學が目的であつた。そしてあとの五人は山を登る事と高いところからの眺望とに釣りこまれて

行つたのであつた。植物の研究にはちつとも興味のない此の五人の連れの一人も、其の後二度と私と一緒に行かうと云はなかつた。實際其の登山はつらいものだ。日の出の眺めなぞは到底其の疲れを癒すには足りない。」

ヴァントウ山は道普請をするために割つた石を積み重ねたものだと思へばいゝ。今ふいに其の割り石を二千米突の高さに積んで、其の裾を相應の廣さにして、そして其の石灰岩の白い上に黒い森の斑をつけて見るとする。それで此の山に就いての大體の正確な觀念が得られよう。此の破片——時としては小さなかけらや時としては大きな岩や——の堆積が、裾野もなく、又段々になつた台地もなしに平原から直ぐと突つ立つて居る。若しそんな裾野や台地があれば、一合目二合目と云ふやうに道を分けて、其の登山ももつと樂になるのだ。

其の登山は直ぐと岩だらけの道で始まる。其の一番いゝところでも近頃小石を敷いたばかりの道よりも惡い。そしてそれは、高さ一千九百十二米突（六千尺餘）の絶頂まで、たゞ險しくなつて行くばかりなのだ。せい／＼する芝草だとか、さら／＼と流れる小川だとか、苔のついた岩だとか、幾百年もたつた大木の廣い蔭だとか、其他ほかの山にはあれ程愛嬌のあるさうした一切の事が、こゝにはないのだ。そして其の代りに、霰のやうに碎けて、殆んど金屬のやうな戞々する音をたてゝ足下に轉がつて行く、石灰岩の塊がいつまでゞも續いて行くのだ。ヴァントウ山の瀧と云ふのは小石の流れである。崩れ落ちて行く岩のころ／＼と云ふのがこゝでは水の囁きの代りになつてゐる。

二

吾々は今山の麓のベドワンにゐる。案内者との談判も濟んだ。出發の時間もきまつた。持つて行くたべ物に就いていろんな議論があつて、それも準備された。寢よう、明日は山の上で一晩夜あかしをしなければならない。が此の眠ると云ふ事が實に難しい、私は嘗つてうまく眠れた事がない。そして疲勞の主な原因はそこにあるのだ。で、私はヴァントウ山へ植物採集の登山をしようと云ふ讀者諸君に、日曜日の晩にベドワンに着かないやうに忠告する。かくして諸君はカフエ兼宿屋の出はいりの騒がしさや、高い聲での終る事のない會話や、球突場でのキャノンの響きや、皿小鉢の音や、醉つぱらひの小歌や、道行く人の鼻歌や、近くの舞踏場での眞鍮樂器のがちや／＼音や、其他此の無爲と歡樂との翌日には免れないいろんなうるささを避ける事が出來るだらう。が、諸君は日曜日でない日にはもつとよく休めるであらうか。私はそれを望む。が、其の保證は出來ない。私はどうかと云ふと、目を閉ぢる事が出來なかつた。一

晩ぢう、私達のたべ物を造るために働いてゐる錆びた燒串廻しが、私の寝室の下でがた〳〵音を立てゝゐた。私は此のやかましい器械と僅かに薄い床板一枚しか離れてゐなかつたのだ。」

　しかしもう空が白んで來た。驢馬が窓の下で鳴いた。もう時間だ。起きよう。寝ない方がよかつた位だ。辨當も荷物も馬につまれた。案内人が『はい、はい』と叫ぶ聲と共に、私達は出發した。それは朝の四時だつた。此の一隊の先頭には、トリブウレが其の騾馬と驢馬とを曳いて進んで行つた。トリブウレはヴアントウ登山の案内人の中の年寄株だ。私の植物學の仲間は明けがたのせい〳〵した光りの中で、道の兩側の植物を探り探り行つた。ほかの者等は話しながら行つた。そして私は、氣壓計を肩に下げ、ノオトと鉛筆を手に持つて、其の一隊について行つた。

　主な植物帶の高度を計るために持つて來た私の氣壓計は、直ぐにラム酒の水筒を傾ける口實となつた。何にか珍らしい植物が見つかると、誰れかゞ『早く、バロメタアを見てくれ』と叫んで、皆んなが急いで水筒のまはりに集まつた。そして物理學の器械の方はあと廻しになつた。朝の涼しいのと歩くのとで、此の氣壓計を見る事が大いに稱賛されて、此の强壯劑の水準の方が水銀の柱のそれよりも遙かに早く下つて行つた。そして私は將來のためを慮つて、此のトリチエリ管を見る事をもつと遠慮しなければならなくなつた。

　溫度があまり低くなるので、先づオリイヴや青オオクがだんだんなくなつて行く。次には桑や、胡桃や、白オオクがなくなる。黄楊(つげ)が多くなつて行く。それから、耕地の終りから山毛欅林の一番下の境まで擴がつてゐる、單調な地帶にはいつて行く。そこでの主な植物は山きだちはつかだ。これは、揮發油を含んでゐる。其の小さな葉がぴりつとする味のあるところから、此の邊では『驢馬の胡椒』と云はれてゐる。辨當の中にはいつてゐる小さなチイズに此のきつい藥味をふりかける。もう既に、私達の中には、此のチイズを心の中で憐んでゐるものが、一人ならず二人ならずあるのだ。そして又、驢馬が荷なつてゐる辨當の袋をよだれを垂しながら見たものが一人ならず二人ならずあるのだ。此のつらい朝早くからの運動のために、食慾が出て來たのだ。食慾と云ふより以上に、もう堪へられない程の空腹、ホオラスが『犬の胃の腑のやうに』と云つた程になつたのだ、私は此の次ぎに休むまで此の胃の腑の死苦を瞞して置く事を皆んなに教へた。私は小石の間の矢の根のやうな葉をした小さなすかんぽを指さして見せた。私みづからが其の先例を示して、それを一口摘まんだ。皆んなは始め私の云つた事を笑つた。私は笑はして置いた。そして直ぐと、皆んなが我れ勝ちになつて

此の貴重なすかんぽを摘みとつてゐるのを見た。

此の酸つぱい葉を嚙みながら行くと、山毛欅林に着く。始めは、ところどころに、地に匍つてゐる大きな灌木の藪であつたのが。やがては、小さな木が一本一本密集してゐる林となり。遂には、大きな幹の、厚いそして暗い森となつた。冬重い雪をいやと云ふ程負はされ、又一年ぢう北風の荒い氣息に打たれて、多くは害められて、或は妙な恰好に捩れたり、或は又地に横はつたりもしてゐる。一時間あまり、遠くから見るとヴアントゥ山の側面に黑い帶のやうに見える、此の森林帶を通つて行く。すると又山毛欅の木が灌木のやうになつて、あちこちに斑に生えてゐるようになる。私達は其の上の方の限界に達したのだ。そして皆んなは大喜びで、すかんぽの葉などは打ち棄てゝ晝飯の場所に選ばれた休み場に着いたのだ。

三

そこにはグラアヴの泉がある。それは、地から湧いて來るのを山毛欅の幹で造つた長い樋の中に受けた、糸のやうに細い水の流れだ。そしてそこへ山の羊飼ひ等が其の羊に水を飲ませに來るところなのだ。水の温度は七度（華氏四十五度）で平原の酷暑の中から來た吾々には、如何んともする事の出來ない冷さだ。其の水面にはいろんな高原植物の綺麗な毛氈の上に横つてゐて、銀の鱗のやうな大きな薄い苞を持つた、いぶきぢやかう草のやうな葉のいぬなつななども其の間に光つてゐる。

辨當は袋の中から取り出された。いろんな瓶も乾草の床の中から取り出された。こつちには、韮をつめた羊の股だの、パンの塊りだの、腹ごたへのあるものがある。あつちには又、さうしたものでうんと餓えてゐる腹をおさへて置いて、暫く奥齒を娛しませやうと云ふ、味のない雛の肉がある。そして、そこから遠くない名譽の席には、山きだちはつか入りのヴアントウ・チイズがある。『驢馬の胡椒』入りのチイズだ。又、其の直ぐそばには、アルヽの腸詰があつて、其の薔薇色の肉が膩肉と胡椒の丸粒とで大理石模様をつけられてゐる。片つ方の隅には、まだ鹽水が流れてゐる靑いオリイヴの實がある。油で味をつけた黑いオリイヴの實がある。そしてもう一方の隅には、カヴアイヨンのメロンがある。白い肉のもある。オレンヂ色の肉もある。それは好き好きがあるからだ。そこには又、ひしこソオスの瓶がある。これは飲むと足が丈夫になる。そして最後に、樋の氷つたやうな水の中に冷やしてある瓶がある。何にかまだ云ひ落してゐやしないか。さうだ、鹽をつけて生で食へる、メエトル・デセエルの玉葱を忘れてゐた。私達の中に二人のパリつ

子がゐたが、即ち私の植物學の仲間がさうなのだが、其の二人は最初此の獻立があまりに興奮劑の多すぎるのに少々驚いてゐた。が、やがて二人は眞先きになつてそれを讃め立てるだらう。用意は出來た。さあ、食べよう。

かくして生涯の紀念になるやうな大變な食事が始まる。最初の幾ほゝばりかは氣違ひのやうなものだ。羊の肉きれやパンきれがすばらしい早さで相次ぐ。皆んなは辨當の上に不安な目ざしを向けながら、其の心配を人には云はずに自分だけで考へる。

『こんな風にして食つて行つたら、今晩のやあしたのは殘るんだらうか。』

が、やがて餓えは靜まる。始めには默つて食つてゐたが、今はもう話しながら食つてゐる。それであしたの心配も治まる。皆んなは、獻立かたが此の餓鬼のやうなたべ方を豫想して、十分それに負けないやうに準備して來た事を賞める。そしてこんどは食通らしく其の食べ物を賞める番になる。一人が其のナイフのさきで突き刺してゐるオリイヴの實を賞める。第二の人が、其のパンの上に石黄色の小さな魚を切りながら、ひしこのソオスを賞める。第三の人が熱心に腸詰を賞める。そして皆んなが一緒になつて掌程の大きなの『驢馬の胡椒』入りのチイズを賞める。パイプや葉卷に火をつける。仰向きになつて草の上に横になる。

かうして一時間ばかり休んで起き上つた。時間が迫つて來る。又歩き出さなければならないのだ。案内人は荷物と一緒に、驢馬の通れるやうな小徑のある森の縁を廻つて、西の方へ一人で行つた。彼れはもう、高さ一千五百五十米突の、山毛欅の森の上の境にあるジヤスのところで、私達を待つてゐるだらう。此のジヤスと云ふのは、夜人や馬を休ませる大きな石の小屋である。私達は猶頂上まで登りつづけて行かう。其の方が一番の絶頂に登り易い。そして日が暮れたら、此の頂上から、そこにはもうとうに案内人が着いてゐる筈のジヤスへ降りて行かう。と云ふ案になつてゐたのだ。

四

頂上に着いた。南の方には、目のとゞく限り、私達が登つて來た比較的緩い坂が展びてゐる。北の方は實に無茶な壯大な景色だ。時としては斷崖になつたり、時としては又恐ろしいやうな勾配の段々になつたりしながら、全山が要するに高さ一千五百米突の斷岩絶壁になつてゐるのだ。石を投げると、それがいつまでも轉がりやまずに、リボンのやうになつてうねつてゐるトウルウランク川の見える谷底まで、ごろ〳〵轉がつて行く。

連れの者等が大きな岩を起しては、それを谷底へ轉がしてやつて、其のごろ〱轉げて行くのを見てゐる間に、私は大きな平たい石の下に舊知の毛深のアモフイルを探してゐた。此の蜂は、いつも私は平原の道の崖の上に一人でゐるのを見るのであるが、此のヴアントウ山の頂上では一つの岩の下に幾百も一と塊りに群れをなしてゐるのを見るのである。

私は此の群れをなしてゐる原因を探らうとしてゐた。すると、朝早くから私に多少ぼんやりした不安を抱かしてゐた南風が、急に一隊の雲を呼んで來て雨を降らした。知らぬ間に、私達は一二歩前も見る事の出來ないやうな濃い雨ぎりに圍まれて了つた。そして困つた事には、連れの一人で私の親友のドラクウルが、此の高度の珍植物の一つであるユウフオルビア・サクシタリスを探しに、一人離れてゐた。私達は皆んな手でラツパをつくつて、皆んな一緒になつて聲を限りに呼び叫んだ。が、何んの答へもない。私達の聲は、渦卷く雲のむくむくとした厚みと、鈍い瀟々と云ふ響きとの間に消えて了つた。聲が聞こえないとなれば探さなければならない。が、此の眞暗がりの雲の中では、一二三歩さきはお互に見えない。そして私は殘る七人のうちで此の邊の道を知つてゐるたゞ一人なのだ。誰れも迷子にならぬやうに、皆んなが手をつなぎ合つて、私が其の鎖の先頭に立つた。かうして、暫くの間は、まるで盲鬼の遊びをやつてゐたが、何んの手がかりもない。こゝの山路をよく知つてゐるドラクウルは、きつと雲の來るのを見て、最後の晴れ間を利用して急いでジヤスの小屋へ駈け降りたものだらう。私達も大急ぎでそこまで行かう。もう雨は着物の内側にも其の外側と同じやうに流れてゐる。雲齋綿のズボンが第二の皮膚のやうにからだの上に糊づけになつてゐる。

が、非常に困難な事が起つて來た。あちこちと探し廻つたり、行つたり來たりしてゐるうちに、私は目隱しをされてぐる〱踵で廻らされた人間の樣になつて了つた。私はまるで方角が分らなくなつた。どちが山の南側だか、全く分らなくなつた。私は一人に聞いて見た、又もう一人に聞いて見た。が、其の說はいろいろと分れて、どれもこれもすこぶる怪しい。そこで結論はかうなつた。私達の中の誰れも、どつちが南か、どつちが北かを斷定する事は出來ないのだ。實際私は此の時程方角と云ふものの價値を知つた事はない。四方灰色の雲の何んだか譯の分らぬものの中に取り圍まれてゐるんだ。足もとは、あつちへ行つてもこつちへ行つても、降り坂になる事は分つてゐる。」が、其のどの坂がいゝのか。其のどつちかを選んで、安心して降りて行かなければならない。若し不幸にして北の方の坂を

降つて行けば、見たゞけでも身の毛のよだつ絶壁に粉微塵と落ち砕かれるのだ。誰れ一人も恐らくはそこから戻つて來るものはあるまい。私はそこで暫く困りきつてゐた。

『こゝに止まつてゐよう。』と多くのものは云つた。『そして雨のあがるのを待たう。』

『それや駄目だ。』とほかのものらは云つた。そして私も其の中の一人だつた。『それや駄目だ。雨は長く續くかも知れない。かう濡れ鼠のやうになつてゐては、夜の寒氣が來ると直ぐ、皆んなは凍え死して了ふだらう。』

私と一緒にヴアントウ登山をしようと云つてパリの植物園からやつて來た、友人のベルナアル・ヴエルロは、此の困難から抜け出るのに私の用心に信頼して、至極落ちついて平然としてゐた。私はほかの人達の恐怖を増さないやうに、少しわきへ彼れを引つぱつて行つて、私の恐ろしい心配を明かした。そして二人で相談して、磁石の代りに思案の指針をつくらうとした。

『雲が出て來たのは南の方からですな』と私は彼れに尋ねた。

『さうです。確かに南の方からです。』

『すると、風は殆んどないのだから、雨は輕く南から北に傾いてゐる譯ですな。』

『さうです。私も方角の分つてゐた間はさうだと思つてゐたのです。では、それで道が分つたやうなもんぢやありませんか。雨の降る方へ降りて行きませうよ。』

『私もさう思つてゐたところが、疑問が起きて來たのです。今風は弱くて一定の方向を取つてゐません。雲が山を包んだ時其の頂きに起るやうなぐる／＼廻つて歩く風なんです。で、今でもまだ風が其の最初の方向通りなのか、今は北の方から吹いて來るんではないのか、まるで見當がつきません。』

『さう云はれゝば、私もさう思ひますが、それではどうしたらいゝんでせう。』

『さあ、どうしていゝか、それが問題なんです。私に一案があります。若し風が變つてゐなければ、私達は特に左の方が濡つてゐる筈です。何故なら、私達がまだ方向を失はなかつた前には、雨は其の方から降つてゐたのです。又若し風が變つたとすればどこもかも殆んど同じやうに濡つてゐる筈です。皆んなで觸つて見て、どこが一番濡つてゐるかきめませう。それでどうでせう。』

『いゝでせう。』

『が、若し私が間違つてゐたら。』

『いや、間違ひはありません。』

そこでごく簡單に皆んなに其の話しをした。皆んなは其のか

らだに觸つて見た。それもそとでは十分でない。一番下の着物の下でなければ駄目だ。皆んなが一齊に左の方が右の方よりも餘程濕つてゐると云ふのを聞いて、私は云ふに云はれない喜びを感じた。風は變つてゐなかつたのだ。よろしい。それでは雨の降る方へ向つて行かう。又皆んなが手を引いて一連の鎖をつくつた。私は先頭になつた。そしてあとに殘るものゝないやうに、ヴェルロを殿にした。そして出發する前に、もう一度私は私の友人に云つた。

『それでは、やつて見るか。』

『えゝ、やつて見ませう。お供します。』

かうして私達は恐ろしい未知の中へ盲滅法に頭を突つ込んで行つた。

二十跨ぎもしないうちに、尤もそれは險しい坂の上での自由にならない二十跨ぎではあるが、危險の心配が全くなくなつた。足の下は、深い淵の空間ではなくて、待ちこがれてゐた土であつた。長い流れのやうになつて轉がつて行く小石の土であつた。堅い土のしるしである此のころ／＼云ふ音が、私達皆んなに取つては、神々しい樂の音であつた。五六分するうちに、山毛欅林の上の境に着いた。そこは山の頂きよりも、もつと暗かつた。どこへ足を運んでいゝか、見るのに地にまでかゞまなければならなかつた。此の暗い中で、どうして、深い森の中にかくれてゐるジヤスを見つけ出す事が出來ようか。それには、人間の往來するところにはきまつてある二つの植物、即ち藜(あかざ)と蕁麻(いらくさ)とが導線になつてくれた。私は歩きながら、自由な方の手を空中にふつて行つた。ちくと刺されゝば、それはいらくさなのだ。標柱なのだ。殿のヴェルロも出來るだけ手をふつて、此のぴり／＼と刺される事によつて目の見えない補ひをしようとした。連の者はこんな探しかたをあまり信用しなかつた。そして氣違ひじみた降りを續けて、若し必要ならベドワンまででも戻らうと云ふ。が、自分の持つてゐる植物學的嗅覺を信頼してゐるヴェルロは、私がかうして探がして行かうと云ふのに贊成して、草を手で探つて行けば眞暗な中でも小屋へ着く事が出來ると云ふ事を皆んなに說明して、意氣沮喪し切つてゐるものらに安心させようとした。皆んなは私達の理屈に負けた。そして間もなく、いらくさの繁みからいらくさの繁みへと傳はつて、一行はジヤスに着いた。

ドラクウルは、うまく雨に會はなかつた荷物を持つた案内人と一緒に、そこにゐた。たき火と着がへの着物とが直ぐに皆んなをふだんの快活に戻した。近くの谷から持つて來た雪の塊りが竈の前に袋に入れて釣つてあつた。一本の瓶が其の漬けて

出る水を受けてゐた。これが夕飯の時の泉水となつた。途に、前にこゝへ來た人達によつて粉のやうに碎かれてゐる山毛欅の葉の床の上で、其の夜を過ごした。此の前に來た人達と云ふのは多勢なのだ。今は肥料土のやうになつてゐる此の席は、新しく代へられてからもう幾年になる事か。

　眠る事の出來ないものは火を絶やさない事を其の使命とする。火を掻き立てる手は絶えずある。何故なら、圓天井が少し崩れて出來た大きな穴のほかに、出口のない煙は、鰊をくすぶらしたやうな空氣で小屋の中を滿たして了ふ。呼吸の出來る空氣を一息しようと思へば、殆んど鼻を地につけて、其の一番下の層にそれを求めなければならない。そこで咳をする。ぶつぶつ云ふ。火を掻き立てる。が、いくら寢ようとしても駄目だ。朝の二時頃に皆んなはもう起きて、絶頂に登つて日の出を見に行つた。雨はやんだ。空は晴れ渡つて、すばらしいゝ天氣になりさうだ。

五

　かうして登つて行く間に、或るものは船にでも醉つたやうに氣持が惡くなつた。其の原因は、第一には疲勞で、第二には空氣の稀薄になつた事だ。氣壓計は百四十ミリ米突降つた。私達が呼吸してゐる空氣は、五分の一の密度をなくし、從つて又酸素も五分の一減つたのだ。無事な時になら、これしきの空氣の變化は感ぜられないで濟むだらう。が、それが前日の疲れと不眠とに附け加はると、不快になつて來る。で、私達は痛い足と溜息をつく胸とをかゝへて、ゆつくりと登つて行つた。多くの者は二十歩目毎にとまつて休まなければならなかつた。

　が、遂に絶頂に着いた。そして田舍風のセン・クロワ堂の中にはいつて、息をついて、そして朝の刺すやうな寒さに對抗するために水筒にかぢりついた。そしてこんどは其の最後の一滴までも平らげて了つた。

　やがて太陽が出て來た。ヴアントウ山は地平線の向ふの端にまで其の三角形の影を投げた。其の影の縁は重屈折される光線の作用で紫色になつてゐた。南と西には、霧に包まれた平原が擴がつてゐる。そこには、もつと太陽が高くなれば、ロオヌ河が銀の糸のやうになつて見えるのだらう。北と東には、私達の足の下に、大きな雲の層が横はつてゐる。白い綿の海のやうなもので、そこから溶岩の島のやうに、低い山の暗い頂きが見えてゐる。氷河の條(すぢ)のある或る頂きが、アルプス山の方で光つてゐる。

　が、植物が私達の注意を呼んでゐる。で私達は此のすばらしい景色と別れを告げよう。私達が登つた時期の八月は少し遲か

つた。多くの植物はもう花が過ぎて了つてゐた。若し本當に實りのある植物採集をしようと思ふなら、七月の上半にこゝへ來るがいゝ。殊に又、羊の群れがこゝに現はれる前に來るがいゝ。羊が草を食つたあとでは、なさけない殘物しか採れない。まだ羊の群の齒にかゝらない、七月のヴアントウ山の頂きは、全くの花壇だ。其の石だらけの土が花で飾り立てられるのだ。私の記憶の中には、朝の露がきら〳〵輝いてゐる間に、いろんなものが現ばれて來る。薔薇色の心のある白い花の、アンドロザス・ヴイルウズの優しい姿。石灰岩のかけの上に其の大きな青い花をひろげてゐるセニス山の菫。其の花の香ばしい香と其の根の糞のやうな臭とを併せ持つてゐるヴアレリアヌ・サリアンク。青い複花瓣を撒き散らした生々しい綠色の目の細かい毛氈のやうなグロビユレエル・ユルデイフオリエ。空と其の青さを競ふやうな高原勿忘草。細い莖の上に白い花の密集した頭を載せて、石の間に匐つてゐるイベリス・ド・カンドル（まがり花の一種）。いづれもくすんだ座布團のやうに密生して、一つは薔薇色花を持ち、一つは黄味がかつた白い花の、對生葉のゆきのしたと苔のやうなゆきのした。

　もつと太陽が暑くなれば、さうした花から花に、朱のやうな赤い四つの斑がついて、それに黑い輪のある、白い羽の大きな蝶がふわふわと飛ぶのを見るだらう。これは、アルプス山の消える事のない雪の近くに住んでゐる、パルナシアス・アプロだ。其の毛蟲はゆきのしたの上で生活してゐる。

日本子福者の悲哀

生方敏郎

一

サンガア夫人足下

新聞にて知り得ましたところですが、私はあなたが無事に此國を見舞はれましたことを慶賀いたします。あなたの歡迎會だか講演會だかが何處かであつた相ですが、それを少しも知らずにゐまして、後から聞いて殘念に思つて居ります。

憚り申ますと、如何にも私は産兒制限論者で同時に實行論者の如くも思はれるでせうが、實を申せば、私はその反對に、これでも仲々の子福者なのであります。私は、あなたのお話が果してお役人様たちの心配したと傳へられる如く、危險思想であるか、又はあなたの仰せの通り福音なのか、つい御講演を聽き損ねたので、何とも判斷は下せません。けれども、兎に角子供問題といふことに就いて、私は近年しきりに頭を惱まして居りますので、あなたの御講演を承らなかつた事を、かへすがへすも殘念に思ふのであります。

私は、今近年子供問題の爲めに頭を惱ますと申しました。本當に然うです。世の中には、財産が澤山有る爲めに、金になやまされ、一生涯金の奴隷と成つて苦しんでゐる人々もあります。又その傍には、金の無い爲めに、年が年中苦しみつゞけ、金のことばかり考へてゐる人々もありますが、丁度それと同じ様に、世の中には、子供の無いために明けても暮れても考へ込んでゐる人もあれば、又その反對に子供が多いために忙殺されつゞけで、花は咲いても見に行くこともならず、不平滿々としながら、襁褓を洗濯してゐる婦人も有るので有ります。

私達の長男が二歳の夏の初めのことでありました。春先、その子が消化不良で大學病院へ一週間ばかり入院しまして、おかげ様で何うやら癒りましたけれども、何うも後が虚弱くて困つて居りました。そこで人に勸められて、その夏の初め、上州伊香保溫泉へ入湯に參つたことがあります。私達は、子供は恵まれましたけれども、お金の方は、その頃兎角不自由がちでござ

いまして、それこそ本當に借金を質に置いて出かけたのであります。そこに一ケ月ほどゐる間に、矢張そこへ入湯に來てゐた二人の婦人と知り合ひに成りました。二人とも東京の人で、その中一人は年頃三十位、丸ぽちやの美人で、他の一人は五十を越したお婆さんでした。二人が二人とも大層な子供好きな方でして、朝早くから私のところの「坊や」を借りに參ります。そして乳の時分には連れ戻つてくれますが又忽ち負んぶして行つてしまひます。子供の取り持つ緣で、だん／＼懇意に成つてから聞きますと、二人が二人とも待合のお內儀さんだとやらで、若い美人の人は大層金持の思ひ者で、新橋切つての幸福者よ、とその社會の人々から羨望の的と成つてゐるのだ相ですが、當人は子供の無いのを何よりの苦にして、「私は子供さへ有れば幸福なんですけれど」と云ひ／＼しました。そして、子供を得たさに、現(げん)の有ると聞くあらゆる神樣に參詣をし、子供の出來るといふ評判のあらゆる溫泉に湯治に行くが、今以て授からないと、悲し相に語るのを聞きました。

私達は最初から、このお內儀のやうにそんなに子供が寶だといふことを知らず、從つて欲しいとも思はず、そんな事には一切無頓着で無我夢中でゐる中に、早くも長男を授けられました樣な次第で、そのお內儀さんに邂逅する迄、子供の値打を知らなかつたのです。そんなに子供つて、いゝ物かなあ、と其時私達はおかしい位に思ひました。

二

尤も私はそれよりずつと以前に、或時、友人の宅で「尊卑分派」と呼ぶ天子樣や藤原家などの系圖を見まして、その中に三十人も四十人も子供を持つた人々のあるのを見て、「何うだ。ずゐぶん澤山子供をこしらへたものだね。これが、それ／＼胎(はら)が違うんだからねえ。羨ましいものさ」

などと語り合つたことがありました。併しそれは、勿論子供の多いのを羨んだのではなくして、實を申せば、その生母の多いのを羨んだわけなのでございます。竹の園生の御事は申すもかしこし、源平藤橘の人々にも、實に子福者が多いのであります。故高山樗牛博士から「本能滿足の實行者」としてお讃めにあづかつた平淸盛なんかは、仲々の子福者であります。それは勿論幾つもかの胎から生まれた子供らなのであります。子供が生れて來るとて、淸盛は生着を三越へ買ひに行く金の工面をする樣子もなく、又夜中に眠い眼をこすり／＼嫌ひな呼出し電話をお產婆さんに駈けに行くの勞をも取らなかつた樣であります。ですから遠慮なく幾つもの美しい母胎からポコ／＼子供を生み出させた筈でありまして、何う考へても平家物語作者のや

うに、祇園精舍の鐘の聲に諸行無常の響有りとは思はれません。

だから、私は「尊卑分派」を見て、古への子福者達を羨望した次第なのであります。ところが、生死を司る運命の神樣は「善哉。善哉。汝の心懸殊勝なれば、その願ひを聞き屆けつかはす」

と御託宣があつたわけでもなく、それこそ全く何のことはりも無しに、細君のお腹はムク〳〵膨れ出しまして、幾人も引きつゞき子供が生れ、忽ちにして平清盛の向ふを張り相な、頗る危い形勢と成つたのであります。私の羨望した點は、多くの子供を持つ事ではなく、多くの胎から出る多くの子供を持つところに在つたのですが、運命の神樣は、多分忙しい爲めに判斷を誤り、後の方の半分だけ私の願ひを聞き屆けて下されたものでございませう。

三

兎も角も、私は子福者の一人と成りました。たゞ憾むらくは、尊卑分派に見える貴族の人々と違ひ、その多くの子供は皆一腹から出たのであります。

その點だけは、私の甚だ遺憾とするところでありますが、私は今日と成つてみれば、私の妻の多産を呪ふ者ではありません。現代子福者の名家としては、服部金太郎さんなど、尤も世に聞こえて居りますが、あれは實に千萬長者の第一人者であります。然るに私は毎日働かなければ自分も食へず妻子も養ふことの出來ぬ無産階級の第一人者であります。尤も近來、日本に於きましては、この無産階級即ちプロレタリアートといふものが雜誌や新聞の上で、殊の外評判よろしく、流行兒の文士美術家は申すに及ばず、官立大學の先生達まで「我こそは正しくプロレタリアートでござる」と名宣りを上げる世と成りましたので、猫氏もその無産階級に屬することを以て誇りとし、杓子氏も亦之に倣ひて無産階級たるを潔しとする、實に不思議にも又痛快なる時勢と相成りました。誠に流行とか評判とか人氣とかいふものは可笑しなものでありまして、少しく今日の雜誌などを讀む青年達は、何れもブルジョアの子弟たるよりもプロレタリアートの子弟たることを名譽とする樣な形勢であります。今の新人諸君が若し新中納言平知盛であるならば、大物の浦に幽靈として現はれるにも「我こそは桓武天皇九代の後胤」と云はずに、「我こそは第四階級のプロレタリアート」と名宣るであらうものを。と云ふでありませう。それこそ義經が靑く成つて恐れ辨慶のお經も功力を失つたでありませう。貴族富豪の子弟にして苟も新思想を汲むほどの者は、實質は兎に角、籍だけ無產階級に這入りたい樣な連中が多々あるのであります。誠に目出

度い話、プロレタリアート萬々歳と申さねば成りません。

併し乍ら、單に肩書としてのみプロレタリアートを持つ人々は幸福であり萬々歳でありませうが、我々どもの如く實質に於いてプロレタリアートに籍が這入つてしまひ、とてもその籍をぬく事が出來ぬと相場が極つたプロレタリアートは、案外氣の毒な人間のやうな生活ぶりをして居ります。さういふ貧乏なプロレタリアートは西洋のプロレタリアートとその苦しさが、略類似してゐはせぬかと思ひます。さて左ういふ働かねば自分も食へず子供も育てられぬ身の上の我々に、多くの子供が出來た場合に、誰も我々を服部金太郎さんと同樣の程度に幸福だとは思つてくれません。私は既に平の清貧の程度に子福者としての幸福を感じ得ないばかりでなく、又服部金太郎さんほどの程度にも幸福でないのです。(服部さんは子福者なれど品行方正なる故總て一つ胎の產出であります)けれども、まだ〳〵小說家菊池さんだかの云はれたやうに、多產を以て地獄であり死である、とまでは悲觀して居りません。子を持たない人々は子を持つことを非常に幸福に考へたり、又は非常に慘めなものに思はれたりするやうです。又私なども最初一人子を儲けた頃は、若しこの分で殖えて行つたならば、我々は仕事も何も出來ず、又心づかひと生活費とに疲れきり瘠せ切つてしまふだらう、と考へたこともないではありませんが、さて本當にガキがぞろ〳〵殖えてみますと、一人二人位お坊ちゃんをお持ちなさるお若い方がお考へに成るほど、大袈裟に悲慘なものではありません。多產は實に地獄でもあれば死でもあるのです。たゞ此地が不死身に成つてしまひ多くの苦痛に感じないのでありませう。それは、一人位の子供の時はお坊ちやんお孃ちやんにして置きまします。A son を譯せば坊ちやんでせう。A daughter を譯せばお孃ちやんでせう。併しながらその複數を作る場合に成ると語尾にSを附けた位の變化では治りません。全然語根迄も變化してガキといふ言葉に成ります。さう成つてしまへば坊ちやんや孃ちやんを育てる時と違ひ、ずつと手が省け心づかひも自づと減りますから、それで一人育てる時、即ち坊ちやんを育てる時と數人のガキを育てるのと、親父お袋の苦痛は澤山はちがはないのであります。

私の家なぞでも最初お坊ちやんが一人生れた時分は、私は貧乏でこそあれ一家の旦那さまであり若しくは先生であり、女房は奥樣でありました。從つて、やうやく產婆の診察に依り坊ちやんが生れるといふ事が分りますと、家中の騷ぎは畏れ多くもプリンス・オブ・ウエールス殿下を我國でお迎へ申し上げるやうな騷ぎでありました。まづ廣い家へ移轉する。婆やを一人お抱へ

に成る。生着を三越へ買ひに行く。それは〳〵大變なことでした。それから產婆やら婦人科醫やら看護婦への謝禮、祝ひの配り物――それは迚も旦那さまの安原稿ではいくら書いても支拂ひきれない位でした。區役所への出產屆。名前をつけること。種痘をすること。その中に奥さまのお乳の出が惡く成る。さあ家中轉動するやうな騷動でした。そして漸く乳母の婆さんに來て頂いて治りましたが、一時は旦那さまも奥さまも死以上の心痛でした。

毎日赤ちやんをお湯へ入れる。これが又一大事業でした。小判型の盥をわざ〳〵誂へて拵へさせ、それに湯をたつぷり入れて、產褥をはなれたばかりの奥さまが、片手で赤ちやんを抱へて片手で洗ひます。旦那さまはシヤボンを出したり、水をうめたり、足し湯をしたり、タルクムをふりかけたりして頗る氣の利かない樣子で傍から手傳ひます。これが毎日の日課でした。

その中に、坊ちやんが消化不良を起したり風をめしたりします。それツといふので、小兒科病院へ驅けつけますが、その晩は心配で寢ることも食べることも出來ません。

「何うも、この分では、子供が三四人も生れた日には、我々は心づかれの爲め死んでしまうだらう」

恁う夫婦とも嘆息して言ひました。

襁褓を三つの竿にこと〳〵く乾してあるのに、俄に夕立がやつて來ることがあります。すると

「パパさん。すみませんが手を貸して下さい。おしめを取り込むのですから」

と令夫人が仰せられます。先生は慌てゝ、玉稿を書きかけた萬年筆を置いて、階子段をバタ〳〵驅け下り

「オット。よし來た。」

とさす股をおつ取り屁つぴり腰で乾物を取り込みますが、あはれこの態に對して、又この金ぶちの眼鏡に對して、何となくきまり惡く思はれます。若しこんな樣子を、知人に見られたら大變だと思ひます。そして

「全く、この分では子供が殖えたら、何うしやう。僕は原稿を書く暇も本を讀む間も有るまいなあ」

としみ〴〵悲し相に嘆息します。

四

然るに、子供の方では遠慮なく、制限なしに、後から〳〵引つゞき生れて來ました。さうすると、坊ちやんの名稱は自づとがきに變らざるを得なくなりました。旦那さまも奥さまも、先生令夫人ではゐられなくなり、人目も辱ちず襁褓だの汚れた着物だのの洗濯をするやうに成りました。子供が熱を出しまして

も、先なら早速青く成つて小兒科醫院へ俥で馳けつけたものが「熱があるなら、救命丸でも呑ませて置け」といふやうに成りました。

ですから、子供一人しか無い時分想像したほどには、子福者は子供で苦勞してゐません。案外安氣でゐられるのであります。

サンガア夫人足下

貧乏人に子供が殖えたら、生活に困窮しやしないか？と仰せられますが。

ご尤もなおたづねでございます。

しかし、貧乏人は獨身でゐても可也悲慘であります。夫婦ぐらしで水入らずでゐても、決して面白い境遇ではありません。況んや子供が殖えるに於いてをや、であります。金持は一人でゐても天國の生活、夫婦でゐても常に新婚氣分が漂い、子福者なればいよ／＼幸福で理想郷に遊ぶが如し。といひ度いところでありますが、世は必ずしも然うばかりは申されません。金殿玉樓にゐて人知れず泣いて暮す人もあれば、賤が伏屋にも楽しい夕顔棚の下涼みといふ奴もあります。併し乍ら、貧乏人に子供が多かつたら、生活不如意は爭ひのない事實でありませう。お産婆さんの話に依りますと、氷川下町あたりの貧乏人に子供が生れますと、それに必要な分娩具といふ物は、一つも用意されてありません。ことく／＼く産婆の方から持參します。オギヤアと來て、いざ産湯をつかはせる段に成りましても、特別その爲めの盥なんかは勿論無いのであります。洗濯盥でも有れば實に貧民長屋の中の華族さんでありますが、先づ大抵はそれすら持たないのであります。五六軒で共有の雜巾バケツがありまして、それで赤ちやんに湯をつかはせます。貧民の子は、生れて初めて入るお風呂が雜巾バケツといふのですから、可哀相と云へば可哀相、俳味があるといへば俳味があります。さて湯は何で沸すかといへば、それは五六軒共有してゐる御飯を炊く土釜で沸します。

恁くて、普通の産婦ならば三七二十一日は産褥にゐるのが常の事、輕い人でも二週間、よく／＼輕くて一週間で起き上るのでありますが、氷川下あたりの産婦は三日もすれば起きて洗濯もする炊事もする。五日目には、この赤ン坊なるガキ君を背負つてエンヤラヤアに出懸けるのだ相です。天佑と申しませうかその健康にも驚くの外ありません。

恁うした貧乏人に子供が殖えたら、可也みじめなものの如くに思はれますが、まさか子供が多いので乞食に成つた話は未だ甞て聞きません。天は自ら助くる者を助く。子供が生れる以上

は、育つだけの祿を背負つて出て來るやうに思はれます。多くの子を持つ貧乏人と獨身者の貧乏人と較べると、子持の方が餘分に私有財産を持つて居ります。彼は獨身者の如く飲酒や賭博や女郎買をすることが出來ないだけが、悲慘といへば悲慘です。そして獨身者なら時々は工場を休み、友達と酒を飲むくらゐのことが出來るのに、子福者は一日も欠勤なく朝から晩まで働かせられるのであります。外から見たら、悲慘にも見えるでせう。のろまにも氣が利かない生活にも見えるでせう。昔から「律氣者の子澤山」といろはカルタにも有りまして、頗る輕蔑されて居ります。

私達位の、纔な所得稅を納める程度の無産階級者に於いても程度の差こそあれ、子福者の氣の利かないことは同じことであります。

私は、初兒が生れて以來、歌舞伎座を一度しか見たことがありません。それも招待で義理で見たのです。帝劇も招待以外にのぞいたことが有りません。それは、金よりも暇が無いからであります。暇が無いといふのは、つまり生活に追はれるからのことであります。獨身者は必らずしも所得は多くはありませんが、怠けるだけの餘裕があるのに、子福者は金は入つても常に生活に追はれるのであります。

若し夫れ、日本人の子福者の家庭で食事をするところを御覽に成りましたら、世に謂ふところの子地獄とは正に是か、と合點が行くでございませう。

大きいのは漸く大人の如く音無しく食事します。次のは盛つてやれば、自分で箸を持ち、何うやら恁うやら食物を口へ運びますが、邊り一面は霰の降つた後の如く飯粒をこぼします。第三番目のは人に養はれて食事し、熱ければ泣き、運び方がおそければ怒り、厭ひな物は吐き出します。第四番目のは同じく之も養なはれ乍ら、食事半ばにてく／＼歩き出したり、小便を垂れたりして、大騷ぎをさせます。その中の一人が水を飲みますと、何れも皆眞似をして水を飲み、一人がおみおつけを飯にかければ、何の子も皆それに習ひます。喧たり鳴たりギヤアたりワアたりで、時とすると二組くらゐは泣き喚きます。その中で兩親は子供の世話をしたり監督したりしながら食事をせねばなりません。

五

サンガア夫人さま

私は、只今、貧乏人に多く子供が出來たとて、まさか乞食に成りはせぬと申しましたが、それは兩親が子の可愛さから粉骨碎身して働くからのことでありまして、人は子供の生れる爲めに貧乏はしない迄も、金持に成ることは容易に出來ません。極

めて稀には服部金太郎さんの如く、子の運と金の運と双方共に持つて生れたお方もありませうが、大抵の場合この二つは別々のものです。夫婦暮しで子の無い人を見ると、實に羨ましいほど綺麗に暮して居られます。家の中は何時行つてみてもキチンとしてゐて、衣服調度何一つとして完美してゐないものは無く、奥さんは何時見ても髪を結つたばかりのやうにつや／＼しく、旦那さまは鬚の剃りたてゞあります。客には御馳走も直ぐしてくれます。訪問して偶々留守だと思へば、それはお二人お揃ひで帝劇か歌舞伎へ出かけられた折なのであります。何と羨ましい話ではありませんか。

子供の多い者は、それと異り、家の中は何度掃除しても散かりますし、疊は僅か半歳でメチャ／＼に切れてしまひます。障子や唐紙は貼つても／＼裂けてゐます。衣服もその通り親達の膝も忽ち黒く光つて來ります。瀬戸物の缺ける數は非常なものです。又子供は毎日菓子を食べます。子供が食べるのを見れば大人も食べたくなります。子供の着物は小さくて、少ししか布がいらないやうだけれども、子供は着物を汚すこと甚しく、一日の中に二度も三度も着換へさせねばなりませんから數多く要り、又彼等は暴れるから忽ち切らしてしまひます。

併し着物を破損し、菓子をむさぼり食ふ子供はまだしもいゝのであります。弱い子供は着物を破損せぬ代り、年中醫者にかゝりつゞけです。一日や二日の熱は救命丸を當てがあつて置いても、三日と續けば醫者を呼び又は病院へ出かけねばならなくなります。子供の死亡率の高いことは御承知のことでせうが、實際子供ほどチョイ／＼病氣をするものはありません。四人も子供があると、いつも誰か病氣してゐることに成ります。この醫藥の費用は實に莫大なものでありまして、一度難病に取りつかれでもすれば、親はいくら働いても足りません。私の家などでは、去年と一昨年は、家内中の醫藥の費用（看護婦マッサーヂ轉地費用等をも含めば）は、生活費よりも多いのであります。その爲めに費す時間、產の費用、とその時間、さういふものを數へて來ると、全く子供を多く擧げるものは、自ら苦痛の淵へ身を投げるやうなものです。その後の教育費用、入學難から兵隊の心配。それから女なら嫁入まで、否嫁入の後まで面倒みてやらねばならないと成ると、人生親父お袋を成るも亦た難い哉です。太行の路よく車を碎く、若し多産に較ぶれば之れ坦途。巫峽の水よく舟をくつがへす、若し多産に比すれば之に安流。ででもありませう。

斯うして育て上げた揚句の果が、皆な良い兒なら報ひられたものでありますけれども、若し運惡く不良少年にでも成られた

ら、それこそ親父お袋の立つ瀬は有りません。何處へ不平の持つて行處も無く、子が惡ければ親の名迄引き合ひに出されて、恥をかきます。全く子供を持つのも考へものでございますね。

六

しかし、天は公平であります。エマアソンの所謂コンペンセーションとやらはこんなところへも行はれてゐます。獨身者が淋しく、夫婦者が物足らなく思ふ時、子福者は賑かな心持で送ることが出來ます。夫婦の中に子の無い人は、小禽を飼つたり犬を愛したり猫を近づけたりして、纔にその寂寥を慰めてゐる時、子福者は子供を天ぐるまにしたり腹鼓をしてやつたり、子供と一緒に鳩ポッポを唄つたり、思ひきりバカに成り子供に還つて、日常煩瑣な苦勞を忘れることが出來ます。子供の多い家庭は、一日の中に一度や二度、乾度腹を抱えて笑ふやうなことがあります。彼等は、最も巧みな喜劇役者であるのです。

貼つたばかりの障子に穴をあけられても、掃いたばかりの座敷へ灰をまかれても、折角書いた原稿を裂かれても、買つたばかりの書籍へ繪をかかれても、そんなに腹が立たないのは、この一日に幾度か演じる彼等の喜劇の觀覽料でありませう。

七

人々は子を多く持つ妻は窶れると申します。實際然うです。妻のみならず、良人もやつれます。良人は多くの者を養はねばならないのですから、ずゐぶん疲勞するわけです。併し日本の妻のやつれるのは、穴勝子供故ではなく、日本の家屋や衣服や炊事やすべて生活の樣式が、お殿さま向きに出來てゐて、非常に多くのムダな手數がかゝるからであります。このムダな手數を省くやうな生活樣式に改造されゝば、子供は左迄母の煩ひとはならないでありませう。

又たとへ何んな重荷で煩ひであらうとも、可愛い子供のことですから、兩親は堪え忍びます。

私はつい此間、親戚の家で、札幌から來て泊つてゐる大學子福者である大學の先生夫妻に會ひました。大學の先生といつても、失禮乍らプロレタリアートの仲間らしく見受けました。とてもブルジョアの生活をする人達ではありません。そして子供は男の子ばかり十人もあります。この子達の並んでゐるところを撮つた寫眞を私に見せてくれました、長男は理科大學にゐるとか次男は高等工業にゐるとか、さまぐ說明されました。そして如何にもその成長を悅ぶ色は見えましたが、それらを育てた苦勞を悲しむ心持は無かつたやうでありました。たとへ貧しい忙しい中から、骨折つて育てても、その子供達が育て甲斐ある良い子供でありましたら、兩親はその悅びの爲めに、如何な

ることも犠牲にして悔ひないでありませう。

併し乍ら、子に對して何等不平の無い人々でも、子供を少しも大切にする道を知らぬ現代の日本の社會に對しては、些かの憾みを持たない者がありませうか？

サンガア夫人足下、足下に語り度いのは此點であります。

日本の政府が、あなたの産兒制限說を怖れて、上陸させるとかさせないとか騷いだと聞きましたが、假令誤解にもせよ、日本政府が子供を大切にする考へから、あなたを警戒したのでありますならば、私達は政府の意の在るところを諒としませう。

併し、政府も亦一般社會も、決してそんなに子供を大切とは思つて居りません。これは誠に悲しむ可き事實です。彼等が子供を大切にするらしい顏をするのは、悲しい哉。皆僞善なのであります。

八

サンガア夫人足下

國家は、子供に對して義務教育を強いて居ります。まあ、結構なことです。およそ子供を持つた者で、一人でもその子を無學文盲に育てたいと思ふ人間は無いでせう。これは國家から強いられる迄もないことです。出來ることなら、小學校どころか大學を卒業させ度く思ふでありませう。今日こそ少しく大學卒業の箔が落ちましたものゝ、以前には大學卒業生と云へば、何うして大變な勢ひでした。そして今日では、まがひ物も澤山に出來、學士の相場も少しは落ちたやうなものゝ、何といつても登龍の門は大學教育を受けた者の他には、開かれてゐません。それほど教育は大切であります。ですから義務教育は勿論結構です。願くは進んで大學までも義務教育と云ふことにして頂きたい位です。それにも拘らず又一方では、その子供らを入學させる小學校の數が不足してゐて、二部教授なんて妙なことをやつて居ります。子供がお午頃から寢惚けた顏をして學校へ行きます。それで算術なんか出來る氣づかひはありますまい。それから又、小學校の教師に拂ふ給料が甚だケチです。とてもそれこそ一家を支へるに足るだけはやつてゐません。小學校教師こそ今の分では産兒制限を強いられてゐるやうなものでせう。何故です？と仰言るのですか？この物價の高いのに、あんな耳の垢ほどの月給をやつて、若し子供が多勢生れたら、何うします？小學校の教師は一人二人の子供を持つだけでも、可成多くの生活難を甞めつゝあるのです。何か他に內職でもせねば、迚もやつては行かれますまい。それから又雜誌や書物も少しは買つて文化に後れぬやうにせねばなりません、それには今の月給では大に〳〵不足します。今日のやうに物質的に成つた社會

では、教師が餘り貧乏してゐるのを見ると、氣の毒とも思はねば月給を殖やしてやらうとも思はず、直に貧乏だからといつて輕蔑します。それに就いて面白い逸話は幾くらもありますが、その御紹介は他日に讓りますが、兎も角もこんな情態でゐて、その小學校教師に自分達の子供の教育を依托してゐるのです。貧乏な輕蔑してゐる教師に自分達の子弟の教育を托し、第二の國民を養成しやうといふのですから、何といふ矛盾でありませう。實に〳〵日本國民は感心す可き國民ではありませんか？否々、寒心の至りではありませんか？

若し第二の國民たる子供といふものが、眞に大切だと思ふならば、小學校や中學校は完備させて、教員をも大に優待し尊敬す可きではありますまいか？　然るに、事實がその反對であるといふ事は、確に日本では子供を大切に思つてゐない何よりの證據であります。表面だけ産兒制限を危險思想だなんどと、態よく飾りますが、實に笑はせるではありませんか？

九

原内閣の時代に一年二千圓以下の收入にして子供を持つ者は、所得税を幾分かづつ免除させることに成りました。私も子福者であるが故に實にこの法令の恩惠に浴したわけでありまして、原さんの一生に唯一つの取柄は此所に存すると信じてゐます。それは金錢にしては極めて纔かで、到底子供の襁褓の代ほどには無く、襁褓を洗ふ手數料ほどには尙更足らず、實に襁褓を洗濯する下等な洗濯シャボンの代にも屆きませんが、併しそれだけの免除でも國家として子供に拂ふ敬意として見れば、たしかに意味の有るものであります。日本の諺に「氣は心」といふ事を申します。免除金はたとへ纔かでも、その志だけでも嬉しいといふ意味なのであります。

だが、日本に於いて子供に對する敬意の表はれはたゞ之れ一つ位のものです。昔から日本では「女子供」とか又は「婦女童蒙」とか申しまして、婦人と子供とは特殊部落扱ひにして來たのでありますから、今更ら二十世紀の一等國に相成候とて外は文明の姿を粧ふとも、僅かに風俗習慣の根抵まで改まる筈はなく、何處へ行つても日本の子供は虐待されてゐます。

論より證據、まづ電車に乘つて御覽なさい。朝早く工場へ通ふ勞働者諸君腰辨諸君には乘車賃の割引といふものがあります。子供はたゞ學生といふ名義の着いた者に對してだけ回數券として割引しますが、實はそれも學生に對する敬意といふより學校に對する義理と云ふ意味合に成つて居ります。學校の證明でもあれば、割引もしませうが、たゞ學生と申しただけでは鼻汁もひつかけません。そして何うです？四五歳のエプロンをつ

けてゐる子供、お母さんの膝に乘つかり片手に菓子を握つて窓の外を眺めてゐる目方二三貫目の子供は、向ふ兩國の關取衆、目方三四十貫もあり背中の幅が二尺もある先生と、全く同じ料金を取られるのであります。しかしそれも去年の春あたりまでは、まだよかつた。

　或日のことであります。私は滿六歳と六ケ月になる子供を連れて、去年の春、日比谷公園へ躑躅見にと出かけました。大塚仲町から電車に乘つたが、子供には――まだ學校の始まる一日前でありましたけれども、既に入學を許可されてゐたから――附屬小學の制服制帽をかむらせてゐました。最早子供として一人前であります。昨日までのエプロンをかけてゐた時代とは違ひます。切符を買ふことをも敎へて置かねばならないのです。そこで私は往復劵を一枚買つて往復とも切つて貰はうとすると、車掌は「往」の方だけ切りました。私が

「兩方とも」

といふと、車掌は

「まあ、切らなくもいゝでせう。まだお小さいお子さんですから」

　と云ふのでした。

　これは電氣局から見たら規則破りの怪しからぬ車掌であるかも知れません。併し私は「この車掌は子供好きの男だな」と思ひました。子供が好きであるか、子供を尊重するかする心が有るならば、この位のことはする筈であります。この車掌の規則破りの動機は決して市會議員諸君、市役所の公吏諸君が瓦斯會社から賄賂を取つて瓦斯會社の爲めに好意を表したのとは違ひ、全く子供を愛する心から出たのです。四錢五厘の乘車賃免除の爲めに、子供の親父は如何なる賄賂を贈ることが出來ませうや。東京市電氣局も若し多少なりとも子供を尊重するものでありましたら、せめては勞働者並みに又は早出の腰辨先生並みに乘車賃半減くらゐの優待はしてゐるでありませう。ところが、私が今玆にそんな事を言ふのは、全く孟子の所謂木に據つて魚を求めるやうなものでした。それから數ケ月經つた去年の秋に成りますと、それどころか、電車の中央の高いところに、子供乘車賃取り立ての威嚇的ポスターが現はれました。その繪はエプロンを懸けた幼兒を連れたお母さんが、電車の中で切符を買ふところの光景を描いたものであります。そして車掌の言葉として

「そのお子さんにも切符が要ります」

　又お母さんは驚いたといふ顏をして

「これはまだ子供でございます」

といふと、又車掌さんが

「今度、三歳から以上のお子さんは、乗車賃を頂く規則に成りました」

と書いてあります。

何うです。サンガアの奥さん。この年の秋から子福者は所得税を割引されることに成つた、この秋に、一方の方では三歳以上の子供に乗車賃が――國技館の闘取衆と同じ乗車賃が附いたのです。原さんが與へたものを、後藤さんがお取り上げになるのです。是に於いて天下の子福者たる者、口をあんぐり開いて豆鐵砲で狙撃された鳩のやうに眼玉をパチクリとせぬわけには參らないではありませんか？

成程、ポスターも去春以來の流行物です。電車の中へ、交通道徳の都々逸や忘れ物の統計表などと共に、ポスターを掲げることも新しい思ひ付きであります。併しそれなら、もつと他に遙に必要でもあり面白くもある材料が、澤山あるではありませんか？一例を申せば（以下圖案は省き標語のみを記せば）

皆さん。何うか車内を靜粛にお行儀よくしやうぢやありませんか？　こゝは日比谷の帝國議會ではないのですから。

こゝは、市民の同乗する電車の中ですから。

とか、又は

口で言つて分ることを、拳固で撲り合ひ周圍の人々を迷惑させることは、お互ひに謹みませう。こゝは衆議院ではありません。電車の中です。

とか、又は

成可く釣錢の要らぬやうになすつて下さい。車掌は市會議員と違ひ、お客さまの金を胡麻化すことが出來ません。正直に釣錢をお返しするには細かいお錢が有りませんから。

とか、又は

市會議員高橋義信以下多勢、今度懲役と決定しました。市として晴天（あつぱれ）名譽な事です。

とか、又は

市會議員鳩山一郎衆議院に於いて暴行を働き、お母さんに讃められ裁判所は免訴と成りました。全く人を撲り德といふものです。併し、市民諸君、之を模倣してはいけません。若し諸君が同じ行動を取れば、勿論有罪の判決が下りますから。又お母さんに屹度叱られませう。殊に第四階級の人々に於いては？

まだ、その他に幾らも市として電車廣告を利用すべき項目は多々あらうと思ひます。何を苦しんでか、子福者を迫害するポスターを掲げたのでせう。

私達忙しい人間――子供が多い貧乏人ほど世の中に忙しいものはありません――が子供を連れ出して電車に乘る日が、一年に幾度ありませう。料金は拂つても拂はないでも、多寡の知れたものです。たゞ、論點は、市が子供を虐待するに努力してゐるといふだけのことであります。

+

サンガア夫人足下

あなたは東京の道路を歩いて何うお感じに成りましたか？ この道路は雨の降る日に子供を表通の煙草屋まで安心して煙草を買ひにやり得るとお考へになりますか？

天氣の日には、火鉢の中を行く如く、一度風吹けば仙人の白雲に乘つて行く如く、一度雨ふれば田圃の中を泳ぐ如き東京の道路は、全く金持が泥をはねかせる爲めに自働車を走らせる目的を以て、設計せられたものなのでありまして、子供を歩かせる爲めにつけられた道路ではありません、學校通ひの子供等の、雨の日の慘狀を御覽下さい。正に産兒制限の好ポスタアに成りますから。

次は借家を探す時であります。未だこの頃のやうに家の拂底しなかつた時代に於てすらも、子供の多い者は、家を借りやうとして何度もお斷りを食つたのであります。況んや今日では、子福者に家など貸す人は市內には容易に見當りません。

但し、旅行する時ばかりは、子供を連れて居りますと、そんなに良いお客さまにもされない代り、安心出來るお客さまとして扱はれます。如何にも、子供を連れてゐる客で、食ひ逃げをする客は、滅多にありますまいから。

子供は常に善行の道伴れであります、惡事の共犯人ではありません。

ところが、その宿屋の設備といふものに成ると、一から十まで悉く大人本位になされて居りまして、例へば便所へ行つても子供の草履は無し、おまけに便器の丈が高くて子供には出來ません。又散歩するにも子供の爲めの下駄は無し、浴衣にせよ褞袍にせよ、皆大人の物ばかりで子供の爲めには一つも備へてありません。それは普通の旅館なら兎も角もとして、溫泉宿の如き婦人子供の多く來て永く逗留する土地に於てすら、然うなのでございます。それ故、子供を連れて旅行しやうとする者は、子供の物一式皆持ち運ばねばなりません。

食物も子供の膳に大人の副食物を平氣でつけます。山葵の入つた物などつけたり、濃い茶を汲んで出したり、滑稽な場合は烟草盆を出したりします。

日本の內地を少しでも御旅行なさるならば、忽ち日本では到

るところ子供といふものを眼中においてゐないことが分りませう。

サンガア夫人足下

あなたは日本の長者傳説の中でも極めて代表的な山莊太夫の話を、誰かからお聞きでも御座いませう。あの人買に拐かされた吉祥丸と安壽姫といふ二人の子供は、山莊太夫と呼ぶお金持に買ひ取られ、奴隷にされて朝夕殘忍酷薄な苛責を受けました。これが尤もよく日本の國民性を語つてゐる傳説でありまして、向ふ嶋にもそれに似た話の梅若丸の塚があります。

小さい商家の店員は、幾百年の間丁稚小僧の名の下に奴隷としてこき使はれましたが、世が進み使用人が拂底に成りました爲めに、近來漸く小店員などといふ名に代るやうに成り、待遇も幾分か好くなりました。

此の樣な日本の國情は、果してあなたの産兒制限といふことを、危險思想として斥けさせ樣としたものでせうか？　それとも亦た『日本では産兒制限どころか、子福者の常に苦しむやうな社會組織風俗習慣に成つてゐるから、誰も子福者だらうとはしてゐない。從つて産兒制限説は不必要だといふ點から、あなたを歡迎しないのでせうか？恐らくは後者の方が眞理かと私は愚考いたします。いや、實際それは不必要でありませう。日本の社會では、いろんな點から子福者をして子を持つた事を後悔させることばかりです。それ故、若しあなたの説を傾聽するとすれば、それは唯方法論の條項に限られてゐるのであります。だが、その肝腎な方法論にあなたの言葉が觸れることを禁ぜられたやうに伺ひまして、私は今更ながら政府の意の在るところを知るに苦しむのであります。だが、この點に於いても世と相容れぬ私は自分の妻の多産を呪ふ者ではありません。多々益々ピヨコ〳〵と生れて、私の膝にたはむれ私を笑はせ、書く材料でも與へてくれることを望むものであります。（終）

內閣改造と將來の政局

內閣改造の失敗と將來の政局

堀江歸一

私は現實の政治に對しては、一個の門外漢であり、又政治の動き方の如何に就て、別段の興味を覺へないようなもの丶、立憲治下に於ける國民の一人として、近頃の政局には大なる不滿を感ぜざるを得ません。

近頃政界の一問題として、私共門外漢の視聽を動かしたことは例の內閣改造計畫でありますが、兎に角原內閣以來事を共にした閣僚の或る者を其意に反して罷免しようとするのが改造計畫の動機であつて、其目的とする所は斯の如くして內閣の壽命を延ばし政友會の橫勢を續けようとすることに外ならないようでありますが、玆に至つて私は今日の所謂政治家の間に行はれる情誼とか、德操とか云ふものが甚だしく低い程度に居ることを見せ付けられた氣がしてなりません。自家の利益の爲めには是れまで同じ道を進んで來た者であらうが、何であらうが、之を振り捨て丶構はないと云ふことは、士君子の間に於ては勿論市井の間に行はれて居る道德の上に顧みても、許す可からざる事と考へられます。詰り高橋是清と云ふ人は今度の改造計畫を行うに就て、自家の發意に基いたものであるか、又は他人の勸說に動かされて、之を敢てしようとしたものであるか之を知りませんが、兎に角自家の利益の爲めには、朋友同僚に不信の所業を爲して、憚らないと云ふ位、德操の低い、又情誼の缺けた人物であることを天下に表明した次第でありまして、此調子であつたならば、高橋なり、彼を圍繞する政友會員なりが黨利の

爲めには、國民全體の利益の如き、之を犧牲に供して憚らない所業を行ふことも、亦怪むに足りません。道徳とか操守とか氣節とか云ふような文字は高橋なり、彼の黨與の頭腦には到底浮んで來ないものと思はれます。

　高橋が改造を思い立つた重なる動機は政權慾の滿足に在るのでありませうが、最初の考へでは、改造を機會として、何か世間に喝采されさうな新政策を實行しよう、其れには、二三の閣僚が居つては甚だ邪魔であるから之を除け者にした次第であるやうです。然らば今度の如く改造計畫が半途に阻止され、自己の不適任とする閣僚が居殘つて、一方に其適任とする輩を閣班に列せしめることを得ないとすれば、差當り新政策を實行するに支障なきを得るでありませうが、此點に支障を生ずることは前後の關係に於て明瞭であるに拘はらず、尙ほ之を忍んで居据らうとするに至つては、高橋の如きは、一個政權慾の權化の如きものであつて、定見もなければ、抱負もなく唯其日暮しをしつゝ、內閣首班の地を貪らうとする者であると云はなければなりますまい。英吉利は立憲政治の祖國と云はれて居ます、而して從來多年に亘つて、政權を掌握し來つたロイド・ヂョージ內閣の如きも、度々の改造を經て今日に至つたものであつて、殊に其改造の內には、內閣の基礎とする政黨の違つて來た位、大規模のものもありました。然し今日までの處では、改造の結果として、一時的內閣の基礎は鞏固に爲るやうであるのは勿論、改造を行つて、中途に斷念したと云ふような失策を演じたことは一度もありません。若し一度でもあつたならば、如何なロイド・ヂョージと雖も、辭職するでありませう、世間も亦斯る失敗者に安心して、一國の政權を託して置くような、政治に無關心なる人々ばかりではないであらうと思はれます。然るに日本では內閣改造に失敗し、首相としての能力の絕無であることの證明された高橋が平氣で內閣の首班に居据り、國民の內には却つて高橋の所爲は淡泊であるとか、禪味を帶びて居るとか、彼の男でなければ出來ない藝であるとか云つて褒める者のあるのは私の驚歎する外なき所であります。

　改造問題の紛糾した當時、文部大臣の中橋と云ふ人は高橋に向つて、現內閣に對する天下の人心の斯く離反するに至つたのは原內閣なり、高橋內閣なりの經濟政策に於ける誤りに基くものであるから、內閣にして改造す可きものである以上は、首相である高橋自ら職を去るのが、當然であると云ふことを抗論したと新聞紙に依つて傳へられて居ります。中橋と云ふ人は、民間で事業を經營して居る際には、讀書家であるとか、氣焰家であるとか、相當の評判があり、數年前まで時々新聞雜誌上に發表

した意見には、稍や見る可きものがありました。原內閣の下に文部大臣と爲つてから、昇格問題などに蹉跌して、世間から甚だ活地なしに見られて居りますが、上記の議論の如きは誠に堂々たるものであつて、一點の非難を加へ可き所を見ません。高橋に辭職を强要された口惜し紛れに高橋に向つて、反抗的に高橋自身の失策を指摘したものであるかとも思はれますし、又從來の行懸りの然らしめた所であると云へ、中橋が斯る問題だらけの經濟政策を敢てする高橋內閣の一員として、其職に安んじて居り、管掌する國務の方面が違うと云ふので、今日まで默過して來たものが辭職を求められて、遽に高橋に喰つて掛る爲めに斯る問題に就て、口を切つたものとすれば、中橋の態度にも甚だしく感服す可からざる點のあることは勿論でありますが、是等の點は姑く措き、兎に角高橋內閣が、經濟政策の方面に於て、失敗に失敗を重ね、今や行詰りの窮狀に居ることは、何人も認めざるを得ない所でありまして、近く內閣が倒潰する運命に迫つて居るが如きも、此點に關係すると思はれるのであります。蓋し物價問題の紛糾、今日の如き、生活難の次第に加重し來つたことの如き、恐慌の襲來を誘致し、續いて經濟社會をして今日の不景氣に陷らしめたことの如き、不景氣と爲つても、物價の低落しない爲めに、少しも景氣恢復の模樣が現はれず、貿易の逆勢、金融の緊縮等相重なりて、益々經濟社會に對する將來の不安を大ならしめることの如き、盡く高橋の立案し、主張し又實行した經濟的秕政の結果であつて、改造の下に職を去る可き國務大臣ありとしますれば、高橋が其第一人でなければならぬことは、中橋の言葉の通りであります。

既に內閣の首相に人を得ない閣僚間に於ても種々意見や感情の衝突があり、政權慾の爲めに、辛うじて高橋內閣と云ふ破屋が支へられて居るものである以上は、今後何が動機と爲つて、何時潰れるか、測り知るを得ません。随つて之に對する後繼問題が起る譯であります。私の如き所謂政機を支配する人なり、其支配者を動かす人なりに沒交涉である者には如何なる後繼內閣が出來るものであるか、全然不案內でありますが、如何なる內閣であつても、今日の高橋內閣よりは聊か勝りはしないでありませうか。尤も所謂中間內閣が政友會援助の下に成立し而して政友會が內閣を通じて、利益を漁するようなことをしましたならば、其弊害は今日に比して、譲る所あるを知らないでありませう。随つて私は政友會を基礎としない內閣が組織され、組織後に於ける第一の仕事として、政友會の絕對多數を打破することを以つて、必要と考へるのであります。政黨政治の下に於て、一政黨が議會に絕對多數を占めて鞏固なる基礎を占めなけ

れば、如何なる經綸も之を施すに道はないと云ふ考から、先づ絶對多數の黨與を作らうとするのは、一ツの道理であるやに見へますが、偖絶對多數の作り上げられた曉に於て、果して如何な結果が現はれるでありませうか。大隈内閣の場合に於て、將た又最近に於ける政友會内閣に依つて、實際に證明された如く、絶對多數の下に生ずることは、一政黨の横暴であつて、其横暴を事とする政治は決して國民の利益に副うものではありません。

或る政黨が偶々或る機會を捉へて、政權を收めたとする、而して其黨首が政權維持黨勢伸張と云ふような特殊の方面に辛辣無比の手腕を備へ自己の率ゆる黨派を絶對多數のものとし、民意が離反しようが、人心が倦怠しようが、其れ等の點は眼中に置かず、飽くまでも黨派心に驅られた政治を敢てするとしたならば、民衆の時の政府に對する感情は如何に爲るでありませうか、國家の將來に就て、私の懸念するのは、此一事であります。或は天が政友會を破壞させてやらう、現内閣の運命を早く縮めてやらうと云ふ趣意で、高橋の如き人物の總理總裁に爲るような機運を開かれたものであると考へますと、今後政局に於ける變動も餘程面白く展開するであらうと想像されるのであります。

然しながら唯政友會の絶對多數が壞れたとか、政友會内閣が倒れたとか云ふだけでは、我國の政治は改良されるものでもなければ、進歩するものでもありません。國民の政治的自覺が進み、國民的德操の標準が高く爲り、道德の上から批判して、少しでも不都合の所業を敢てした内閣は一議會で倒潰する斯る内閣を援助した政黨所屬の議員は一期で落選させると云ふ位に嚴峻なる制裁が國民に依つて加へられない限り、我國政治の改善は百年河淸を待つの類であります。普通選擧甚だ結構であり、婦人の參政權獲得亦當然の事と認められます。然し私は之を結構とし、又之を當然の事とするのは、是等に依つて國民の政治に對する批判の嚴峻と爲る一助たることを望む點に基くものであります。

改造劇の見物

室伏高信

五月二日、永田町首相官邸で、達磨宰相以下十名の大臣が大卓子を圍む。衣裳の立派なのに似ず何れも鈍重役者。皆が顏をしかめてゐる。座頭の達磨さんが言ひ悄くさうに、先づ口を切る。

達磨。「皆さん、あの、どうも、わし達の一座も、近頃（近頃になつてからではないが「近頃」といふところが達磨さんのトリック）あちこちで評判が惡るい。このまゝでは今に客足もすつかりとまつて、わし達一座の生死の場合だ。依つてこゝが皆さんに相談だが、あのどうだらう、中橋さんも、元田さんも、一つ國家のため（——「俺のため」といふ場合に達磨さんは何時でも「國家のため」といふ。尤も或る場合には「吾黨のために」ともいふ）に、一座の改造に贊成しては貰へまいか？」達磨さんは岡崎さんに敎へてもらつたとほりのことを言ふ。

中橋、元田の兩大臣、學問はなくとも、世界の形勢なぞは寸分も分らなくとも自分が評判の「犧牲大臣」だ位ひのことはよく知つてゐる。恐怖神經がびり／＼つと動く。しかし胸の動悸をそつと隱くして、二人が交る／＼立ち上る。

德五郎（咳拂ひをしながら）それはもつてのほかだ。政黨政治は一蓮托生でなくては（……わしが困る、と口のうちでいふ）

發。（蒼白な顏して）「わしも德五郎さんと同說だ。改造なぞは國家のために（自分のやうな無能なものが大臣をやめた方が餘程國家のためになる位ひのことは百も承知の癖に）不贊成で御座る。」

床次さん、（分別顏はしてゐても押し出しばかり。しかし泳ぎの上手。何んでも大きな方へくつついてゐれば損はないと思つてゐる人）。「達磨閣下の仰せは如何にも御尤もの至りで。へへ……」

この日にこれで終。次の日もおさらひをして一日潰す。五月六日、達磨一座がまた相談を始める。中橋、元田の「犧牲大臣」が昂奮しながら顏を出す。達磨宰相の顏色がよくない。第一日や第二日とは違つて、この日は大きな聲や、咳拂ひの音が聞えない。いよ／＼お葬式かと思つてゐると、連名でお客さん方へ

次のような中合せが發表される「中合──改造の相談を繼續するは今日は時機宜ろしからずと考ふる故他日の相談とし各自國家の大局より考慮することとせり」

見物人、呆氣にとられる。しかし樂屋の中からは大物小物の不平の聲が漏れてくる。岡崎、小川、山本、横田なんぞの改造派の面々、「うちの達磨は馬鹿だよ！」「實際今度は呆れたよ！」「あんな間抜け總裁ぢや困まつたもんだ！」

自分達の親分の方が今度の喧嘩では勝つたものだと思ひきつてゐる吉植、木下の兩勅參。地位の卑ひ割合に年はとつてゐる。年だけにカンニングの名人。樂屋のさゝやきを盜み聽きして、「そうだ〱、一層達磨に罷めてもらほうじあないか」すると（床次さん登場、得になることなら機會を逸してはなるまいといつた風。新聞記者席の方へ色目を使ひながら）「改造派の主派も枉げず、非改造派の面目も立て、一擧兩得」

それから四五日たつて一座中の隅つこの方に小さくなつて腰掛けてゐたカーキー服の山梨さんが汽車に乗つて氣晴らしに出掛ける。半造（新聞記者達を尻目にかけながら）「俺は知らんよ、改造なんぞといつたつて、その實は政友會内の兄弟喧嘩さ。俺なぞは初めから關せず焉だよ。」言ひ捨つて半造が空うそぶく。その實は自分も中橋、元田と同様「犧牲大臣」でびく〱してゐたことは忘れてしまつてゐるように。

この間に足まめの横田さん（この人は政治は足だと思つてゐる）が興津へ急行車へ乘つてお寺詣り。幕。

憲政會、これも政友會同様不人氣な政黨。それを自分でもうす〱は承知してゐても、輿論は自分の掌の中に轉がつてゐるようなことを言ひ觸らす。改造劇の興業中は、狸の胸算用をしながら、柄にもなく行儀をよくしてゐたが、幕が閉ぢると、初めて算盤の外れたことに氣がつく。幹部會を開く、無精な總裁さんも氣になつて出る。演説會をやることに定める。青年會館。登場辯士濱口雄幸。一目見ても頭の涸渇してゐるのが目立つてゐる顏。それで慾は深い「内閣は改造でなくて、頭を更へべきだ。それから俺の方へお鉢を廻すのが憲政の常道だ」（そういつて濱口さん精こりもなしに、また胸算用を始める、──岩崎のお婿さんを座頭にして俺は大藏大臣か、フン。何にしろ「憲政の常道」で行くと損にはならない）

見物席の甲。「頭を更へろといつても、頭なぞはないじやないか。達磨が首相だと思つてゐるのが間違だ。あの男は内田臨時首相の引伸ばしだよ。今度の改造劇で、少くともそれだけは分つたちあないか。英國の「ロックなぞにいはせると、英國ではアスキスを最後として首相といふものが無くなつた。ロイド・

チョージのような野卑で、世間の尊信をうけてゐない男はほんとうの意味での首相ぢあないといつてゐる位ひだ。高橋なぞはどんな意味でも首相ぢあありえないぢあないか。」

見物人の乙「そうかといつて岩崎の婿でも困る」

革新倶樂部。落ちぶれ公卿や士族の寄合身上、犬養翁（若年寄の面々に取りかこまれながら、「俺の方ではどうか」

見物席の丙。つくぐ〳〵犬養翁の白髯を眺めながら。「犬養先生は今年お幾つになりましたか？」犬養先生「今年は明治何年だつたかね？」

見物席一同。「一九二二年。」

政見熱と政權慾の錯位の矯正

杉森孝次郎

人間は衝動の動物なんだから、先度の騷ぎ位の事を、内閣の大臣連や政府黨の重役らが、いまどき、しでかしたとても、不思議ではない。こないだまで原氏が懸命に引き締めて來た黨の結果のいのちがプツンと切れて、とりあへず性格者の、そして藏相としては不成績によつて顯著であつた高橋氏をその引き締め役に名義上おし立てた次ぎの瞬間が、黨内の隱謀と爭鬪に機會を與へたことは、物の數であつたといひたいほどに自然だ。

政友會が、内閣を軸として、火の着いたかんな屑かなにかのやうに、"悶えまはり"、狂ひころがるさまは、"いにしへの秦を族せるものは秦なり天下にあらざるなり。といふ評を想ひおこさせる圖だ。政友會の自滅の端がひらけたのだ。政友會にして、なほかつ内閣を持ちつゞけやうといふならば、普選・撤兵、義務教育延長、補習教育増設、これらを最低限の實行的兆象のうちに算ふる新原則の把持者となつてでなほすことが先要事だ。その目的のために多少、人の入れかへを行ふといふはなしなら、まだきかれる。單なる黨情、黨内私情にもとづく國務大臣の入れかへざたが、つぶれた饅頭のやうなさまになるのは、よんどころない。單なる黨情、黨内私情にもとづく内閣改造は、

道理と正義にうつたふる用意を缺ぎすぎてゐる。首切られる位置に自己を見いだした二三の大臣が、私憤に公怒のきものをきせることも不可能でなく、國民も、途ばたで醉つぱらひ同志のいさかひを見物する位の興味で、本統の力瘤をば改造派にも、非改造派にも入れない心理狀態に置かれる原因が、改造の企てそのものに大部分存したのだ。

政友會が、いまのべたやうな新原則のこゝろから把持者となれる見込は薄い。しかし、この際、內部でもめるだけもめて、つぶれるなり、多少改造して持ちこたえる努力をつくすなりすることは、どのみち政局のそれだけの進轉だ。

政友會內閣がたふれて、次ぎの內閣が憲政會內閣だと想定し論斷し、希望し、確信することは、憲政會の黨族にとつては自然だが、そのほかの人人にとつては多少不自然だ。つまり、政友會と憲政會では、本質的差別があさやかでなさすぎるといふ不滿足がその不自然感を構成する一要因だ。憲政會が政友會に代はつても、いはゆる人心を新たにするといふ興味からはなにほども期待されない。憲政會が、大事な政治的行動に於いてあまりに非獨創的であつた閲歷がたたる。加藤氏は、事後の批評としては割合に國際が見えるやうだが、事前、事中の責任ある判斷者、決行者としては國際問題の場合にも多少ちがつたあらはれかたをするかも知れん。氏が、比較的に文明式であり、また煽動政治家的でない點は、現代日本の政治界に一用ある品性だが、時代の根底層にくゞりぬけて、いはゆる新舊兩者に通在する進步脉を纏堀する器量は、氏に於いても不備だ。想像の・深・遠・廣が、現代日本の政治家にはありすぎゑないほどに必要だ憲政會が內閣を經營しても、背景と後援に、國民の政治的衝動及び意思の或る大いなる部分が內存せず、外存する可能が見えすく。たとひ憲政會が內閣にすはつても、ながゐは出來ないにほゞきまつてゐる。それはちやうど、政友會に於ける原時代から高橋時代への推移が意味する原則的內容を、現代日本に於ける政友會時代から憲政會時代への推移が意味するのだといふ言句を有意義にする現象にすぎないだらう。

政權授受、政權爭奪といふたぐひのことばは、もう常識的にも時代錯誤の烙印を押されてよささうなものだ。政治を、動機に於いて私事と心得てゐる人人が、現代政治家の大多數だが、これでは、政治家と、國民の進步的頭腦心胸とはかけ離れて行くわけだ。政權にありつくための政見とあつては、いやになる政見を行ふための政權でなくてはならんことは、わかりきつた理屈のやうだが、わかりきつた意思であり、實行でなくては、あまりにばかばかしい。賄賂し、叩頭して選擧を爭ふ根柢から

が腐つてゐるのだ。憲政會も、その他の野黨各派も、さういつた根柢を隨分持つてゐるのではないかと推想されるかぎりに於いて、當面の內閣問題、政黨問題に對する興味が不純にされる。

勿論この不純は、正當には、複雜とし、困難とし、挑戰とし越ゆべき山として理解さるべきだ。立法、行政は、有用事だから、政治に冷淡であつては無自覺だ。政見熱と政權慾とのたけくらべに於いて、政見熱の方が一寸でも上にでもゐる人人の政治的活動が待望されるその政見が、知識として有價なものであることは、いふまでもなく、一條件だ。

改造騷ぎのあと

山川均

內閣改造騷ぎの大風が落ちて、新聞を通して見た世間は急にひつそり閑とした。政局は當分また安定するらしい。議會閉會後にはなど〻總辭職の相談に立會つたようなことを書いてゐた新聞も、此頃では、大風の爲に順延して、六日とか八日とかいふことにした。反對黨の新聞は、違吠えをつゞけて居る。彼等は聲を嗄らして、高橋內閣に辭職せよと叫んで居るが、さて誰れ一人、進んで內閣を政友會の手から取らうとする者はない。

何が解らぬと云つて、恐らく日本の政治家の行動と、彼等御調子を合せて笛を吹く政論家の條理くらひ解らぬものはない。

反對黨の新聞で見ると、高橋內閣は憲政會の總裁を後繼內閣の首相に奏請して、辭職するのが『憲政の常道』だそうである。所謂『憲政』といふ美しいもの〻、それほど美しいことの解らぬ吾々には、少數黨が多數黨となつて內閣を取るのが憲政の『常道』と勘違ひをして居つた。ところが日本では、多數黨の內閣が辭職して、絕對少數黨の首領を後繼者に推薦して與れるのを待つのが憲政の常道である。憲政の常道すらも解らぬ吾吾に、日本の立憲政治の局面を彼れ是れいふ資格の無いことは無論である。

然し今度の政局のどさくさを、唯だ新聞を通して見物した者は、何人もこれだけの事を感じたに相違ない。

第一には、日本のブルジョアジーも愈々政治上で、一本立ちが出來たといふことである。反對黨の新聞は、高橋内閣が居据はつたのを見て、噛ぢり附き主義に驚いて居る。しかし吾々は寧ろ、政友會内閣の噛ぢり附き力に驚かざるを得ぬ。議會中の對貴族院のごた〳〵から引續く改造騷ぎを通じて、内閣の屋臺骨は大分搖るいでゐたに相違ない。若しこゝに何等かの政治上の一勢力があつて、どちらかに押すか引張るかしたならば、屹度倒れたに相違ない。高橋内閣が居据つたのは、日本の政治界には、最早やブルジョアジーを除いては大した勢力の無くなつたことを意味して居る。

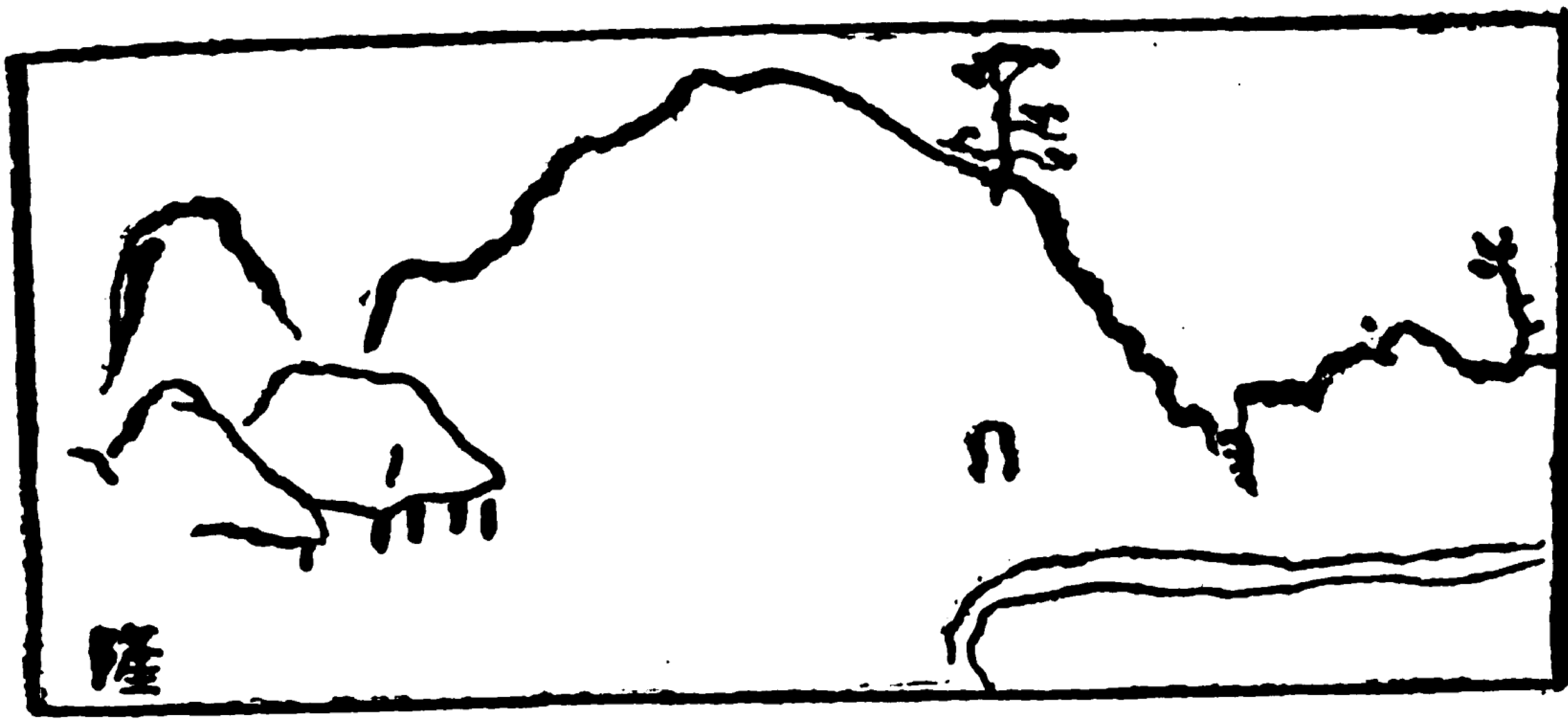
政友會内の謂ゆる改造派と非改造派のいがみ合ひの如きは、畢竟、資本家黨の内部の夫婦喧嘩であつて、此のいがみ合ひの爲によし内閣が倒れたとしたところで、それは憲政の常道かは知らぬが、決してブルジョア・デモクラシーの常道ではないのである。

憲政會と政友會のいがみ合ひにしても、この夫婦喧嘩の稍々大なるものに過ぎぬ。何故ならばこの二つの政黨は、別段異つた綱領や政策を代表して居らぬからである。憲政會も政友會も唯だ大づかみに、ブルジョアジーの利害を代表する政黨であつて、一方が地主黨で一方が商工黨といふ譯でもなく、一方が大地主と大資本家黨で、一方が小ブルジョア黨と云ふ譯ではない。若し憲政會と政友會との間に政綱の相異があるとすれば、或る一國の財閥と他の一國の財閥との利害の相異を代表するか、それとも此の利害を擁護する政策を遂行する爲に、小ブルジョアの階級を味方に引入れる爲の手段の相異に過ぎぬ。

そこで日本の政治界には、少くとも今一つ有力な政黨の出來る餘地がある。（無産階級黨は別として）即ち純粹の小ブルジョア黨である。革新倶樂部がこの第三黨となるかどうかは知らぬが、なる可き可能性がある。そして革新倶樂部が一つの有力な政治的勢力となる可能性は、唯だそうなる事に在る。更にこの假想の小ブルジョア黨が、財閥の爲に墮落された純官僚分子と結ぶなら一層妙である。

有力な小ブルジョア黨が起つた時、日本の政界は憲政の常道から、ブルジョア・デモクラシーの常道に幾分引戻されるに相違ない。高橋内閣が居据つたのは、詰りは日本の小ブルジョア階級が、餘りに、無氣力になつたからである。日本の小ブルジョア民主々義者が早老して、餘りに非戰鬪的になつたからである。

六月特別號創作



妹の問題

瀧井孝作

一

田舍道を終日やつて來て信一は疲れた。闇で岐阜行の電車の乘場へ往つた。終電車に間に合つた。彼の空氣の拔けた自轉車を車掌が運轉臺の扉寄りに繋いだ。斯うして信一は中へ入つた。

それからすぐ野に出た。寒い夜の野の底冷が電車の中へ泌みて來た。車内の疎な客のある者は横臥してゐた。信一は其に眼をやつた。而して揚げてゐた自分の著物の裾を、土埃の一杯な草鞋穿の足許へ下した。

「翌朝大阪へ著くやうに、岐阜の夜行に乘りたいが」

と話聲がする、其客も草鞋穿であつた。

(信一は、流行感冒で義理の母が死んだ、其報をうけて歸省したが、少し逗留してまた田舍から出て來たのであつた)

昨夜「ぢや往けよ！」と、父が決心の動かないのを酌んで出京を許したので、信一は無理な氣持なしに出てこれた。

而してそれは又、六年前の家出以來ずつと家に居やうとしない彼に父が拘泥してゐた、其をも父は解けたわけであつた。

信一は、今度の歸省でかやうに父ととけ合つてよかつた事を憶ふた。

電車が或停留所でしばらくひつそり留つてゐるのであつた。

信一は復考へに入つた。父が許さなくとも關はず出て來る覺悟であつたが、若し、左うしたらお互に殘酷であつた。

父が折れて呉れてよかつた。

常に父は頑固で通つてゐたが、家族が追々死に絶えてすくなくなり、父はまた年が寄つて、心が折れたのであつた。

信一は左う考へて泌々した。

左ういふ窓の外に灯りが殖えて岐阜の街に入つた。それは前の締合せた扉の根に彼の自轉車が繋いであつて、車掌臺からのみ出入りする電車であつた。

其夜、金屋町に住むR夫婦が未だ起きてゐた。草鞋を脱ぎ足をすすいで昇つた、信一を眺めて

「寒かつたらうに」と年上の友達は犒つた、

夫婦は丁度酒の燗をしてゐた折で、其を嗜まない彼には、又近所から善哉をとつて勸めた。茶間でしばらく話をした。

信一は今日自轉車の上で田舍道を間違へ犬山街道から廻つて關町へ出た事を話した。而して東京行の夜行の時間を尋ねた。

「今夜は悠くり休んで草臥を直しておいでたらえい」

Rが左う言ふた。其とぢ糸の多い丹前姿を眺めて、信一はいそぐ事がないので泊ることにした。

座敷には馴染が深いH先生の書の額が掲げてあつた。其下に蒲團がふはり展べてあつた。信一は横になつてから、Rの許に泊るのだから翌日は此岐阜在に居るUを訪問しやうと考へた。

而して、夜半の時を撞く鐘のこゑが響いて來て、彼は頭を横へて寢た。

翌朝おそく起きて信一は庭に出た。鳥屋の中に話聲がして、お客があるから澤山玉子を産めよ、と年寄が庭鳥に言うてをつた。Rのお父さんで、其は息子のRを大事にしてゐる心持なのが直ぐ分つた。而して其人と顔があつた。信一は、

自身の父親の事がはなれない頭で、眞向に此方を眺めてゐる年寄の力のある眼に目禮した。

食事の折彼は、玉子の料理と煮大根の味加減がよいのとで、R夫人にも感心した。

軈てゆふべの丹前の姿で、Rが起きて來た。

信一は左右して、Uを訪ねる由を話し、世話になつた禮を述べて其處を辭した

信一は岐阜驛で此土地を打上げた東京角力の一行に逢つた。プラットホームの日向に大勢の角力達が銘々はなしをしてゐた。一緒に西行に乘込んで、彼はすぐの穂積驛で降りたが、旅の感じが頭にしみて居つた。鐵橋の下の渡船を呼んで、其四邊は幾度か來て覺えがあるのであつた。霜晴の長良川の塘に上り歩いてゐると竹落葉がとび散つた。左うして彼は、藪の中を通るUの裏徑から邸へ入つた。

Uは元來痩形であつたが、今はずつと肉附豐かで昔のUではなかつた。繁しい喫烟を止めて肥えたのであつた。Uはから言ふた。

「斷烟は難儀なやうにいふが、實は節煙のはうが難儀だね。僕の場合では煙草は節したはうが猶よいが其中庸がとれないので、全く止めてしまつたのだ」

其書齋で夕方まで話をした。信一は父親の事をいうて

「今度出て來る時左も右父親がとけて與れて、よかつたのです」

而して家で父が隱居し妹を別家さして、父が妹にかゝると言つた、其話をした。

「君は力があるからね」

Uは、（立根を絕たれたる草と自ら稱へて）地主の境涯に居る人であつた。また自分の位置を（絕海孤島と名づけて）悲しんで居る人であつた。

信一は、六年前家出をして來た折、家を捨て父に背いて差支ない事をUに話した。同じ書齋で信一は、いま其談話の記憶が羞しいので親くならずにすむのだと思つた。

彼は左うして、父ととけ合つた事をのみ憶ひ續けたが、Uと對座してゐる中に頭は漸妹の絹子の上が考へられて來た。………――………

（妹の師範學校時分の憶出を纏めて書く）

師範に居る妹の許へ始て逢ひに行つた日は雨が降つた。彼はその折逗留してゐたUの家から俥で出かけた。雨にぬれた街道の松並木があり、鵜籠をつけた荷車が往く、其籠の鵜がしきりに外へ首を出した。俥の前どよ越しに信一は、少時その鵜を眺め乍ら往つた。

岐阜の女子師範では、疊のある應接室で絹子に逢つた。而してその春入つた許りの妹の口から學校の制度を聞いた。途中退學や義務年限を果さぬ場合の罰のある事には、厭な氣がした。信一はなほ、寄宿舍や賄の事を尋ねて、曾て京都で視察した事のある、鐘紡の工女達の寄宿舍が頭に浮んで來た。左うして信一は、學校の遣方には多く不愉快を覺えてそこを出た。

しかし、絹子自身は上の學校へ入つたと言うて悦んでゐた。其を思うて彼は、妹の樂しみは壞すまいとしたが、物の考へが出來ない妹を左ういふ學校へ入れた、父の分らないのに腹が立つた。父は、彼が家出をして彼が當にならないので、絹子にゆくゆく懸る考へから左うしたので、事柄が父自身の利害の爲である丈に、信一は二重に腹が立つた。

其夕、彼は藪の書齋に戻つて、學校のいけない事と父親の惡口とを盛にUに聞かした。而して妹には頭の中で謝つてゐた。

其處になほ一兩日逗留して、彼は藪の中をうろついたり、野の梨畑へ出て白い梨の花を眺めたりして、沈んだ氣持で居つた。

而しても一度信一は岐阜へ出た。

その日は日曜で妹と一緒に町を歩るき、名和昆蟲研究所の札が出てゐる山の麓へ來て、傍の登り口から山道を其中復まで登り、中復から又來た道を降りた。妹は只蹤いて來た。妹は何の疑も持たず彼を唯一の便りにしてゐた。話は多く

國の出來事が話題になつた。左うして長良堤の櫻の若葉の下を抜けた。洋傘を挿した妹の前に眞白な橋梁が現れ、それは忠節橋であつた。其傍で彼は別かれる事にして、橋の袂に來てゐた電車に妹を乘せた。其電車の去るのを眺めて信一は、無事に歸れるかしらと不馴れな妹を氣遣ひ乍ら、少時佇んで居つた。學校の門まで見届けたらよかつた、左う踟から考へた。

その次ぎに妹と逢つたのは、絹子が四年生に成り、修學旅行で上京した折であつた。手紙は四年の間常に往復して居つた。ある折の手紙に、父から今月は一圓で辛抱せよとそれだけ送つて來たとこぼしてあつた。金の事は、父が貧しいから絹子は隨分きりつめて居るだらうとは想像したが、一ヶ月一圓限りは非道いと思つた。師範學校であるから食はして貰へるにしても食ふだけでは濟まないのであつた。信一は自分の收入の中から幾らかを割いて妹に送つた。其時妹は手紙で「私は親の手で學校へ出して貰ひ、兄さんは苦學して居らつしやるのに」と言うて來た。

學事についてヽ、受持教師が轉任した不幸を訴へた。又中等學校で教師と生徒との間にPとか何とかがありPはよいが他の者は氣の毒だと云ふ憤慨を漏して來た。成績は、一年二年生頃迄は優等生で居れたが上級になる程惡くなり、學問の望みはない等悲觀して來た。彼は左う云ふ手紙を讀む都度、頭をこはす妹の事が憶へて、而して年頃の女の惱みを想像するのであつた。

絹子の修學旅行は四月初めの豫定が延びて中旬になつた。上京した夜、彼が直ぐ其旅館を訪ねた。彼は玄關傍の應接室の粗末な卓の前に少し待たされた。

妹がやがて出て來た。其時絹子は湯上りの赤い顔でお辭儀をして一寸默つて居つた。四年振りで逢ふた、其大柄な有様の頬には健康さうな面皰がみえた。特別な話もなく對ひ合うて居つたが、妹が前から考へてゐた事らしく自身の友達に逢つてくれと言ふた。

信一は其處で妹が紹介した女の人に會つた。妹は赤い毛糸の羽織紐を結んで袴のない扱帶の儘のなりで居つたが、其

友達といふ人も殆同じ歳であつた。信一は凝つと眺めて兩人共二十才で恰きり田舍娘であると思つた。

妹は四日間滯京して、ある晩は彼の下宿へも來て見た。而して翌日兄妹二人で記念の寫眞を撮る事を約束した。絹子は其日の午後みんなと帝劇を見物する筈だつたので、彼は又其芝居へ行く事を約束した。

次の日、Eと云ふ石造建の寫眞屋で、兄妹は値段の事もあつて餘り大きくないのを撮つた。二枚の燒增を賴んで其處を出た。一枚は田舍の父へ贈らうと思つた。彼が父に腹を立てた事は時日がそれを薄がして居つた。

帝劇は、妹の連れが四等席に居る筈で其入口へ行つた。四階の花やかな天井の間近な場所に、賑かな女學生達が居つた。左うして芝居は、桐一葉の途中から見たのだが、餘りよく思はれなかつた。其長い狂言がすんで女學生達は歸つたが、彼と妹とは何とか云ふ切の踊まで殘つて居た。

芝居がはねてから、あくる朝の汽車で發つ筈の妹を錦町の旅館に送つて往つた。濠端の道の上で、「私どうしてですか香が少しもないのですよ、鼻がキカナイらしいの、教場で化學の實驗などの場合でもなんともないのですよ。稚い折頭を打つた事がある、其故かと思ひますの」絹子は左う言ふた。彼は其不具の事を始て知つて困つたと思つた。女はそれでは料理の折味がきけなくて弱るであらうと考へた。其事は彼が其場で如何とも爲難かつた。左うしてそれは頭にかかり乍ら別れた。

この嗅覺のない事に就ては、其秋彼が上野公園の木間を友達と歩るきながら、いろいろの事を話し合うて、嗅覺のない人の場合を、妹とは指さずに彼が言ふた。而して其時自身の頭は妙に沈んだ。

絹子は其頃、卒業期が近づいて赴任の學校の事が一杯であつた。鄉里の小學校を望んで居つて、其事を郡視學へ手紙で賴んで欲しいと彼に言うて來た。妹の萬事兄で出來るときめて居る、其信賴は尊く思はれた。が、彼は自分の手紙で事がうまく行く自信がなかつた。また手紙を書くのが却々大儀なので其は延延にして置いた。其中に妹は村の學校の方が或は氣安くて好いかも知れぬと言うて來た。彼は其手紙の上で色色行先を案じてをる妹を想ふた。左うして事柄は、卒業した三月の末に町の隣村の小學校へ極つたのであつた。

…………………………………………

Uが爐に圍い炭を繼いだ。信一はやがて口を開いた。
「妹は親仁の世話をする氣なのです」
Uは、ずつと顏を擡げ少時して
「お父さんが、エイと言はれたのは、何よりぢやな」と左う言うて、又「妹さんは、岐阜の學校はすんだのかな?」と尋ねた。
「今年の春師範を出て、國の町で近くの學校の教員をしてゐます。廿五になる迄あと四箇年半其義務年限があるのです」
信一は義務年限の事を話し乍ら自身ある束縛を覺えた。
「妹さんは、なかなか骨ぢやなア」
而してUは閑かに言ふた。
「君は、自分を立てる事をしたが」
其細い眼を見ながら、信一は口を噤んで居つた。地主の跡繼に生れたUは動きがとれなかつた、左う考へた。何もかも捨る事をUは人情的に出來なかつた、左う頭は考へた。
少時二人は口を結んで居つた。信一は瑠璃戸越しに外へ眼をやり、此頃つくり直したと云ふ、其庭の石の豐富な有様を眺めた。そこには彼より十幾つ年上の主人が感じられた。
Uは友達の動靜の上に話を移した。信一が東京の同人の噂をした。
其晩、眞一は東京行の汽車に乘つた。車室には上に灯がはいり、座席は空いてゐた。列車の窓の外がとつぷり暮れて、信一は隔ての厚い背板に脊中をつけ、下の溫かいスチームパイプの蓋金の上に、足のうらを乘せて居つた。
頭には妹の絹子の事がついて居つた。半日薮の中の書齋で話をして、妹の上が考へられるやうになつた、其事を「さすがにUは考へて居る」左う思へて、彼はUを德とした。
彼は汗ばむので外套の釦をはづし古びた首卷を退けた。而して少時蜜柑を剝いで甘い汁を垂し乍ら幾つも食べた。鈍

い灯りをうけた、額に汗が出て疲れを覺えるのであつた。

朝六時半に東京驛へ到着した。信一は直ぐ電車に乘り本郷へ來た。街はうすい霧がこめて未だ表てを閉めた店があり、物の古めかしい心持がした。

湯島の下宿では、家の人が澤山重ね著をして著ぶくれてゐた。信一は半月程の旅行で有樣の變りが多いのに驚いた。

その夜信一は根岸の先生の許へ出かけた。いつもの書斎の藍色火鉢にすぐ膝を寄せ、ふき綿がある羽織姿のH先生に眼をやつた。

信一は田舍での出來事を話して

「こちらへ歸る時、父が家のきまりをつけて行けと言出し、歸京させない鹽梅で一寸弱つたのですが、終ひに父が解けて呉れて、出てこれたのです」

信一は左う父が折れた事を告げた。

先生は默つて聞いて居つた。

信一が猶、Rに自轉車を借りて出掛けた事や、歸りに其家に一泊したので、序いでUの許もたづねた由を言ふた。

「Uさんと話してゐると、其迄は私は父と解合つた事許り考へてゐたが、其からは妹の事も憶はれるやうになりました。此事はUさんに話してよかつたと思ひます」

而して信一は少し間を置いてから、又妹の話をし、前に憶ひ出の中に記した其を述べた。

「妹は僕と異つて、うちで學資を出して貰つた事から、うちの世話をせねばならぬと考へて居るやうです」

左樣な意味の事まで話をした。

H先生は一一聞とつて、其時他の意見は出さなかつた。

信一は少時經つて先生の書斎を辭し、直ぐ下宿に戻つた。

居間には白木綿の窓掛が引張つてあり、電氣の明りから壁に掲げた友達の油畫のよい森の色が浮出て居つた。

彼は手紙を書く爲机に凭つた。田舎の父親へあて、無事に歸京した由をのべ、來る折許して貰つて有難かつた事を、落着いてしたためはじめた。

二

其冬を越へた二月の末に、彼の郷里飛驒高山から一つの手紙が來た。差出人は其封筒に—、—、—の三つの署名があり、其は彼が緣續きの苗氏であつた。信一は封を切つた。

謹啓　春暖の候に相向候處御前樣益々御壯健に修業遊され候哉何時も御無沙汰にのみ打過申譯無之候

扨　私共親戚一同を代表し是非御願申上度儀有之書面を呈し御意見御伺申上候次第に付何卒宜敷願上候

實は竹內家の相續を誰が致すやら分らぬ樣な事を承候へ共共は貴殿を措いて誰人もなく何卒其積にてなるべく早く歸郷被成度待居候

處が先日御父上樣妹御に聟を進められるとやら承り　私共親戚が御令妹樣を招き申し氣を引いて相見申候處御返事には「私には兄上樣ある以上そんな聟を取る事なんかは出來ません、其中に兄上樣が歸つてみえ竹內家の相續をして下さいます、私は家の相續はようしません」と斷然聞入申さずとの由にて至極最の御事と感じ入候　又「自分は他に嫁ぐ積りにて兄上の都合にて一二年は分らねど共話だけは定めて置度」との御心に御座候

貴殿は竹內家の爲又數ない兄妹の間柄愛らしき妹樣のいふにいはれぬ御心を察し御父上の安心被成樣　一二年末には歸郷すると云ふ確かな處を私共の方へ御知せ被下度さすれば及ばず乍御父上に宜敷御話可申上候

而して此度　野田家の相續人義雄どのの儀に付其御嫁樣の見立に私共心致居候處　本人は竹內の絹子さんをしばらく位は待故と申是非定めて頂度と非常なる熱心にて望居候　私共も良緣と存じ又御令妹樣の御心も承候處來て被下樣見受られ候　相方親戚の間柄の事故無理申ても御聞濟相願度未表向貴家へ御願に參上仕らず候貴殿の御意見伺ひし上にて參上す

る樣內談仕居候
（次に當人義雄の人柄が書かれて居た）

右の次第故兩方の心を御察の上甚恐入候へ共殊に緣積なる私共の顏を立させ被下樣御同意一重に願上候　然して前に申上候何時迄には歸鄕して竹內家を相續する考であると云ふ其御返事希望致候　さすれば相當の方に依賴仕萬事父上の氣に入樣取計ひ可申候間右何卒宜敷願上奉候

罫紙四枚綴の其終りの場所には、上書と同じ三つの署名があり下に朱の捺印がみえた。この三つの苗氏は野田の近親で、從つてこの手紙は、義雄を絹子と結婚さしたいと云ふ理由から、信一の歸鄕を促して來た物であつた。

信一は、相手の立場に對し理解のない文面である。左う考へ乍ら其を下に置いた。

自分を立やう爲に家を捨て父の氣持を一旦は踏著けた。が、この冬父親が理解して、現在は其極りがついて鄕里を離れてゐる體であり、家を繼ぐ爲呼戾される筋は無かつた。野田の親類達は義雄をば理解するが、外に暮してゐる信一の心持は分らない鹽梅であつた。

彼は、かやうな手紙の筋合では歸鄕出來難ると思つた。野田の親類の情には氣の毒であるが、其申出は斷らうと考へた。

併し、義雄其人の氣持には同情を持ちたいと思ふた。

而して絹子の事は、先づ其意向を聽く要があるが、欲しがつてゐる義雄に妻合す事は宜からう、左う兄として考へた。

信一は、去年の三月父が「此頃は暖になつたが未だ雪があるで寒い、川原町の野田平兵エが死んで昨十六日御葬すました」と、從弟である野田の父親の事を認めて來た、其を憶ひ出した。

信一が徵兵檢査を受けに歸省した折、自家の一間に見馴ぬヴアヰオリンがあつた。妹はその春岐阜の師範に入つてゐなかつたが、母が「野田の義雄のヴアヰオリンぢやぞ」と云うて、絹子が居た間よく遊びに來ては彈いた由を告げた。

彼はその樂器を眺めて、其折頭には義雄と絹子とを一つに浮べて居た。

母が流行感冒で死んだ折、其報せで歸つた信一が跡から一つの話を聞いた。母の棺を火葬場へ送り猶彼の歸りを待つて

一晩焼かずに置いた、その棺の番をしに火葬場へ誰かに往つて貰ふた。其通夜をしたのは義雄であつた。其事を聞いて信一は、左樣な役目を爲た義雄に感謝した。而して頭には、其年學校を卒へて歸つてゐた妹の事が一緒に浮出た。

彼はその逗留中一度、川原町の義雄の許を尋ねた。疊屋で義雄は職の手を動かいて居つたが、直ぐ母親と共に爐裡に榾を折りくべて信一をもてなした。

其折丁度店へ客が來て、誂の疊の遲い出來を何かと切りに言ふのであつた。義雄は流行感冒で職人が休み手が缺ける由を述べてあやまつたが、客は却々諾かなかつた。義雄は母親と一緒にひた詫に詫てゐた。

其場合信一は爐の側で、客の頑固な態度に腹が立つやうに思へたが、一軒の店を家業大事にやつて行く有樣を、その折二つ年下の義雄に見出したのであつた。

信一は左樣な若者の配偶に妹を置く、其考へはかうして早く頭の中に出來上つてゐたと思つた。其場合若者が持つた感情が信一に傳つてゐたのであつた。

しかし、左樣な考へが若し彼の先走りであつたとすれば、左うすれば或は又、前に左う云ふ考へを持つた事が、今日義雄に妹を望ませる結果になつたかと思へた。

孰れにしても信一の頭には、今度の手紙から直ぐ始つた問題でなく、自ら考へてゐた事なので、事に對して盡せるだけは盡したいと覺悟した。——

野田の親類達から來た手紙を前に置いて、信一はかやうに心持をキメた。而して自身の考へただけの事柄を、詳しく認めて其返事とした。猶、本人の意向を直かに確めたかつたので、追伸に、義雄と直接文通したい意味を述べた。

また其返事を出す折一緒に、信一は妹の絹子へ、手紙に仔細を書いて其意向を尋ねてやつた。

(信一の日記抄出)

大正八年三月一日。

絹子よりてがみ。

義雄に事を打明けられて兄に相談をしてきたてがみである。父にそれとなく縁談の事を尋ねたが「お前は別家させ他姓はなのらせないので、野田の義雄まが時々遊びにくるけど嫁にはやれない」と云うて父はきかぬらしいとある。この手紙に絹子が自身斯う仕たい共は云うてゐない。

絹子がそれとなく父に尋ねてゐる所を推すと其氣持は分かる。それまで絹子を動かした義雄の眞率な氣持も汲れる。さきに絹子へ問合せたのと行違ひに來たてがみで、自分の意は前便がもう屆いてをる筈なので、之には返事をさしをく。

三月三日。

××新聞社に入社。はじめて職を得たのである。文藝欄の編輯大組などにたづさはる。内部は割に雜然としてゐる、新聞といふ物は正確に明瞭に極りのついてゐないやうな處から出來上るものかと思ふ。

三月五日。

ゆふべある事件をしらべる爲深川から麻布邊まで走り歩いたが、其記事をこしらへる。「常陸丸遭難當時その乘組の中に一人の青年詩人があつた、といふ風に冒頭したらよい」と、机を並べてゐる―君が心得を敎へてくれた。

三月六日。

常陸丸の青年詩人の記事は寫眞が添うて朝刊の特種の一つになつてゐた。

文藝部へ社會部長の―氏が顏をみせて「新聞をもつと精讀なさるよう」と誡られた。自分は記事を隅々まで讀んでゐなかつたので、―氏の誠と好意を有難いと思つた。

三月九日。

あさ手水鉢が凍つてゐた。勤めでこのごろ早起するが、氷を見て何か感じがある。緣側から崖下へこの氷をバサツと投げてやつた。

三月十日。

義雄よりてがみ。

はじめて貰ふのであるが兄上樣とある。歸鄕出來ない事了解したやうで、さきの親戚のてがみの事は詫びてある。

義雄はこちらの好意を心からよろこんで其を唯一の力にしてをるやうだ。父親の肯かぬ點には「私共は互に助け合つて一の險しい山をよぢ登るのです」と、健氣な氣象を見せて居る。

自分はかういふ青年の艱難に直ぐ惹かれる(當時殊にさうであつた)其氣持から、義雄へ力づけになる手紙を書いた。

國は彼岸近く柔らぎの雪や氷を片付る最中で、町で義雄もそれを仕て居ようなど手紙を出し乍ら思うてしみじみした。

三月十五日。

雨、出あるくと顏が汚れるやうな暖雨である。絹子よりてがみ。すべて兄樣に任せると書いてをるが、戀され戀する重荷を訴へて來てをるのである。

此事では、常に學校へあて手紙を欲しいと書いて、自家では父がこはいかの樣子で、それだけ又父親の不同意の有樣が見えるやうな懊悔の音信である。

三月十七日。

義雄より來信。

「父上が一人で不自由ならば、後妻? と云はずそのやうな、守のやうな人を迎へて」

「絹子さんの學校の月給は父上に任せ」

「父上が其氣になつて下さらば、私の家の離座敷に移つて安樂な境涯を送つて欲しい」

等、義雄は考へてゐる事を云うて、はつきりした氣持をみせて來た。

三月廿日。

義雄より又てがみでこちらの返事を待つてをると云うて、前便の後妻云々の事は言ひ過ぎでないかと謝つて來た。

義雄の細かい心遣ひに惹かれる。
返事は左の如く出す。
「父が野田の離座敷に移ればずゐ分樂隱居の身の上になると思ふ」
「父へは自分も手紙を出すが、却々むづかしさうであるから、まづ自分の方の親戚達を動かしたらどうかと思ふ」
「父は聟とりの事を考へてゐる樣子が見えるが、兄のある家の妹に聟を取つても面白く行くまいし、若し來る人があつても妹が不憫に思はれる」
「父親の事がヒドく氣遣はれるやうだが、本當はお互が根强い確かさを持てば事は自然に解決するものと思ふ」
この終ひの項は、彼等の結びつく力が、父の心を解くやうにと思つた。而して、野田の離座敷は、其母屋とやゝ隔たり、川に臨んで淸々しい處である事などを憶ひ出した。

三月廿三日。
議會へ飛驒鐵道の請願の爲に上京した、國の町長J翁に逢ふ。新聞社に勤める事になつたのを喜んで貰つた。自分はJ翁からけふ迄學資として援助を得てゐたものを辭つた。翁は其氣持を理解された。
妹の事を一寸話すと、翁は義雄が謠をやる事から知つてをられて、其若者のよい評判を云はれた。
午後から、根岸の句會にJ翁と一緒に出席。
「妹等に父をあづける田舍は樹樹の軟葉」自分は會でこの句を作つた。

三月廿六日。
新聞に各地雪の電報が見える。
市內版に彼岸櫻の寫眞が出る。
社の圖書室の窓べりへ見馴れぬ人が盆栽佇む。
「やつとすんだですね」

「これから梢らくです」議會が了り、日比谷に詰てゐた記者が戻つたのである。

J翁は東京驛の夜行で歸鄕。

四月一日。

毎日銀座へ出てゆく仕事に樂しみを覺える。さくらの花が滿開。車中で「眠る人の隣りに腰をかけ花曇り」と口ずさむ。

四月四日。

毎週金曜の夜、居のこつて社會部の仕事を手傳ふ事になる。文藝部だけでなしに一般的な新聞記者としての仕事を會得する爲、すゝんで居のこりをする。

四月七日。

改造の創刊號露伴の運命は力のある筆にて明の建文帝の事を爲り、近刊の幽情記は史中の才子佳人の事を爲り、ともに小說に勝る小說的事實をあぐ、近頃たのしく讀む。

四月十五日。

國の高山の町にある氏神日枝祭がある日、色々の事を憶ひ出す。

しばらく音信のない絹子や義雄の上を憶ふ。絹子へてがみで樣子を尋ねる。

四月十九日。

前に妹が仕立て遺して置いた袷を取出し、其に著更へる。

東京は櫻の木立が今は梢が伸々して若い葉をふき出してゐる。

四月廿日。

毎日勤の爲出步るくこの頃偶の日曜に居間を離れぬ事が樂しい。

この住居を始めて見る、或る女の友達が來訪。

緣側のてすりに沿うて湯島からの眺めを其人に說明し「國技館は彼處」と指しながら、不圖その建物が無いのに當惑した。

「オヤ、每日見えた筈だが」と、甍の上を探ねて少し氣不味く思へた敏感な友達は、

「街のお屋根に、すぐ鯉幟が出ますわネ」と話を他へ移した。

晝過ぎまで一緒にくらし物和らかな其人の感情に頭は同化した。表てへ送つて出、歸りしな夕刊を買ふと、其には朝の風で鐵骨がネヂ倒れた、兩國の寫眞が掲げてあつた。

四月廿一日。

義雄より約一ト月ぶりに意外なてがみが着く。

「馬場へ繁々お伺ひしたのが父上にいけなくて、去る三日夜叔父上達から、父が斯く〳〵申し嫁にはやれぬ身の上故承知して貰ひ度とのお話にて」

「私は譯が分らず、皆心疑りをされたのかと思ひ、何と返事してよいか苦しみました」

「お報せのてがみがすぐ書けず、また祭前後で家業に忙殺され、人は物見遊山と浮かれ歩く此頃、望みが破れた私は夜もまんじりともせず」

「母は私の心を憐んで色々慰めて吳れます、三月十五日に差上げたてがみは母の意向でした」

「兄上どうぞこの事解決して下さい」

「絹子さんは福寄の學校へ轉任なさいました」——

父の仕打は若い者の氣持を摘み捨てるのみと思ふ。

義雄へ時機をまてと返事する。

四月廿四日。

絹子より、途方にくれた訴のてがみ。

「義雄さんとの事父の耳に入り、向ふの親類も〱だ親のある者を親をふみつけにして子供と話してきめてゐるなんて失禮なと、大層怒つてぜひ離れるやうに、こちらの叔父達に中へ入つて貰つたのでした」

「高山新聞に、馬場通りから某女學校へお通ひの女教員さんは此頃少しづゝ尻をふりなさる云々と中傷的な投書がのり、其評判から私は福寄校へ轉任され、それで父はどうしても離らかしてもらはねばならぬと毎晩親類へ行つて話し、而して私にはいたづら者かのやうに父は常にヒドイ惡口をいはれるのです」

「私は社會から殺された不名譽を恢復するまでは決して結婚しない父父の目の黒い中はどうしてもこの縁談はだめですから私は死んだと思つて諦めてくれつて義雄さんへ手紙を出しました」

「親類は、こんな縁談の事に信一が口を入れてゐると父様が知つたらどんなに怒るだらうお前は兄様を使つたとて家の事に關しては信一には餘り權利がないのだお前の父様のなさる通りにさへしてゐればよいのだ信一が口を出してゐる事を決して父様に聞せてはならんと云はれ、私はほんとに父にどれだけの權利があるか知らないけどもう自由と云ふ事を束縛され籠の鳥同様になつたのです」

斯う書いてある。

彼女は故なく傷つけられた事を何より口惜がるのかなあ。

父は頑固に意地を通してゐる。

絹子へ人を怨まぬやうととりあへず返事をする。

四月廿六日。

妹等の事が氣がかりである。或はいま一寸國へ顔を出せば割に早く事が解決すると思はれる。が其には旅費と時間とが無い。

けふ給料日にてこれの入つた袋を手にし、今の境遇を思うて猶情けなくなつた。

四月三十日。

このごろ新聞は支那の女形梅蘭芳の寫眞を掲ぐ。而してそれに興味の持てる自身が、何かなし都會染みた感じがする。

五月六日。

外國電報は北京にて章公使の横死を報じてゐる。

去月この支那の公使が東京驛を發つ晩社會部の居のこりで見送りに出掛けた。

其事からこの死去の電報を見過し難かつた。

新聞の仕事を爲ながら自身に感興のない事を筆にする場合があると考へてゐたが、案外左うでない様だ。

信一は、這度の緣談の破れた事で、妹が父に叛き親を棄ても差支ないと思へた。絹子は何故愚圖々々するのであらう。

信一は妹を腑甲斐ないと思つた。

併し信一自身が妹に其事を指圖出來なかつた。其處まで入つては間違ひであると思ひ、唯眺めて齒痒がるだけであつた。

信一は又、考へを曲げない父には好意を抱くが、其爲意見が合はず若い者が離れるのは致方がないから、其點を氣の毒であると思つた。義雄が父親を離の座敷に引取りかしづくとまで云うて來た、這度の事は幸せに思へるが父は頷かない。——

信一の頭は毎日斯様な考へを置いてゐた。其で盆樹獨りでゐる折は露骨に悒鬱な顏をした。

或夜根岸の小集の折、信一はH先生に妹等の問題をはなした。

「此事は親仁が頷けば、何もかも工合よくゆくのです」と信一は父親を非難した。

H先生は聞き、

「お父さんが淋しいのだ。細君は亡くなり君は遠く離れてゐるし」左う云うて「ユーゴーの噫無情の中には、晩年に一人娘に別れる年寄の寂寞がかいてあるが、讀んだかね」

而して先生は、一座の他の人へ眼を移し「ユーゴーは人間の心持をよく掴んでゐるね」と、昔其小說を興奮して讀んだ折の話を續けた。

信一は父の立場から本氣に考へた事がなかつたので、左う聞かされて弱つた。

先生は猶、

「君は前にお父さんと解け合つたと云ふ話をしたが、家の事を父親に任してあるのなれば、妹を貰ひに來てもまづ父親へ尋ねて呉れと言ふ所であつた」

信一は、間違ひの本が自身にあると思へて、參つた。

「兎に角まあ、お父さんの氣持も考へて遣れよ」左う先生はつけ加へた。

かういふ小集があり、其後信一は、妹の縁談には別な考へを置くのであつた。

信一が父親の事が分かるやうになり考へは廣くなつたが、自身の位置は若い妹達と其との間にハメに陷ちて動きが行かないと思へた。自身をどうせうと思つた。

「左うして義雄へまた福寄の村に居る絹子へ、缺かさずてがみを書いた。間に合せであるとは分つたがお互にせめてもの慰めになると思へた。

六月に入り村にゐる絹子からてがみが來た。

此頃は他の方々の私に對する誤解もやゝとけて少しづゝ我に返つたやうな氣がします。人に對し當局に對し何一つ辯解せず島流しにあつたやうに淚をのんでゐましたけど、やはり罪なきもの はみすて られないのだと漸く息をつぎました。

お父さんも少しは落付かれたと見えて此頃はそんなにひどい事も云はれません。林檎山も賣つて終つて一人家で仕事

をしてゐられます。先日十一日の日曜に歸つた時篠原の世話で誰か來て下さるとか父が云つてゐましたから十五日の祭には家へ行きませんでしたの。そしたら其人は十二日の晩來て翌る朝歸つて行かれたさうです。私も何處から來られたのかどんな人か少しも知りませんの。それでやはり祭には父一人で御馳走したんですつて。父もほんとに氣の毒です、私も親不孝です。

私は此處一二年は結婚しやうとは思ひません。きつと父の目の黑い中は義雄さんとの緣はだめでせう。今暫く此話は父にしない方がよいと思ふのです。これは私の誤解がはつきりとけて後がよいと思ふのです。

三

三月から信一が新聞社の人となり、實に彼がそこから得たものは固い意志の自覺であつた。

「××新聞はデモクラシイだから文章には尊稱をつけぬ」

「事實通りのみだしにしませう」

等の言葉が通つてゐる、左ういふ處に性根を据ゑて世の中へ出た。

彼はこの職に就く前は、根岸のH先生と一緒に、其集りから出る機關雜誌の編輯を助けて居た。而して感情本位の生活信條の下に、其を培ひ乍ら過した。

それが、職に就くと一緒に異る信條の下に移り、彼はどぎまぎした。が軈て分り、彼は其を感じて妙に力づくのを覺えた。

新聞に、一の記事を掲げる場合當人の弱るのが分り厭な氣がする折があつた。左ういふ折には其事實を認めて自身の感情を殺すのであつた。其が一度ならず有つた。終には其感情が湧かぬやうになり、それから何にでも出來事の事實の上に頭が向いた。

信一が左う云ふ新聞社に入り、半年した九月のはじめの事であつた。家族と伴に湯治から戻つたといふ根岸のH先生を其寓居に尋ねた。

玄關から次間へかけ、紐にて吊つたげんのしようこが陰干にしてあつた。其乾草の香が邊り一ぱいに罩めてゐる、座敷へ彼は通つた。この草の葉茎を煮てお茶のやうに飲用すれば腹中を整へるといふて、前に岐阜の在からHが乾草を遣した事がある。

「まるでげんのしようこの中に住むやうですな」信一が座について言ふた。

漸湯燒のしたH先生は、鴨居に暖簾のやうに垂下つた草を眺めて其を摘んだ話をした。

「始は葉の色や形で他の草と見分けをつけてゐたのが、末には其が白い花をつけ、遠くからでも見當がつくやうになつた」

樂しい湯治場の様が思はれた。

信一は、新聞の方の話をした。而して社の仕事に手腕を持つてゐる口氣で其を言ふのであつた。

「窮な心持などは捨て、事柄だけを書くのです」

先生は頷いたなり、少時口を噤んで居たがやがて、

「新聞社に入り、君は好い影響を受けないと云ふ噂があるよ。誰しも周圍の感化は免れないが、殊に感じ易い質の君としては仕方がないが」

斯う笑顔で穏かに言ふた。

「さうですかな」彼の頭は其を頷かず、左様な噂の本をすぐ考へた。

先日揃つて夕めしを食ひに行くつもりで、友達の家に皆が落合ふた、其折の事を信一は憶ひ合せた。

「ほう剃髪されたのですね」

「北上袈裟をつけたら、衣の手前多少は行ひが直るかねえ、いつも失策をやつてねえ」

友達は其折左様な事をいふた。生活精進の事を頭にをき乍ら常に間違ひをしでかすのが憐れに頻笑まれた。

それから話が色色なほうへ伸びて、其友達の家でみんなは腰が揚らぬ鹽梅であつた。獨り口かずの尠い信一はそれに興味を持なかつたし、飯をくひに行くときめた事も果されない有様なので、漸焦れて來た。其坐にそぐはない氣持を覺えた。尤その頃仕事の方があり仲間から隔り、親みを缺いでゐたのである。

其折の氣持が友達に傳はり、惡く噂されるのであると考へた。

「――君はまたあまりに世間ばなれがしてゐますからな」

信一はＨ先生に友達の事を言ふた。

先生は苦笑した。それから少時默つてゐて、信一はやがて家族達の相手になり、げんのしようこの一杯な草の香がする座敷で夕暮まで遊び、先生の家を辭した。――――

其秋、信一は左う云ふ淋しい頭で、國の妹の悲みをみてゐた。

新聞の仕事にたづさはり、世間に觸れ、自身は固い意志に覺めたが、其爲感情は冷めたかつた（當時彼は左様な事は考へない、跡から分つたのであるが）左う云ふ頭で妹の事に關つてゐた。

秋の末に、根岸のＨ先生が關西に移住した。東京驛から起つ朝信一は其見送りに行つた。みんなが集つて、やがて其列車の窓が動き出いたのであつた。

跡の歩廊に頭に殘つた人の中から、信一はＮがある親しみで近づく事を期待した。Ｎは色のマントが脫げさうな背向の儘、他の人と頻りにしやべつて居つた。信一は卒氣ない感じで其跡に蹤いて居つた。

廣場へ出て、時雨にぬれてゐる砂利に佇み、Ｎは目禮だけした。信一も口言はず濠端のほうへ離れた。

信一は少し前、或女の人との仲をＮに打明けられた。其場合相手の事が問題になり、

「此方が一杯でさへあれば、相手は石塊でも瓦の片でもかまはない理なんだ。で此方の氣持が大事だな」信一は言つた。

猶、解決の方法は、

「すつかり斷念するか、かまはず突き進むか二つの道があるだけだ」と信一は嚴しく言つた。

Nとは左樣な間柄であり、信一は逢ふ事に期待を持つて居つた。が、其は外れてしまつた。其を信一はその頃H先生の居ない事とともに不滿足に感じた。

ずつと後になり、東京驛にてのNの仕打を信一は自然だと思ふやうになつた。あの場合突放した詞がNの助けにはならず、却つて冷たかつたのである。左う思へた。――

信一は絕へず妹の事を解決しやうと思ひ乍ら、それなしに日を過した。自身が鄉家を繼げば解ける事はたやすいが、其は出來ない。どうしていいか判斷爲難かつた。

信一はさきのNとの出來事を考へ、妹の場合には突放してゐないと思つた。事柄に入つて解決しやうとする事の難いのが分るのであつた。

其年の暮になり信一に結婚の事が起り、明けの春には世帶を持つて居た。

彼の妻は松子と呼ばれた。前に知合で一度間が絕へたが、また逢うやうに成り、直ぐ一緒になつたのである。

妻の松子は、妹を未だ見知らなかつたが、直ぐ「阿絹さん」と其名を口にした。而して懷かしがるのであつた。左うして信一は、無造作に妹の名を口にする松子に氣付いて、親身になつてゐる其妻振をまた眺めるのであつた。

信一は斯うして家庭を作り、全く東京を離れ難くなつた。

國の妹の事は其儘片付かず、又その上野田との親類の間に隙が生じてゐた。

信一の頭は、絹子と義雄との間が一時斷たれて居るが、其中また一緒になる折がある事を考へて居た。左う思ひながら月日を過すのであつた。

四

絹子が東京に出たいと言うてきたのは、あの事から丸二年過ぎた、其夏休みであつた。

妻の松子と母親との三人で家庭を作つてゐた、信一は家内の同意を得て、妹に來いといふ音信をした。

松子は其年の梅雨入に咯血し常に藥餌を絶さない身であつた。

「阿絹さんを私案内出來るでせうか」

「お前さんは動けないよ」

「さう？　仕方がありませんワねえ」

松子の母は、茶間の長火鉢の側にてヤケに羅宇をはたき、よく默つて居た。初ての彼の身內を病中の娘に會はす事を本意なく思へた。其人の來るのが分り不機嫌になるのであつた。

信一は、義雄との事柄がその後どうなのか絹子に直かに逢へば分るので、其を聞く筈にした。而して逢ふ日が近づき頭は多く其事に關つて居た。

其日正午に東京驛へ著くと云ふ電文をうけその迎への支度をして、松子が白靴を揃へ、彼は絹子に始ての己が夏服のなりを顧るのであつた。

降車口からプラットホームへ出て、灯(とも)つてゐるすり硝子の上の急行が著く時表を眺めて信一は盆やり時間を過すのであつた。

やがて、列車の最初の窓の中にそれと思はれる女の顔があり、絹子は機關(かま)にすぐ續いた車室の第一番目の場席で其ニス塗の壁にもたれて居つた。

妹は伴れと四人で歩廊に降り、みんなが彼に目禮した。

改札口で四人は急行券が無効といふかどで引留られた。みんなは譯が分らなかつたが、更に一圓づつの料金がいると言はれた折絹子は左に右にすぐ伴れの分まで支拂ふのであつた。

無効の其を所持したのは、東京までの切符にそへ品川までのをうる岐阜驛がいけないと思へた。「岐阜から品川までは二百五十哩の急行券、東京驛へは五百哩の分が要つた」彼は女達に附いて居り、むかふへ懸合ふため、一所に支拂ひしたその領收證を驛の係員からもらつた。

彼が左樣な執成をしてゐる間、大きな待合室に絹子達は休んで居つた。皆單衣のうへに袴をつけ夏の講習會に出てきた女敎員であつた。

「つれが一緒に泊めてほしいやうに、言はれるけど？」と、妹が彼の意を尋ね「會から指定の宿はあるの」と續けた。

此事は一兩日前松子の母から話があり其は能ないと思へた。彼は妹に厭な顏をし、其で友だちを本郷の宿屋へ案内する事になつた。

それから信一が郊外の自身の住居の邊りへ妹と二人できた折は遠慮のない兄であつた。

「お前さんの伴れは餘り美しくないナ」左う言ひ乍ら草生の明地を通るのであつた。

門口についた氣配がし母が玄關へ出た。松子は茶間から勝手元へすと起つた。其絹子にかくれるやうな素振を思うて信一が勝手へ行くと、妻は涙をながして手拭をはなさぬのであつた。

「どう？」

「羞かしいのですもの」妻は變なしかめ面をして頰笑むだ。

「泣くことは無い」

信一は妻の病の事を憶ひ、左樣な胡麻かしを言うて氣を換へようとした。が自身同じやうに神經が弱り一杯になり當惑した。

「今まゐりますワ」松子は氣を引立ようとした。

「左う」と、信一はそこを離れた。

而して妻は漸と母親に伴はれ、絹子に逢ひに茶間へでた。信一は此方で裸になり乍ら、妻と二人が「阿絹さん」「嫂さ

ま」と言ひ割に澄して御辭儀するのを眺めて居つた。
妹がきがへをする折、妻は
「私の湯帷子で宜しければ」と言つた。
「もつてきてをりますの」
しかし絹子が、帶は縮緬の扱をしめるのであつた。常に袴で通し絎けた其をあまり使はない樣で、其が妻には學生らしい感じがした。而して扱帶のなり妹は彼に伴はれ街の錢湯に出かけた。
日が暮れるとすぐ蚊帳を吊つた。蚊遣をすると松子が噎せて咳き病にさはるので毎も宵から左うなのである。三間の家に三張の蚊帳を用ひ、玄關の間は絹子の分にした。
緣側に茣蓙を敷き納涼んでゐた母が、
「お疲れでせうから、お休みなさい」と言うて、而して自分の蚊帳へ退いた。
「うちでは年中雨戶を閉めないんですもの」と、絹子は團扇がをいてある、枕に著くのであつた。
信一は腹の邊りだけ搔卷をあてた寢方で、まだ夕刊新聞をひろげて居つた。
けふ妹と二人電車にのりこみ、ふくよかな妹の俤に魅するやうな處女性と二十四にもなつた其年の影とが不思議な感じをなしてゐると思つた。それにつけて信一は直く以前の野田のはうの事を知りたかつた。夜分になつたら悠くり尋ねようと思つた。が、住居へつくと家内の者がをり、そんな話を持出す機がなく、又絹子が言はうとしないで、其儘になるのであつた。
翌る朝、七時から講習が始まるといふ學校へ、信一は妹に其道筋を敎へながら本郷まで往つた。其邊りで多く袴をつけた講習生が目についた。また左ういふ集りに袴なしで來るのは東京在住と思はれる女敎員である事を彼はみしつた。
而して信一は其學校の前で妹と分かれ、一人歩いてゐたがあてがなくて、早朝から友達を訪ね、將棋に耽つて晝過になり、家に戻つた。

絹子たちがでる講習は唱歌と遊戯の其であり、朝から夕方まで一日九時間づつ一週間續くのであつた。
「何百人も一緒なのですから、後ろの席では分りませんワ」と其晩妹が話した。
「大變な苦行だな」彼は輕く笑つたが、頭は笑ひ事でなかつた。聞いたのみで此方が草臥れた。
信一は、妻が左ういふ病氣と分り、彼の外へ勤る事を厭がり家に居て貰ひたい樣子なので、今は宅で書いたり考へたりする仕事をしてゐた。それで頭は外の刺戟に馴れなかつた。
「山師のやる事だな」と、其時彼の考へは遠慮がなかつた。
が、翌朝妹は常のやうに母の石に辨當の支度をさせて其會へでかけた。信一はそれには感情を動さなかつた。
午になり母親は軒端から狹庭へ白い日除を渡した。日除は木の香がする一種の布で重みがある。其下へ、信一は水を張つた盥をすゑた。松子は緣の腰屛風にきれをかけて强い光りを避ける工夫をした。
家内中が暑さに抵抗しようと試みたが叶はなかつた。彼はしまひに水を張つた盥に體を浸し、それでグッタリとして居つた。松子は左ういふ間で藥の瓶を冷し、また體溫器を透してみるのであつた。
母の石は聽てあたりを掃出して夕の炊事にかゝつた。
「日除をおろして下さいな」と、石は聲をかけた。
信一は遊り遊り動いた。妹の事で家内を煩してゐると頭は考へた。が、庭に下り干物棹をしまふ時明るい夕空をながめた彼は、長い棹竹に手を遣り其を樂しむ澄んだ頭になつてゐた。
絹子はとつぷり暮れて戾つた。
「暑かつたでせう、汗をお拭きなさい」
妻が言うて洗面器を緣側へ運んだ。
「御飯をお召りになり、又阿母さんとお湯へ座つしやればよござんす」
………かういふ日を送り、彼は頭が勞れ、妹と九九はなしをすると云ふ時間がなかつた。蚊間座敷で妻の松子とかや

うな談しをした。

「妹をどう思ふ。どんな女かつてさ？」

「左うネ。美しうござんすわ。顔にあどけなアい處がありますわネ」

「變な魅力はあるが」彼は其意味では、もし誰か逗留中絹子を見染め、事を複雜にする危險を感じた。

「併し、神經が鈍感ぢやないかネ」

「大様なのですワ」

信一は、妹があの父の側に暮せるのは、物を氣にしない德があるのであらうと考へた。また彼が夜半に眼を覺し、絹子の齒を鳴らすのを聞き、そんな癖を直すやうにしたかつたが、朝になり信一は拘泥し憚りなく言へなかつた。

絹子は七日間の講習を了り、後二日友だちと東京見物をした。伴れが日光から信濃の善光寺にまはり北陸線で歸る筈であり、絹子は大阪の叔母を尋ねる事があるので、日光だけ友達と一緒に見物せうとした。

「日光なんテ、詰らんよ」信一が言ふのであつた。

「見物なさつたの」

「往く氣がしないさ、田舍者の見る處だ」

「見んうちは分りませんワ」

「憶つただけで、俗惡な厭アな氣がする。德川時代の建築はわざわざ見に行くがものは無いよ。山の風景なら、もつと善い處をうちで見飽いとるんだろ」

彼は妙にムキになつて留めた。「そんな處へ往く暇に、少し骨休めをして、叔母さんのとこへおいで」

「でも、伴れの方と約束したんですの」

「翌の朝上野驛へ見送りがてら、断つたらいゝよ」

「さうお」

其晩彼が妹を淺草へ案内する事にした。

「阿絹さん、わたしの單帶をして座つしやると宜いわ」妻の松子はせめて自身の衣裝でなりと妹の樂しみを滿したかつた。「わたしが動けるとねえ」

左うして薄物に更へた妹が門口を出た。信一は此間から聞きたい心組でゐた國の方の事を歸りしな聞けると思つた。

淺草は彼が半年ぶりで足を入れたので、稍勝手が知れぬ心持がした。外から見通しの店に客が腰をすゑ客を執つてをり、左樣な物からも淺草らしい刺戟があつた。

歌劇が妹に目新しからうと思ひ常盤座へ入つた。

内では、ロシヤの婦人の舞踊と、王女がヂプシイの天幕の陰に眠り戀が能ると云ふ筋の其を見物した。が、妹にも彼にも感興がなかつた。深い人なかで蒸された信一はずつと後へ出て休むだ。

その歸りに電車の終點から歩きながら、信一は妹と肩をならべてゐた。が、頭は淺草の刺戟が殘つてなり沈まらぬので弱つた。で、碌に妹に話ができず信一は戾るのであつた。

あくる日、日光行の斷りを言ひ友達の見送りをした絹子が家でかう言つた。

「皆さんも直ぐ善光寺へ行きなさつたの。日光は措いて」

聞いて信一は默つた。妻は

「竹内がとめて、惡うござんしたわネ」と言ひ、妹は笑容を深めた。

午後はまた溫度が昇り熱かつた。皆がグツタリとして居る間で、骨休みの妹が

「東京は暑いし、用がないと思ふと家へ歸りたいが。今夜の夜行で起たうかしらん」

左う獨りでに言うて、絹子は靜として居る事から弱るのであつた。

「ゆつくりなさいましよ」妻が留めた。

信一は懶い面持で

「夜行なら涼しいだろ」と言ふた。

絹子は急に歸る支度をはじめた。

「夕飯を少し早めにして」彼は母の右に左う言ふた。

「ほんとに何一つお世話ができず」と、松子はヂッとしてをれないで動かうとした。

信一は常の通り朝顔や其他の茂つてゐる庭面に打水をした。軒の糸瓜の大きい裏葉を仰いでゐた。

それから絹子が袴をつけ別れのお辭儀をした。涙が玄關でまた感情に負けたしかめ面をした。信一は薄い湯帷子のなり妹の持物をさげて門口を出た。

信一は表で尋ねて呉れた友達に逢つたが、出がけなので直ぐ分れた。又少し往つて他の友達に逢ひ電車道まで一緒に行つた。信一はよく知人に逢ふ日であると思つた。妹を連てをり妹に話があるので、逢つて直ぐ分れたのであつた。

濠端で電車をすて、赤い東京驛の方へ眼をやりながら、信一は口を開いた。

「其後義雄まの事どうな?」

「野田でも嫁をさがして見えるさうですの」

「自家とはゆきゝがないのか」

「中違ひなのです」

妹は割に感情を動かさず言ふた。

信一は重い荷物があり、湯帷子を汗が透してゐた。

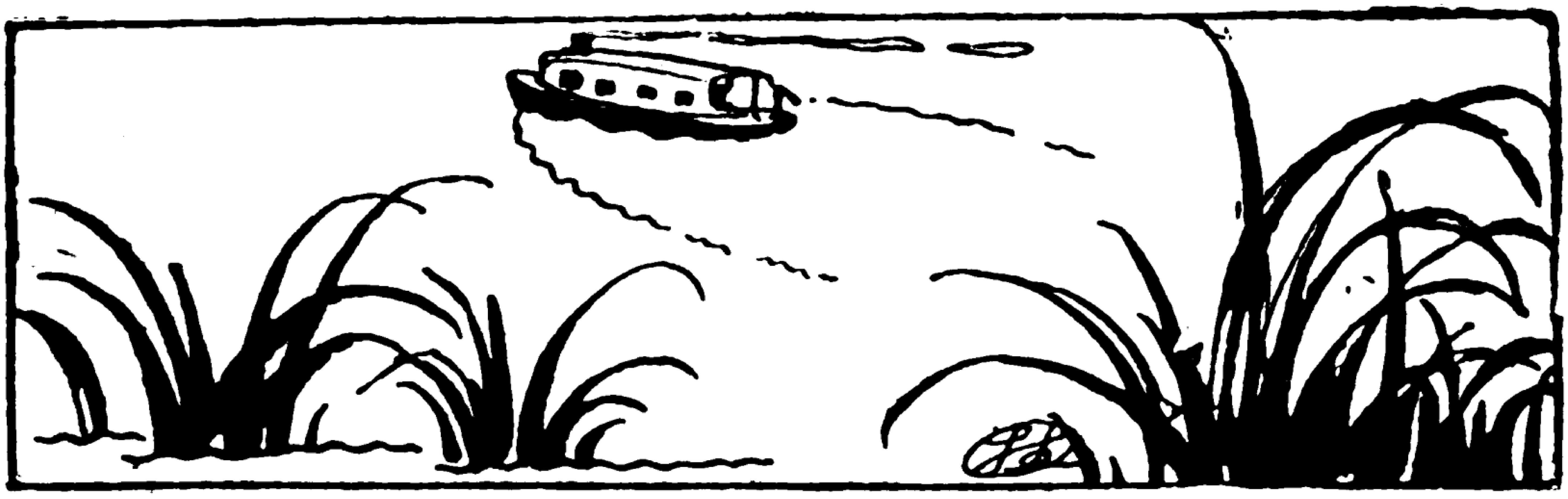
妹は義雄の事に拘泥して居なかつた。「左うなのか」と信一は考へた。

信一はまた妹が拘泥しなかつた事を一種美しく感じた。

しかし、自分だけが問題にした事も無駄ではなかつた。信一は左う思つた。

驛へ二人が持物を預けてから、日本橋へ出て海苔を買ひ、左樣な土産の包みをさげて、一緒に又銀座の夜店を見物した。

（大正十一年五月）



紫陽花

佐藤春夫

——あの人があんなふうにして不意に死んだのでなかつたら、假にまあ長い患ひのあとでゞもなくなつたのであつたら、きつと、あなたと私とのことを、たとへばいゝとか決していけないとか、何かしらともかくもはつきりと言ひ置いたらう………わたしにはどうもそんな氣がするのです。でも、あなたがあれから七年も經つのにどうして今日までひとりでゐらつしやるか、またわたしがどうして時々お說教を聽きに出かけたりするやうな氣持になつたか、そのわけをあの人は、口に出しては言はなかつたけれどちやんと知つてはゐたのですものね。それならばこそ、私を一さうやさしくしもしたのでせう。そのことを思ふとわたしは、それだけにまたどうしていゝか心が迷ふの。さうしてわたしとあなたとがこんな話をしてゐることも、またこんなことを思つて見ることも氣が引けてならないのですわ……

さう、今のさつき目に淚を溜めながら女の言つた言葉を、男は、自分の心のなかで繰返して見た。さうして、女がどういふわけでそんなことを言ふかといふ心持が

男にもわかるやうに思へた。それにつけてもあの時から言はふか言ふまいかと思ひまどうてゐる事を、今も、女に打明けようかどうかと考へたりする。それは、──全く、私はあののち幾度あの男が死んでさへくれたら。……と思つた事があるか知れないのです。あなたの夫があんなふうにして溺れ死んだその瞬間にも、私はもしかすると遠くで何も知らずにではあつたが、それを思ひつめてゐなかつたとは言へないのです。實際、それほど度々私はそのことを思つたのだから。──男が言はうか言ふまいかとしてゐる言葉といふのはそれだけのことである。

六疊の佛壇の間に、蒼白くやつれた病兒──六つになる女の子の枕元から少し距れたところに女は座つてゐる。さつきから極く低い音で三味線を弄びながら、目を疊の上に見据えてゐる。その同じあたりの疊の上を見入つて男も、今言つたやうなことを考へつゞけてゐたが、そんな神經質な考へ方を突放さうとして、目を上げて女の横顏を凝と見た。肘枕をしてゐる男の目には女の顏が少し紅を帶びて來たやうに思へた。

その時、部屋のなかが少し明くなつたと思ふと、障子の腰にうすれ日が射した。

「あら、日が當つて來たわ。」

ひとり言のやうに女は言つて、身を浮かせながら障子を引いた。雲に斷え間があつてさみだれの晴れ間である。女は空を見上げてから、意味もなく男の方を見返つた。少し不自然に歪んでる笑ひ顏であつた。まだ乾ききらない今のさつきの涙と笑とで女の眼はかがやかであつた。今まで女の横顏を偷み見てゐた男の目は、女のそのまなざしをまぶしがるやうに避けて、視線は庭の方へ向けられた。軒から雨だれが光つてしづくしてゐる。

「紫陽花があつてもいい庭ですがね。」

男はつかぬことを言つた。

女は答へる――「いやですよ、紫陽花などは。あれは病人の絶えない花だといふぢやありませんか。」

「さう。そんなことも言ひますね……」

女は再び三味線をとり上げた。

男は急に肘枕から起きて座り直した――彼は、まわり椽に人が來ると思つたからであつた。

眠つてゐた子供が、突然、その時、けたたましく泣き立てた。母親は今とり上げたばかりの三味線をそこに置くと、子供の枕元へにぢり寄つた。

「お父さん！　お父さん！　お父さん！………」

子供は母の顔を見ようともせずにさう叫びつづけた。

「どうしたの。どうしたの。――夢を見たのね………」女は憫みを乞ふように男の方を見やりながら、初めは子供にさうしてだんだんと男に言つた「……本當にへんな子ですよ。今になつてお父さんばかり戀しがるのよ。それにこゝでなけや――佛壇の間でなけや寢やうともしないの。」

男はそれには答ようともしなかつた。心臓が不思議に早く打つて、耳鳴がするのに氣がついた………

女はふと自分の背後をふりかへつて見なければならなかつた。そこには、しかし、もとより何もなかつた。たゞ病み疲れた子供は、痩せおとろへて一さう大きく一さう透明になつた黑い瞳をぱつちりと見張つて、母の肩ごしに、空間を、部屋の一隅をいつまでも凝視した――。



ダンス・マカブル

武林無想庵

外はまだ明るかつた。」が、そこら邊の小さな寺々の屋根や、石塀や土塀や、もくり〱と頭を出す木叢の低い梢などへ、絡まつたり獅嚙みついたりして、頽る往生際のわるい斑點をとどめてゐる落日の殘光も、地球それ自身のロタシオンには詮方なく、不本意ながら淡黄色の微翳に弱められて行つた。

MとYとのまん中へ介まつて、そろ〱足元も覺束なげに、私は細い裏通りをユサリユサリと歩いた。六七間づゝの距離を置いては、三々五々の中折や二重外套が、大して急ぐでもなく、又ハツキリした目標もなさゝうに、幾組も〱、跡になり先になり、私達のゆく手に動いてゐた。

角を一つ曲ると、俄に寒い風が吹きつけて、捲き上つた砂埃の尖端が、ジヤリ、と私の目鼻から口中へまでもシブきかゝつた。私は思はず嚔した。さうしてハンケチを曳ずり出して鼻をかんだり、眼鏡をはづして着物の袖口で玉を拭いたりした。

――東京は砂の都會だね。

――昔は土一升と云つたものサ。

——埃及でナポレオンの見た蜃氣樓は東京だつたかも知れない。

——砂の上に築ける城か。

——雨が降りやたん雨の中だ。

——だから勢ひ空中へ樓閣を造りたくもなるサ。

駄辯の相手は大抵Mであつた。Mは甚かきで文章家で、口數の少ない饒舌家で、記憶がよくて、皮肉が好きで、さうして十六代も連綿とした江戸つ子であつた。が、死んだ友人とは異つて、Mは町人の伜ではなかつた。即ちプロレタリアの出ではなかつたのだが、如何せん、薩長の足輕共に、殘念ながら旗本八萬騎の榮華の夢を一掃されて了つた跡へ、武運拙くヒョツコリ生まれて來たのだから止むを得ない。從つて、今では、プロレタリアの別名であるところの、一箇薄給のサラリエとして、資本主義の奴僕たる、タワイもない贅六新聞の、その東京の出店へ忠勤を挺んでつゝ、漸くにして一家四口の飢餓だけは免がれてゐる狀態だ。が、Mは甚だ負惜しみが強い。さうして寺門星軒の如く、凡そいかなる場合でも、その高揚子の口ばかりは決して減らない。

——近頃は創作はどうです？と、MはYに云つた。どんな平凡な言葉を發しても、物靜かなMの聲は、どういふものか、何となく皮肉に響く。Yは苦笑した。さうして巨きな眼玉をギョロリと動かして、

——僕の創作は子供を拵へる事だね。と、太いバスの聲で答へた。

——今度で何人目だい？と、別に訊きたくもない事を私は訊いた。

——七人目サ。と、ひそかに自ら嘲けるやうに云つて、Yはやゝ瓢輕らしく、併し又やゝ棄鉢氣味に、一寸ばかり鼻の先で笑つた。

Yも江戸つ子だ。が、二代ほど前には、どこか印幡沼附近に蟠居してゐた貧乏大名の、その家老職を勤めた家柄だつたと云ふからして、血統に於いては、とてもMだけの誇るに足りさうな連綿さは持合はしてゐなかつたわけだ。けれども、その代り、これは不運なMなどには遙かに及びもつかぬ即ち、物質的方面に限られたゝかのブルジョア的江戸趣味

に對する陶醉と執着とは、殆んどそれが病的である程度にまで、Yの生活本能の背骨に達して、ピッタリと深く鉤狀齒の如く食ひ入つて離れないのだ。さうしてYは詩人なのだ。十八大通の境界標から、決して一歩も踏出さぬ、踏出す事を肯んぜざる、象牙塔中に錦繡を綴つて倦まぬ詩人なのだ。さうしてYは資産家だ。三高利貸の一人として、氣慨のない官員原から怖毛を震はれた、立志傳中の父親から、居ながらにして數十萬の遺産相續を敢てした資産家だ。

もう八九年にならう。その頃、Yのブルジョア趣味と、さうしてその小遣錢とを中心としたる、世間はもとより、文壇の注意すら、一向に喚起し得なかつたところの、しかも飽くまで高踏的であつたところの創作雜誌が、臆面もなく月毎の各店頭へ、恐らく一冊も賣れる事なしに、堂々と曝されてゐたものだ。同人は六七名であつたが、Mも私もそのうちに數へられてゐた。が、お互ひに時流を超絕した、純眞な、眞劍な所謂『創作』に沒頭し合つたと云ふよりは、むしろいつも豐かなYの懷ばかりアテにして、到るところで長夜の宴を張り步く事の爲に、徒らに健康と精根とを消耗しつゝあつたと云つた方が、今にして思へばどうも適切であつたやうだ。

海から續いたキヤナルの橋を渡つた時、パッと眼がさめたやうに電燈がついた。精養軒の二階から迸しつた光が、なみ〳〵と湛へた滿潮の水の上へ、稻妻の如く散亂した。さうして歌舞伎座の前わたりが、俄に陽氣らしく輝き出した。人通りが繁くなつて、もう四十九日の連中も、思ひ〳〵の都會の夜へ、いづくともなく吸收されて了つた。

――いゝ人であつたがなどゝ土手でいひ。と、輕く口誦んで、――燒場の歸りでもないが、あの男もあれでとにかく仕合はせな死に方をしたわけサ。と、Mが云つた。

――併し禪宗で悟つた人間へ、いくら死んだからいゝわと云つて、きこえよがしにお文さんを讀み上げるのは酷だ。いくらか死屍を鞭打つと云ふ形ちがあるね。と、振舞酒のさめかけて來た私が云つた。

――だが、先生の禪學は要領よく葷酒山門に入つた方なんだから、あれで結構サ。

――尤も、山門よりや大門の方へ、とかく足の向き勝な男ではあつたけれど……

――死ぬのはいかん！　と、Yは思ひ出したやうに唸いた。

三十間堀の橋畔にさしかゝつた。

すると、何やら考深さうな顔をして、Yはふと立止まつた。

――どこかへ行つて、晩飯を食はなくちやならんが………

――さア………と云つて、頭の中で料理屋の撰擇でも始めたやうに、一寸小首を捻りながら、Mも立止まつた。

――卓袱（シッポク）はどうだい？ と、私は卒然と云つた。

――戻るのは面倒だ。と、Yはすぐ否定した。

――ちや、春日もちツと遠すぎるだらうね。と、はじめから否定を豫期して、Mが云つた。

――遠いばかりか、あすこは高い。と、Yは顔をしかめた。

不決定のうちに、言はず語らず、三人は橋を渡つて了つた。

『どうせYが奢るのだ。どこへでも行け。』と、私は思つた。Mは猶更さう思つたらう。

――そこへ行つて見よう。と、Yは弓手の横丁を指さした。どうやら最初からチャンと目星をつけてでもあつたらしく。

――よからう。と、私は何の苦もなく贊成した。

――まづい家だがね。と、一應は難癖をつけたが、別段不贊成を唱へるほどの筋も必要もなかつたと見えて、Mも私達と打連立ち、寧ろ快然としてその料亭の門を潜つた。

――思ひ切つて俗悪な部屋だね。と、通された座敷へ落ちつくと、Mは先づ罵倒から口を切つた。

――これが現代さ。純日本趣味さ。茶室と銅壺とを取違へたやうに磨き立てたところが自慢なんだ。

――『檜の皮を入れるべし』と書いた人の設計に相違ない。

――これでいかにも金がかゝつてゐるらしく見せかけた苦心は大したものさ。

——現代人の苦心はすべてこの流儀だ。

——青黄粉式か。

——××も滅びるね。

——なあに、もうとツくの昔滅びて了つてゐるんサ。お互ひに氣がつかないだけだ。

——さう、文明はね。だが、氣もつかぬ筈サ。滅びて惜しいやうな文明は、もと〳〵無かつたやうなものだからね、××には。

——一體文明といふ奴は元來滅びて惜しいやうな、代物ぢやない。ルネツサンス文明でも、ロココ文明でも、勿論、近代の所謂科學的文明でも。

——そこへ行くと支那なンぞは大いに見識がある。その時々の都合次第で、未練も遠慮もなく、バタバタと滅びてゐるからね。

——歐羅巴だツてさうサ。猫の目のやうに頻繁を極めて滅びつゝある。文明とか進步とかいふものは、つまり、あゝしたわけサ。

——ところで、まだ一度も滅びた經驗のない國はと云ふと、それは恐らくたゞ日本とアメリカばかりだらう。

——お互ひに滅びて見る事サ。

——このベルは利かないのか知らん。ばかに遲い。と、Yはジレつたさうに手を叩いた。さすがに際限のないMと私との駄問答には、聊か僻易もした樣子で。

——お待遠樣。と、やがて女中は膳部を運んで來た。

酒宴は始まつた。

恰も自分の創造した天地が現前したやうな顏して、Yは莞然として盃をとつた。Yは本當に酒が好きなのだ。心から好きなのだ。但しアルコオルが好きなのぢやない。Yには酒でなければいけないのだ。日本酒でなければいけないのだ。

但しモツキリや升の隅などゝいふ類は大嫌ひなのだ。相當な日本間で、相當な肴を並べて、氣長に、上品に、ユックリユックリと、落ちつき拂つて飲む事が好きなのだ。所謂五分もスキのない通客のブルジョア趣味だ。

飽くまで徹底したYの、この垢拔けた、この洗練された趣味に對して、いかにブルジョア嫌ひの私でも、どうして容易く反感などが持ち得られやう？とても反感は持ち得なかつたばかりぢやない。寧ろ却つて反對に、常に大いに尊重し、常に大いに敬慕しつゝやまなかつた位だ。江戸つ子ではないのだけれど、生まれ落ちるなり、そのまゝ江戸つ子の手一つで育てあげられた關係上、生活樣式の趣味に於いては、勢ひ私もまた一箇の江戸つ子であるべく運命づけられて了つたからだ。

が、それだけでは物足らなかつた。どうしても、どうも、それだけでは、そこに何かゞ欠けてゐた。さうして強ひてそれだけの上に安住しようとすると、たまらなく心に壓迫を感じて來るのだ。恐らく江戸つ子でない生來の血肉が、江戸つ子である母親の薫育に裏切つて、氣隨氣儘に叛逆を企てつゝある所以であらう。

——このカジキはいかん！と、一目見て、Yはもう箸をつけなかつた。

——ウン、駄目だ。と云ひながら、私は平氣で食つた。

——それほどでもないがなア。と、酒客でないMは恬淡に味はつた。

生活に處する三人の態度は、一寸まア、こんな調子に異つてゐた。Yは嚴密だ。Mは溫順だ。さうして私は出鱈目だ。Yのそれに比べると、私の酒量は遙かに弱かつた。それにも拘らず、いつも私の方がYよりは余計に飲んだ。從つてYはその分限を越えて、滅多に微醺以上に出る事は稀れだつたが、私は飲めば必ずベロベロに醉つた。醉はずにはゐられなかつた。醉へば醉ふほど意地になつて飲んだ。飲めば飲むほど滅茶苦茶に泥醉を欲した。さうして終ひにはウヰスキイだ。

——すぐ鵠沼へ歸るかい？と、さも心地よげに醉つたYが、劬はるやうな調子で、やさしく訊いた。

——さア、序でに母の墓まゐりをしてゆくつもりだつたんだが、かう日が暮れて了つちやア、お話にならない。親孝

行も、まア願下げだ。と云つて、このまゝすぐあんな砂漠へ引上げて了ふのも、何だか一寸業腹な氣もするやうだ。が、もと〳〵女中どもへ土産を買つてつてやる事の外、東京には全く用といふものがないんだから始末がわるい。せめて、濱松屋の立見でもして行つてやらうかとも思つてゐるんだが……と、口のまはりの筋肉が弛み出した聲で、私はウダウダと答へた。

——濱松屋はもう遲いだらう。と、もう飯を食つて了つて、所在なさゝうなMが注意した。

——とにかく、もう一本飲んで、愛は出かけよう。と、Yが云つた。

女中は心得て立つて行つた。

——どうも日本の食物は酒を飲むやうにばかり出來てゐるんで、ほんの見た目と口先だけの淺薄な味しきや考へてゐないんだから、酒本位になれない僕等にとつては、甚だ食ひ足りない。そのくせ腹にはわるくモタレるんだが……

——つまり、この建築と同じわけサ、物質的經濟的の現代人の生活とは、甚だ距離の遠いものだ。食物は何と云つても支那料理だ。

——併し日本の支那料理は駄目だね。或男が偕樂園へ支那人を連れてつたら、貴國の料理は頗る弊國の珍に似たりと云つたさうだ。似てゐるとは思つたが、あれが支那料理だとは氣がつかなかつたものなんだらう。

——あれは飜譯だからサ。我輩の飜譯のやうに門並誤譯だからサ。

——誤譯なんぞは問題ぢやない。正式に胃の腑の要求に應じてゐるかゐないかゞ問題なんだ。その點から云ふと、日本では長崎料理が一番傑作だ。舊い飜譯で誤譯も澤山あるらしいが、あれなら立派にオリジナリテが出てゐるね。恐らく鳩摩羅什の舊譯に匹敵すべきものだらう。觀自在よりや觀世音の方が、たしかに胃液の分泌量が多いよ。

——君はライオンを食つたさうだね。

——惡食はやつぱりいけない。殊に猛獸の肉は駄目だ。豹もライオンも臭くてね。

——馬の睾丸はどうだつたい？

——ウン、ありや一寸オツだつた。シコシコして、歯切れがよくて、丁度動物性の松露といふところだ。

Yの茶漬を裝つてゐた女中は、喫驚してMの顏を眺めた。が、Mはパクリパクリと紙卷の煙を吐き出しながら、眉宇さへ動かさず、尋常茶飯な顏して喋つてゐた。

——マリネツテイのマフアルカ・ル・フユチユリストには、悍馬のペニスを食つて、猛烈な細胞慾を起した事が書いてあつたが、多少さうした傾向があるものかね？

——麝香ほどの利目もなかつたやうだね。尤もシユンが外れてゐた爲かも知れないが………

——勘定してくれたまへ。と、飯を食つて了ふと、Yは女中に云つた。

——介子椎の腿は丁度シユンに相當してたものと見えて、重耳は羊肉だと思つて、旨さうに食つてゐるぜ。

——九江王が名詮自稱にゲイゲイ云つて、手妻遣ひのやうに小蟹なンぞを吐いたのは、大方彭越の醢が產卵期の肉だつたせいだらうよ。

——劉安の嚊はサンマイにオロされたが、玄德は何だと思つて食つたらう？

——榮陽の燒跡から黑焦の紀信を曳擦り出して、はじめて人肉の美味に舌鼓を打つたのは、多分チヤーレス・ラムの仕業だらう。

Yが書附を前にして、嚴肅な顏つきをしながら、氣前よく勘定をしてゐる間、Mと私とはわざとその方は見ぬふりをして、テレ隱しのやうに愚談を續けてゐたものだ。

——さア、行かう。と、Yは立上つた。待兼ねてゐたやうに、二人も立上つた。

外へ出ると、クワツと醉が發して來た。光が、Mの横顏が、犬の尻尾が、電車の踏段に留まつた人の片手が、暗が、物音が、レールが、店先が、女の笑顏が、時計臺の針が、スパークが、雲が、Yの眼玉が、騷然雜然と、グワラリ、グワラリと、恰も未來派の、ダダイストの、表現派の、奔放な、錯落な、無作法を極めた色彩と、畸形と、それ等から生

ずるニユアンスとが、一時に目まぐるしく私の眼前に渦卷いた。さうして私の魂はハチきれさうになつた。魂と名がつけられる何物かゞ、若し私の生命のどこかにあるならば………

――君のところの鹽せんべいは旨いかい？　と、私はよろ〳〵しながらさう云つた。が、私が云つてるんだか、誰が云つてるんだか、私にはよく分らなかつた。

――君が食ふのかい？　と、不思議さうにYが訊いた。

――母は非常に鹽せんべいが好きだつたよ。さうサ、母の好きなものは、クサヤの干物と、シヤケの茶漬と、それから鹽せんべいだ。それから小鍛冶だ。長唄サ。勿論、野暮な御新造だつたからね。併し役者は成駒に五代目だ。パア、パアの成駒屋だぜ………ウン、所作事と云つたものサ………姉さん、君も江戸つ子だらう？　江戸つ子なら鹽せんべが好きな筈だ………當今のバケモノは何かと云ふと、そら、タマルやだ、ツル勝だとぬかしやアがる。ヘン、『けふは帝劇、あすは三越』が、二度云つたら風をひく玉サ………但し斷つて置くが、これは必ずしも雜司ケ谷へ御持參に及ばうといふ了見ぢやない………いくら醉つても、もう日が暮れた位の事は、チヤンとわかつてゐる。だから雜司ケ谷ぢやない。だから親孝行ぢやない。二十四孝でもない。手札が劍を引懸けに行くんでもない。高がお鹿さんサ。鵠沼の女房へ持つて歸るお土産なんだ………わかつたかい、姉さん？　わかつたら手をあげて………オヤ、この姉さん、一寸澁皮がむけてるぜ？　こつちを向いて御覽？　いくつだね？

――へえ、お待遠樣。と、笑ひを押殺した、氣のよさゝうな姉さんは、わざ〳〵鑵入りにしてくれて、丁寧に新聞紙へ包んで、吊下げるやうにまでしてくれた鹽せんべいを差出した。

――スパシイボ！　ダンク、シエン！　メルシ、ボオクウ！　トウシヤ！　アハハハハ！

大層な機嫌で、私は前後不覺に喋りつゞけながら、YとMとに擁護せられつゝ、忽ち明るいところへ出た。人間の頭が珠數繋ぎになつて、ヒユウ、ヒユツと私の左右を飛びちがつてゐた。Mの顏がダンテに見えた。Yの顏がジオツトオに見えた。

——君は飯を食はなかつたが、腹はすかないかい？　Yが云つた。すると、Yの顏が、今度はツゴリノ伯に見えた。

——ウン、何か食ひたいナ。かう、ドロドロと血の垂れるやうな奴を……

——風月のビフテキを食はうぢやないか？　西洋料理にロクなものはないが、あれだけは旨い。と、Yは柄にない事を云つた。Yも大分まはつてゐるのであらう。

——まだ食ふつもりかね？　と、Mは興さめ顏に云つた。

——食ふよ。食ふとも。どうしたんだか、この頃は物が無暗に食へる。さうして何でも旨い。死に目が近いのかも知れない。ハ、ハ、ハ。

底力の籠つた、Yの低いバスの聲が、何となく悽愴に響いた。

——さうかね。と、氣のないやうに、Mが答へた。恰も肚の中で、"Not in adunbance, but in virtousity"といふ句を想出してゞもゐるやうに。

やゝ暗い横丁へ折れた。

風月の二階で、

——君は？　と、トボケたやうにMの顏を見て、わざとらしくYが訊いた。

——さア、僕はよして置かう。紅茶ぐらゐなら貰つてもいゝが……と、Mはもうかなり迷惑さうであつた。

——さう。ぢや、ビフテキが二人だ。それに菓子が一人、日本酒に、紅茶に、ウヰスキイが、一人づゝだ。あゝ、さうだよ。銘々別々だ。それ〴〵流儀が異ふんだ。ハ、ハ、ハ。と、Yは大分上機嫌だ。

——畏まりました。と、角帶をしめたギヤルソンが、笑ひもせずに立去つた。

私は殆んど幻想の中にゐた。ピカピカしたナイフを見ると、戸外では雪が降つてるやうな心持がした。若し顧向いたら、そこに眞白な頸(うなじ)を延べて、金髮の美人が、ル・アヴルの助役の妻君が、蠟燭のボンヤリした、朦朧たる火影に照らされながら、スヤスヤと睡つてゐるさうな氣がした。さうして、『さうだ。今だ。あの頸筋を……さうだ。あの眞白なと

ころをグサリと……ウン、グサリとこのナイフでやるのは……』と、どういふわけだか、さう思ふ事が、別段不思議でも何でもなくて、それが極めて自然であるやうに考へられたのだ。で、ブツリと刺した。一寸血が滲じみ出た。ぱかにいゝ心持だつた。そこで左の手で突刺したまゝ、右の手でスツと切つた。血脂が皿一杯に亂れた。私は笑ひたくなつた。

――人肉もやツぱり雌の方が食用に適してるものか知らん？　と、フオークへ貫いた肉片をば夢現で口の方へ持つて行きながら、私は呟いた。と、プンと一種の臭氣がした。ワキガに似た臭氣が……

――カンニバル系統と貝塚系統とは、恐らくその舌の先の感觸に於いて、或はその祖先を同じうしてゐるのかも知れないね。と、Ｍの聲が冷やかにきこえた。

ヌラヌラする感觸が、私の舌の先にツルリと滑つた。『オオパリシユタカ』といふ梵語が、忽ち私の腦中へ湧上つた。クラクラと眩暈がした。私は慌てゝウヰスキイをグツと飲みほした。

――君、ギヤルソン君！　アンコールだ。

角帶がついと來て、チツクで光つた頭髪を心持傾けて、無言で、無表情で、形式的に八分目ほど注いで行つた。

――どうだね、一杯、君も？　と、私は盞中の黄金水を透し視るやうにして、Ｙに云つた。

――いやア、と、Ｙは首を振つた。ウヰスキイは旨いよ。アルコールのうちぢや、そりや一番旨いよ。だから飲まないのだ。怖いのだよ。僕が若し君だつたら、今頃はきつと死んでゐるだらうよ……

――死んでもいゝぢやないか？

――死ぬのは厭だね。

――どうせ死ぬんぢやないか？

――それでも厭だね。

Ｙの壜詰はオツモリになつた。

――出掛けようぢやないか？　と、潮時を見計らつたやうに、Mが云つた。

――我々はいそぐ必要もないが……と、二合瓶を逆様に搖つて、殘惜しさうに雫をきりながら、――君は？　まだ汽車があるのかい？　と、Yは氣遣はしさうに私の顔を見た。

――一體何時だらう？　と、何時だつてかまはないのだが、さうしてもう鵠沼へ歸る氣などは、てんでなくなつてゐたのだが、私は器械的にさう呟いた。

さア、と、帶の間から重さうに曳出した、甚だ舊式だが、併し又ばかげて目方のありさうな、素晴らしい金時計を伏目に見て、

――十時だね。と、歸るなら今の内だといふやうな顔をしながら、Yが云つた。

――ぢや、まだいゝ。十一時まであるんだ。尤も終列車だと、向ふへ着くのが一時になるけれど、そんな事はかまはない。ばかりか、下の山極道子の部屋へ×××にでもゆく氣なら、却つてその方が、結句、お恰好な時刻になる。ハハヘ！　と、出鱈目に喋つてゐるうちに、私は急にムラムラとなつて、これからすぐにもその××が實現して見たくてたまらなくなつたものだ。と、無性に歸りたくなつた。追立てられるやうに歸りたくなつた。さうしてヒョイと立上つた。

――とにかく出よう。

私の眼の前には友禪縮緬の搔卷の下に横たはつた女の寢姿ばかりがチラチラした。

三人は狹苦しい階段を下りた。

下の店先で、Yがその子供達への栗饅頭かなんかを買つてゐる間、Mと私とは暗い歩道を押並んでブラリブラリしてゐた。

――家へ來て泊らないか？　と、Mはやさしく云つた。

——さア、さうしてもいゝんだが……と、私は曖昧に答へた。さすがに、『どうしたんだか今晩はたまらなく女が抱きたいのだ。』

と、さうは麗々しく口へ出してまで、思ひきつた白状もしかねたからだ。ジリジリとアルコールに燒きつけられた、フツフツと湯玉の如く沸えくりかへつた、ウヨウヨと百千の鎌首を一齊にもたげた、驀地に異性を目蒐けて、身悶へして、火焔を吐いて、さも苦しげに虚空を摑みつゝあるところの、恰も蛇塚のやうな私の肉體の、凡ゆる細胞の生理的叫喚をば、そのまゝに擔いでゆける方角としては、Mの家庭はあまりに健全すぎてゐた。あまりに幸福すぎてゐた。あまりに春風駘蕩としすぎてゐた。

——ねえ、さうしたまへ。と、Mは重ねて勸めてくれた。が、

——さうさなア、、、と、私はますく煮え切らない返事をした。私の心にはMの長男の機敏な顏が浮んだ。愛嬌のある剽輕なその次女の樣子が目に見えた。親切なその妻君の歡待が想出された。それだけになほ苦しくなつた。なほ幸くなつた。一層自分の孤獨がたへきれなくなつた。

——お待遠う。と、大きな紙包をば、これもどうやら幸福らしくブラ下げたYが、やがて出て來て私達と一緒になつた。

私は大きな絶壁に突當つたやうな心持がした。それは幸福といふ絶壁だ。突當つては跳反され、突當つては跳反されてゐる。その絶壁だ。さうして、『Open, Sesame!』ぐらゐな呪文では、決して開きさうもない絶壁だ。

私は息づまりさうになつた。MもYも私の親友だが、私を自分達の兄弟の一人のやうに、或は恐らくそれ以上の親しさで、諒解もし取扱つてもゐてくれる人々なのだが、石のやうに冷たい私自身の乾枯びた孤獨は、かたくなに、偏屈にこの二人の生活から拋射される幸福の圓光をば、動もすれば水臭く回避するのだ。云ひ換へれば、私はかうやつて、ただ私達二人きりで、永遠に續いてほしい夜の闇の巷をば、いつまでも、どこまでも、このまゝに放浪して歩きたかつたのだ。さうしてそれが出來ない爲に、さうしてそれを二人から阻隔するところの、容赦なく二人を掠去つてゆくところ

の、彼等の家庭が邪魔になつたのだ。腹立たしくさへなつたのだ。

――すぐ停車場へゆくかい？ と、Yは云つた。

――ウン、、、と、私は答へた。さうして莨の煙にむせて、續けさまに咳をしながら、

――さう、さう、木村屋のパンに龜屋の西洋菓子といふ注文があつたツけ……木村屋はもう駄目だが龜屋はまだ開いてるかも知れない……開いてたら、序でに買つてツてやらうか。ハハハハハ！ 恨みツこのないやうにナ、、、と、云ひ譯のやうに、獨語のやうに附加へた。

――龜屋なら僕も一緒に行かう……珈琲を買つて歸らうと思つてゐるから……とMが云つた。

私は早く二人から逃れたかつた。

龜屋はまだ半分扉が開いてゐた。跳び込むと、いきなり珈琲の香ばしい匂が鼻を衝いた。棚に並んださま／＼な洋酒の壜が、恰も學者先生の本箱が無學な低能兒を威嚇するやうに、花やかな電燈の光を燦爛と受けて、しきりに購買力の薄い貧乏人どもを嘲つてゐた。

――鵠沼のお金さんが好きさうな西洋菓子はあるかい。と、ヅカヅカと通つて、硝子張の臺の中を覗き込みながら、巫山戯た調子で私は云つた。

――えゝ、えゝ、御坐いますとも。と、色の白い、眼の可愛らしい、年若な店員が、スルリと近寄つて、悧發さうな聲で答へた。

――ウム、君は中々感心だ。我輩のいふ事がよく分る。その要領なら、きツと出世する。ところでどうだい？ 君は何かね？ 出世とストライキとでは、どつちの方が、好きだい？

――へへへ！ そりや出世の方が宜しうムいますね。

――いよ／＼頼もしい。その位頼もしけりや、我輩の妹の聟にしてやつてもいゝ。

――へえ、どうぞ宜しくお願ひ致します。

――よし、その代り、何だぜ、それと同時に斷然人間を廢業するんだぜ。いゝかね？

――承知致しました。そこで、お金さんのお土産には何を差上げませう？

――お金さんの好きなものなら、何だつてかまはない……すべて君に一任する！

――宜しうムいます。では、おいくらばかり？

――それもまかせるサ……十圓でも二十圓でもかまはない……

――では、百圓ほど包みませう。

――あゝ、いゝとも。

鹽せんべいの罐の外に、香包の外に大きな紙包がもう一つ殖ゑた。かうしたハイカラな店はYには全く用はなかつたが、Mは何やら大分仕入れた樣子であつた。

――ぢやア、僕等は爰で失敬しようぢやないか？ と、もうよほど光の弱くなつた歩道へ出ると、Yが云つた。

――やつぱり歸るかい？ と、力なさゝうにMが云つた。

青白く街燈の薄あかりを浴びた、細面の華車なMの横顏には、實意の籠つた、『淋しいだらうね！』といふ表情が、ありありと暖かく溢れてゐた。

――失敬……

思ひもよらぬ涙が、どうしたのか、ホロリと私の眼から出た。私は勢よく歩き出した。

碾きたての、新鮮な、ばかにいゝ珈琲の匂がプンプンした。氣がつくと、その匂は左の手首から來てゐた。左の手首には持重りのする包が大小三つまでブラ下つてはゐるのだが、どう考へても、珈琲などは買込んだ覺えはなかつた。まさか鰮屋の店から曳摺つて來た匂とも思はれなかつた。それにしてはあまりに薰りが高すぎたからだ。不思議な事もあればあるものだ。』と、私は思つた。さう思つて新橋を渡つた。渡る時、チラリと暗い水の上を見たがそ

の拍子にゾクリと襟元に寒氣がして、何だか醉がさめかけたやうな氣がした。と、急に厭アな氣がして來た。」

『俺は本當に今晩鵠沼へ歸る氣でゐるのか?と、私は自分の心へ訊いて見た。

――歸りたければ歸るがいゝぢやないか?と、心は答へた。

――別段歸りたい事もないが……

――××××たいのか?

――別にあの女に限つた事はないのだ。

――そんなら、ワザ〳〵鵠沼くんだりまで歸らなくたつて、女はどこにでもゴロゴロしてゐる。

――ウン、この邊にも澤山ゐる。

――そこで間に合はして置け。

――さうしようか?

――さうしろ、さうしろ!』

私は可笑しくなつた。さうして聲を出して、わざとらしくカラカラと笑つた。珈琲の匂がプンプンした。大橋行の電車の中で、革につかまつたMの顏がまざ〳〵と見えた。中根岸のMの二階にスヤスヤと睡つてゐる自分自身の姿が見えた。と、妙に悲しくなつた。また涙が出て來た。

『馬鹿! そんなにセンチメンタルなシチンムングに漬かりたいのか? と、どこかの隅から心が叱つた。

――なあに、さういふわけぢやない。まだ醉ひかたが足りないのだ。

――ぢや、もツと飲め。

――ウン、飲むとも。

――意識を失ふまで飲め。

――ウン、死ぬまで飲む。』

いつの間にか停車場へ這入つた。終列車にはまだ三十分ほどあつた。

『なアんだ、やつぱり××にしたのか？

と、突當りの時計を仰いだ時、ニヤリと心が冷かした。

――ばかを云へ！　なンであんな女に執着があるもんかい？

――負惜しみを云ふな、負惜しみを。

――負惜しみぢやない。これから鵠沼へ歸る位なら自動車で村木座へ押懸ける。

――そんなら、さうして見ろ。

――馬鹿野郎！』

私は二階へ上つた。

――今しまつたばかりのところで御坐いますが？　と、ボーイは恐る／＼云つた。

――いや、何にもいらないんだ。たゞウヰスキイを二三杯のめばいゝんだ。後生だから飲ましてくれたまへ。命にかかはるんだから……頼む、頼む。この通りだ。と、私は手を合はして、拜む眞似をした。

ボーイは噴き出した。さうして人がよささうに半分ばかり這入つた壜とコップとをテーブルの上へ置いて行つてくれた。

――それぢやア、まア、御ゆつくり……チーズでも差上げますかね？

――エライ！　君にかぎる！

ボーイは笑ひながら、やがてチーズも持つて來てくれた。早速つまんで見ると、思ひきつて下等なチーズだつたけれど、それだけに尙その惡臭い匂ひが、この際却つて痛快にも味はゝれた。でそれを肴にして、立續けにグイグイと飲んだ。飲みながら、ふと、Anather ken. といふ言葉を思ひ出した。さうして思はず微笑した。

『アナザア軒。さうだ、こんな時、あの男が一緒だとなア……』と、私は思つた。

あの男とはTの事だ。比叡山の雪の中に閉ち籠つて、セツセとスチルナアの翻譯に精を出しつゝあるTの事だ。三ケ月以前、まだかうした取とめのない放浪をはじめなかつた頃は、夜になると、きつとTを誘ひ出して、こんな風に到るところでウヰスキイを飲みちらして歩いたものだ。出鱈目な英獨佛をゴチヤまぜにした言葉をば、お互ひに喋々と囀りかはしながら、一軒へ這入つて、一杯のむかのまぬうちに、ヒヨイト立上つては、

——アナザア軒！　と云つたものだ。さうしてそのアナザア軒の見つかり次第、殆んど一軒も見のがす事なしに、次から次へと、根氣よく停留所のやうに廻しをとり歩いたものなのだ。で、落ち行く先は、きまつて新宿とか、御宿とか、又吉原なら小格子といふところだつたが、甚だしい時には、一ト晩に十五六軒も立寄つた事があつた。

Tも江戸つ子だつた助六の子孫で、花川戸ではないが、藏前に巣をくつたお札差しの伜だか孫だかだ。母親に名にしおふ小舟宿の娘ださうで、その氣前のいゝ全盛ぶりは、子供心ながら凡そ溜飲の下つた位のものだつたといふ。お陰で早くから苦勞をさせられて、十八九の頃から、Tはもう學校の教師などをして、迚も背負ひきれる筈のない一家を支へて來た男だ。さうした感心な男に連添つて、二人まで子を產んでも、自由戀愛といふ奴はまた格別な味がするものと見えて、Tの女房はその穩しい亭主を潔く振りすてゝからに、强い、勇ましいアナキストの懐を目覓けて、飛鳥の如く跳込んで行つて了つたものだ。それが爲めにTまでが名高くなつて、名高くなり序でに、世間からは馬鹿だの、意久地なしだの、低能兒だのと云はれてゐる。

「低能兒ならどうした？　低能兒で惡けりや殺してくれ！　さア、遠慮なくスパリとやつてくれ！」と、頭の中へフンぞり返つて、Tは默阿彌の主人公の一人のやうに、フテフテしくタンカを切つた。が、よく見ると、タンカを切つてるのは、Tではなくて私自身なのだ。尚よく見ると、Tは却つて氣の毒さうな顔をしながら、淺猿しくフンぞり返つた私自身の側へ座つて、香箱をつくつた猫のやうに、時々シツと眼を閉ぶつたり、ニヤニヤ笑つて見たりしてゐた。

「さア、もういゝから起きたまへ。さうしてこれから君の妹のとこへ案内しようぢやないか？　と、ノンビリした聲で、Tが云つた。

——どこだい、一體、そこは？ と、私はムツクリ起上つて訊いた。

——大文字の前サ。

——その女はソシアリストなのかい？

——なくたつていゝぢやないか？

——なけりやア、つまらない。

——ソシアリストかも知れないよ。この間までソシアリストのバアにゐたんだからねえ………

——君は買つた事があるのかい？

僕等にやアどうしても賣らないんだよ………カマラードを絞る氣にはなれないと見えてね………そんな御遠慮にやア及ばないのだが………

——それぢやア、我黨だつて、やツぱり駄目だらう。

——君なら大丈夫だ。大島ぞろひのソシアリストといふなア、日本ぢやまだあんまり見かけないからね。

——さうかい" それにしても妹ぢや一寸氣がさすなア。

——だから尙は案內したいのだよ………Incestus はサアドによつて痛快に解放されたものサ………

——そんなに似てゐるかい？

——この寫眞そツくりだ。」

私は停車場を出た。

——どちらまで？

——A "Onzième Duit."（ア・オンヂエーム・ドワ）

——え？ と、ショツフアが訊返した。

――ハハハ！ 吉原の事サ。

――吉原？

――いやかね？

――まゐります。まゐります。

――大文字の前だぜ？

――承知しました。

醉つ拂つて、たゞ一人、夜更けのタクシイの中で、ドシン、ドシンと、小氣味よく衝上げられてゆく心持は、何としても、やつぱり下戸には分らぬ味だ。

死んでもいゝと思ふ。何がどうならうと管ふものかと思ふ。川へ陷らうと、電柱へブツからうと、電車にハネとばされて、滅茶々々に破碎しようと、そんな事が何だと思ふ。このまゝ無事に行き着いて見たところで、どうせ吉原だと思ふ。

ツツつツと走る。電燈が走る。軒が走る。人影が走る。店先が走る。線路が走る。交番が走る。暗闇が走る。何もかも走る。走る。が、何物が走るのだ？ 視覺が走るのか？ 錯覺が走るのか？ 自分が走るのか？ ショツフアが走るのか？ 賃銀が走るのか？ 支拂能力が走るのか？ 文明が走るのか？ 野蠻が走るのか？ 生が走るのか？ 死が走るのか？………

『とツとゝ走れえ！』と、粉屋のチホンが昔ジレツたがつた。が、その時分はノロくさい馬車だつた。尤もロシアの片田舍なら、今だつて同じ事かも知れぬ。粉屋のチホンは人道主義者だから、無暗と先ばかり急いでゐたものだ。それゆゑ、馬車を自動車に取更へて乘せられても、そのいかにも氣が氣でなさゝうな『とツとゝ走れえ！』といふ音には、一向變りはないであらう。

『人道主義なンて文藝ばかりだ』と、走りながら私は思つた。

『チエラウエーク！　ロシア人にはそんなにいゝ音に響くか知らないが、俺には別段何とも響かない。多分俺が馬鹿なんだらう……が、さうかと云つて、非人道主義は尚ほ大嫌ひだ。一體、俺は、何にかぎらず、主義といふものが嫌ひなのだ。さうして就中一番嫌ひなのは無主義といふ主義だ。ピルロニズム！　イズムが既に厭だ。アタラクシイ！　ニルヷナ！　言葉が厭だ。そんな言葉を想ひ浮かべる。この念頭が厭なのだ。叱！　叱！　ハハハ！　閑居靜處がチヤンチヤラをかしいや！

『動くと思ふから急ぐのだ。俺は急がない。アイレ・ミツト・ワイレなんて、そんなサモしい了見からぢやア、さらくない。アキレスが龜の子を追越す事が出來ぬといふ、そんな代數から割出したんでも勿論ない。たゞ急ぎたくないから急がぬ迄の話だ。タクシイの急ぐのはショツフアの勝手だ。俺の知つたこツちやない。

『が、なるほど、急ぎこそはしなからうが、どこへ向つて動きつゝあるかといふ事だけは、さすがに俺も知らないとは・云ひきれない。たしかに吉原へ向つてゐるのだ。急速力でその方角へ疾驅してゐるのだ。それだけは何と云ひぬけても事實だ。ソラ、今越したのは淺草橋だ。これから雷門へ出て、吾妻橋の手前から左折するのだ。行程は立派にきまつてゐる。寸分の疑ふ餘地はない。見ろ！　女が抱きたいのだ。最も簡便に異性の肉體へ觸れたいのだ。フン、簡便にす！

『一簞の食、一瓢の飲、さうして小店女郎か。ハハハ！　まづ顔回式といふところだ。回也に果して女郎買をやるだけの元氣があつたかどうか知らないが、ディオゲネスになら慥にある。あるどころぢやない、立派に女郎に惚れられたものだ。女郎の名前まで分つてゐる。仙臺さんの吊し斬りにこそならなかつたが、又なるにはあまりに聰明だつたが、千金で購はうとしたデモステネスには、こツぴどい肘鐵砲を食はしてゐる。アレクサンドルがオートクラツトなら、さしづめデモステネスはブルジョアだ。さうして酒樽の仙人は勿論プロレタリアだ。プロレタリア中の錚々たるものだ　そのブルジョアを振つたのだ。振つたばかりか、すぐ飛んで行つて、酒樽仙人へかぢりついたのだ。ライスは小氣味のいゝ女だ……ライス！　ライス！　ライス！……

『ライスはディオゲネスの妹そツくりだつたかも分らないが、小式部は丁の云ふほど俺の妹に似てゐるとも思はれな

い。なるほど、さう思つて見れば、多少目鼻立にさう云つた面影もありさうだ。脊が高いとか、無口とか、無表情とか、それ位なタイプだけは、或は似てゐると云つても差支がなからう。併し感じにまるツきり異ふ。感じが異つちやア、似てゐないも同然だ。初會の時には T の外にYも一緒だつたが、Yまでが T の間違つた鑑識に雷同してゐた。人間の鑑識ほどアテにならぬものはない。

『が、妹になンぞ似てゐなくたつて管はないのだ。ソシアリストでなくてもいゝのだ。ライスのやうな見識も望まないのだ。又惚れても貰ひたくはないのだ。女であればそれでいゝのだ。人間であればそれでいゝのだ……人間！　チエラウエーク！……して見ると、俺もやツぱり人道主義者なのか知らん？……オ、もう大門だ……』

右へ曲ると、タクシイは停まつた。

フラフラとよろけ込むと、これ〳〵に一箇宛、生きた人間を磔けた引伸の顔面がヅラリ、こま〳〵と罪状を数立てた、恰もお上の高札を見るが如く、一網打盡に壁上へ括着けられてゐた。と、その寫眞の女達の顔が、わづかに悲しげに見分けられる程度に於いて、薄ボンヤリした光線の搖曳する、入口の三和土の奥深く蹲まりつゝ、徒ら人生に飽きはてた押丁のやうな牛太郎は、ポツネンと行火かなんか抱へてゐた。

――どうだい？　大將、忙しいかね？　と、私はいきなりその前へ立ちはだかつて云つた。眼のドンヨリした、間延のやうに鼻の大きい、ぢゞむさく鬚の針のフキ出た、もう四十はとうに越した齢の、色のわるい、ひどく憔悴した男だ。

――サツパリ閑でいけませんや……と、さも太義らしい顏をあげて、物臭さうに口の内で呟いたが、忽ちそのドンヨリした眼の底へ、狡猾な、淫猥な、そして下司張つた、異様に後暗い光を滲じませると、――よ、遊んでらツしやい。よう、一時間でもいゝから……ね？　ね？　いゝでせう？……と、内證話のやうに私語いて、牛太郎は小馬鹿にしたやうな顏をしやくツた。

――遊びに來たものなら遊んでゆくだらうよ……えエ？　さうぢやないか？　それとも貴公はどう思ふ？

――へへへ！　御尤も……お馴染さんはどなたで？

――お馴染なンてもなア問題ぢやない。まあ、どう思ふよ、貴公は？　我輩は果して遊びに來たものかどうか？

――大分いゝ御機嫌樣で……果してと來たね……果してお遊びにいらつしツたものと睨んだね。へへへへ！　だから上つて下さいよ……

――貴公は牛太郎だらう？

――まづね。

――牛太郎は人間だらう？

――さア、人間の部ぢやなさゝうだね。へツ！

――なに？　人間の部ぢやない？　そんな事があるものか！　馬鹿ツ！　牛太郎は人間サ。立派に人間サ。ロイド・ジヨージやヴアンダアリツプよりや、チイとばかり出來のいゝ人間サ……惜しむらくは、たゞ權力と金とがないだけだ。さうだらうが？

――その通り、その通り……だから、景氣よく上りたまへ……

――我輩は女郎買に來たんぢやない。人間に逢ひに來たんだ。遊びに來たんぢやない。一人前の人間になりに來たんだ。牛太郎は人間だから、人間の云ふ事は分る筈だ。

――分つた、分つた、分つたから……

牛太郎が持てあましてゐると、見知り越しのおばさんが、折から店廊下を通りがけに、チラリと私の姿を見つけて飛んで來た。

――何を店先で牛太郎なンぞをいぢめてゐるんだよ、このしとは？　さア、さア、もういゝから、上つたり、上つたり……と、私の手から包をひツたくつて、バタバタと先へ立ち、階段を昇ると、大きな聲で、

――小式部さんエー　と、おばさんは呶鳴つた。

ドタン、バタリと、やにツこい板敷を踏みぬくばかりに、凄じく廊下を轟かして、導かるゝまゝに私は引付けへ這入

つた。

安下宿にでもありさうな、汚ならしい部屋だ。敷島の吸口や燒判した燐寸が、粉炭に混つた灰の中で、貧乏くさく燻つてゐた。シミだらけな餉臺、曇つた電球、薄ツぺらな座布團、掃除の届かぬブクブク疊……が、私にはそんな事はどうでもよかつた。

――もう大分這入つてるやうだから、お酒は大壜一本で澤山だらう？……何かくらふかね？

――ウム、天麩羅蕎麥が一杯食ひたいナ。

――ミンなにやア、何を奢つてくれる？

――花魁と相談しろ。

――花魁もあたいもお辨當だ。面倒くさいから、ミンなおなじにしとかう。いゝかね、五本ばかりとつとくよ。

――いゝとも。

――ぢや、さう云つてくる……花魁すぐよこすよ。

おばさんはテキパキと出て行つた。

天金の女中、小格子のおばさん、その事務の簡捷ぶりに於いて、その頭のよさに於いて、夙に私の敬服して措かぬものゝ一つだ。更に附加へれば、芝居の出方だが、人間の頭もあの位機敏に實際的に働けば、この世に於いてもう全く思ひ殘すところはなさゝうだ。「日に日に新たにして、又日に新たなり。」とはあの事だ。「一日の事は一日にして足れり。」とはあの事だ。

ニチャニチャした餉臺へ靠れかかつて、私は吸ひたくもない紙卷の煙をば、強ひてプカプカ吐き出しながら、まじ〳〵と酒と女の來るのを待つてゐた。

夕方から吹き出した風は、かなり勢ひを增したやうな氣はひがする。シユウマイ屋の笛が遠くなつたり近くなつたりして響く。お茶屋の二階か、大文字の奥の座敷か、鼓や太鼓の這入つた騒ぎが、時々吃驚させるやうに賑やかす。また、

『いけエのドンガメたりやこそ……ズボンボヤ……』などと唄ふ文句が、どこかゝらきこえて來る。氣がつくと、、、、、、、、、、、、、、、、。

私は氣が滅入つて來た。

『何の爲だ？……』と、私は思つた。

『何の爲に生きてゐるのだ？ 生きたくて生きてゐるのか？ 生きずにはゐられたくて生きてゐるのか？ 他人は知らない。こんなにまでして生きてゐたいのか、少くとも俺は？ 一ト思ひに自殺の出來ないのは、人一倍臆病な俺の性癖なのか？ それとも別に理由のある事か？ 熱鐵丸……生を得ず、死を得ず……

『さうだ。ミンな苦しむのだ。生まれたほどの者なら、人間には限らず、凡ゆる生物には限らず、この地球自身からして、太陽も、恒星も、銀河も、宇宙そのものも、ミンな、みんな苦しむのだ。さうして苦しむだけのものなのだ。苦集滅道……生滅の四諦……無生の、無量の、無作の、四々十六諦……天台無間、祠天際……唯有一乘法、無二亦無三……言語道斷、心行處滅……法華涅槃……佛……

『いや、俺は佛を信じてゐない。俺は佛教徒ではない。俺は全く何も信じない。全く何でもない。たゞの人間にすぎぬ。人間そのまゝだ。なま〱しい野生そのまゝの人間だ。食慾と性慾との外は、一切何も考へぬ野蠻人なんだ。さうだ。野蠻人だ。たゞアフリカに生まれそこなつたゞけなのだ。誤つて文明國へ生まれたゞけなのだ。さうだ。ターザンだ。たゞターザンと俺とでは、その養母がちがふだけだ。ターザンの養母はゴリラだか豹だか、とにかく猛獸だが、俺の養母は江戸つ子だつただけのちがひだ。それだけだ。』と、突然、母の墓まゐりに行かなかつた事が悲しくなつた……

『母はけふ死んだんだ！』と、思ふと、ボロボロ涙がこぼれて來た。

『さう、さう、あの前の晩、Yが凜(リウ)としたなりをして、それとなく俺を帝劇へ誘ひ出しに來たつけ……』

サラリと入口の障子が開いた。酒と肴の物とが來たのだ。

――オヤ、お一人でげすかい？ と、『ほんとにすまない』といふ顔を拵へて、若い衆は擔いで來たものを餉臺の上へ置

いた。

——ウム、一人で淋しいから一杯つき合ひたまへ。と、私は五人廻しの一人のやうな要領で、杯洗から盃を撮み出して、若い衆の鼻先へさしつけたものだ。

——へへへへへ！ こりや恐れ入りましたね………ええ？ さうでげすかい？ それぢや、まア、御遠慮なく………と、尻の大きな兄さんは窮屈さうに坐り込んだ。

——君は酒が好きかね？

——酒と來ちやア、へへへへへ！

——女は？

——勿論でげすなア。

——母親は達者かね？

——へツ？ 母親？ わツちのでげすかい？ と、兄さんは眼を白黒した。

——さうさ。

——へえ、まア、お蔭樣で………

——泣かしてばかしゐやしないか？

——御冗談でげせう………旦那はどうも人が惡くていけねえ………

——いや、君の相はたしかに親孝行だよ。母親を泣かしたのは俺の事さ………俺は泣かしたもんさ………

——でも、旦那なんざ少しばかりお道樂をなさつて見たところで、金がウンとおありなさるんだから、お袋さんだつて、さうシンペイなさるがもなアねえ………こちとらと來た日にやア、へツ！

——何だい、何だい、いゝ氣になつて、久米公は？ と、ガラリ現はれると、「——何をくだまいてるんだよう、こんなところで！ 旦那も旦那だ………と、おばさんはキメつけた。」

──へへへへへ！　と、久米さんは忽ち敗亡して、立上つたが、──花魁はエ？　と、恰も私へ對する義理立のやうに、詰るが如く一寸おばさんへ双向ふまねすると、

──余計なお世話だよツ！　早くお出ツたら……と、一刀の下に腰斬された。で、

──へえ、へえ、と、泥鼈の如く首をちゞめ、──どうも旦那、大きに御馳走様でげした。と、久米さんは、ダアと出て行つた。

小式部がすうとやつて來た。Tの敵娼であるところの、元氣な、酒の强い花魁まで這入つて來た。

──なぜ内の人を連れて來ないんだよ！　質がないね、この人は！　と。Tの敵娼はいきなり私の後から抱きついて、脇の下から片手を差入れると、いやと云ふほど内腿のあたりをつねツた。

──痛い！　オイ、亂暴するなよ。小式部が泣くぜ。

──誰がお前さんのやうな不實な人の爲に泣くもんか……ねえ、小式部さん。

小式部はニコニコして、穩しく横の方へ坐つてゐた。

──どツちがお神さんだか、かうなると分らなくなるね……さア、いゝから、もう勘辨してやつて、仲直りに一杯お上り……と、おばさんへ跳きつた[illegible](ヒステス)に取掛つた。

──さア、かうなりや、もうヤケクソだから、思ひ入れ飮んでやる……その杯洗お貸し……いゝから、お貸しツてば……どうせ小式部さんは飮まないんだから、ムダなこつた。と、猩々のやうた顏したTの敵娼は、猩々のやうに飮みはじめた。

──小式部さんエ！　と、廊下で男衆の呼ぶ聲がした。

小式部はおばさんと顏を見合した。さうしてお互ひに何やら目と目で信號すると、今度は私の方へ一寸媚びるやうな視線を抛げかけて置いて、そのまゝ又すうと出て行つて了つた。

──今ね、むかうの煩さいお客を、すぐ寢かしつけて來るから……と、おばさんは子供でもだますやうな眼つきをし

こ、ソツと私語いた。

――君は今夜はお茶を引いたわけない？　と、小式部の中座なんぞは問題ぢやないといふ態度をして、私はTの敵娼の方へ鷹揚に顔を向けた。

――馬鹿におしでないよツ！　かう見えたツてね、憚り樣だけれど、あたいはお茶と風邪とは引いた事がないといふ姉さんなんだ……お前さんに岡惚れしてるからなんぢやないか……忙しい中を、かうやつて、わざわざ逢ひに來てやつてるのは……分らないのかよう？　ジレつたい！　と、Tの敵娼は又候私に武者振りついて、、、、、、、、、、、、、、酒臭い息で、、、、、、、、、、、、。

――いゝ加減、お巫山戯よ、小牧さん。とおばさんは窘めた。

が、私はむしろ惡くない心持がした。さうしてチユウと舐め返したものだ。

お誂への辨當が來た。天麩羅蕎麥も來た。ヒイキ分にそれまで五つ來た。

三疊ばかりの名代部屋へ、どうやらかうやら、間もなく寢かしつけられて了つたが、肝心の小式部は容易に姿を見せなかつた。

五燭の電燈が一つ、不景氣に天井からブラ垂つてゐた。見るともなく、そのウスぼけた小球をば、マジイリ、マジリと見詰めながら、私は仰向けにフンぞり返つたまゝ、

『フン、かうした小店の女郎にまでフラれりやア、もう世話はない。』と思つた。

硝子戸のはまつた小窓の外は、例のバアなども巣くつてゐる、曲折したラビリンツの一角だと見えて、醉拂つた足音が、だらしのないぞめき聲とたがひちがひに、ガタガタと溝板を踏みちらして、轟かして、絶間なく通りすぎてゐた。

――お寄りよ。お寄りツたら……などゝいふ、骨がらみにでもなつたやうな、毒々しい女の聲もきこえた。

『大變な墓まゐりになつて了つたものだ。』と、私はまた思つて苦笑した。

『が、考へて見ると、雜司ケ谷だつて、吉原だつて、大した異りのあるところでもなさゝうだ。どつちだつて墓場なんだ。白く塗れる墓の隙間もなく行列してゐる點は、どつちだつて同じ事だ。死に對してまで虚僞を離れる事の出來ない人間が、生に對して虚僞を販ぐのは當然の話だ。雜司ケ谷も人間の虚僞の結晶だ。吉原も人間の虚僞の公設市場だ。

『つまり、人間の生活は、はじめから虚僞で、虚僞だけで成立つてゐるものだからなのだ。それゆえに、まツ正直に、人間の生活から一切の虚僞を取除いて了つたら、人生は全く空虚になる。眞空になる。眞空の中ぢやア、生物は生きられツこはない。從つて、かうやつて生きてゐると思ふのは、とりもなほさず、虚僞の中に漬かつてゐるといふ事にすぎないのだ。

『虚僞だ。虚僞だ。一切が虚僞だ。生きるといふのも虚僞だ。死ぬといふのも虚僞だ。生死を超越するといふのも虚僞だ。大道無門？ 勿論、虚僞だ。透得斯關？ もとより虚僞だ。その虚僞と絶叫する虚僞が虚僞だ………

『なアんのこつた。フン、從假入空觀のおさらひか………「眞諦を得て、慧眼を具し、羅漢果に入る。」が、きいて呆れらア……ばか〳〵しい。それよりや、、、、、、、、漲溢しはじめて來た………どうしてくれるんだ？………』

私は閻右のデコ山さんを想ひ出した。さうして一人をかしくなつて、思はずクスクスと笑ひ出した。

――何を笑つてゐるの？ と、小式部が這入つて來た。

――お前の來樣が遲いからサ。

――さう？ 怒りさうなもんだのにねえ………

――怒つて、、、、、。俺はおやぢだから、却つて笑ふのサ。

――馬鹿だよ、この人は？ 今、一寸一ト風呂浴びて來てやつたの………それで遲くなつたのサ。と云ひながら、小式部は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

――オイ、、、、、、、、、、、、、？

――だツて………、、………

——耻かしい柄でもなからうが？

——この方がいゝんだよ。

——話せないなア！

——何でもいゝよ。、、……

(以下二十九行欠)

……黒髪の末端をば、巨大なる鷲の嘴でくはへた、爛々たる兩眼をクルリクルリと回轉させてゐる怪鳥が、なまなましい血痕の絲を率く、浦若い女の生首を提灯のやうにブラ下げながら、氷柱をその樹幹とした、白刄をその樹葉とした、身の毛もよだつ幽林中を飛翔してゐた。百羽や二百羽ではきかなかつたであらう。さうしてそれ等の暗色の双翅翼が、一様にフワフワとひるがへるたび毎に、白刄の葉枝は燦々と相觸れ相交はり、閃々と隨處に火花を散らして、同時にパサリパサリと薙ぎ落される人間の首や手足や胴體をば、流るゝ血潮と共に凄惨と照らした。

それが夢だなとわかつてゐても、私にはどうしても眼を開く事が出來なかつた。千釣の錘をつけて、ぐい〳〵と海底へ曳ずり卸されるやうに、痺れきつた頭はどう藻掻いても擡げる力が出來なかつた。さうして私の關節は悉く釘づけになつてゐた。

盛んに雨の降る音がきこえた。

……女の口は耳まで裂けた。兩眼が飛び出して双頬の上で止まつた。殘された眼窩は眞紅になつて笑つた。鼻孔から大きな蛆が這ひ出した。髪の毛は燃え上つた。腐つた乳首からベロリと舌を吐いた。、、が皆蛇になつた。、、は青脹れにくづれ爛れて、パツクリと血膿にまみれ口を割り、片方だけ眼を開いた赤子の顔が、その間から出かゝつてゐた。さうして腫物でウヂャヂャけた、その赤子の唇の中には、半ば、、を嚙みちぎられた、、が、、、しながらピクピク動いてシャブられてゐた。肛門からズルズルと出て來た蛔蟲が、見る〳〵、、へからみついた……

私は嘔きたくなつた。バラバラと雨の足が硝子窓へしぶきかゝつた。

『けふは降りだナ………』と思ふと、私の意識は少しハッキリして來た。無性に水が飲みたくなつた。

やツとの思ひで眼を見開くと、舟底枕の上には、もう小式部の首はなかつた。雨降りで微暗いけれど、夜はスッカリ明け離れてゐたものだ。

息もつがずに水を飲むと、私はわづかに人心地がついた。が、箍のかゝつたやうに頭は重かつた。節々が痛かつた。

あまりと云へば自分自身が馬鹿らしくなつた。自分自身のする事なす事が淺猿しくてたまらなくなつた。が、それが自分なのだ。本當の自分自身なのだ。いくら馬鹿らしくても、いくら淺猿しくても、その外には別に自分自身といふものゝ存在しようがないのだから仕方がない。

『なぜ俺はあんなに酒を飲むのだらう？　なぜ酒を飲むと、俺はあゝいふ氣になるのだらう？』と、疲れきつて、グツタリと蒲團の中へ五體を抛り出したまゝ、私はキョトンと眼を開いたまゝ、痴狂のやうに身動きもせず、考へるともなく考へた。

『放縦だ………これが放縦な生活といふものだ。デカダンとかデヂエネレとか賤しめられてゐる人間の狀態はこれなのだ。精神的の自殺者か。全くそれに相違ない。俺にはもう精神などゝいふものは影も形もなく全く滅びて了つてゐるのだ………ただこの肉體を組織しつゝある無數の細胞が生きてゐるから、それだけの事で生きてゐるといふまでだ。つまり、細胞が生きてゐるだけなのだ。別に俺自身といふやうなものが生きてゐるわけぢやないのだ。マテリアリストの考そツくりだが、事實その通りなんだから、それでかまはない。

『細胞が酒を飲めと命令するんだ。細胞が女のゐるところへ行けと命令するんだ。細胞が放縦のかぎりを盡せと命令するんだ。人間のからだは凡ゆる細胞のデモクラシイなんだ。俺はたゞその命令に服從したまでだ。それに反抗する自由意志なんてものが、俺には全々缺乏してゐるからなのだ。

『なるやうになつて行け……さうだ。俺はいつでもさう思つて突まで來たのだ。つまり、細胞の要求どほりになつて行け、といふ事だつたのだ。さうして俺はいつの間にか運命論者になつて了つてゐたのだ。

『が、果して俺は運命論者か知らん？　周圍から決定された運命に對して、俺は果して何等の叛逆も企てなかつたか知らん？　叛逆！……なアに、叛逆ばかりだ。叛逆といふ事から離れては、今迄の俺の生活は全く考へられない。第一番に、、、、、、いた。それから親に背いた。妻子に背いた。家族主義そのものに背いた。それから教師と先輩に背いた。友人に背いた。常識に背いた。社會そのものに背いた。それから凡ゆる宗教に背いた。凡ゆる學問に背いた。凡ゆる藝術に背いた。文明そのものに背いた。結局、自分自身に背いたのだ。

『が、何が背かしたのだ？　何が何に叛逆させたのだ？　細胞の要求が背かしたのか？　アニマリテの無上命令が一切のコンヴェンショナリテに叛逆させたのか？　さうだとすると、運命に反抗する爲に、やッぱり運命に陷つた事になる。さうしてその結果が、とりとめのない、だらしのない、この放縱なのだ。

『が、放縱では駄目だ。無意志では駄目だ。無目的では駄目だ。そんなところでマゴマゴ叛逆が行詰つては駄目だ。もつと、もつと、俺は叛逆しなければいかん。もつと、もつと、俺は徹底した révolutionnaire の一本筋を邁往しなくちやいかん。生きるといふ事は、俺にとつては、即ち叛逆するといふ事だ。俺は虛無主義者かも知れん。俺は無政府主義者かも知れん。或は單純な一精神病者にすぎないのかも知れん。自分では何かよく分らないけれど、とにかく叛逆が生命そのものであるだけは事實だ。

『さうだ。叛逆だ。徹頭徹尾叛逆だ。飽くまで叛逆だ。斃れるまで、死ぬまで、、、まで……さうだ。世の中はあまりに不公平だ。人間はあまりに獲手勝手だ。特權階級はあまりに齒がよすぎるぢやないか。資產階級はあまりに狡猾すぎるぢやないか。智識階級はあまりに卑屈すぎるぢやないか。さうして民衆はあまりに無智だ。あまりに馬鹿正直だ。あまりに從順だ……叛逆だ。叛逆だ。プロレタリアの、、、、、！　目的はそれだ。、、、、、、、、、！　理想はその一點だ。、、、、、！　手段はその一法だ。俺はそれが爲に生きるのだ。俺はそれが爲に死ぬのだ。Voilà tout

…さうだッ！」

私は頭がすうッとした。心持のいゝ音を立てゝ、雨はザアザア降つてゐた。

――サア、サア、起きた、起きた……どうせ、けふ一日ブン流すンだらう？ そのつもりでお部屋を綺麗に掃除して置いてある、、、サア、さッさと起きて、あつちへ行つたり、行つたり……と、這入つて來たおばさんは、いきなり私の夜具を剝いだ。

――向ふのお客はもう歸つたのかい？

――何時だと思つてるんだよ、このシトは？ もう十二時すぎてるんぢやないか……默つてほつときやア、いつまで寢てるか分りやしない……呆れたもんだよ、フンとに……

私は寢間着のまんまで否應なく追ひ出された。

●

寢間は廊下が眞暗がりなので、ところどころの足元へもつて行つて、四かくい小さな明り孔などが苦しまぎれに切取られてあるのがをかしかつた。小式部の部屋はその廊下の一番奥にあつた。

勿論、爰とても、同樣に素人下宿以上には出さうもない、粗末な六疊一ト間だが、壁に所帶じみた簞笥が嵌入んであつたり、茶棚や長火鉢がそれ〴〵適當に排置されてあつたりして、たとへそれ等が極めて形式的で且つ極めて安直なものであつたにせよ、人間味にあこがれきつた學生や、或は荒みきつた放浪者の心には――私もその一人だ――何となく砂漠の中からオアシスでも發見したやうな心持になる。

顏を洗つて、再びこの部屋へ歸つて來ると、私は小式部と相對して、長火鉢の前へドグロを卷いた。私の心はノビノビした。久し振りで一人前の人間になつたやうな氣がした。さうして、出來るなら、いつまでも、いつまでも、このまゝ爰にかうしてゐたくなつた。

――お蔭でサツパリした。これでもうこの世に思ひのこす事は何もない。と、私は獨語のやうに呟いた。

小式部はニツコリしたが、別に何とも答へようとはしなかつた。

やがて、持ち込んだ寄せ鍋をば、仲よく長火鉢の上へかけたりして、私は迎へ酒をチビリチビリ飲みはじめながら、

――君は社會主義だつて話だが、それは本當かい？　と、改めて口を切つた。

――貧乏人なら誰だつて社會主義サ。と、小式部はケロリとして答へた。

私は一本まゐつた。

――さうか。なるほどその通りだ。併し、貧乏人でも社會主義でない奴はいくらでもあるぢやないか？

――みんな馬鹿だからサ。

私はまた參つた。さうしてこの女がひどく嬉しくなつた。ばかりか、どこかエライところのある女のやうな氣までした。そこで、

――どうだい？　俺の女房になる氣はないかい？　と、冗談に云つて見ると、

――受出してくれさへしたら、誰の女房にだつてなる。と、小式部は眞面目な顔して、キツパリ答へた。

私はこの女を思ひきつて女房にしてやらうかと思つた。見たところ、體身もまだ少しも荒れてゐないし、體格もよし、年は若し、頭もよさゝうだし一擧一動に無駄も油斷もないし、度胸もありさうだし……と、そんな事を考へながら、

――一體、いくらあつたら受け出せるのだい？　と、今度は眞顔で訊いた。

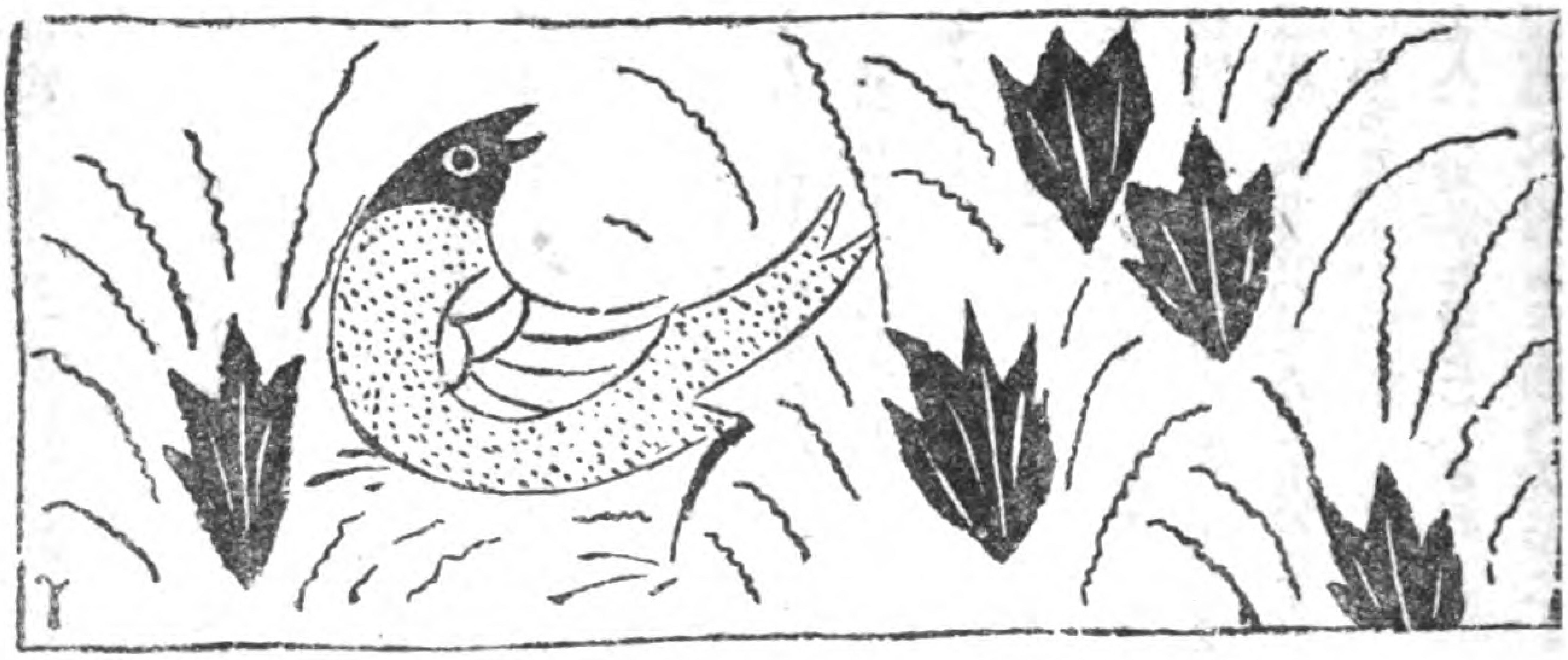
――九百圓あつたらいゝ。

――九百圓？　フム、千圓ならお釣りが來るのか、………

――まア、そんなものだね。と、小式部は心もちニツコリした。

月末には三萬圓出來るのだ。千圓ばかり何でもない。』と、私は思つた。『さうだ。この女を受出して、この女を連れてさうして外國へ行つてやれ。』と、私は思つた。と、さう思ふと、私は何だか急に前途が明るくなつたやうな心持がし出した。

私は小式部の側に二日ゐた。



戯曲

捨兒（一幕）

小山内薫

人物

龜井留吉。酒店の主人。
およし。その妻。
松吉。その弟。
二郎。小僧。
新吉。小僧。
近藤寛。大學生。
白井數高。巡査。
酒を立飲に來る男二人。
町を通る人。

場所

東京の或學生町。

現代。

時　代

舞臺。食料品乾物などを兼業する或酒屋の店先。及びその前の道路。
十二月の或晩、十時頃から十一時頃までの出來事。

主人留吉、小僧二人（二郎と新吉）を相手に帳合をしてゐる。

二郎。……十九日が拾錢でたわし。二十日が一圓十錢で牛罐。廿一日が五十錢でシロップ。廿二日が拾一錢で上酒。廿三日が五錢で酢。同じく十五錢で草箒。廿四日が二圓五十錢で味の素。廿五日が三十三錢で日本橋漬――それで、山口さんはおしまひです。

主人。よし。間違ひなしだ。〆は。

二郎。二十三圓と三十八錢。

主人。よし。よし。

時計、十時を打つ。

主人。十時か。もう一息だ。やつてしまはう。あと二軒だらう。今度は高山さんか。

新吉。へい、高山さんです。高山さんはお酒ばかりだから、わけなしだ。

二郎。隣り合つてゐても妙なもんだね。山口さんは一切お酒の御用なし、高山さんは年中お酒の御用ばかりといふのだからな。

主人。（取り合はずに）さあ、讀んだ。讀んだ。あすこは新吉だらう。

新吉。へい。では願ひまして、お朔日が三圓五十錢で一升。二日が一圓八十錢で五合。三日が一圓八十錢で同じく。四

日が一圓八十錢で同じく……(讀み續ける)

電話の鈴鳴る。

小僧二郎、出る。

二郎。はあ、はあ……上州屋でございます……はあ。どなた樣で……ああ、荒木さんで入らつしやいますか……へい、へい……福娘を一升……へい、へい……荒木さんでございますね……明朝八時までに……へい、へい、畏りました。どうも有難うございます。左樣なら。(電話を離れる。主人に)旦那、荒木さんで、あしたの朝八時に、福娘を一升ですつて。

主人。(帳面から目を放さずに)よし、お前覺えて置け。忘れるな。

二郎。へい。

新吉。(讀むのをやめて、二郎に)なんだつて朝つぱらから酒が入るんだらう。

二郎。きつと子供が生れるんだよ 奥さん、隨分大きなお腹をしてゐるからな。

新吉。子供が生れたつて、朝つぱらから酒を飲む奴があるものか。

二郎。ぢや、産湯にでも使ふんだらう。

主人。(帳面から顏を上げて)馬鹿。新吉、あとを讀まないか。

新吉。へえ。ええと、十四日まで濟みましたね。ええと、十五日が三圓五十錢で一升。十六日が一圓八十錢で五合。十七日が一圓八十錢で同じく。十八日が一圓八十錢で同じく。も一つ、十九日が一圓八十錢で同じく……(讀み續ける)

勞働者風の男、立飲に來る。

小僧二郎、直ぐ一ぱいコップについで出す。鹽を少し皿にのせて持つて來る。

勞働者、默つて一杯一息に飲み干す。コップを出す。二郎、又樽の栓を拔いて、注ぐ。

勞働者、今度は間を置いて飲む。初め鹽を抓む。やがて、腹掛から、小さな竹の皮包を出し、その中から何か摘んで食ふ。

主人。（新吉に）今はいくらになつてる。

新吉。丁度五十六圓になつてゐます。

　勞働者、一寸主人の方を見る。併し、直ぐ又酒の方にかゝる。

主人。（二郎に）二郎。今度は大井さんだぞ。

二郎。へえ。（主人の側へ行く）

　勞働者、二杯目を飲み終り、又コップを出す。今度は新吉が酒をついで出す。

　勞働者、ちびりちびり飲む。

二郎。（この間に、もう讀んでゐる）朔日が二十錢で味噌。二日が十錢で味噌。三日が十五錢で味噌。四日が十錢でマッチ。五日が六錢で磨き粉。六日が二十一錢で味醂。七日が五錢で鹽……（讀み續ける）

　紋附の羽織を着た男が、店へはひつて來る。

新吉。入らつしやい。

紋附。酒を。

新吉。お酒は何を差し上げます。

紋附。ここで飲むのだ。

新吉。（驚かずに）へえ。（直ぐコップへ一杯ついで出す）

　紋附の男、ちびりちびり飲み始める。そこに出てゐる鹽を嘗める。

　勞働者、竹の皮包を紋附の男の方へ出す。

紋附。（相手の顏を見て）いや、これは。僕にですか。それは恐縮。頂きやす。

勞働者、寒いね。

紋附。東京の寒さぢやこわせん。滿洲の寒さでやす。

勞働者。お前滿洲へ行つてた事があるのか。
紋附。左樣。三年をりやした。
勞働者。どこにゐた。
紋附。大連にもゐやした。旅順にもゐやした。奉天にもゐやした。
勞働者。商賣は何だね。
紋附。興行をしてゐやした。
勞働者。鑛山か。
紋附。いや興行物で。
勞働者。ああ、芝居の興行師か。
紋附。芝居もやりやしたし、手品もやりやしたし、オペラもやりやした。
勞働者。儲けたな。
紋附。一時はあなた、馬車を乘り廻すやうな景氣でやしたが、明智光秀三日天下で、忽ち沒落でやさあ。
勞働者。今は何をしてゐる。
紋附。どつかに何か働くとこはないでやせうか。
勞働者。ねえな。
紋附。旦那は何をしてゐなさるので。
勞働者。おれか。おれは勞働運動よ。
紋附。儲かりやすか。
勞働者。儲からねえな。その代り、どう轉んでも食ひはぐれはねえ。
紋附。成程な。

勞働者。だが、この頃はどこでも酒を禁じちまつたんで、そいつだけが不自由だ。その代り、運動はしつかりして來た。容易に資本家に負けやしねえ。

紋附。全く資本家といふ奴は癪に障りやすな。

勞働者。お前だつて、興行師なら、資本家だ。

紋附。もうそれは廢業でやす。

勞働者。資本家の自由廢業か。笑はせやがる。

紋附。（怒りもせずに、笑つてゐる）へ、えへえ。

主人の弟、出て來る。

店に客のゐるのを見て、また元來た方へはひる。

主人。（二郎に）〆高は。

二郎。十一圓と二十三錢五厘。かどの多い割に少ねえなあ。

新吉。あすこは婆さんがしつかりしてゐるから、經濟がうまいや。

主人。無駄を言はずに、帳面を片づけろ。

二人、帳面を片づける。

主人も帳場を片づけにかゝる。

勞働者。何か。君は演說が出來るか。

紋附。演說て程の事は出來やせんが、口上なら巧いもんでやす。

勞働者。どうでえ。一つおれの方の會へ來て働いちやあ。

紋附。結構でやすな。會はどちらにおるんで。

勞働者。小名木川だ。愛勞會つてんだ。お前ひとりものか。

紋附。女房も子もありやしたが――滿洲へ置いてきぼりにして來やした。

勞働者。當り前だ。どうも食へなきやあ、しやうがねえからな。おれなんぞは、人間が利口だから、初めつから女房なんぞ持ちやしねえ。

紋附。全くだ。人間至るところ靑山ありでやすからなあ。

勞働者。何でえ、そりやあ。

紋附。女が欲しけりや、コッへ行けでやす。

勞働者。お前、割に話せるな。そのイキで一つ遣つて吳れ。

紋附。やりませう。

勞働者。ちやあ、これから直ぐ來るか。

紋附。參りやすとも。

勞働者。お前、家はどこなんだ。

紋附。家なんぞありやしません。

勞働者。ちやあ、今宿へ泊りねえ。ところで、お前もう一杯やらねえか。

紋附。御馳走になるんやすか。

勞働者。しみつたれた事を言ふねえ。（紋附の男コップをとつて、二郎のゐる方へ差し出す）

二郎、そのコップに酒を注いで來る。

紋附。いや、濟みやせん。有難う。

勞働者。よせやい。一つ健康を祝して、今夜は板橋とするかな。あしたは又命がけだからな。

紋附。そんな危險な事があるんでやすか。

勞働者。なあに、お前は口の方だから大丈夫だ。おれは腕で行く方だからな。さあ、行かうぜ。（二郎に）小僧さん。い

くらだ。

二郎。一緒ですか。

勞働者。さうだ。

次郎。（新吉と相談してから）ええ、一圓と十五錢。

勞働者。（腹掛から錢を一摘み出して、その中から要求されたゞけの額を置くと、殘りを又腹掛の中へ入れて、どんどん出かける）

紋附。どうも、濟みやせんな。（あとを追ふ）

主人。暢氣な人達だ。さあ、早く戶をしめろ。

二郎と新吉。へえ。へえ。

主人。あしたの朝、荒木さんの福娘を忘れるなよ。

二郎。へえ。大丈夫です。

丁度そこへ、主人の弟、はひつて來る。ふところに、赤子を入れてゐる。

弟。今晩は。

二郎。入らつしやい。（主人に）旦那。本所の旦那が來ましたよ。

主人。（默つて、何か片づけてゐる）

新吉。本所の旦那が入らつしやいましたよ。

主人。（一寸弟の方を振り向くが、又よそを向いて、片づけものをする）

弟。兄さん。今晩は。

主人。（突然、弟の方を向く）何か用か。

弟。ええ。少しお願ひがあつて。

主人。お前のお願ひは聞かないでも分かつてる。もう店をしまふのだ。出直して來い。

弟。でも……折角遠いとこを來たんですから。

主人。それはお前の勝手だ。

弟。どうも、兄さんのやうに言はれてしまつては。

　　二郎と新吉、奥へはひる。

主人。（赤子に目をつける）お前、赤んぼを抱いてるな。

弟。ええ。一週間ほど前に生れたんです。それで、實は……

主人。祝へと言ふのか。

弟。どう致しまして。今の身分で、決してそんな大それた事は願やしませんが、唯、かかあが産後の肥立が惡くて……

主人。（默つてゐる）

弟。全く、どうも、十月にあんな事はあつたんだし、二度と來られた義理ぢやないんですが、ほかに頼るところはないし、この頃ぢや職の方もからつきし……

主人。當り前だ。はやらないのが當り前だ。第一、おれはお前の職が氣に入らないのだ。そこの（指さす）活版所へ行つて見ろ。大きな器械が夜も寐ずに廻つてゐて、日に何萬といふ本が刷れるんだ。製本も、器械でどんどん出來るといふぢやないか。選りに選つて、今どき、日本紙のかがり綴などを職にする奴があるものか。

弟。でも、この頃の本は直ぐ毀れてしまひます。

主人。讀んでしまへば毀れたつてほごれたつて構ふものか。

弟。ところが、さうでないんです。後世へ傳へるやうな立派な著述は、成るべく日本紙に刷つて、しつかり綴ぢて置きたいんです。

主人。ふむ。また受賣だな。あの「探古」とかいふ先生の。おれは第一、お前がああいふ時代おくれな人間を貴んでるのが氣に入らないんだ。やれ「酒樽の由來」だの、「吉原の沿革」だのつて、役にも立たない穿鑿をして喜んでるん

ぢやないか。今どき、そんな物を讀む閑人があるものか。先生がそれだもの、弟子のお前が貧乏するのは當り前だ。

弟。ええ。あたしはどうせかういふ意氣地なしですから、何と言はれても構ひませんが、どうか先生の事だけは惡く言はないで下さい。先生は日本の學問の爲に、金も名も忘れて、食べる物もろくろく食べずに、一生懸命に働いて入らつしやるんですから。

主人。入らつしやる。何が入らつしやるだ。よく聞けよ、松吉、好いか。働くといふのはな。おれ達のやうに、朝は五時に起きて、夜寢るのは大抵十二時。その間、飯もおちおち食はずに、働き通しに動いてゐる——これが「働く」といふのだ。

弟。兄さんの事を働かないとは言ひません。唯、先生は兄さんなどのしてゐる事より、もつと高尚な爲事をして入らつしやるんです。日本に何人といふ人にしきや出來ない爲事をして入らつしやるんです。

主人。ふん、そんなに偉い人なら、おれのところへなんか賴つて來ないで、その人のとこへ行つたら好いぢやないか。

弟。でも、かういふ事で、先生に御迷惑をかける事は出來ません。

主人。賴る事の出來ない人間なら、いくら偉くたつて、しやうがないぢやないか。人間は人に賴られるやうにならなきや駄目です。

弟。兄さんはお金の事ばかり考へてるんです。

主人。さうだ。金の事ばかり考へてる。だから、お前のやうな怠け者にはビタ一文だつて惠む事は出來ない。

弟。ああ、さうですか、分かりました。ぢやあ、もうなんにも言はずに歸ります。ええ。左樣なら。

　行つてしまふ。

主人。おい、おい、二郎。早く戸をしめてしまへ。

二郎。（出て來る）へい。（そこらを片づける）

　新吉と一緒に主人の妻およしが出て來る。

妻。どうしたんです。

主人。なあに、又松吉の奴がやつて來やがつたんだ。

妻。で、もう歸つたんですか。

主人。追ひ返してやつた。あいつも今度といふ今度は目が覺めるだらう。なあに、ここで働かして呉れと言ひさへすりやあ、何でもないんだ。それがあいつには言へないんだ。やつぱり、あいつは親父の血が勝つてるんだ。

妻。でも、あなたにはたつた一人の弟さんですからねえ。暮れで困るんでせう。なんとかしてお遣りなされば好かつたのに。

主人。子供が生れたんだとよ。

妻。まあ、ぢやあ、尚更の事ですわ。可愛い子でせうねえ。お粂さんは美人だから。

主人。怠け者の子だ。どうせ碌な者になりやしないよ。

弟、又出て來る。

弟。兄さん。

主人。（知らん顔をしてゐる）

弟。兄さん。

妻。あなた、松さんですよ。

弟。姉さん、どうも、こんなにおそく上がつて、濟みません。

妻。どう致しまして。

弟。兄さん。今のはあたしが惡うございました。今言つた事はみんな取り消します。あたしはやつぱり兄さんを賴るより外に致方はありません。子供が可哀さうです。嫁が可哀さうです。

主人。（默つて戸を締めにかゝる）

弟。ねえ、兄さん。
妻。（主人に）ねえ、あなた。松さんがあんなに言つてるんですから。
主人、駄目だ。歸れ。歸れ。
妻。（赤兒に目をつける）まあ、赤ちやんを連れて來たんですね。どれ。どれ。一寸見せて下さい。（側へ寄る）まあ、まあ、おとなしく寢ん寢だこと。
弟。へえ。仕合せと、世話のちつとも燒けない子でして。
妻。男。女。
弟。男で。
妻。それはまあ、お峯さん、大喜びでせうね。
弟。それが……まだ、子供の顏もろくろく見ないんで。
妻。あとでも惡いんですか。
弟。ええ。へえ。
主人。さあ、さあ。いつまで同じ事を言つてるんだ。早く歸れ。早く歸れ。
弟。でも、兄さん、あたしは、どうしても、今夜は、この儘は歸れません。
主人。ぢや 、どうしようと言ふのだ。
弟。もう、一圓でも、二圓でもよござんすから、貸して下さい。
主人。いけない。
妻。あなた、その位なら、どうかして。
主人。お前は默つてゐなさい。（弟に）さあ、歸らないか。
弟。ぢやあ、せめて、子供だけでも引きとつて。

妻。あなた、さうして上げようぢやありませんか。

主人。駄目だ。駄目だ。歸れ、歸れ。

弟。ぢやあ、子供を、ここへ捨てて行きますよ。

主人。まだ歸らないな。どうしても歸らなけりや、手荒な事をするぞ。

弟、ええ、どうされても、あたしはどきません。

主人。歸らないか。(突く。赤子、泣き出す)

妻。まあ。あなた、そんな亂暴な事を。

主人。お前は默つてゐろ。(弟を外へ突き出す)さあ、歸れ。歸らないか。

弟。いいえ、歸りません。

主人と弟、揉み合ふ。

弟、終に締め出される。(戸を締める時は、小僧達も手傳ふ)

弟、暫く締め切られた雨戸を睨んで立つ。やがて、泣く子をすかしながら、行きかける。が、直ぐ戻つて來て、赤子を軒先へ捨てる。一度行きかけて、又戻り、自分の羽織を脱いで着せたり、自分の襟卷をとつて、子供の頭を包んでやつたりする。暫く佇んで、子供の樣子を見てゐる。やがて、顏を押へて、足早に去る。

一度默つた赤子が、又泣き出す。

雨戸の中で十一時が鳴る。

主人の妻、小窓をそつと明けて、顏を出す。

妻。まあ、ほんとに捨てて行つてしまひましたよ。

主人。(妻の後から少し顏を出して)うつちやつとけ。うつちやつとけ。あいつは氣の小さい奴だから、近所にゐて樣子を見てゐるに違ひない。今に歸つて來るにきまつてる。(小窓を締める)

人の往來、絶える。

赤兒、泣く。

雪が少し降つて來る。

稍長き間。

口笛でファウストの行進曲を吹いて來るのが聞える。

やがて、マントを着た大學生が一人出て來る。店の前を勢よく通つて行つてしまふ。

赤兒、烈しく泣く。

學生、うろ〳〵しながら、歸つて來る。子供を見つける。あたりを見廻す。赤兒、泣く、學生、思はず抱き上げる。が、又下へおろす。又抱き上げる。又考へて、下へおろして、行きかける。又赤兒、泣く。又抱き上げて、少し行きかけるが、又立ち留つて、考へて、元のところへ置きに歸る。赤兒を下へおろして、襟卷の崩れたのを直してやつたりなどする。

丁度、その少し前から密行の巡査が出て來て、ぢつと立つて見てゐる。

學生、行きかける。

巡査。君。君。

學生。は。

巡査。（赤兒を指さす）それは。

學生。子供です。

巡査。君の子供ですか。

學生。僕の。（笑つて）僕は學生です。

巡査。學生だつて、子供がないにきまつてはゐません。

學生。それは、僕の同級生にだつて、持つてる奴はあります。

巡査。だから聞くのです。それは君の子ですか。

學生。僕の子ではありません。

巡査。では、なぜ今抱いてゐたのです。

學生。自分の子でなければ、抱いては惡いのですか。

巡査。理窟を言つちやいけません。では、率直に訊きませう。あなたは自分の子を捨てたのではありませんか。

學生。いいえ、さうぢやありません。

巡査。さうでないといふ證據がありますか。

學生。證據。

巡査。證據と言つては無理かも知れませんが、私に承認の出來るやうな事が、何かありますか。

學生。では、順序だけ申し上げませう。僕は親類の家へ遊びに行つた歸りに、唯ここを通りがかつたのです。僕はそこの下宿にゐるもんですから。ところが、子供の泣き聲がするから、戻つて見ると、どうも捨兒らしいんです。あんまり泣くから、可哀さうになつて、抱き上げては見たんですが、下宿へ連れて歸つても、僕にはどうする事も出來ません。で、また、元のところへ置いたのです。唯、それだけです。

巡査。併し、近頃は、大分學生間に戀愛問題がありますからな。

學生。それは、あるかも知れません。また僕自身にも、あるかも知れません。併し、これとそれとは別問題です。

巡査。(手帳を出す) 君の名は。

學生。僕は惡い事をしたのでせうか。

巡査。それは分かりません。私は唯自分の職責として、君の名を訊くのです。

學生。では、あなたの名をお言ひなさい。

巡査。私の名こそ言ふ必要はないのです。併し、私は自分一箇の主義として、訊かれれば言ふ事にしてゐます。私はそ

この派出所にゐる臼井數馬といふ者です。
學生。僕は、近藤寛。
巡査。ユタカは。
學生。寛です。寛大の寛です。
巡査。帝大ですね。
學生。文科の三年です。
巡査。下宿は。
學生。元町二丁目廿三番地。長生館。
巡査。ちやうせい。
學生。長く生きるです。
巡査。國は。
學生。京都市七條下ル西洞院。
巡査。年は。
學生。そんなに何もかも訊くのですか。
巡査。一應訊いて置きます。
學生。二十三です。
巡査。(子供を抱き上げる。子供泣きやんでゐる)では、お氣の毒ですが、一寸署まで御同行を願ひます。
學生。警察へ行くのですか。
巡査。さうです。
學生。それは迷惑ですな。

巡査。迷惑かも知れませんが、やむを得ません。
學生。警察へ行くのは餘り愉快ではありませんな。
巡査。爲方がありません。この子が君の子だか、さうでないか、確めなければなりませんから。
學生。それは、さつきからさうでないと言つてるではありませんか。
巡査。それだけでは、私として承認が出來ないのです。
學生。なぜ承認が出來ないのですか。
巡査。それは署へ行つて言ひませう。
學生。なぜ。ここでは言へないのですか。
巡査。また理窟ですね。それでは言ひませう。先づ第一に斷つて置きたいのは、私が巡査であるといふ事です。
學生。それは分つてゐます。
巡査。私は巡査です、それをしつかり頭に置いといて下さい。その巡査の私が、この目で見たものは何でしたか。この子を抱いてゐた君が、この子をここへ捨てた事です。私の見たのは、唯それだけです。私は巡査として、君を疑はなければなりません。疑はなければ、私の職務が立ちません。想像や推測で、人を罰したり許したりする事は、吾々に許されてゐません。
學生。あなたの職務は人民を保護する事です。
巡査。さうです。人民の保護です。私はこの子が可哀さうだから、君を疑ふのです。若し、これが君の子であるとして君がこの子を捨てなければならないとしたら、その事情も訊きたいのです。それは君を保護する事になるのです。
學生。僕は自分の子を捨てるやうな事はしません。
巡査。さうかも知れませんが、私の見たのは、君が捨てるところを見たのです。
學生。捨兒が泣いてゐれば、可哀さうになるのが當り前ではありませんか。誰だつて拾つてやるのが本當です。それが

人間といふものです。あなただつて拾ふでせう。

巡査。勿論、拾ひます。

學生。それで、あなたに嫌疑がかかつたらどうします。

巡査。警察へでも何處へでも行つて、明かりを立てます。

學生。若し僕が、拾つた儘、どん／＼行つてしまつたら、どうですか。

巡査。それなら、咎めなかつたかも知れません。

學生。それは不合理ぢやありませんか。

巡査。精神的に言へば不合理かも知れません。併し、吾々は目で見た事のみに根據を置きます。

學生。では、僕が一旦拾つたものを、又捨てたのが惡いのですね。

巡査。拾つたところは、私は見ないのです。

學生。（考へて）さうだ。確にそれは惡い事だ。僕は愛が足りなかつたのだ。僕の躊躇は愛の缺如から來たのだ。どんな事があつても、拾つて行くべきだつたのだ。さうだ。やつぱり、あなたは拾はないところを見つけた。僕は惡かつた。僕は罰せられても爲方がない。ああ。恐ろしい。僕は恐ろしい罪を犯したのだ。

巡査。同行しますか。

學生。致します。

巡査。では。

二人、去る。

雪、ますます降る。

寝巻姿の主人の妻、小窓を明ける。

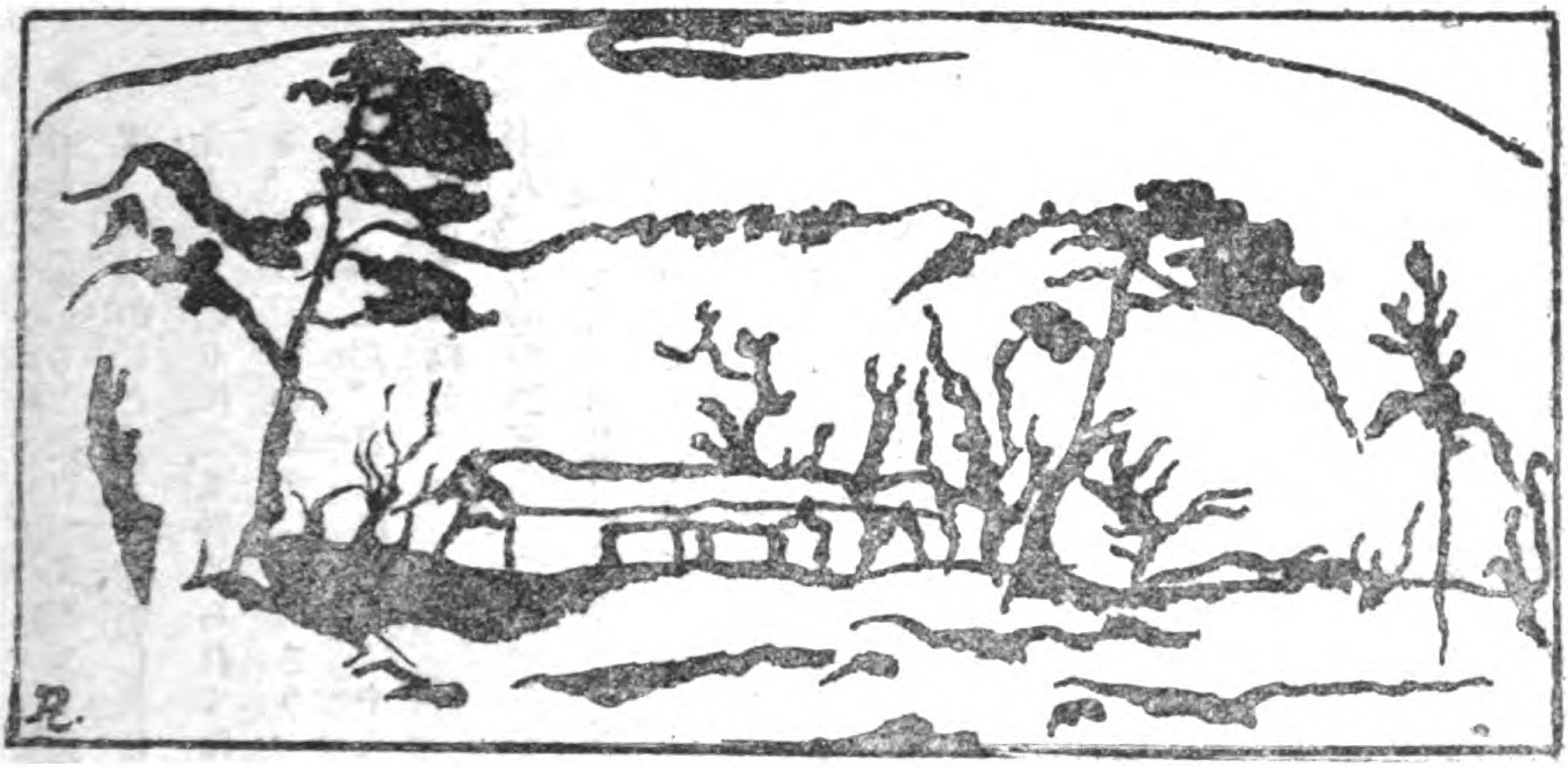
妻。あなた、あなた、子供がゐませんよ。

主人。（後から）松吉が又來て、連れて歸つたんだらう。
妻。何だかごと〳〵足聲がしましたね。
主人。お廻りにでも咎められてゐたんだらう。
妻。さうですかねえ。可哀さうに。
主人。あした、どうにかしてやらうよ。
妻。どうかねえ。
主人。子供の始末さへつきやお安心だ。さあ、寢よう。寢よう。

　二人、顏を引つ込める。小窓の戶が締まる。
　雪がますます激しく降る。
　松吉、ふるへながら、出て來る。軒下を透かすと、子供がゐないので、一寸驚くが、直ぐ又何か考へついたやうに、酒屋の店の雨戶の側へ身を寄せて、耳を傾ける。

弟。よく寢てると見えるな。

　安心したやうに、行つてしまふ。雪が無闇に降りしきる。　——幕——



或る男

武者小路實篤

一一九

彼は雜誌をやることにあまり大きな望は持つてゐなかつた。彼は新しい運動を起す氣はなかつた。彼が元氣のない時に、回覽雜誌を始めた。今も彼には現在の自分の生活に不滿で、何かして新鮮な空氣に自分の生活をふれさしたいのが第一の要求だつた。しかし用心深かい臆病な彼等はすぐ雜誌を出さうとはしなかつた。滿一年さきのくわだてとした。武郎さんは毎月五圓づゝ送つてくれた。四圓と云ふのに五圓づゝ送つてくることをよろこんだ。會計はHがやつた。金がたまつた時彼等は相談して、債券を買つた。そして志賀の祖母さんがそれを佛壇（神棚か）に供へてお辭儀した。しかしあたらなかつた。

　原稿もいゝのが出來るとそれを雜誌の原稿の候補者とした。ずつとあとのハガキだが彼は志賀にから云ふハガキを送つてゐる。

「何しろ中々巧くかけてゐる。この調子で書きたいものを書いてゆけば少しも悲觀することはないと思つた。殊に殺すまでは巧いと思つた。缺點は見出せなかつた。生々してゐると思つた。人殺の元因が單純なので大作とは思へなかつたが、雜誌に

立派にのせられると思つた。お世辭ではない、慰めでもない、ほんとに巧いと思つたからハガキを出すことにした」

之は「殺人」と云ふ短篇だつたが、志賀は何處へも發表しなかつたと思ふ。

お互に元氣をつけあつた。

彼等は元より一方自分の仕事に自信も持つてはゐたが、自分の仕事の幼稚なことゝ、小さいことを認めないわけにはゆかなかつた。そしてよく悲觀した。だがその時、彼等はお互に慰めあつた。

彼は常に淋しかつた。そしてその淋しさが彼に仕事をさした。しかしその仕事もかき上げると彼をよろこばすわけにはゆかなかつた。彼はそのなぐさめは畫にもとめた。

彼は非常に不器用でどうしても畫がかけなかつた、それで畫家になることは斷念してゐた。しかし彼に畫が少しでもかけたら、彼は淋しさに打ち克つ爲に畫をかいたにちがいない。しかし彼は畫はかけなかつた。たゞ彼は西洋の畫の複製を見て、そしてそれをかいた人の心にふれてよろこんだ。

彼はある日丸善へ行つて注文してあつた畫の雜誌を受けとつた。それはゴヤの出てゐる號だつた。彼は歸り路にあけて見た。彼は其處に生々しい色づきの「一八〇八年五月二日の出來事」と云ふ畫を見た。彼はそれを見てすつかり興奮した。憤慨した。それはフランスの兵士達が武裝なきマドリツトの市民達を殺してゐる處だ。殺すものも殺されるものも正氣の人間ではない。正視出來ない殘忍とか、殘酷以上、狂氣の世界に入つてゐる人々である。殺すものは一列にならんで同じく下を向きながら銃劍をつけたまゝの鐵砲を市民達の一間程前にさしつけて今にも發砲しやうとしてゐる。市民達はアンドレーフの「赤い笑ひ」の内に出てくる人々のやうに、赤い笑ひと云ひたいやうな崩れた顏をしてゐる、恐怖以上の感じが實によく出てゐる。そして其處には既に死骸がよこたはり、負傷せるものがもだへてゐる、そして其處に生々しい血が流れてゐる。

人に殺される時の瞬間の氣持が實に露骨に、之以上眞をつかむことは出來ないやうにかけてゐる。

彼は涙ぐんだ。そして今更に戰爭の悲慘人殺しの罪なことを全身で感じさせられた。彼は雜誌をつゞけて見ることが

出來なかつた。頭が一パイになつて淚がながれさうになつた。彼は櫻田門をぬけて又さきの方を見た。其處には「死人には勇敢」と云つて、手や足や首を切つて木につきさゝれて、男根がゑぐりとられてゐる畫や「一つの小刀の爲に」と云つて、小刀を首にぶらさげて死刑を受けてゐる僧侶（？）の畫を見たりすると彼は憤らないわけにはゆかなかつた。

それは事實であらふ。ゴヤがそれを見たのか、或は想像かそれは知らない。だが人間の內にはそんなことを敢てする本能もある。それは過去の歴史許りが示してゐるのではない。彼は一人憤つた。人間の爲に戰ひたい氣が內に燃えた。人間の手によつて人間がなぶりものになる。人間の價値を蟲けら以下にする。それは彼には不快であつた。彼は人間が猿の祖先を同じくするにしろ、それは猿の價値を高めるにしろ、人間現在の價値を低めることにはならないと信じてゐる、人間の現在の有樣は事實その通りで、先祖によつて變化するわけにはゆかない。處が現在の人間が、人間を辱かしめ、虐待し、なぶり殺しにし、それにあきたらず死人を辱かしめるのに勇敢なのは辛抱が出來ない。彼は見へない敵と戰ひ、そしてそんな不合理な悲慘な事が、地上から消えてゆくことをのぞんだ。更に又そんな目にあつた人々の心が、彼の心によみがへつた。あつてはならないことが地上には平氣に行はれてゐる。

自分の實力を高めるより仕方がない。勉强しやう。勉强しやう。最後に彼のおちつく點はいつも其處である。

一二〇

彼が彼女については同じ考をもちつゞけてゐた。高島さんがまた先方へ出かけて行つて同じくことはられて來た。それは三月の始めだつた。彼はそのことを「お目出たき人」の內にかうかいてある。「お目出たき人」は過半つくりものであるが、こゝは事實そのまゝにかゝれてゐる。高島さんのことを川路と假名がつけてある。そして彼女の名だが鶴になつてゐる。「自分は不安を感じながら樂しみにして、希望に燃えて川路氏から何とか云つてくるのを待つてゐた。もう川路氏は鶴のところへ行つて下さつただらう。何とも云つてこないのは面白くない返事だつたからかも知れない。いや用があつてまだ行つて下さらないのだらう。それとも鶴の自家で最後の決斷を與へる爲に返事をおくらしてゐるのかも知れ

ない。お目出たい自分にはどうもその方がほんとのやうに思へる。

あれは三月二日の晩のことだつた。待ちに待つた川路氏から手紙が來た。自分は「幸あれ」と心に祈り乍ら不安と希望に燃えながら封を切つた。そして讀んだ。自分は腹が立つた。

鶴の父に川路氏は逢つていろ〳〵話して下さつたのだが、先方は依然として、鶴のまだ若いこと、鶴の兄のまだ嫁をもらはないことを云つて、今その話しはきめたくないと斷つたさうである。さうして他からも醫學士とか何十萬圓の金持の息子とかからも結婚を申し込んで來たが此方と同じ答へで斷つてゐると云つたさうである。川路氏はもつとつゝこんで云はうと思つたけれども反つてそれが爲に話をやぶるやうなことがあつてはいけないと思つて、曖昧にして歸つて來られたさうである。

川路氏は手紙に、なほ他の方法で骨折る心算だが時期をまつ方がいゝと思ふと書き加へてあつた。

自分は全身に力を入れた。さうして自分は勇士である、勇士であると鼓舞したが、やゝともすると涙が出てくる。もう駄目になつたのだ。とりつく島も無いのだと思はないではゐられなかつた。十時頃床に入つた。さうして泣いた。しかし何時のまにか寢ぐるしい眠りに入つた。一時頃目が覺めた。自分をあはれむ情が强く起つた。自分はたまらないので起きて日記をつけた。

三日

一時頃目覺む。

自分は悲しく思つた。餘りだと思つた。はがゆく思つた。どうかしたいやうに思ふ。自分は淚ぐんだ。

自分は足かけ五年前から一日も彼女のことを忘れたことはない、これは自業自得である。

この罪は自分にあつて他人にあるのではない。しかし自分は自分を憐まないではゐられない。かくまで目出たく出來てゐる自分を憐まないではゐられない。

彼女を戀し始めたのは三十〇年九月である、それから滿三年半たつてゐる。この間自分は何時でも彼女と結婚したい、

結婚しなければいけないと思つてゐた。

さうしてその點には彼女の爲にもそれがいゝことだと信じてゐた、彼女もそれを望んでゐるやうに思はれた。

馬鹿だ〳〵かくまで自惚れる自分は馬鹿にちがひない。

かくて自分は母や父を無理に賛成さした。それまでに十九ケ月を要した。自分はかくまで苦しんでゐるのだ。

かくて自家の人を始めとして川路氏や友に非常な同情を得たのである。同情をかち得る身はたまらないものである。

自分は平氣な顏をしてゐる、又平氣な時が多い。しかしこの爲に何度泣いたか、何度胸がせまつたか、何度不安になつたかわからない。

この憐な自分に本人の鶴がいさゝかの同情をもたないならば自分はこの緣談をお斷りしたく思ふ。

緣談に冷淡なのは父であらう。しかし鶴がどうかしてくれるならば鶴の父ももつとどうにかなつたらう。

鶴は自分のことなんか、なんとも思つてゐないのだらう。

鶴が何とも思つてゐないならば自分は鶴を妻にすることを好まない、多くの人をわづらはしてまで鶴の夫になりたくない。それ程お目出度い男になりたくない。

勝手になれである。

鶴に自分の妻になることが幸福でなければ自分に鶴の夫となることが幸福なわけはない。

自分を夫にもつことをいやがるやうな女、そんな女は妻にしたくない。そんな女を妻にして喜ぶ程自分は肉慾許りの男ではない。

鶴の心が見たい。

鶴はもう自分のことを知つてゐるはづだ。知つてゐながら僕の不安な狀態にゐることに向つて、いさゝかも同情せずこの不安の狀態から救はふとすら思はないならば、鶴に自分の妻たるの資格はないのだ。

たゞ鶴が自分を愛し自分を憐れんでゐるが、鶴自身の力のないことを知つて默つてゐるならば鶴は憐な人間である。

自分には鶴はこの憐な人間のやうにも思はれる、さう思はれる限り、自分はこのことを思ひ切らない。

かくてこそ思ひ切らないことが男らしく自分には思へ、思ひ切らないことがいゝことのやうに見えるのである。

この思ひ方がまちがつてゐるならば自分は思ひ切つて見せる。

彼女の心が見たい。

彼女の心は見ることは出來まい、彼女はとらわれてゐる女であらう。父と兄に自分の運命をたくしてゐる女であらう。

それをいゝことに思つてゐる女であらう。

情の動くまゝに自分の身を任すことを罪惡としか思へない女であらう。

かゝる女に自我はない。

自我のない女に自分の心の内の秘密を人にもらすだけの勇氣はない。自分にきく機會がないが、他の人に聞いてもらつても駄目だらう。

しかし聞いてもらいたい、かう云ふ問題について女は可なり大膽である。女の一生はこの問題できまるのだから。しかしよく聞くことが出來ても力なき鶴の答はオ、ソリチーのないものだらう。

時期をまつより他はない、不安をつゞけるより他はない。

しかし不安な狀態をつゞけるのはいやなものだ。もうつゞけすぎた。

鶴が自分を愛してゐるか、愛してゐないかゞ知りたい、それを知れば思ひ切るのも切りいゝし、不安をつゞけるのもつゞけ甲斐が出來るわけだ（夜二時十分）

自分は日記にこれだけ書いたら少しは頭が休まつたやうに思つたので寢やうとした、しかしまだ興奮してゐる、自分は又おきた、目出度しと云ふ題をつけて次の新體詩を泣きながらかいた。

「思ひ切れ〳〵

今となつて彼女のことを思ひ切らざるは餘りに女々し

多くの男に戀さるゝ女
汝のことのみ思ふはずなし
思ひ切らず／＼
我思ひ切らず

——（女）

女々しき汝よ
思ひ切らざるにあらず
思ひ切れざるなるべし
男なる汝よ
男らしく思ひ切れ

る

汝を愛せず、汝の爲をはからぬ
女を思ひ切れ

——（男

我を愛せず？
我が爲をはからず？
そを我は眞に知るまで
思ひ切らず／＼
思ひ切れざるにあらず
思ひ切らざるなり。

汝三度求婚して
三度とも彼女の父よりていよく斷られたるに
なほ彼女が汝を愛しつゝありと思ふか

我は思ふ〳〵
彼女の父の言葉
我をしてしか思はさゞる爲には
餘りによわし

目出度き哉
甚もつて目出度き哉

我は目出度し
目出度し
汝の思ひおるよりも
更に目出度し
我、彼女を見すてることを
見す〳〵彼女を不幸におとすことゝ思ひおる也
されば我、思ひ切らず

思ひ切らざるを以てほこりとす
我たゞ驚く
云ふべき言葉を知らず

さなり〳〵
汝の忠告をきかんには
我餘りに目出度し
目出度し〳〵

目出度き故に他人と自分を苦しめる程目出たし。

からかいたら少し元氣になつた。翌日彼は鵠沼東屋に行つた。彼は同じ小說にからかいてゐる。

「自分はその翌日、即ち三月四日に鵠沼の東屋に行つた。春休には間があるので客は少なかつた。自分は二階の江の島の見える日照りのいゝ室を占領した。（占領したは大きい、押しつけられたと云ふ方が本當だらう）自分はこゝへ來て、勇氣を養はうと思つたのだ。鶴のことはすべて川路氏と運命に任せ、その事に就ては一切考へず身體と思想を健全にしやうと思つた。自分はこの頃少し神經質になりすぎてゐると思つたのだ。本もなるべく讀まずに四日間、海岸や田圃を歩きまわつた。そして五日目に自家に歸つた。

自分はそれからなるべく鶴のことを考へないやうにしたがやゝともすると考へられてくる。さうして、三月の十五六日になると何時の間にか自分と鶴は夫婦になるやうな氣になつた。」

その春鶴は學校を卒業したわけだが、彼の小說にあるやうに四番で卒業したと云ふのは嘘である。新聞に優等生の名は出てゐたが、彼女の名はその內になかつた。

彼の小說にはその他嘘が多いが、しかし或日、四月の四日かと思ふ、小說には五月十二日となつてゐるが、それは彼の誕生日なのでわざと五月十二日にしたので、本當は五月十二日ではなかつた。三年のちに彼は偶然五月十二日に彼女に逢つたが、それはあとで又かく時があるであらう。

しかし逢つた時の事情や氣持は全部本當がかゝれてゐる。

彼はその日木下の處を午前にたづねて、十一時半頃歸ることにした。木下は散步がてらに彼を柏木の停車場まで送つて來た。電車が中々來なかつた。せつかちの彼はそれをよろこんだ。なぜかと云ふと電車を待つ時間が多ければ、それだけ彼女が代々木からのる機會が幾分か多くなるからだ。前の電車とあとの電車の間が、ながければその間に來た人は多くなるわけだ。電車が早くくれば、電車の出たあとすぐ彼女が來ないとも限らない。

彼はかうかいてゐる。

「電車は來てゐない。さうして中々來ない。自分は來てくれない方がいゝのだ。自分は中野（柏木をわざと一寸かへてある）の友の所へ來る時、歸る時、鶴と電車で同車することを想像しないことはない。さうして電車をまてばまつ程鶴に逢ふ機會が多いやうに思つて嬉しい。その内に電車が來た。

自分は友達と挨拶して電車にのつて眞中より少し後ろに腰をかけた。のつて暫くしてから出た。鶴は停車場で電車を待つてゐるかも知れないと思つた。しかし今十二時頃だから飯を食つてゐるだらうと思ひ返した。しかし何時ものやうに大久保（代々木）につくことを樂しみにしてゐた。電車が柏木に着いて一寸止つて柏木を出た。自分の胸はせばまるやうに覺えた。これは珍らしいことではない。さうしてかう云ふ感じを何十度味つたか知れないが、鶴に逢つたことはたゞ一度だつた。それは去年の四月四日である。

電車が大久保に着く時、自分はこわ／＼プラットホームを見た。六七人まつてゐる人があつた。その内に若い女が一人ゐた。鶴じやないかと思つてゐる内に電車は益々近づいて止つた。

鶴だつた！　鶴はこの瞬間に自分に氣がついたらしかつた。後から乘らうとした足がこの時ピタリと止つた。鶴に引

きかへして前から乘つた。自分と見合つた時、目と目があつた。鶴は赤い顏して目をそむけた。そうして自分の腰かけてゐる右側に腰をかけた。鶴と自分の間には三人の人がゐた。

自分は鶴の大人になつたのに驚いた。鶴は相變らず粗末な着物を着て薄くお白粉をぬつてゐた。自分は鶴程美しい女を見たことはないと思つた。

優しい、美しい、さうして表情のある顏、生々した口、紅の口唇、顏色のいゝ、自分は鶴の顏をもつとはつきり見たいと思つた。しかし間にゐる人が邪魔になる。赤い髮の毛が一寸見えるだけだ、（鶴の髮毛は赤い）自分のわきには勞働者がゐた。その隣りが軍人で、その隣りが四十許りの女で、その向ふに鶴がゐるのだ。

自分は向ひ側の空いてゐる席に鶴の腰かけなかつたのを殘念に思つた。しかしあわてた樣子、自分と顏をあはせるのを氣まりわるく思つて同じ側に腰をかけたことを嬉しく思つた。

新宿で可なり人がのつた。代々木では殆んど滿員になる程人がのつた。自分は老人か子供を負つてゐる人が來てくれるといゝなと思つた。さうすれば自分は何げなく立つことが出來る。さうして鶴を見ることが出來る。しかし自分の前には男の人のみ立つてゐる。

千駄ケ谷で少しおりた。信濃町では五六人下りて、三四人のつた。四谷につく少し前に自分は立つた。鶴の方を見た鶴と自分の目は合つた。鶴はすぐ目を轉じた。自分は思ひ切つて鶴の前を通つて降りることにした。電車はとまりかけたが鶴はたゝない。さうして自分に顏を背むけてゐる、電車はほんとに止つた。自分は鶴の前を通らうとした。この時不意に鶴は立つた。自分は嬉しかつた。自分の手は鶴の背中にふれた。自分は鶴について電車を降りやうとした。この時入口のそばにゐた子供をつれた人が立つた。自分は厚顏しくその男をかきのけて鶴のすぐあとに從ふ勇氣が無かつた。自分は鶴と自分の間に二人を入れた。自分は電車をおりると二人を逐ひこした。

さうして改札口を鶴について出やうとした。

しかし鶴は改札口に達した時一寸後ろを見た。自分を見た。さうして身體を少し右によせて自分に先にいらつしやい

と云はぬ許りの態度をとつた。自分は夫の權威を以てさきに出た。しかし自分の心はあがつてゐた。切符を改札掛に渡さうとして落してしまつた。自分は落ちた切符をたゞ眺めて改札掛の拾ふのを見て、なるたけ落ついて停車場を出た。出て右に折れて段々を左側のはしを通つて登つた。さうして自分はふり向いた。鶴と又顔をあはせた。一階段を登りおはつてふりかへると鶴は自分の通つたあとを登つてくる。矢張左側のはじを通つて。

自分は段を上りきる前に又ふり向いた。鶴は靜かに自分の歩いた所を歩いてくる。自分は登りきつて右に折れて麴町通の方へ行つた。

ふり向くと鶴は段々を上りきつて未だ自分のあとをついてくる。自分はもう夢中だ、嬉しい「お鶴さん」と聲をかけたい程自分は親しさを感じた。さうしてさう聲をかけても鶴はおどろかないで、「何に御用？」と笑ふやうな氣がした。自分の足はおそくなつた。自分は電車道をよこぎつて麴町通の左側を通つた。鶴は電車通をよこぎらずに右側を歩いてくる。

自分は何度ふり向いたか知れない。その都度鶴と顔をあはせた。あはせるとあはてゝ自分は顔を元に戻した。鶴も顔をそむけたやうに思ふ。

自分は鶴が自分を愛してゐてくれたと思はないではゐられなかつた。自分の心は嬉しさにおどつた。眞心は眞心に通ずる。自分が鶴を戀してゐるやうに、矢張り鶴も戀してゐてくれたのだ。

自分の足はおどつた。自分の足はつい早くなつた。六丁目あたりに來てふり向いた時、最早鶴の姿は見えなかつた。自分は鶴は何處かの商店に入つてゐるのではないかと思つたが見えなかつた。しかし自分は嬉しくつてたまらなかつた。自分は自家に急いだ。

鶴は自分を戀してゐるのだ。鶴は自分の妻になるのだ。二人は夫婦になる運命を荷つて生れて來たのだ。なにしろ今日は嬉しい日だ。紀念とすべき日だ。鶴も嬉しく思つてくれてるだらう。自分は自家に歸つてこの喜をもらさないではゐられなかつた。母に逢つて今日鶴に逢つてよ。鶴はそれは美しくなつ

てよ。僕は萬龍より鶴の方が何十倍美しいか知れないと思ひましたよ。と云ひたかつた。母は或日萬龍を見て、美しいと感心してゐたことがあつた。さうして鶴のことはさう美しいとは云はない。

母に三年前自分は鶴の自分の室の窓の前を通る處を見せたことがある。

何しろ自分は落ついてゐられない。しかし母に打ちあけて云ふのは氣まりがわるかつた。

晝飯食つてからもじつとしてはゐられないので神田に行つた。さうして一人鶴のことを思つて微笑んだ。

美しい、美しい、優しい、優しい、氣高い、氣高い、鶴は女だ。

自分はその夕、麻布の友(志賀)を訪れて「鶴に逢つたよ」と簡單に話した。友は「さうかい、それはよかつたね」と云つた。

三

彼は外界には實に刺戟のない變化のない世界に住んでゐた。彼は又冒險の出來ない、又好まない、そして又外界の刺戟なしに生活出來る男だつた。彼は子供の時から自分で好んで變化を求めなかつた。又外界から變化を強いられなかつた。彼は美しい少年ではなかつたから誘惑されたことはなかつた。又富んではゐなかつたが、金のために生活をかへる必要はなかつた。彼は又運動家でもなく、社交家でもなかつた。彼の世界は少數の友と、本と繪だつた。あとは一人で考へることだつた。

彼の內面生活より他、彼には單調な戀より他なかつた。それはある人が彼の思ひ切りのわるいのにはがゆかつた程、何年も一日の如くくりかへされた。そして彼の內面生活も同じやうな考がくりかへされた。仕事の慾望と、戀と、それから死の恐怖が、彼にとつての大事件であつた。彼は實によく死に關する夢を見る。それは彼を實に強く苦しめた。生れない方がよかつたと、心の底から思つたことは一度や二度ではなかつた。しかしその感じはやがてすぎ去るものではあつた。

彼は死の恐怖についておそはれた。

「我を知らざるものは思はん。
我敵なきに雄叫びし、
我戰はざるに凱歌あぐると
あらず我に敵あり
大敵あり、名づけて死の恐怖と云ふ。
我夜毎に死の恐怖と戰ふ。
我が氣はやれども、我が身おのゝき、
我が心しほれ、毛髮よだち、
汗全身をおふ。
かゝる時我自己の生れしを呪ふ。
されど我生れたり、
死せざる可からず。
されば我死の恐怖に勝たざる可からず。
して恐ろしき死を愛してこの世去る時
戀人かき抱くが如く死をかき抱かざるべからず。
かくて我雄叫びし
かくて我勝てる瞬間凱歌を上げる、
思ふ。我が生は死の恐怖に對する戰なり」

これは幾分の誇張と、簡單な處はあるが、彼は常に死を思つてゐることは事實で、それにうちかつ爲に戰つてゐることも事實だ。しかし彼はそれにうち克てることはまれである。彼が社會主義者でおさまらないのも、自分の一生でこの

問題をもつと根本的に解決したいと思つてゐるのも一つだ。彼は社會問題よりも、人生問題の方に自分の心を奪はれる。その方が彼にはなほ直接である。彼が神の國を求めるのも、すべての個人が死に勝てる道を歩むことの出來る國をつくりたいからである。

彼のかくものはよく死とすれ〲な氣持をもつてゐる。彼は死に安價に勝ちたくは思はない。だが死を忘れ切ることは出來ない。

彼はその秋、「ある家庭」と云ふ三幕ものをかいた。それは、彼の脚本の處女作とも云ふべきものである。其處では主人公次郎が自分の戀人なる女を、その女と相愛の間にある兄と結婚出來るやうに骨折り、自分が失戀する淋しさをかいた。父はかう云つた。

「次郎！お前は死にはすまいな」

「大丈夫です、私には仕事があります」

彼は失戀しても、死の恐怖を感じてもたゞ一つ彼に背かないものがある。それは仕事であつた。しかもその仕事が時々彼には不可能に見へた。その時、彼は何處へ逃げこむか。

彼は云つた。

「あきらめの隠れ家用意しつゝ
我は圖々しくこの世に生く、
恰かも龜の如し」

そのあきらめは何處にあるか。それは淋しさの内、涙の内にある。

彼は當時かうかいた。

『自分は生きてゐる甲斐のない淋しい生涯を送るのだ。

自分は又他人と話をするのがいやになつた。無意味に口を動かし、心に響かぬ言葉を聞くのはいやだから。

自分は孤獨になりたい。しかし時々彼女の姿が見たい。自分は淋しい涙の谷をさまよひたい。
涙の谷のみ自分には故郷の氣がする。
彼女のことを思ふと淋しくなる。
しかし彼女に逢ふことを恐れてゐる。
逢つたところがそれによつて二人の運命はどうもならない。
もしも彼女を淋しくしたら。どうせ駄目なものなら彼女を淋しくしたくない。
今の自分に男らしい所は少しもない。
今の自分は彼女に接吻したくもない、話したくもない。しかし姿は見たい。どうしてゐるかゞ知りたいのだ。見交して感じる淋しさがなつかしいのだ。
元氣もない、活氣もない。
さうしてあの世に行つたら、お貞さんや、まさや、彼女に僕は淋しい生涯を送つて來ました。これが貴女達の下さつた最大の贈物ですと云ひたい。
いやみではない。淋しい内に何かある、淋しい處に故郷がある、自分は淋しい心に馴れてゐる。
自分は淋しい人間だ、淋しいことの好きな人間だ。淋しい色を帶びてゐないものは何でも自分には賤しいもの、つまらぬものゝやうに思へる。
華やかな内に淋しさを求めて、そこに故郷を見出す自分は人間だ。
自分は今までそれに氣がつかなかつた。
氣がつかない方が淋しいだらう。
しかし氣がついた方が淋しいかも知れない。
愛するものには愛されず。何事もせずに生きられる爲に、自分は淋しいことの好きなことを感謝する。』

どつちにころんでも彼は損しない男だから彼は意久地なしのくせに圖太いのだ。よはるくせによはらないのだ。

彼は希望を生みだすことの天才、ヒドラの足よりもなほ彼は希望を生みだすことの天才だ。其處で彼は樂天家になる。

彼はある家庭をかく前に樂天家と云ふ三百枚ばかりの感想や詩や日記や小說やをあつめた小說をかいた。そして友達全部からあまりにまとまりがわるく未成品の故に非難された。彼はその時不服だつたがあとで自分の方がわるかつたことに氣がついた。そしてそれから全體のまとまりと云ふことをより注意するやうになつた。

二三

別に變つたこともなく秋になり十一月になつた。志賀ももう大學をやめた。正親はその前にやめた。そして雜誌の方の計畫をたてた。しかし別に變つた考もなかつた。

彼は一番自然主義に反感をもつてゐた。しかし自然主義に反對しやうとは思はなかつた。たゞ自分のかきたいことを書いてゆかうと思つた。彼は夏目さんに一番感心してゐた。そして夏目さんの惡口を云ふ人がふへて來たのに時々腹を立てた。そして白鳥のものがほめられるのが彼には不思議だつた。彼は一度志賀にすゝめられて微光（？）をよんだ。彼にはどうでもいゝときりかいてない　に思へた。さう云ふ人もゐるだらう。其がある人々の生活であらう。彼にはしかし他人の日常生活が何にゝなる、自分で無頓着にかいたもので、讀者の心を動かせると思ふのは蟲がいゝ。彼は其處に四つ角まで來て「貴女は右へゆきますか、僕は左にゆきますさよなら。」そんな女とのわかれ方が、自分の心にひゞかないのは當然だと思つた。彼は死とつくんでゐる。それに何の力も與へてくれない作品は尊敬出來なかつた。しかし自分一人が尊敬しないやうに思へた。何か自分には足りない處があるので、感心出來ないのかと思つた。しかしトルストイや、イブセンや、マーテルリンクなどにはすなほに感心出來る。感心出來ないのは自分の罪許りではないと思つた。その他、當時評判なものをよんで彼は感心出來ないのが多かつた。藤村のものも花袋のものも彼は途中でいやになつたり、手がつかなかつたりした。夏目さんのものだけは精神を生々させてよめた。しかし「坑夫」は途中でいやになつてやめた。「それから」には感心した。彼は小さき樫お大きな樫の生長してゐるのを見て感心してゐる小品をかいたの

は「それから」を見た感じだつた。

夏目さんを風上におけない人間だと誰かゞ書いた時彼等は本氣になつて怒つた。

又その時分から、彼等はロダンを尊敬しだした。有島生馬から、武郎さんにクラデルのロダンを送つて來た。それを彼等は里見の家で見ておどろいた。其處には生々した人間が赤裸々に、本當の裸體の女よりも、もつと裸體の女としてかゝれてゐるデッサンがいくつか入つてゐた。彼はおどろいた。

ある時。彼は矢張り丸善に行かうとして出かけた。そして途中でロダンの接吻がくることを想像した、そしたらへんに興奮して來た。そして一つのシーンが浮んで來た。それで彼は丸善にゆくことをやめて家に歸つて一氣にかき上げた。

そして翌年ロダンの七十才のお祝ひのあることを知つた彼等は、白樺でそのお祝ひにロダン號を出すことをきめた。

彼はその時分、西洋の畫の雜誌をとつて居た、それにゴオホのことが時々出てゐて、獨逸の畫家に多くの感化を與へてゐることを知つたがどんな畫をかく人か知らなかつた。そして知りたく思つた。

彼の當時好きた畫家はドイツの理想派、ロダン、ミレー、シャバンヌ、英國のラファエル前派なぞであつた。

文學者ではユーゴー、エマーソン、ホイットマン、トルストイ、ドストエフスキー、メーテルリンク、イブセン、ニイチエなぞであつた。

白樺は矢張り本屋にたのむ方がいゝと云ふことになつて、高島さんの處で洛陽堂の主人の河本龜之助氏にあつて、若菜を洛陽堂發行にすることをたのんだ。彼はその時、金がなくなると休刊にして、又金が出來たら出すことにするつもりだと云つた時。それでは本屋の信用にかゝはるから休まないやうにしてほしいと云はれたので、なるべく休まないやうにすると話した。

そして休刊せずに出せるやうに豫算をたてることにした。志賀は二百部賣れることにして豫算をたてた時、正親や彼は反對した。そんな蟲のいゝ豫算をたてたら駄目だと云つた。

洛陽堂が萬朝の記者に語つたので、貴族の坊ちやん達が文學雜誌を出すと云ふ記事が萬朝に出た。いゝ樂みのやうにかいてあつたので皆不服だつた。見てゐるがいゝと思つた。



隱れ家

廣津和郎

月の半ば頃になると、私はいつでも隱れ家に逃げて行くことにしてゐた。我々のやうな仕事を持つてゐるものは、誰でもさうであらうが、毎月、月の半ばと云ふ奴が、一番息苦しくて、やり切れない。それは雜誌の締切間際だからだ。電話、電報、速達、そんなものが頻々として襲來する。それがためにいらいらして、おちつけなくて、迚も自宅にぢつとしてはゐられない。そんな時のために、私は誰にも知らさない一つの隱れ家を、逃げ込む隱れ家を、東京市内の或處に用意してゐた。單に逃げ込むためではない。あの人をいらいらさせる電話、電報、速達の襲撃から脫れてそこでおちつきを恢復して、そして原稿を書くためである。

隱れ家と云ふと、少々大袈裟に聞えるが、それは山の手、と云つても、もう半分下町に屬してゐると云つた方がほんたうのやうな地位にある、或下宿の一室なのだ。そこは五十計りの父親と、十七八の娘とのたつた二人の親子してやつてゐる下宿で、室數も十一二しかない。二階の五間か六間かの部屋には賄付の客を入れ、階下の五間の中、二間には家人が住み、殘りの三間には、賄なしの、部屋だけ借りる人を入れてゐる。割合に生活に困つてゐないらしい主は、賄附の手のかかる客よりは、手のかからない、部屋だけ借りる客の方を寧ろ望んでゐるらしいのである。食

事を外に取りに行く事にしてゐる私のやうな人間には、部屋だけ貸して呉れると云ふ事が、何より好都合だつた。狹い四疊半の、何の裝飾もない部屋、一脚の机の外に何もない部屋、それがへんに私の氣に入つてしまつた。北の窓からしか光線が入らないので、一日ぢゆう明るさが割合に變化しないと云ふことが、何よりも私には好い。——おまけに、玄關を上つて、とつつきの廊下を左に曲ると、直ぐ自分の部屋に行けると云ふ位置が、私には持つて來いだ。止宿人の大部分と顏を合はせないで濟む。ほんたうに、そつと隱れてゐられるやうな氣がする。

その日、私はその北光線の小さな部屋で、朝から机に向つてゐた。自宅の方には乾度電話、電報、速達が、盛んに舞ひ込んでゐるだらうと思ふ。それを思ふと、此處に逃げ込んでゐても、やつぱり安閑としてはゐられない。もう實際、月の半ばも過ぎてしまつたのだ。締切を延ばしてゐる雜誌社でも氣が氣ではあるまい。——それでどうかして短い小品でも書かうと思つて、さうして机に向つてゐるのだが、併し考が少しも纏まつて來なかつた。頭の中にはいろいろな材料が、ばらばらに雜然と浮んで來る。が、それが少しも纏まつて來ない。私はペンを投げ出したり、煙草を喫んだり、小さな部屋の中を、檻の中の獸のやうに歩きまはつたりしてゐた。そしてそんなことを何度も繰返した末、やつぱり材料が纏まらないので、仰向けに轉がつてしまつた。いつもの事ながら、こんな時には實際堪らなく情ない氣がして來る。今更雜誌社に斷りも云へない。と云つて、一日延ばして貰へば、それだけ雜誌の發行日が遲れると云ふことが解つてゐる。今のやうに雜誌の競爭の烈しい時には、發行日の遲れると云ふことが、雜誌に取つてどんなに傷手であるかと云ふことも解つてゐる……

私は眼をつむつて、仰向けになつたまま、後腦に兩手をかつて、ぼんやりそんな事を考へてゐた。起上つて、今一息奮發して見ようにも、もう頭が十分に疲れ切つてゐた。——何だか氣力がすつかり失くなつてしまつたやうな氣がしてゐた。いつか私はついうとうとと微睡んでゐたものと見える。——突然、前の部屋の話聲に眼が覺めた。もういつか夕方で、北窓の部屋の中は、殊に薄暗くなつてゐた。電燈が來てゐるなとは思ひながらも、起上つてスヰツチを捻るだけの事が憫かつた。

それでやつぱり仰向けに寝ころんだまま、ぼんやり天井を見つめながら、前の部屋で數人の男の聲が、何かの問題で、烈しい程ではないが、かなりの強い調子で、論じ合つてゐるのを聞いてゐた。

『それは瓦さん、お前さんがいけねえや。そんな不人情な事つてあるもんぢやねえや。女房は女房、情婦は情婦として置くのが、お前、男の働きぢやねえか。……お前さんがどうしてもおゆきと一緒になつて、女房子供を捨てるつて云ふなら、俺はもう友達になつてることは御免だ。ねえ、俺ばかりぢやない、此處にゐる高田さんだつて、乾度俺に贊成に極つてゐるぜ』と一人の男がかなり高い聲でさう云つてゐた。

『これや、さうだとも。──女房子供が後で路頭に迷ふやうな事があつた日には、おゆきさんだつて、餘り好い氣持はしなからうぜ……』と「高田さん」と呼ばれた男──それは私と向ひ合つた部屋の持主であるが──が、それに應じて、持前の濁聲で云つた。

そこまで聞くと、その話の内容が、私にも朧ろげながら、解りかけて來た。

けれども、その話の事について此處に說明する前に、私と向ひ合つてゐるその部屋に集まる人々について、少し語つて置くのが、順序であらうと思ふ。

その部屋は三疊の小さな部屋で、一ケ月ほど前までは、物置として使はれてゐたのであるが、それを「高田さん」が無理に借り受けたのである。私は始終此處に來てゐるわけではないから、いつ彼がそこに移轉して來たか、精確には知らないが、何でも十日程私が此處を留守にして來て見ると、その障子に室内の電燈が明るく映つて、人聲がしてゐたのである。

メリヤス業と云ふ名義で泊り込んだのであるが、間もなくその「高田さん」がばくちうちの親分であると云ふ事が、宿の親父から私の耳に傳はつた。人の好い宿の親父は、「高田さん」の職業が明瞭になつた後でも、追ひ立てるやうな事はしなかつた。それにばくちうちの親分と云つたら、誰でも胸に毛の生えた、熊のやうな物恐しい男を想像するだらうが、「高田さん」は決してそんな物恐しい樣子をした男ではなかつた。いかにも商人らしい腰の低さで廊下などで私などと

擦れ違つても、腰を屈めて道を譲つて呉れた。角帯をキチンと締めて、無地の羽織を著てゐる恰好は、どう見ても堅気らしかつた。――これも宿の親父の話であるが、「高田さん」はもともとからの遊び人ではなく、立派な呉服屋の主人だつたのが、つい人に誘はれてばくちを押つたのが初まりで、身代を擦つてしまひ、その後又料理屋を出したが、それもやはりばくちのために、潰してしまつたので、だんだん今のやうな境涯に落ち込んで來たのださうである。

それからと云ふものは、その三疊の部屋には、毎日六七人の男が、何處からともなく集まつて來た。朝から晩まで、花札を切る音が、それもかすかに聞えてゐた。――實際かうした專門家達になると、花札の扱ひ方が微妙だと見えて、その札の音が、直ぐ廊下一つ隔てた私の部屋にさへも、ほんの微かにしか聞えない。私は彼等が集まつて、彼等獨特のインチキの方法などを研究してゐるのを、そつと聞いてゐると、まるで手品のやうに巧みなものであるらしい。その中で無論「高田さん」が親分なので、彼があつまつてゐる者たちに、いろいろの事を教へてゐた。――みずをして大場を撒く法から、ツカミを撒く法、掌に札を隱す法、そんな事を障子越しに聞いてゐると、實際うかうかと化も引けないと思ふ。

或晩こんな事があつた。もう十二時近くなつて、「高田さん」のところに、何處からか電話がかかつて來た。『うん、一人……よし、待つてゐる』と「高田さん」の濁聲が、寢しづまつた下宿の中に響き渡つた。それを聞くと、私の頭にも、直覺的に、「高田さん」の子分の誰かが、何處かで好いカモを一人見つけたから、これからそれを誘つて、此處へ來ると云ふ意味の電話をかけたのだと云ふ事が、解つて來た。

私はその時は未だ起きてゐて、机に向つて雜誌を讀んでゐた。が、「高田さん」が急にそれまで寢てゐたらしい夜具などを片付けてゐる音を聞いた。

間もなく、玄關が開いて、三四人の男の足音が廊下に聞えて、どやどやと「高田さん」の部屋に這入つて行く音が聞えた。

『これは私の知合で』こんな事を云つてゐる男の聲が聞えた。

『職人でございます、どうぞ宜しく』と紹介された男は、甲の高い、優しい聲でさう云つた。顔は解らないが、その聲で聞くと、二十五六の小柄な男らしかつた。

それから聲がひそひそとして、札を切る音がかすかに聞えて、直ぐに「仕事」が始まつたらしい。それは八八ではなく、カブだと云ふ事が、直ぐ私にも解つた。

『どうもいけねえ』他の者がひそひそした聲で喋つてゐる間に、その職人の聲が時々、高く聞えた。『おや、又駄目だツ』

札の音が又かすかにぱちぱちと聞える。

『六圓、今度は六圓!!』と職人が叫んだ。

そして間もなく、

『又いけねえ。どうしたんだらうな、今夜は。……私や他では滅多に負けた事がないんですがね』

『どうも、運がないやうだね』誰やらが慰めを云つた。

『ええ、親父が金時計を持つてます。そいつを入れりやあ、二十兩やそこいらにやなりますから、一寸今のは借りにしといてお呉んなさい。……ええ、後で何方か一緒に來て下さりや、渡しますから』と職人の聲が又聞えた。『それぢやあ、今度は廿二圓、十二圓……』

札を一枚づつ開ける音が、かすかに聞える。……

『いけねえ、又いけねえ……』と職人の甲高い聲が、再び叫んだ。他の者たちは默々としてゐる。

『それぢや、今のも序でに借りにしといてお呉んなさい。金時計で足りなけれや、私の着物もあります。ええ、五十兩や六十兩の金はどうでもなりますさあ』と彼は云つた。『それぢや、今度は二十四兩、二十四兩!!』

その聲の調子には、泣き出しさうな、悲しい響を含んでゐた。――私はいかさま師にかかつた多くの人間の話をよく聞いてゐた。けれども、眼のあたり、廊下一つの彼方で、それが實際に行はれてゐるのを聞いたのは、これが初めてであつた。日頃の彼等のインチキの研究の仕方と云ひ、それについての彼等の術語を聞いてゐる私には、その職人がど

んなにあせつたところで、到底彼等に勝てる見込のない事がよく解つてゐた。私はだんだん憂鬱になつて來て、一刻も早くその職人が彼等の手から逃れる事を望んでゐた。

　すると「高田さん」がかう云つた。

『お前さん、もういい加減にしなさつたらどうだね。どうしたつて駄目ですよ。そんな風に負けて行つたら、今にどうとも仕方がなくなつてしまひますぜ』

『ええ、でも……この一度だけ』

『惡い事は云はねえから、好い加減に切り上げなすつた方が、お前さんのためですぜ』

『ええ……では、これ一度だけ、これ一度だけやらして下さい。……今夜はどうしたつて云ふんだらう。私や、他ぢや負けた事がねえんですよ、全く』

　そこで、再びばちばちと微かに札を切る音が聞えた。職人は屹度片唾を飲んでゐるに違ひない。私も何だか肩がこはばるやうな氣がした。何かの運がその職人について吳れたらと、そんな風に希望しながら、待つてゐた。が、その最後の企てもやつぱり駄目だつた。

『ちえツ、駄目だ！』と叫んだ職人の聲が、私の心には痛いやうに響いた。何も彼も投げ出したやうな絕望的なその叫びの中には、未だ未練らしい響が殘つてゐた。

『これで五十兩だ』と「高田さん」ではない、誰か子分の聲が、何の慈悲もない調子で云つた。

『ええ、家は直ぐそこですから、何方かひとり一緒に來て下さりやあ……』そんな事を云ひながら、職人はもじもじしてゐるらしかつたが、やがて立上つた。

　こそこそと廊下を辿つて行く彼の後から、子分の一人がついて行つたらしかつた。

『ちえツ、莫迦にしてやがらあ。たつた十兩ばかり持つて來やがつて……』と殘つた子分の一人が云つた。

『だが、あんなのは可哀さうだからな……』「高田さん」が低い聲でそんな事を云つてゐるのが聞えた。

私はほつと一息ついた。兎に角、一段落ついたと思つたからだ。そこで、もうその時は午前一時半頃だつたらう、夜具を引きずり出して、その中に潜り込んだが、一寸昂奮してゐて寢つかれなかつた。僅一時間ばかりの間に、現金十圓の上五十圓の借りをこしらへて歸つて行つた職人の心持が、同情されてならなかつた。取り返さう取り返さうとあせつて、金額を上げて行つた氣持もよく解るし、それが總て駄目になつて行く情なさもよく解る。――何かの事で、あんな風な破目に誘ひ込まれ兼ねない氣持は、私自身にだつて、ない事はないと云ふ氣がする。……それにしても、何の職人かは知らないが、五十圓と云ふ金は、隨分その職人に取つては傷手に違ひない……

間もなく玄關ががらがらと荒々しく開いて、職人について行つた子分が、歸つて來た。

『莫迦にしてゐやがらあ』と彼は高田の部屋に這入るなり、怒氣を含んだ聲で云つた。『喧嘩にもなりやしねえや。兩手を合はして拜みやがるんだ。……親父の金時計なんて、ありやしねえんだとよう！』

『それぢや呉れねえのか？』

『明日の朝まで待つて呉れろつて云ふんだ。さうしたら、紫檀のちやぶ臺を質に入れて、金をこしらへて來るつて云ふんだ。あれはちやぶ臺の職人なんだよ。……大きいのが一つと小さいのが一つとあるつて云ふんだが、大きいのが八十兩で、小さいのが四十八兩するんだとよ。紫檀のちやぶ臺なんて、そんなに取るもんかね？』

『うん、それや安かあねえだらうよ』

それから未だそんな話がいくらか續いた。その中に、聲を低めて、ひそひそとなつて、又翌日の彼等の『仕事』の手筈について相談し始めたらしかつた。間もなく私は眠つてしまつた。――そしてその翌日、私は寢坊した。八時までに、昨夜の職人が果して金を持つて來たかどうか、それはたうとう知らずにしまつた。

私はその時から、私の部屋の向ひの部屋に集まるそれ等の博徒たちに、かなりの反感を持つやうになつた。けれども、始終こつちの部屋から觀察してゐると、彼等のさうしたむごたらしい一面の他の一面には、案外正直な、いはゆる竹を割つたやうな素直なところのある事を、次第に感じて來た。退屈な時には、彼等の話を障子越しに聞いてゐると、

隨分慰めになる事もない事はなかつた。彼等は時々、伊豆まはりとか、東海道下りとかをやるらしい。徳川時分の俠客傳にあるやうな一面を彼等は、未だに保存してゐる。知らぬ土地で、地方々々の博徒同志が集まつた時には、互に相手のインチキを見抜かうして、疊の上に短刀を突きさしながら、虛勢を張り合つてゐる形、意地と名譽のためには、命までも捨て兼ねない意氣込……無論さう云つたをとこ氣は無智と單純とから出た、時代錯誤の不徹底な、をかしみの加はつたものであると云ふ誹は免れないけれども、併しそれを信條としてやつてゐる彼等の生活には、何かはつきりした、快いと云つても好いやうな明るさがない事はない。

殊に、彼等が彼等の仲間の間にこそ、短刀、ピストル、その他あらゆる亂暴と殺伐との氣分を漂してゐるが、仲間以外の人に對して、不思議に禮儀正しい事は、或好感を彼等に感じさせないでは置かなかつた。朝洗面場などで顏を合はせると、彼等はお天氣の挨拶などを、莫迦丁寧な調子で、我々にした。

私の向ひの部屋に集まる人々と云ふのは、さう云つたやうな人達であつた。

×

×

ところが、つい三日程前から、その三疊の小さな高田部屋に、一つの小さな出來事が持上つてゐたのだ。と云ふのは「高田さん」の子分の一人が、何處からか女を一人引つぱつて來た事である。

來たやつと十九か二十、せいぜい二十一ぐらゐであらう。一見して田舍のだるま茶屋か何かの女を思はせる、品のない、黑襟をかけた、身長(せい)の低い丸まつちい女であつたが、それがそれ等の荒くれ男たちの間に混つて、その三疊の部屋に座つてゐた。——最初私は高田が何處からか引つぱつて來たのかと思つてゐた。が、一體この高田と云ふ男は、割合に酒は飲まないらしいし、又女にもあつさりしてゐるらしい。どんなに遲くなつても、めつたに外泊はしないらしい。唯いはゆる「博(ぶ)つ」専門の方で、「飲む」と「買ふ」とは、そんなにやらないらしい。それに何しろ一方に親分として立てられてゐる男だから、彼が引つぱつて來るにしては、少々女が粗末過ぎると云ふ感じがあつた。

その想像通りに、それがをんなではなく、彼の子分の一人のをんなだと云ふ事がその晩解つた。

『俺は今夜は歸つて來ないから、辰さん、お前はおゆきさんと此處に泊るがいいや』そんな事を云ひながら、高田は夜になつてから何處かへ出て行つた。

その時から、辰さんとおゆきさんは、その三疊の部屋から離れなかつた。――私は障子一つを隔てた彼等のささやきに、それからは朝、晝、晩と、ひつきりなしにかなり惱まされる事になつた。二人のひそひそ話では、はつきりした事は解らないが、やはり何處か東京の附近のお茶屋あたりから引つぱつて來たらしかつた。

辰さんと云ふ男の顏は、前からよく高田の部屋に見かけた顏だつたが、その時から、私は彼の顏をよく記憶するやうになつた。額の狹い、一寸のつぺりしたところはあるが、見るから無智そのもののやうに、冴えたところの少しもないぼんやりした男だつた。そしてそれがその丸まつちい女と、互に『命までも』と云つたやうな睦言を囁き合つてゐる光景は、私に苦笑を覺えさせずに置かなかつた。――やつぱり同じ種屬は同じ種屬を求める、さう云つたやうな氣がした。

その日――私が原稿を書かうといらいらしながら、朝から机に向つてゐて、たうとう一枚も書けずに、夕方疲れ切つてしまつて、仰向けに轉がつてゐたその時に、急に耳に聞え始めた前の部屋の男達の話題と云ふのは、つまり此辰さんとおゆきさんとの問題だつたのである。

無論私はこの二人の情事に、特別な興味は持つてゐなかつた。けれども、今、親分の高田を初め、朋輩達が集まつてその事について辰さんに意見を始めたのだと思ふと、彼等の生活とか、女に對する解釋とか、さういふものがどんなものであるかと云ふ一種の好奇心が湧かないではゐなかつた。――私は默つて耳を傾け始めた。

その時は、何かの使にでもやられたと見えて、おゆきはそこにはゐないらしかつた。

『それに君、君がそんなに云ふ程の女ぢやないと、僕などは思ふね、失禮だけれど……』と高田の濁聲が、相手を抑へつけるやうな調子で聞えて來た。『一寸遊ぶには好いさ、それは男だから差支へないさ。……だけれど、女房子供を捨ててかかるつてねえな、あんな女ぢやないね。おゆきさんだつて、そりや君にぞつ魂惚れてはゐるだらうさ、だが、未だ

よく氣心も知れやしないぢやないか』

『……』辰さんが何かそれに對して抗辯しかけたらしかつたが、はつきりは聞えなかつた。

『一時の迷ひだよ。……一時の迷ひだよとも』とそれをおつかぶせるやうにして高田が云つた。

『ほんとうだよ、一時の迷ひだよ、今高田さんの云つた通りだよ』と子分の一人がそれを引取つた。『何しろ、何だぜ、辰さんが若しあんな女と一緒になつて、女房子供を捨てるやうな事があつたら、もう友達になつてるのは、私や御免だね。……これだけは、私やきつぱり云つとくよ。』

『……』

一寸の間みんなが默つた。暫くして、辰さんが何か云ひ始めたが、すつかり悄氣切つてゐると見えて、低い聲で、私のところまでは聞えて來なかつた。

『えツ、なに、女房にするつて約束したんだつて？』と今の子分の聲が、辰さんが云つたらしい言葉を、大きな聲で繰返して云つた。『そんな事は構ふもんかね。もし辰さんさへしつかりしてゐりやあ、その事は私達からおゆきさんに云つて上げるよ。……女房にする、そんな事あ、誰だつて女をこしらへる時にや云ふ言葉さね。今時の女はそんな事を一々ほんとゝ思つてゐるもんかね』

『……』

そして又暫く沈默がつゞいた。

『あゝ、私やよく解つたよ。よく解つたよ』と今度ははつきりした調子で辰さんが云つた。『俺あ女房にはしやしねえよ。……それぢやね、何處かに賣つちまはうか？』

私は吃驚してしまつた。何か聞き違へたのかとその時は一寸思つた程だつた。――今まで女房子供を捨てゝ、一緒になると云つてゐた女、その女と一緒になれなければ、今度は賣つてしまはうか――辰さんの言葉は餘りに唐突で、餘りに私達には解らない心持だつた。

私はその言葉を聞くと一緒に起き上つて坐り直した。そして今までぼんやり耳を傾けてゐたのを、今度はぢつと聞く氣になつた。

『近頃ぢや、銘酒屋ぢやどの位貸すもんかね？』

『さあ、三四百圓ところかなあ』と例の子分の聲が直ぐにそれに答へた。その聲には、今の辰さんの云つた事を不審に思つてゐるらしいところなどは少しもなかつた。『だけれど、銘酒屋ぢや身體が骨で、なかなか大變だぜ』

『三四百圓貸して呉れると、一寸好いなあ。……俺あ今金が入用で弱つてるところだからね』

『それやお前さんから、云ひ含めりやあ、譯はねえやね。……辰さんのために命までもと思ひ込んでゐる女だもの、お前さんがさう云や、喜んで承知するあね』

さう云つて、その子分はひひひと笑つた。

『高田さんは、龍ケ崎の△△屋の親方を知つてなすつたな？』と辰さんが云つた。

『知つてるよ』とその事について今まで默つてゐた高田が答へた。

『あの親方に賴んで貰ふわけには行かねえかね？』

『それや、話に依つちや、賴んでもいゝさ。――だけれど、あの邊ぢや、お金にしようつてえんぢや、大した事はないぜ』

『さうかな……』

それから、そこに集まつてゐる者達の誰も彼もが、東京近在のだるま茶屋の話をし出した。千葉縣、埼玉縣、群馬縣……それは私の耳にはみんな珍らしい事ばかりだつた。その土地々々の親分の名だの、酌婦が逃げるのに、警察がお茶屋のためにどんなに見張つてゐるかと云ふ事だの……

そして辰さんが急に、女を賣ると云ひ出した事を、誰も止めようとする者はなかつたところか、怪む者もないらしかつた。みんなはさういふ方面についての知識を、さも自慢さうに、知つてゐるだけ並べ合ひ始めた。何處々々では二百

圓貸すとか、何處々々では百五十圓だが、そこは身體が樂だとか、何處々々は六百圓だが、そこは年期が長くて、可哀さうだとか、そんな事が次々に並べられた。併しそんな事を聞いてゐる中には、初め辰さんの言葉を聞いて、ひやつとした變な戰慄は、だんだん私の胸の中で靜まつて行つた。二三日前から、直ぐ私の前の部屋に來てゐるあの女、あれが賣られて行くかと思ふと、無論へんに憂欝な感じと、その男達の亂暴な心持に對する憤慨とを、感じないではゐられなかつたが、それと同時に、或かすかな興味も私の胸に湧いて來た事を否定出來なかつた。正直に云ふと、私は『これは書けるな』とそんな事を思ひ始めたのだ。――女房子供を捨てゝまでも一緒にならうと云つてゐた女、それ程愛著を持つてゐた女、それを、一緒にならないとなると、今度は賣つてしまはうと思ふ心持……私は遠い遠い野蠻時代の、女が全然の物質扱ひをされてゐた時代の事を思ひ出した。その思想が、そつくりそのまゝ現代に通用してゐるのだ。何の疑ひもなく、當然の事でゞもあるやうに。

それから、それはつい最近の新聞で讀んだ話であるが、台灣の生蕃が、愛著を感じると、その愛著を感じたものゝ首を切つてしまふと云ふ話をも思ひ出した。それは何でも十五年間も生蕃地に行つて、そこで土人達と馴染んでゐた內地人が、久しぶりで內地の方に歸つて來る事になつて、その事を云ふと、馴染んだ生蕃達は非常に別れを惜しんで涙を流した。そしてさんざん歎いた揚句、その內地人がいよいよ別れを告げて、向う向きに歩き出すと、いきなり後から行つて、首を切つてしまつたと云ふのだ。――つまり可愛さが餘つて、首を切つてしまつたと云ふのだ。

それとこれとでは、少し話が違ふ。――けれども、何處かに、現代の我々の思想から見ると、その二つの中に共通した匂ひが感ぜられる。一緒になれなければ賣つてしまふ。――我々に取つては、餘りに思ひがけない、餘り吃驚させられる思想だ。そしてさう思ふところに、或興味が湧かないではゐない。

『これは書ける』と私は再び心に繰返した。丁度、その日は朝からかゝつて、たうとう考が纏まらずに、未だ一枚も書けないところだ。今更雜誌の締切を待つて貰つてゐる以上、投げ出すわけには行かない。私は今まで書かうとしてゐた材料を後まはしにして、これを書いて見ようと云ふ氣になつて來た。私は心がだんだん昂奮して來るのを覺えた。

おゆきが使から歸つて來たのは、それから間もなくだつた。

『何處まで行つてもないのよ。それでたうとう須田町まで行つちやつたの。すつかり迷ひ子になつちまつてよ』そんな事を開けつぴろげたやうな、蓮葉な調子で廊下から云ひながら、彼女は高田の部屋に這入つて行つた。

『あゝ、御苦勞、なけれやいゝよ。――大變だつたね』と高田が優しい調子で云つた。『時にね、おゆきさん、まあ、此處にお坐り。此處にお坐り。……お前さんは此高田の云ふ事を聞いて呉れるかい？』

私はいよいよ始まつたと思つた。おゆきの留守の間に男たちの間に交はされたあの話が、いよいよ親分である高田の口から切り出されるのだと思つた。

『なあに…』とおゆきは、改まつた高田の樣子に薄氣味惡くなつたとでも云つたやうに、妙に尻上りになつた不安さうな言葉で云つた。

『ね、お前さんは、辰さんと一緒になるつもりでおいでかも解らないけれども、辰さんには女房も子供もあるんだよ。まあ、お聞き。それでお前さんが、どうしても辰さんと一緒になるつもりだと、辰さんの女房や子供の事を考へて見なければならないよ。いいかい、ね、辰さんに捨てられた女房子供が路頭に迷ふやうな事があると、それは辰さんの男としての面目が立たない。それにお前さんだつて、連れ添ふ男の前の女房や子供が乞食して歩いたなんて聞いたら、あんまり好い氣持のものでもあるまい？』

『えゝ』

『それでだね、辰さんだつて、お前さんと一緒になるのには、今の女房子供をどうかしてやらなければならない。ちやんとその方の始末をつけてからでなければ、お前さんと一緒にはなれない。それには何より稼がなければいけない。一生懸命に稼がなけれいけない。……それについてだね、私はお前さんに相談があるのだよ』

『ええ』

『辰さんが稼ぐ一方、お前さんが安閑として遊んでゐては、とても辰さんがやり切れるものぢやないし、いつまで立つ

ても、うまく始末のつくものぢやない。——そこで此高田が、昨日からいろいろ考へてゐる事があるんだよ。お前さん私の云ふ事を聞いて呉れるね？』

『ええ』

高田は一寸言葉を切つた。たうとう最後の言葉が高田の口から洩れる時が來たと私は思つた。何處かに賣られると云ふ事を知つた時、この無智な女がどんなに憤るだらう。どんなに悲しむだらう。——添ひ遂げようと思つてゐたところに、それが出來ないどころか、いきなり何處かに賣られると云ふ。——どうせ最初どこかの田舍のだるま茶屋からつれて來られたにしても、そんなところに、二度と逆戻りする事とは豫期してゐなかつたらう。——私は高田の口からいよいよの言葉が洩れた時の、その場の有様が想像されるやうな氣がした。どんなに心の痛む場が、そこに演じられることだらう。

『お前さん、此家に女中代りに暫く働く氣はないかい？』おちついた調子で、高田はさう云つた。——此思ひ設けない言葉を聞いた時、私はほつと思つた。先刻から、女を賣ると云ふ相談のあつた時、此高田は大部分默つてゐた。して見ると、彼はその間子分たちとは別のことを考へてゐたのだ。——この家に女中代りに、暫くの間働かせる。——これはなるほど、一番好い思ひつきに違ひない。さすがに、親分だけあつて、この男の考は、他の子分たちのとは違つてゐたのだ。『ええ、若しさうして貰へれば、こんなに嬉しい事はありませんけれども……』と女はいかにも嬉しさうに答へた。

『いや、未だ、此家の主人には話しては見ないんだけれどね、私から頼んだら、承知して呉れるだらうと思ふんだ』

さう云つて、高田は立上つて、帳場の方へ出て行つた。——高田が帳場の方へ行つてしまふと、子分たちが急にがやがやと喋り出した。

『それやあ、うめえ考へだ。一番好い考だ。——さうしておゆきさん、お前時を待つ事にしろよ。長え間には、風向きが變つて來らあな』と一人が云つた。

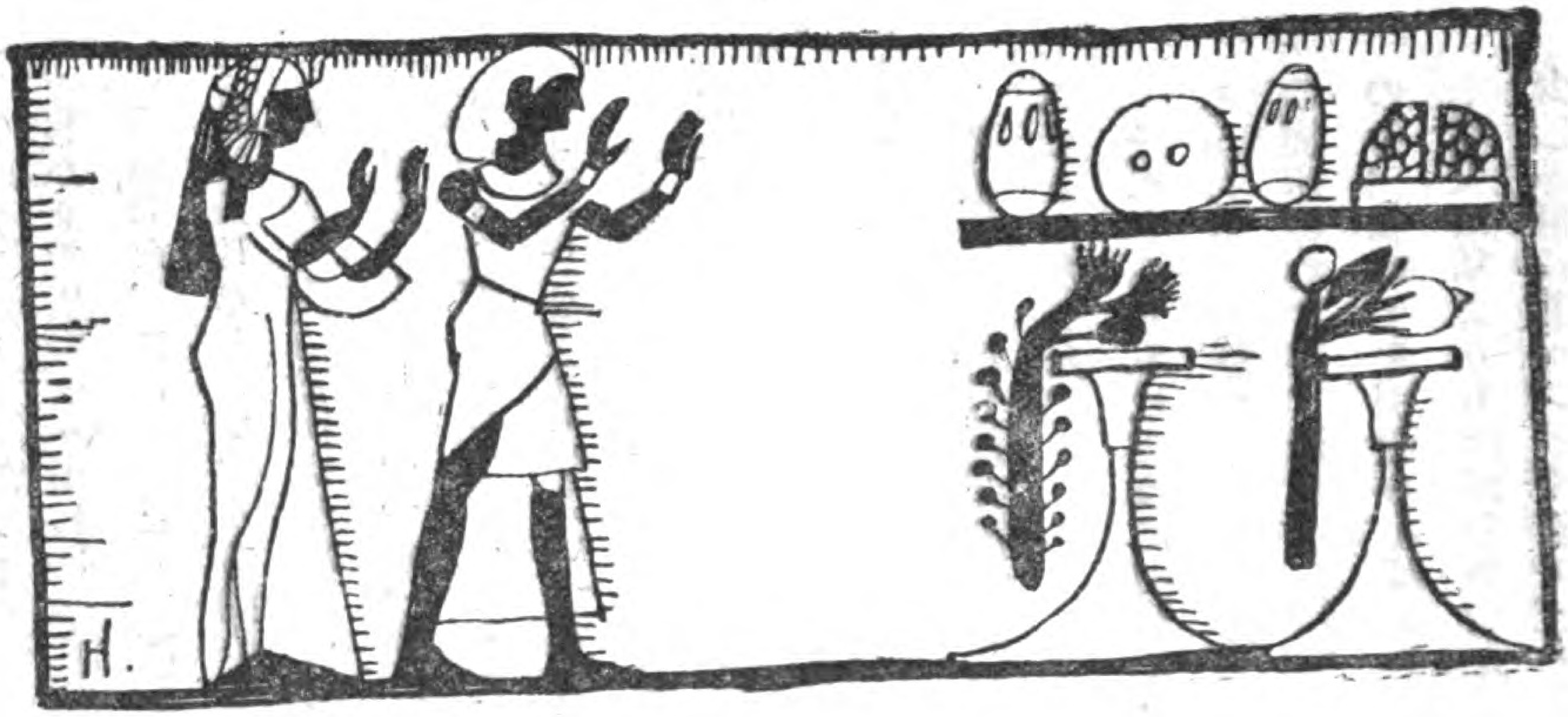
『だがさうなると、お前、ちよつとは遠慮しなけれやいけねえぜ。始終辰さんばかりといちやついて、用事をちつともしねえやうぢや仕方がねえぜ……』

女の探られるやうな笑ひ聲がそれにつゞいた。けれども、辰さんだけは默つてゐると見えて、その聲が聞えなかつた。

何か頬笑みたいやうな氣が、私もして來た。『まあ、よかつた』さう云つて、ほつと大きく息をするやうな氣持だつた。

けれどもそれと同時に、今折角この事件を小說に書かうと思つてゐた私の中の或心は、このあつけない結末に、すつかり失望してゐるのを私は感じた。――私はその自分の心持に氣がつくと、何とも云はれない苦笑が浮んで來るのを禁じ得なかつた。人生に對する私達の仕事の位置……そんなものを、まざまざと眼の前につきつけられるやうな氣がして。

（未定稿）



不良兒

葛西善藏

一月末から一ケ月半ほど、私は東京に出てゐた。こんなことは今度が初めてと云ふわけではないので、私はいつものやうにFは學校へは行つてゐること丶思つてゐた。ところが半月ほど經つて出したお寺からの手紙に、Fは私が出た後全然學校を休んで、いくらすゝめても私が歸るまでは學校へは行かないと云つて丶困るから、「私に早く歸るやうにと云つて來てゐた。またその後だつたが、東京の或る友人から、「君の子供が鎌倉で憂鬱病にかゝつてゐると云ふことだが、君は知つてゐるのか――と、どこからそんな噂さが傳はつたものか、弟のところへ宛てゝ葉書で私に注意して吳れた。

二月十六日に私は東京へ發つて、疲れ切つた暗鬱な氣分をいくらかでも換えたいつもりから、東北地方を汽車で一廻りして來た。鄕里の妻を訪ねて、Fが東京の中學へ入學出來たら郊外へでも世帶を持たうと云ふそんな下相談などして、二十三日に歸つて來て、その手紙や葉書を見たので、二十四日に弟の二階に居る文科受驗生の井出君を鎌倉に使ひにやつた。

『仕樣がない奴だ。兎に角Fをつれて來て下さい。云ふことを聽かなかつたらひつぱたいてもいゝから……』と、私は井出君に云ひつけてやつた。

その晩寺に泊つた井出君は、Fは叱られるからどうしても厭だと云ふのを、淺草の活動寫眞を見せると云ふ約束で、東京まで引つ張り出しさへすればどうにかなるだらうと云ふのでつれ出したのだが、結局活動の見せ損で、Fに新橋から歸られ、井出君ひとりでぼんやり歸つて來た。で私はいよ〳〵腹を立てゝ翌日更に井出君を引返してやつたが、心元なく思はれたので、夕方勤め先きから歸つて來た弟に、『井出君ではやはり駄目らしいから、お前行つてつれて來て呉れないか。剛情で仕様がない奴だ。何もかも分つてゐて、あゝ横着を極め込んでるんだから、癖になるから、……』と、急き立てゝ出してやつた。間もなくやつぱし井出君ひとりで『どうしても厭だと云つて何と云つても聴かないもんですから……』と云つて歸つて來た。それから日が暮れて、Fは食事や一切の世話をして呉れてるS屋の娘――と云つても二十三になるおせいといつしよに、怯けた顔してやつて來た。行違ひになつた弟は遲く終列車で歸つて來た。」

そんな譯で、Fはかなりひどく叱られねばならなかつた。翌日は雪が降つて、私は熱があつて床の中に這入つてゐたが、『貴様のやうな人間は小僧にでもなつちまへ！』と云つて、新聞の廣告を見て、井出君に外へつれ出させようとまで思つたが、弟夫婦や昨年の暮れから出て來てゐる老父に取做されて思ひ止つた。尤も小僧と云ふのは言葉だけの威嚇なんだが。

その日の午後Fは井出君といつしよに寺に歸つた。井出君は晝間は自分の勉強をし、晩はFの遲れた學課を見て呉れることになつた。

それからも私は東京に引かゝつてゐて――金の都合が出來なかつたので――三月十四日に、一ヶ月半ぶりで、弟のところから老父を誘ひ出して二人で寺に歸つて來た。脚の不自由な老父は、玄關わきの二疊で、暮れに産れた弟たちの赤んぼの寢床のわきに、脊を丸くして火鉢に當りながら、終日新聞を讀んだりして所在ない日を送つてゐた。ひどく臆劫がるのを、私は手を引張らんばかしにしてつれ出したのであつた。

老父は私よりも酒が強かつた。閑靜な寺の座敷を悦んで、老父は朝から私相手に飲んで、二晩泊つて十六日の午後、少し時間が遲かつたが醉つた身體を井出君に介抱されながら、初めての江の島に廻つて歸ると云つて、元氣で出て行つ

た。その日は特にFも學校を休ませて送らした。三人は江の島の棧橋の手前の茶店で榮螺の壺燒や丼などたべて、藤澤に出て、Fだけが大船で別れて乘替へて來たのだが、寺へ歸つたのは十時半頃だつたので、少し時間が遲過ぎると思つたが、格別氣にも止めなかつた。十七日はいつもの時間通り、豫習をやつてゐるので七時頃歸つて來た。十八日の晩は二時過ぎまで私は起きて待つたが、たうとうFは歸つて來なかつた。十六日の晩の時間の遲過ぎたなど考へ合はされて、いろ〳〵に氣を廻して見たが、結局私の長い留守の間にFは不良少年に取つかれたのだらうと云ふ疑惑が、私の心を慘めに昏迷さした。小僧と不良少年、——斯うした暗示が最後までFに利用されて、私に祟つた。

前の晩だつたが、Fが次ぎの室の寢床に這入つて間もなく、彼の睡入らないのを知つて故意に彼に聞えるやうに、私は酒を飲みながら、彼の性質の良くないことをおせいに話して、殊にこの前井出君につれられて東京に出て、淺草で活動を見さしたり御馳走させたりした上、井出君に鼻を明かして自分ひとり新橋から歸つて來た——私はそのことを非難した。Fはそのことだけはまだ私に明かされてゐないことゝ思つてゐたらしかつた。彼は寢床の中でそれを聽いてゐた。そして心を傷めた。後になつて考へて見ると、その晩のことが事件の動機を作つたやうなものであつた。後に新聞に——學校退出後活動寫眞に入り歸宅の時間遲れし爲め父に叱られるを氣遣ひ云々——などゝ出たが、それは間違ひだつた。

兎に角Fは私と二人きりになつて、ひどく脅えてゐた處だつた。東京でひどく叱られたと云つても、私と二人きりではなかつた。十六日に老父に歸られ、十七日の晩は——私はいつも面罵一方の方なんだがその晩はどうかしてそんなことだつたし、十八日の朝いつものやうに私の枕元で行つて參りますと挨拶した時、いつものやうに互ひの視線がピツタり感じが合はなかつた。それがFにも感じられた。でその日も彼は時間通りに歸つて來たのだつたが、すぐ這入れずに、雨戸を〆めた濡椽の外に立つて、しばらく中の樣子をうかゞつてゐた。そのうちに時間が經つて、私が雨戸を明けて手洗鉢で手を洗つた時、Fの方では私が彼の立つてる姿に氣がついた筈だと思つたが、私は氣がつかなかつたのでそのまゝ雨戸を〆めたが、それで彼はやはり私が前の晩のことを怒つてゐるものと思ひ込んで、二時間も外に立つた後そつと物置きに忍び込んで、翌朝の五時頃晩飯も朝飯も食はず、そつとまた學校へ出て行つたのだつた。……

　十九日は日曜だつた。が學習生は日曜も休まないことになつてゐるので、若しやと云ふので、お寺の婆さんも心配して下の方丈の電話を借りて學校へかけて呉れたが、受持ちの教師が出て來て、Fはいつもの通り學校で勉强してゐると云ふ返事だつた。で早速おせいに迎ひに行つて貰つた。ゆふべはどこに泊つて、どこで飯を食つて——さう思ふと、私には唯不良少年の場合のみ慘めに聯想された。由比ヶ濱の小學校までは二十町からあつた。私はぢつと部屋の中に座つてゐるに堪えない氣持で、寺の前の高い石段の上を往つたり來たりした。月曜の天氣で、石段の下の通りは、半僧坊詣りの客で賑かだつた。Fを郷里からつれて來て一年半ほどになるが、此頃になつてだん／＼、斯うした父子二人きりの不自然な生活からの神經の傷害——それがお互ひに堪え難いものに思はれて來た。Fは一昨年の春流行感冒から重い肋膜を患つて危い生命を取止め、引續き夏休みにかゝつて、十月に奥州の山の中からつれ出して來て十一月から由比ヶ濱の小學校へ通はせたのだが、さう云ふわけで、學課の方も健康もひどく鈍つてゐた。二冬の海岸の小學校生活——濕氣の强い山の上の寺は、彼には寢るだけの場所だつた——は、彼の身體をかなりしつかりさせた。後れてゐた學課の方もぼつ／＼取返して來たやうに思はれた。が彼の性質はだん／＼陰欝になり神經質になりいろ／＼な點から注意が必要になつて來てゐた。斯うした生活狀態がいけないのに違ひなかつた。私も氣がついて、幾度か郷里の妻の許に歸さうと思つたのだ。最後は、昨年の十一月だつたが、東京から弟を態々呼んで、Fの行李まで擔ぎ出さしたのだが、丁度獨りの老父が郷里の家を疊んで出て來たのとカチ合つた爲め、その時もお流れになつた。そして卒業式も後幾日と云ふところまで來てゐたのであつた。

　私は石段の上で彼等の歸つて來るのを待つてゐた。近所の男の子が石段を驅けあがつて來た。

『小父さん、今ね、せいちやんがね、Fちやんをそこまで伴れて來たんですがね、門の中まで來てFちやんがまた遁げ出したさうですから、せいちやんが小父さんにすぐ來て下さいつて……』

『さうですか。どうも有難う……』と云つたが、私はすぐ驅け出して行く氣になれなかつた。どこまで手古摺らす氣なのだ、剛情り奴！……と云ふ氣がした。

『それではね、おせいちやんにね、いゝから構はないで歸つて吳れつて、さう云つて吳れませんか。ほんとに仕様がない奴だ……』と、私は男の子に云づて、がつかりした氣持になつて家にはいつた。

おせいは息を切つて歸つて來た。

『どうだつた?』

『いえね、やつぱしゆふべはそこの物置きに歸つて來て寢たんですつて。學校の歸りに途中で他所の子と喧嘩して、顔に傷したからお父さんに叱られるから歸らなかつたと云ふてね、さうかと思ふと井出さんと活動を見たことをお父さんが怒つてるから歸らなかつたんだとかね、そんなこと云つてね、途中も歸るのは厭だ〱と云ふのをやう〱そこまで引張るやうにして伴れて來たんでしたが、……』と、おせいは申譯なさうに云つた。

『ご飯はどうしたんだらう?』

『ゆふべも今朝も喰べてないんですつて。お辨當も空でしたわ』

『ぢやあまた日が暮れたら歸つて來るだらう。いゝ氣になつてあゝしてるんだらうから、ほつて置け。仕様がない奴だ。

その晩はそつと寢鳥でも押へる氣持で、時を置いて物置きや軒下や、下の建長寺の山門のまわりなど提灯つけて見廻つたが、夜更けになつても影も見えなかつた。

『それではやつぱし不良少年のところへでも歸つたんだらう。ゆふべ物置きへ寢たと云ふのも嘘かも知れないな』と、私はすつかり暗い氣持になつた。

『さうですかねえ。そんなものに取つかれたんですかねえ。そんなFちやんでもないやうですがねえ……』

『いやさうかも知れないよ。そんなものがあつて學校を休んでゐたのかも知れないし、さうでなかつたら、おやぢを送つて行つた晩は時間が合はないやうだからね、あの晩の歸りにでもどうかしたのかも知れないね。兎に角唯事ではなさゝうだから、弟のところに電話をかけて吳れないか。……Fが見えなくなつたから金を少し仕度して明日早く來て吳れつて』斯う云つて、東京の弟の近所の酒屋から弟を呼出さして、方丈の電話を借りておせいに云はした。

翌朝九時頃やつて來た弟と二人で、兎に角學校へ行つて見ることにした。

『多分この邊の山だらうと思ふが、山のどこか洞穴見たいなところにでも潜んでゐるんだらうと思ふが、何しろ飯を食つてないんだし、夜は冷えますからね、今頃はもうフラフラで動けなくなつてゐるんだと、時が經つては何だから、町を二廻りしたら早速僕は牛僧坊の山からその邊を搜すことにしませう。町の方ではありませんね……』と、弟は步るきながら云つた。

『それとも、昨日は下の方へさがつたさうだからね、お前のところへでも步るいて行くつもりで、横濱への路はこの一月乘合自動車で往復して知つてるからね、東京まで步るくつもりでフラフラ行つたかも知れないね』

『さうでせうか。そんなだと、兎に角山を搜して見て見つからなかつたら、私は東京まで步いてもいゝ、途中行倒れにでもなつてるんだと、警察へでも訊くと大抵わかるでせうから……』と、弟は東京までもひとりで步かうと云ふつもりだつた。

學校で受持の若い先生に會つたが、この頃のFの樣子に別に變つたところも見えないと云ふ話だつた。Fと席を並べてゐる生徒を教室の廊下へ呼び出して、Fがこの頃活動でも見に云つたやうな話をしてゐなかつたかと、訊いて呉れたりしたが、そんな話は聽かなかつたとその生徒は云つた。一昨日も昨日の朝も平生と變つたことがなく、冗談など云つて遊んでゐたと、無邪氣な目をしてその生徒は云つた。先生は成績簿を出して來て見せて呉れた。どうやら七點平均には行つてるやうだつた。操行は甲だつた。

『學校へ來てはよく眞地目に勉强はする方でした。成績も學期毎に少しづゝは好くなつて來てゐます。唯これと云つて特に優れた點のないのはお氣の毒ですが……』と、先生は同情を持つて云つて呉れた

『私はまたもつとわるいのかと思つてゐました。自分でもさう思つて氣がひけてゐたのか、この一二學期は通信簿を私には見せなかつたやうです。東京の中學は迚も受からないと自分でも思ひ込んでゐたやうで、だんだん日が迫つて來るし、そんなことからもだいぶ氣を痛めてゐたのかも知れませんが、大體無口な方なもんですから……』

『さう云ふと、どの生徒にも特別に懇意なと云ふ友達の一人や二人はあるものですが、Fさんには特にこれと云つて特に懇意にしてる友達はなかつたやうです』

Fのさうした孤獨な心持には、自分も同感された。滿たされない孤獨な少年の心は、不良な誘惑の手に、小雀のやうに握られてしまつたのに違ひない。入學試驗の脅迫――彼が入學出來ないと、彼の母や妹たちは東京へは出て來られなかつた――さうした責任感?……そして彼自身東京の中學の受からないことを知つてゐた。私はFに對しては寧ろ偏愛的だつた。私は私自身の存在を否定してゐる。自身の壽命に見切りをつけてゐる――それだけに、私が彼にかけてゐる希望は過大なものだつた。妻や娘たちに對する愛情とは別なものだつた。彼女等に對しては、私は嘗て犧牲的な感じを持つたことがない。Fにだけはそれを持つことが出來た。彼女等は何年來妻の實家の食客だつた。がFだけは私以上のものだ。が斯うした私の氣持の働き方には、多分の不自然なものがあつた。彼に取つては、私と云ふものは、單に苛酷な、容赦のない、怖い父に過ぎなかつたらう。彼の小僧志願の心持には、さうした私への反抗でもあり、同時にまた彼自身の能力否定の糊塗的行爲でもあつた。がその結果は、全然不良少年的な活動ぶりを發揮した。――いつしか不良少年の群に入り次第に惡化し……云々など、或る新聞では書いてゐたが、さう云はれても仕方がないほどの惡才に長けたところがあつた。

『さう〳〵』と、私たちが歸らうとすると、先生は思ひ出したと云つた風で云つた。

『つひさつきでしたが、逗子の藥屋だと云ふ人が見えて、Fさんが昨日小僧になりたいとか云つて訪ねて行つたさうで、Fさんの成績や性質など話して貰ひたいと云つて寄つてありましたが、こちらではいゝやうに云つて置きましたが、あなたの方へもお訪ねするやうなことを云つてましたが、會ひませんでしたか。名刺を置いて行つた筈です……』

斯う云つて、先生は職員室からその名刺を持つて來て見せた。

『さうでしたか。それでは私たちは行違ひになつたのでせうが、どうもわかりませんね、全然そんな心當りがないのです。それではやつぱし逗子あたりのわるい奴に摑まつたものでせうか。全然ひとりでそんなところを訪ねて行く……逗

子へは一度もまだ行つたこともないのですから……』と私は云つたが、その時まではまだ、まさかと思つてゐた不良少年の豫感が、最早動かせない事實のやうに思はれて、私は眼も眩むやうな氣がした。

私たちはその名刺を借りて外へ出た。山を搜さうと云ふ弟の心構へも無になつた。彼もまた、最早私と同じやうな暗い聯想に囚はれない譯に行かなかつた。『困つたことになりましたなあ……』と、彼も嘆息した。

『兎に角逗子へ行かう。その藥屋に居るのかゐないのか、ゐて呉れるといゝが、なんにしても手遲れになつてはいけない』

私たちは斯う話しながら鐵道のガードの下を停車場の方へ歩るいて來ると、向うから駈けるやうにしてやつて來るおせいに會つた。おせいは息を切らしてゐた。

『私はね、あなた方が出たあと八幡前の占ひやに見て貰ふつもりでね、占ひやに寄つてそれから一寸床屋さんに寄つたんですの。するとお內儀さんがね、今朝Fちやんが近所の時計屋さんの幼稚園へ行つてる子の手を引いて、床屋の前を通つたのをたしかに見たんですつて。そんなことゝは知らないもんだから、Fちやんがどうしたんだらうとヘンに思つてゐたんですつてね……』

『ちやまだ居るんだね?』

『居るんでせう。でもまた私がいきなり突かけて行つて逃げ出されてもたいへんですからね、今床屋のお內儀さんにそつと裏から時計屋へ行つて貰つて、時計屋のお內儀さんに譯を云つて逃げられないやうに賴んで置いて、あなた方を搜しに來たんですの』

『それではお前が行つて、彼奴に逃げられないやうにして床屋さんまで引張つて來て置いて呉れないか。僕は兎に角逗子の方を調べて來よう、どんなことになつてるのかわからないから。それにしてもうつかりしてまた逃げられちやいけないよ。彼奴ひとりの智慧ぢやないんだらうから油斷出來ないよ』

私は斯う弟に云つて彼等と別れて、逗子までの往復切付を買つて汽車に乘つた。その床屋と云ふのはおせいのうちの親

歳で、Fを學校へ出す時そこへFの寄留を頼んだので、床屋の人たちは私たちのことをよく知つてゐた。それにしても今朝逗子の藥屋がたしかに學校へ來てゐるのだから、床屋のお内儀さんがFを見かけたと云ふのは、間違ひだらうと云ふ氣がされた。その時計屋なら、Fが私の時計の修繕の催促で幾度も使ひに行つたこともあり、私の眼鏡が毀れた時、前から持つてゐた東京の眼科醫の檢査の書附を持たしてやつて、Fに待たして安物の眼鏡を買はしたこともあり、また私たちはいつもその近所のお湯屋へ行くので、その家の前は始終通つてゐた。床屋とは十軒と離れてゐない近所だつた。さうしたところにFが潜伏してゐようとは、一寸かんがへられなかつた。やはり逗子の方がほんたうだらうと思はれた。誘拐した相手が持餘して來たのか、それとももつと惡事を働かせる爲め強ひたのか、それともまたFが、どうしても私のところへは歸らないで小僧になると云つて相手のものに頼んだのか、兎に角に彼ひとりの智慧ではないと思はれた。物置に寢たと云ふのも、みんな嘘だと思はれた。その晩彼は取返しのつかない侮辱を受けて、私に面目ないところから、斯うしたことになつたのだとすると、彼もまた不憫な奴である。私は彼の年齢時分――彼は十二歳八ケ月だつた――の、私自身の性的な記憶を喚び起されたりした。

汽車が出て間もなく、夏時分のやうな氣紛れな通り雨が、ザアツとやつて來た。私はその頃も、七度二三分位ゐの熱がずつと續いてゐた。身體を動かすことが一番いけないのだつた。熱の出て來た徴候の足の甲や掌などのチク／＼と刺すやうな不快な感覺が、腰掛に座つた私の氣持を一層不安にした。逗子へ着くと雨は止んだ。その藥屋は驛から一町となかつた。度量衡や化粧品など並べた小綺麗な店だつた。髷の若いお内儀さんが店先きに座つてゐた。

『一寸うかゞひますが、十四位の男の子が昨日とかこちらへ見えたさうですが、まだ居りますでせうか。實は鎌倉の小學校からこちらのことをうかゞつて來たのですが……』と、藥屋の名刺を出して、隠されるやうなことがあつてはならないと用心して相手の顔色を見ながら、云ひ出した。

『はさうでしたか。その子供さんのことでお出でになつたので、……はあ、さう云ふ子供さんは昨日見えるには見えましたけど、實は斯う云ふ譯ですぐ鎌倉へ歸りましたですが……』

お内儀さんの話では、學校通ひの仕度のまゝのＦが、突然訪ねて來て、小僧に置いて呉れと云つたが、主人は、明後日鎌倉に用事があるからその時學校や親の方を訪ねて、その上で置くことにするから一先づ歸れと云つて、鎌倉までの汽車賃を與れて歸したのだと云ふことで、お内儀さんの話にはすこしも曖昧な點が感じられなかつた。

『鎌倉から歩るいて來たと云つて、お父さんと二人で斯う云ふお寺に居るんだが、お父さんは病氣で上の學校へはあげられないから私は小僧になるのだと云つて、お父さんは斯う云ふ商賣だと云ふことも云ひますし、見たところ子柄もわるくないやうだし、實はうちでもたいへん小僧をほしがつてるところなので、それでさう云つて歸しますとね、大へん悄れてゐたやうでしたが、ひどく元氣のない風でフラ〳〵と停車場の方へ歩るいて行くので、宅が後を追つて行つて汽車賃を渡したんださうでして。それで明日のつもりが今日鎌倉へ行くことになりましたので、學校へも寄りましたんでせうが、多分お宅の方へも廻りましたことでせうが、まあさう云ふ譯がございましたのですかねえ……』と、お内儀さんは驚きと好奇の眼を見張つた。

『それでなんでせうか、その時何か伴れ見たいなものでもその邊に見えなかつたやうでせうか？』

『さあ、そこまで氣がつきませんでしたけど、別にそんなものは見えませんやうでしたが……』

『それではどうしてこちらで小僧さんが入用だと云ふことがわかつたんでせう？』

『さあそれは、そこに小僧入用の札の出てるのを見かけて這入つたのか、それとも鎌倉の停車場前に懇意にしてるうちがあつて、そこへも賴んであつたのでそこからでも聞いて來たものでせうかと、こちらではさう思つてゐましたのですが』

『それにしても彼奴がひとりでなあ……？』と、私は伴れの者がその邊に立つてゐてそつとＦの樣子をうかゞひ、Ｆがうまく藥屋に這入れさうなのを見屆けてそのまゝ遁走したか、それともその晩には商品でも持出させるつもりだつたらうかと、曲者が立つてゐたとしたらどこらだつたらうかと、私は店先きの腰かけにかけながら、店屋の並んだ狹い往來を見廻したりした。しかしまた、それから鎌倉の方へ立廻つたところを見ると、Ｆが失敗して停車場へ行つた時、そこで其奴が待つてゐたのだらうと思はれた。

奥から婆さんも出て來て、『まあそんなことだつたのかねえ。お父さんが病氣で寝てゐるなんて、どうしてご病人どころぢやないぢやないか』と、私の様子を見ながら云つたりした。

『この邊の宿屋にでも泊つてゐたんだとすると、心當りのうちもありますから、もしなんでしたら訊かせませうでせうか。もう追つけ宅も歸る時分ですが、……自轉車で參つたもんですから』と、お内儀さんは親切に云つて呉れた。

そこを出て、汽車の時間を待つ間に、驛前の交番へも行つて頼んだ。刑事もゐて、宿屋へは泊つた形跡はないと云つた。

『またこの邊へ立廻るやうだつたら、すぐ抑へませう。こゝで斯うして見張つてる以上は見逃しつこありませんからね。鎌倉にも不良少年が居るさうだが、……十四ですね、それ位ゐの年だと三日目か四日目には屹度出て來ますよ』と刑事は云つた。

時計屋の方が？………と、私は心に念じながら鎌倉へ歸つて來た。改札口の外に、紺の詰襟服にマントを羽被つた、黑の中折れ帽の弟が、暗い顏して云つてゐた。

『Fが時計店にゐた？』と、私は外に出るとすぐ訊いた。

『さあそれが……』と、弟は息を呑んだ。

編輯を了へて

◇大正の達磨は轉げる達磨であつた、柄にない政治なぞと頓だ野心をおこす達磨であつた。中橋とか元田のカヂリつきかたも又面白い、現内閣ほど德義節操の觀念のない内閣は開闢以來だそうな、定めしいい感化を國民に與へることだろう。

◇ロメン・ローラン氏から來翰に曰く「自分は目下或る大冊の著述にとりかゝつておるしかし遠からず貴誌の爲めに執筆したい」と、アインスタイン氏の原稿と共に一日も早く執筆していただきたい。

◇英のラツセル米のニヤリング氏の寄稿も到着した。論文欄も創作欄も近くまた陣形を新にしたいと思つている、箇々の努力、殆んど生命を賭して本誌の向上、充實のため精を出しておる。

◇不良老僧の光瑞とやらが、我國に歸つては一人前らしい默法螺を吹く、自個に獨立し得ない特權階級者が經世とか濟世とかチャン／＼おかしいや。

◇すこしばかり期待された新婦人會の何とか獲得の第一回講演に男子の助太刀は恐れ入る、腦氣のせいで少々血迷つていないのか、しかし薄つぺらな新人の對手には柄相應といつておかう。

◇いろんな意味で我國では、フロツクやモーニングが必要とされておる、我社は今後は社内でも、社外でも斷然背廣服の外着用せぬことにした、以後フロツク、モーニング必要の集會には出席をお斷りする。

◇社員スモール、アキタも五月獨逸についた、これと共に本社の或計畫もボツ／＼發表の運に至るだろう、九月にはライプチツヒにて獨逸自然科學學會の百年記念祭がある、定めて意義ある催しのあることだろう。

◇六月號に發表したリツケルト氏の長篇は近時論壇の最重鎭とも稱すべき力作だ、また福田氏の論策も近來の好收穫だ。瀧井の力作「妹の問題」を本誌によりて發表するやうになつた事を愉快に思ふ。

◇榊博士十三年の苦心の作になる「精神發育研究」は出版早々全國各小學、中學よりの申込殺到して初版、再版、三版賣切れとなりました、四版は五月廿三日出來ますと出版小僧の傳言をそのまま。

◇九大の山之内氏は五月十六日渡歐、獨逸ではハイデルベヒで哲學を研究し、歸朝して憲法講座を擔任する。一寸變つている。同じく九大の佐々君京都の三木君も渡歐した。

◇五月は田舍人の博覽會見物で我々まで少からず悩まされた、もうソロ／＼暑くなつたり、梅雨が近いたりするから今のうちにウンと勉強することだ。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	増大號共郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼外國よりの御註文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割増の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾壹年五月廿日印刷納本
大正拾壹年六月一日發行
六月號壹圓
編輯兼發行者　東京市芝區伊皿子町四拾番地　平田貫一郎
印刷者　東京市京橋區[illegible]町廿七番地
印刷所　秀英舍
發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話　芝(長)一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替　東京八四〇二

◉社會講談發行の主旨◉　‖發行者識‖

講談本は相變らず賣れてゐます、それは古い講談本をその儘、形を變へて縮刷本にした、何々文庫といふやうなものや「長篇講談」のやうな類のものが頻發され、その他講談雜誌が毎月夥しい數を以つて發行されるを見ても解ると思ひます。講談にはこれらの多數の讀者を惹きつける「何物」かがあるからであります、けれどもあまり興味中心の荒唐無稽の『講釋師見て來たやうな嘘をつき』流のものでは今日の知識階級では喰ひ足りないと思考します。

其處で正史にも文獻にも見當らない社會記錄を、當代著名の社會批評家、文藝家諸氏に御願ひして新らしき批判を新らしき智識とによつて新らしき見解の下に創作して頂いたものであります。この書なれば如何な知識階級の諸氏が公然と電車又は汽車の中で繙かれても少しも恥かしくないものであるのみならず、そこに書かれたものには現今の新らしい文藝に見られない社會批評とヒユウマン、ドキユーメントとしての眞實があります。

沖野岩三郎氏著　新作長篇 **社會講談（新刊發賣）**

第三編

英傑サウル

定價壹圓廿錢送費六錢

三六判三百數十頁

製本堅牢函入美裝

日本に於て嘗つて試みなかつた宗教文學の第一矢

一農夫より民衆に推されて王者となつたサウル、其權勢を握るに及んで、彼は民衆を敵とした。花の如き彼の第一の姫は戀に狂つて死んだ。天使の如き第二の姫は父の仇とするダビテと深い戀に陷つた。天位を嗣ぐべき王子は民衆の味方となつて父に背いたサウルは遂に狂つた。イスラエルの山の彼方の森には若く美くしい王子ヨナタンが赤に染んで斃れた。サウルが痛手に呻吟してゐる頰の林檎のやうに紅いダビテが一騎當千の兵を率ゐて疾風のやうに驅けて來る。サウルの聲は段々と低くなつていつた。『ダビテよ、吾が子ダビテよ朕は最う死ぬ、朕は王子ヨナタンと一緒に死ぬ、此所に落ちてゐる此の王冠は、これは御身の物ぢや、ダビテよ、御身は朕の愛する娘ミカルを愛してやつてお呉れ、ダビテよーダビテよ』

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂書店　振替東京五六一一四　電話本局一八七一

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO